

ぼっちじゃない。ただ皆が俺を畏怖しているだけなんだ。

すずきえすく

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

千葉を去り、とある地方都市で大学生活を送る八幡。

大学生になっても相変わらずな彼のもとを

一人の少女が訪ねて来た事から、物語は始まります。

「センパイ……ここに正座してください。」

「ヒツキー……ここに正座!」

「比企谷君……ここに平伏しなさい。」

「なんでだよ!」

この文章は、“やはり俺の青春ラブコメはまちがっている”の二次創作で、

ある程度、原作の相関関係を把握されている皆様を対象としています。

それ以外の皆様には、分かりにくいやり取りがあるかも知れません。

渡航先生の“やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。”は、
只今14巻（本編11巻、短編3巻）まで大好評発売中です。

原則として、原作に書かれている事は焼き直し致しません。

（是非是非、原作を手にとってお読みください!）

目次

第1章 いろは、襲来

第1話 タモさんって、今フ○テレビ出てたっけ? | 1

第2話 マツ缶はa○a z o nでも買える | 11

第3話 きれいじゃないジャイ○ンは：：どうなるんだろうな。

19

第3・5話 それからの俺は、肉まんを買うのが気恥ずかしくなっ
た。

第4話 別腹でも、太るんだからな? | 50

第5話 てへぺろって何? って言われた。 | 59

第6話 俺の歌う番に、みんなは曲選びに没頭する。 | 68

第7話 俺はもっぱら、シ○ックスへ行く。 | 81

第7・5話 クリぼっち? いいえ、常にぼっちです。 | 94

第8話 人工衛星なら、たまに落ちて来るけどな。 | 109

第9話 混ぜるな危険 (人間関係的な意味で。) | 123

第10話 本当は師範だけど、本気出してないから無級 | 133

第11話 格闘家の武○選手は、新右衛門さんの子孫らしい。

145

第11・5話 かまくらは猫である。 | 158

第2章 結衣の逆襲

第12話 彼女が出来ません。どうしたら良いですか? (千葉県

剣豪将軍)

第13話 5○1蓬○と蓬○本館ってのは、別の会社なんだな：： | 169

179

第14話 今年は不発弾とか出て来ませんように (ストフェス)

| | |
|---|-----|
| | 189 |
| 第15話 ウイ〇ビー国民的美魔女化計画（中の人的に）―― | 199 |
| 第16話 ねえねえ、ヨーロッパの首都ってどこにあるの？ | 211 |
| 第17話 インド人もビックリ（色々な意味で）―― | 227 |
| 第17・25話 因みに俺は千葉県生まれアニソン育ちな。 | 237 |
| 第17・5話 真顔でギャフンと言われたら、それはそれでむかつくよな。―― | 247 |
| 第17・75話 マニアの財布は店のもの（某メイド喫茶のスロ―ガン）―― | 257 |
| 第18話 勉強会という言葉の頭に「大人の」を付けると途端にエロくなるよな。―― | 270 |
| 第19話 俺の転職先が、こんなにブラックな訳がない（※ブラックです）―― | 284 |
| 第20話 もしあの場面で、ネロがブラックブラックガムを持ってさえいたならば……―― | 296 |

第1章 いろは、襲来

第1話 タモさんって、今フ〇テレビ出てたっけ？

あれから数年が経ち、俺は大学生となった。

千葉を愛する気持ちは誰にも負けないと自負していた俺が、進学と同時に千葉を離れ、とある地方都市へと移り住む事になったのは、まあ……御愛嬌という事にしてもらえると、八幡的に超ポイント高い。

卒業後、戸塚は地元の大学へ進学し、由比ヶ浜は都内の専門学校へ……そして雪ノ下は海外へと旅立っていった（材木座は知らん。）。

それにしても、高校生までの視野と卒業してからのそれってのは、これでもかって言うくらい変わるもんだな。高校までは、世界の全てが“学校内で完結”という感じだったのだが、卒業した途端に全ての壁が取り払われて、そこには無限の荒野が広がってたって感じた。

つまり、目立たず地味に生きる事を常に探求してきた俺のスタイルは、荒野に出没する賊（……例えばほら、アキバとか歩いてたら、絵を売りつけてくる若いお姉さんとかいるだろ？色香に惑わされ、気が付いた時にはラッ〇ンの絵を12回ローンとかで買わされてたっていうアレだ）から身を守る上で有効であり、これまでの俺は、時代を先取りしていたのだ……と、声を大にして言いたい。

そうそう、メイクとスーツでばっちり決まった、美人なお姉さんに気後れして、“え……あ……”と戸惑っているうちに連行されるケースもあるから要注意だ。まあ、お姉さんも狙ってやっぺらうけどさ。

ここまで回りくどい話をしてきたが……

詰まるところ、俺は大学に入って尚、孤高な生き方を貫いているという訳だ。

……言わせんな、恥ずかしい。

要は、年齢を重ねようが、環境が変わろうが人は、そんなに大きくは変わらないって事だ。それがアイデンティティというものなのだろう。

結論。契約書に判を押ししてもアイデンティティはそうそう変わらないが、財布の中身は（主に財政破綻する方向に）結構変わるから気をつける。

第1話

タ
モ
さ
ん
っ
て、今フ○テレビ出てたっけ？

俺以外に誰もいない自室で、誰に聞かせるでもなく下らない事を考えていたのだが：そういう時って、人間ってのは大概油断しているものだ（野生を失うとはそういうことだ）。そんなタイミングを狙い澄ましたかのように、もはや電話としての機能なんかあったっけ？なんて思うほどにゲーム端末と化していた俺のスマホが、本当の実力を見せてやんよと言わんばかりに”ムーンっ、ムーンっ”と、いきなりその存在感を声高らかに主張し始めたのと、これまた運の悪いことに、脇腹の当たる内ポケットにそれを入れていたので、その振動にビクツとなってしまう、テール裏で膝を打ち付けて”がこっ”と大きな音を立ててしまった。

もし、ここが奉仕部の部屋だったら…

“比企谷君、挙動不審な動きはやめなさい。身の危険を感じるわ。

“ ヒツキーまじキモい♪ ”

と、誰かさん達にディスプレイされていたところだ。俺にとってそれなりに身近なあの2人は、俺をディスプレイろうとする時、何故かとっても嬉しそうに顔をやるんだ：解せん。

：つていかんいかん、メールが来てたんだったな。

早速確認してみると、差出人の欄には“ ☆★ゆい★☆☆ ”の文字が。先程出てきた、それなりに身近な2人のうちのビツチ担当の方だ。“ ビツチ言うなしっ！” って怒られそうだけどな。

登録名がスパムっぽいのは、面倒なので直してないからだ。そもそも本人が打ったものだし、変えるのも何々だよな…。一度だけ“ ゆいゆい ”にしようか？ と提案した事があるんだが、“ もうそのネタ止めてえええ ” と全力で拒否られた。自分で自分に渾名を付けるのもなんだけど、ネーミング自体が由比ヶ浜にとって、黒歴史となっているらしい。

以前、由比ヶ浜からのメールに気が付かず…つてか、携帯の電池が切れちまつただけけど、どうせ誰も連絡してこないやと思ひ、2、3日放置していたら

結衣「小町ちゃん、ヒツキーと連絡とれない…(´・ω・｀)」

小町「えっ…ホントだ。電源が入ってませんって…。」

結衣・小町「何か事件に巻き込まれたんじゃ!？」

危うく、搜索願を出されるところでした…。

そんな事もあり、今ではなるべく早くチェックする様になっている。あの時は、サイレンの鳴らないパトカーに乗ったお巡りさんがやって来て、ちよつとした騒ぎになった。その様子を見てた近隣の住民が、俺を見て何かをヒソヒソ話すんだ。

“ 前から怪しいと思つてた ” つて、一体何を!?

法に触れる様な事を一切してないにも拘らず、あんなに居た堪れない思いをするのは、正直勘弁願いたい。そもそも、目が死んだ魚みただってのは関係ないだろ…。

うつかり黒歴史を紐解いてしまい悶絶していた俺だったが、なんとか落ち着きを取り戻し、指紋だらけの画面を袖口で拭って、画面に目を向けた。

そこには

差出人：☆★ゆい★☆☆

やつはろー(・ω・)ノ

お台場を歩いてたらタ○リさん見かけたよー

。*∴☆∖(*☒▽☒*)／☆∴*。

という、古代エジプトも真つ青な大層煌びやかな装飾と共に、文字が紡がれていたのだった。

満面の笑みを浮かべたコージー富○の写メと共に。

……。

これは釣り……なのか？

いや……由比ヶ浜の事だからこれは素だな(断定)。

とりあえず俺は、『コージー○田でググってみてくれ』とだけ返信したあと、慈愛に満ちた眼差しでそれらを一瞥し、スマホをそつと：

テーブルの上に置いたのだった。

ああ：我らが神よ！天の恵みに感謝致します…。

俺は、いつになく澄んだ心で神に祈りを捧げると、昼飯であるラーメンを食べる為、箸に手を伸ばした。さつきから妄想したり悶絶したりしていたから、若干伸びているかも知れないが、食えなくはないだろう。カップ麺：あれから進化したからな。

そして、箸で麺を掬って口に運ぼうとしたその瞬間、再びスマホが吠えた。ちなみにこの間、時間になるとおおよそ10秒程度だ…。

調べるの速ええよ！そしてメール打つの速ええよ！

差出人：☆★ゆい★☆☆

知ってたしっ？（？、へ、？）？

ヒッキーを試したただけだしっ

ノ、（こ）ノ 上：：：：： 下：：：：：

嘘だ…絶対嘘だ。

平塚先生！由比ヶ浜さんが、僕に虚言を吐いてきますっ！

でもまあ：俺も、たまにやらかすから気持ちは分かんなくてもないけどな。ってな訳で、ここは敢えてそういう事になしておいてやろう。真実はいつも一つだが、それを常に追い求める必要なんてないのだ。

この複雑に入り組んだ現代社会の片隅に、慎ましく咲くタンポポのような優しさがあっても良いはずだ。うん、今日の俺ってば、超ガンジー。

ああ、この慈愛に満ち足りたこの気持ちを誰かに伝えたい。そんな清々しい気持ちを伝えるべく、俺は再びスマホを手を取った。

由比ヶ浜がそう言うのなら、
そうなんだろうな（ー、ー）

P・S タ〇さんによろしく。

：送信してから言うのもなんだが、結局タ〇さんと思い込んでた前提で書いてね？まあなんだ：人間、正直が1番だな。無理な気負いは良くない、だってハゲるから。

こんな具合に一頻りの結論が出たところで、この地から遠く離れたお台場の海浜公園にて、一人悶絶しているであろう由比ヶ浜に、俺はそっと囁いた。

「ドンマイ、ゆいゆい（ー、ー）*」

とまあこの様に、由比ヶ浜は時々こうしてメールをよこしてくる。孤高であるはずの俺も、ほんの少し気が緩むひとときだ。

べ、べつに由比ヶ浜からのメールが嬉しいって訳じゃ無いんだかねっ！

奉仕部で過ごした3年という時間に加え、グラデュエーションによってヴィジョンがチェンジしたからだろうか？俺のアイデンティティも、少しフレキシブルになったのかも知れないな、うん。

なんだか、どっかの生徒会長みたいな言い回しだな。

由比ヶ浜とのやりとりもひと段落し、俺は自室でぼんやりとしていた。辺りはシンと静まり返り、窓から暖かな陽射しが絶え間なく注ぎ込んで、穏やかな時間を演出している。

ああ、何もせず怠けるつてのは最高だな！

日曜日で且つ課題も出ていないので、恐らく今日は一日こんな感じだろう。ついでに言えば、明日まで学園祭なので講義も無い。あんなリア充の巣窟たる騒々しい場所に、赴こうという発想など湧き起るはずもなく、俺は事実上の3連休を謳歌していた。

初めの頃は予習復習、加えて課題に四苦八苦していた俺だったのだが、ようやく講義と課題のペースを掴めて来たところだ。だが慣れるまでの間、買ったラノベを読む時間を作れず、それでも“後で読むか”と買い続けていたら、いつの間にやら30冊近く溜まってしまい俺の机に高々と積まれてしまっていたのだった。

うん、とりあえず買ったラノベを片っ端から読んでいくか：そう思い、書棚の本に手を伸ばした時だ。

”コンコン”

来客など皆無なはずなのに、入口のドアがノックされた。

なんだよ：またお巡りさんじゃないだろうな。

心当たりなどなくても警官に声をかけられると、なんとなくキョドっちまうってことってあるよな。まあ：俺の場合、警官に限らず、学校で普通に話しかけられた時も似たようなものだけど。

ともかく、来客なのは間違いない。俺は一先ず

「し、証拠はあるんですか？」：とか

「アリバイ？その時間は友人と遊んでました」：とか

「べ、弁護士が来るまで黙秘します」：とか

「刑事さん：俺がやりました」：などなど

一通りのシミュレーションを済ませ、ドアを開ける事にした。

”ガチャッ”

だが、扉を開けると、そこに立っていたのは高橋英○や高田純○に似の刑事達などではなく、何のことはない、この部屋の貸主である大家のおばちゃんだった。

：まあ、普通に考えたらないよな。そもそも、俺は何もやってないし何なら働きたくない。

そんな胸のうちを他所に、大家のおばちゃんは俺が部屋から出てきたのを見計らい、こう言った。

「比企谷さん、妹さんが来てはりますえ。」

ちなみに、ヒキタニじゃないからな？そうそう、今にして思えば、戸部とかクラスの奴らはともかく、葉山のやつはワザとヒキタニって呼んでたんだよな：何気にモヤモヤするな。

まあその点大家のおばちゃんは、多少ご高齢とはいえ、自分の店子は流石に間違えないだろう。

信じても：良いよね？

俺はマンションやアパートではなく、築数十年の下宿家の1室を間借りしている。大学の幹旋する1ルームのアパートを借りるという選択肢もあったのだが、色々あってここに落ち着いた。

晩御飯付で月45000円は魅力だ：つてのもあるが、

「誰か面倒を見てくれる人がいないと心配だよ：つてお兄ちゃんを心配してる小町、超ポイント高い♪」

という意見が、両親に取り入れられたって訳だ。まあ、店子は俺一人だけなんだけどな。

いや、そんな事はどうでも良い。今は小町が最優先だ。

「済みません、ありがとうございます」

俺は大家のおばちゃんに礼を言うのと、スリッパを履くのも忘れ、急いで階段を駆け下り玄関へと急いだ。

それにしても小町のやつ、来るなら来るで連絡すれば良いのに。まあ、次世代型ハイブリッドぼつちなだけに、自由気ままなヤツではあるのだが。

一人暮らしとはいえ、見られては不味いものは、全てベッドの下だから抜かりはない：おいそこ、訪ねてくるような友達はいないだろう？とか言うな、悲しくなるから。

やれやれ仕方ないやつだなあ：などと思いつつ、その実、浮足立った気持ちを隠そうともせず、俺は軽やかなステップで廊下を駆ける。小町と顔を合わせるの、かれこれ半年ぶりくらいなのだ。

わざわざ訪ねてくるなんて、お兄ちゃんは嬉しいよ！

だが、そんな有頂天な俺の心に、冷や水を浴びせかけるような現実が待ち受けていようとは：

数分後、廊下にたどり着いた俺は、そこに立っている人物を見てすこぶる驚いた。

「な、なんでお前がここにいんの？」

「もうセンパイ、遅いですう：むうーっ」

俺を待っていたのは・・・あざとい溜息を付きつつ、上目遣いで見つめてくる亜麻色の髪の後輩だった。

つづく

【おまけ】

「そんで…お前、誰だっけ？」

「センパイ！酷いです!!今すぐ土下座してください！」

「いきなり土下座かよっ！」

「当然の報いです。さあ早く！」

「け、決してお前を忘れてた訳では…これは…そう、大人の事情なんだ！」

「大人の事情ですかあ…それなら仕方ありませんね♪」

「じゃ、じゃあ許してくれるか！」

「はい♪土下座は服着たままで許してあげます♪」

「全裸土下座だったのかよ…。」

第2話 マツ缶はa○a z o nでも買える

【前回のハイライト】

「あ、あの・・・もしかしてタ○リさんですか？」

そんな、見知らぬ私からの問いかけに

「明日、来てくれるかなっ?」

あのお馴染みなセリフを、振り向きざまに間髪入れず返してくれた、サングラスでオールバックな人。

もしかしても何も、どう見てもタ○リさんだよー。

千葉の英雄ジ○ガーさん以外で、生まれて初めて目撃した芸能人：しかもタ○リさんを前に、その驚きと興奮を隠せない私。

まさか：それが、モノマネの人だったなんて！

ヒツキーは“サングラスからしてモノマネ感たつぷりだろ”って言ってたけど、それ以外は全然見分けつかないよ。だって私、思わず“いいともーっ”って言っちゃったもん。大体、モノマネの人が似過ぎてるのが悪いんだもん。だから、私は悪くないもん。ヒツキーだって、その場にいたら絶対騙されてたもん。

そもそも“大丈夫か？お前：そのうちオレオレ詐欺とかに、引つかかんじゃねえの？”って、いくら何でも失礼過ぎだしっ！ヒツキーのばかっ！そんなのに引つかからないもん。西山きよし夫妻の出演する振り込め詐欺予防DVDとか見てるから、対策は完璧だもん！だから大丈夫だもん・・・多分。

あのあと“タ○リさんじゃないって、最初から知ってたし！”って、慌ててメールを送ったけど：絶対バレバレだよ。

あああああつ、超恥ずかしいしっ!!私のばーかっばーかっ。

ヒツキー：私のメール見て、めちやくちやニヤニヤしてそうだよお…。

この後10分もの間・・・、待ち合わせていた優美子と姫菜が来るまで、私は公園のベンチで、延々と頭を抱え悶える事になるのだった。

第2話

マ

ツ

缶

はa○azonでも買える。

俺の記憶が確かならば、俺の妹とは小町の事だ。そしておばちゃんと言った。“妹さんが来てはりますえ”と。

それならば、俺の目の前にいるのは小町でなければならぬはずだ。ところがだ：目の前にいるのは、どう見ても小町ではない。

キラツキラと輝かせた大きな瞳で、如何にもってな具合で、俺を上目遣いで見つめて来る、あざいことこの上ないこいつの名は一色いろは。とつても面倒な、俺の後輩だ。

「ご無沙汰してまーす♪とつてもカワイイいろはちゃんですよお」
♪

片目を閉じて、軽く舌を出し“てへぺろっ”とポーズを決める一色。自分で自分の事を“カワイイ”とか言っちゃいますかね、こいつは。

もしこの展開が、俺ではなく並の男子が相手であれば、遠路遙々恋人でもない女子が訪ねて来たという、不自然極まりない事実に大喜びし、勘違いをした挙句にコロツとやられていたに違いない。だが、幸いな事に（主にフラれる方の）恋愛経験豊富な俺であれば、こんな程度ではグラリともしない。

これまでの経験がなければ、危ない所だった…。

綺麗な薔薇にはトゲがあるし、画廊の前に立つお姉さんの後ろには、絵画の売買契約書が隠れている。つまり、自分にとって都合の良さそうな展開の裏には、必ず危険が潜んでいるものなのである。増してや、今回の相手はあの一色なのだ…。

また何か、厄介事を持ち込んで来たのではあるまいな…。

この様に、ぶつくさと熟考していた俺に痺れを切らしたんだろうな。一色は、口いっぱいにドングりを詰め込んだ仔リスのように両頬を膨らませ、拗ねた表情を浮かべると、“ちよつとお、私の事無視しないで下さいよお…”と言いなながら、俺のシャツの裾を掴んでクイクイツと引つ張った。ちよつ…おまつ！ だから、そういう所があざといんだってばっ！

女子の皆さん、無闇に体に触れて来るのは止めような？勘違いするからさ。八幡との約束だ。

とはいえ、一色の言い分はもつともだ。折角、気合を入れてポーズまで決めたのに、俺のリアクションつてば、完全スルーに近かったからな…さぞかし不本意だったに違いない。

ここはひとつ…年長者として、ちゃんと構ってやらなきゃな。

その後、俺の“はいはい。かわいいかわいい。”という答えに“むきーっ”と怒りを露にする一色。なんだよ…折角リアクションし直したのに。お前、カルシウム足りてないんじゃないやねえの？

まあ…こんな具合で全然話が前に進まないの、俺は挨拶もそこそこに、取り敢えず頭に浮かんだ疑問を、一色にぶつける事にした。

「お前…何でここまで来たの？」

そもそも、俺の下宿先を知っている人間なんて限られている。小町を含む家族と戸塚、由比ヶ浜、そして雪ノ下だけだ（材木座は知らん）。なんでこいつが知ってるの？

それに対し一色は、きやるん♪とした表情を浮かべてウインクしながら答えた。

「やだなあ、新幹線に決まってるじゃないですかあ♪」

なんともお約束な回答だが、確かに歩いて来るには大変な距離だ。なにせ、直線距離でもここまで600km近くあるからな。人の歩く速さを4km/hと仮定して、立ち止まらずに延々歩き続けたとしても、6日とちよつとは掛かる計算だ。

それを考えると、江戸時代に踏破した（設定の）東海道中膝栗毛の弥次喜多は凄えな！俺だったら歩けるか歩けない以前に、チャレンジする前に心がバツキリと折られるまである…つまり、歩きたくない。ちなみに、三条大橋の珉○前に弥次喜多像があつたりして誤解されやすいけど、彼らは架空の人物だ。これ豆な？

…つていかんいかん、また話が逸れちゃった。

「いやそうじゃなくて、俺の住んでる所がよく分かったな」

質問の仕方が悪かったと思って再度訊ねてみたものの…一色から返ってきたのが、“とある筋から、情報を仕入れちゃいましたっ♪”という答えだけ…。

何か、超怖いんですけど…。話し方がきやびきやびしている分、怖さ倍増だ。なんだよお前…ガ○エーションシーか何かなの？そのうち、刃のついてない刀を、あちこちで振り回したりし始めるんじゃないだろうな…。

この様に、玄関でうだうだとやり取りを続けていたのだが、そこへ大家のおばちゃんが出て来た。

「遠くから、よお来はりましたな。それにしても可愛い妹さんやねえ」

さすがは年の功、リップサービスにもそつが無い。一方一色は、可愛いの一言に気を良くしたのか、満面の笑みを浮かべつつ、けれども事も有ろうに“比企谷いろはですっ。兄がいつもお世話になっていきます♪”と、のたまいやがった。

ちよつ、おまつ！妹どころか、比企谷ですらないじゃないかっ！

驚愕し絶句する俺をよそに、二人はやりとりを続ける。

「素敵なお名前やね。今日はお兄さんに会いに？」

「そうなんですよお。ちよつと、兄の様子を見たくになりました♪」

「お兄さんと仲がよろしいんやね」

「ハイ♪大好きです！」

よくもまあ……こうも簡単に、口から出まかせがポンポン出せるもんだな。それとき、とつても和やかな雰囲気話してるけど、“大好きです！（下僕として）”とか後ろに隠れてそうで、お兄ちゃんちよつと怖いよ……。

いやいや、だから俺はお前の兄貴じゃねえ。

「大家さん、兄はご迷惑をお掛けしてませんか？」

「え、そんな事あらしまへんえ。安心してな。」

「よかったあ♪兄の場合、目がちよつとアレなので……ご近所のウワサになってたりしないか、ちよつと心配だったんです♪」

おいそこつ、目だけでご近所を騒がせちゃう俺って一体何!?俺の目は、ハリウッドスターを凌駕しちゃってるって言いたいのか?それとも、人ならざる目とかって言いたいのかね?

一応、誤解の無い様に言っておくけどさ……俺と目が合ったからって、相手が石になったりしないし、ビームが出たりとかもしないから。

まあ……子供は半泣きになるけどな。

「あー……大丈夫やと思うけど……多分。」

多分なのかよ。

この様に、延々続く二人の会話に対して、ひたすら（心の中で）突っ込みを入れ続ける俺であった。

こいつら、俺をデイスる事に全く躊躇が無え…。

「ほらっ、これしか無いけど良かったら。」

俺は冷蔵庫からマッ缶を取り出すと、それを一色に手渡した。永遠に続く様に思われた二人の会話だったが、一息ついたのを見計らって一色を自室に招いたのだ。

「うわっ、相変わらずこんな甘いものを…って、よくこちらで手に入りましたね。」

「ああ。その気になれば、amazonでお取り寄せ可能だ。」

こつちで暮らし始めて一番驚愕したのは、マッ缶がどこにも置いて無かった事だ。確かに、修学旅行で泊まったホテルの自販機にも置いて無かったけどさ…どこにも見当たらないなんて事は、全くの想定外だった。

何軒も店を回って分かった事なのだが、“MAXコーヒー？ああ、昔そんなのあったね”ってのが、こちらでのスタンスらしい。一応、以前は全国販売してたんだけど、今は再び、ローカル飲料への原点回帰を図っている…らしい。ソースはWikipediaだ。

そんな訳で、日頃から色々とお世話になっているamazon様のお取り寄せラインナップに、マッ缶が新たに加わったのだった…ってこらそこっ、ベッドの下なんて覗くんじゃない！

「だって、ベッドの下チェックはお約束じゃないですかあ♪」

お前は鬼か。

俺がマツ缶に思いを馳せている間に、一色はそんな事お構い無しに、俺の部屋のガサ入れを行っていたらしい。いろはす…恐ろしい子！

しばらくして、“ありましたっ！”という大声と共に、一色がベッドの下から引っぱり出してきたのは、セクシーポーズを決めた、胸の大きなお姉さんが表紙の本だった。

「……。」

「……。」

なんか、ネタつぼく漁ってたなら、ガチなやつが出てきました…みたいな感じで、一色は唾然としている。それにしても、訊ねてきた女性に隠してたエロ本を見られる事が、こんなに精神的に来るなんて、八幡知らなかったよ…。相手がドン引きしてるのなら、尚更な。

気まずい空気が流れる中、一色が口を開いた。

「…センパイ。」

「なんだ？」

それまで、虚ろな目でエロ本を眺めていた一色だったが、俺の方へ顔を向けると、感情を喪失した様な抑揚の無い声で言った。

「今日から、デラベっぴん先輩って呼んでもいいですか？」

やめてっ！勘弁してっ！

だらだらと過ごす予定だった日曜日。ところが、そんな平和を打ち砕かんと、一色いろはという名の炸裂弾が、俺のライフをガリガリと削ってゆくのであった。

つづく

【おまけ】

「枕の下に写真を入れると、それが夢に出てくるんですよ？」

「まあ：そういう話も聞かなくは無いな。」

「という事は、センパイのエロ本を枕の下に入れると：。」

「いや、出てこなかった。だから迷信だと俺は断言する。」

「・・・もしかして、既に試しました？」

「・・・ああ。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・センパイ。」

「・・・なんだ？」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・なんか：済みませんでした。」

「・・・まあ：気にするな。」

第3話　きれいじゃないジャイオンは・・・どうなるんだらうな。

やあお前ら：元気でやっているか？えっ、俺か？俺は、ブラック企業どころかどこにも勤めていないのに、もう駄目かも知れない…。だから力尽きる前に、色々と伝えておきたい事があるんだ。かなり怪しい話になるが、俺の忠告を聞いてくれ。

まず第一に：アレの隠し場所として、ベッドの下を選択するのは止めておけ。万が一、（小町：じゃなかった、妹などの密告により）親によるガサ入れが決行される際には、真っ先に手を付けられる程のオーソドックスな場所だ。類似箇所としては、本棚の裏や屋根裏収納も該当する。何故オーソドックスかって？そりや、親にだって思春期はあつたらう：あとは察してくれ。

次に、歴史に興味がないのにDVDラベルに“歴史秘話ヒトリア”と書くのも悪手だ。ついうっかり、サブタイトルに“真田丸特集”なんて書いてしまったら大変だ。初めて自分の部屋に招いた異性が歴女で、“私、これ見たあい♪”とデツキに投入されてしまい：という悲劇的な事故が、近年多数報告されている事を考えると、自殺行為に等しいと言えるだろう。

チャー○式の表紙を被せて書棚つてのもダメだ。本物の中身が机上にあれば、バレバレだからな。加えて言うと、中身を入れ替えている事をうっかり忘れて学校へ持参してしまい、自習時間に気付かずそれを開いてしまって冷や汗をかく思いをする：なんて事も起こりうる。危ねえ危ねえ：ホント、シャレになんないところだったわ…。

俺：色々考えたんだけどさ、どんなに巧妙な手口で隠蔽しても、隠し事ってのは遅かれ早かれ、白昼の元に晒される事になるんだよ。だからさ：何をやってもどうせ見破られるのなら、最初っから堂々と机の上に置いておくってのはどうだろう？ほら、“負けるなら：前のめ

りに倒れて負けようぜ？」ってゴローさんも言ってたし。

「潔い」って事は、生きる上で結構大切な事なんだと…八幡は思うな。

そんな事を考えていた時期が…俺にもありました。

第3話

き れ い じ や な い ヤ イ ○ ン は

は…どうなるんだろうな。

「先輩、ここに正座してください。」

ベットの下の発掘作業を終えた一色は、一通り検閲を済ませると、無機質な表情で床を指差した。一色の横には、「…まったく材木座の奴、仕方ねえなあ」と、いかにも「友達の為にしぶしぶ買いに来まし

た”といった具合に、レジ前で猿芝居までして購入したお宝の数々が、罪人よろしく晒しモノになっていた。

“なんでだよ、俺が何を買おうが勝手じゃないか!”と、一色に対して勇気を出して精一杯の抵抗を試みたのだが…

『ギロツ』

一色の目は、それを一切許さなかった。さっきまでとは打って変わり、あざとさの欠片もない一色を前にして、俺は未だかつて無い程の速さで一色の指さす場所へ正座した。

…怖いよ。いろはす超怖ええ。

日曜日の昼下がり…後輩の女子高生にエロ本を隠し持つてるのがバレて、自分の部屋にも拘らず正座させられている俺。それはまるで、安月給な中、僅かな額をコツコツと積み上げて貯めたへソクリがある日突然に嫁さんにバレてしまい、ガッツリとシメ上げられている中年サラリーマン夫の様な、なんとも居た堪れない光景だ。

「あ、あの…一色さん？」

「なんですか、センパイ？」

「そろそろ足を崩しても…」

「ダメです（きつぱり）」

あっさり却下された。駄目だ…一色には、この理不尽な仕打ちに一切の躊躇いが無い。そろそろ足が痺れて来たんだが…いつまで続くんだろな。

俺が正座を始めて、10分位経っただろうか。

「センパイは、胸の大きな人が好みなんですわー。」

一色は、俺のコレクションの中から、“脱いたら凄い！ムチムチさん”と表紙に書かれた本を手に取ると、ジト目でそう語りかけてきた。

「え、違うよう？」

気分転換に近所をぶらぶらと散歩していた時に、ついふらあ…つと入った本屋で本を買ったら、たまたまエッチな本だったんですよお。ホントですよ？

まあそんな事、ある訳ないんだけどな。

「つていうかこのモデルさん、結衣先輩に似てますよね。」

なんで由比ヶ浜が出てくるんだよ。骨格レベルで別人じゃねえか。

「だってー、似てるじゃないですかあ」

「全然似てないだろ。」

確かに似てるどころも、無くはないけどな…自己主張の激しい胸元とか。

「でもお…」

「似てると思うから似てくるんだ。つまり似てないと思えば、たとえ似てても似なくなってくるんだ…つまり似てない(きつぱり)」

自分で言ってる意味が分からない。分からない…のだが、ある程度の効果はあったようで、“なんか、適当に言い包められた気もしますけど…”と一色が呟いたところで追及の手は緩められ、俺の部屋には再び静寂が訪れた。

3連休の中日にあたる…そう、今日の午後一番くらいまでは、俺にとつてこの静寂さは、非常に心地よいものだったのにな。何故だろう…同じ静寂さだというのに、冷や汗が全然止まらない。

どうしてこうなった。

そして、その間一色は“むううううううーっ”と、自分の気持ちに折り合いを付ける様に、言葉にならない想いを吐き出す様に唸っていた。

なんだよそれ、ちよつと可愛いなオイ。

だが、やがてそれも収束に向かった様で、1つ大きく深呼吸をして落ち着きを取り戻した一色は、念を押す様に俺に問いかけてきた。

「じゃあ、結衣先輩に似てるから買ったんじゃないんですね？」

「無論だ。」

俺は、きれいなジャイオンの如き眼差しを一色に向け、他意が無い事を必死にアピールした。お願いっ、勘弁してっ：そんな思いが伝わったのか、それを見た一色は“目がキラキラし過ぎて、かえって胡散臭いです。”と小声で呟きながらも、大きく溜息をついた後に、

「…………それなら許してあげます。」

と言った。やつとお許しが出たみたいだ：ってオイ、頑張つて全力出して目を輝かせたのに、そんなにあつさりど“胡散臭い”って斬り伏せるなよ！容赦無さ過ぎだろ：俺のひたむきさを返してっ！

ともかく、流石はきれいなジャイオン：効果は絶大だ。因みに、きれいなジャイオン（ノンスケール PVC製塗装済み完成品）はamazonをはじめ、全国で好評発売中だ。

まあ……剛っぽくないけどな。

ともかく嵐は過ぎ去り、俺の部屋に穏やかな時間が戻ってきた。やつはり、平和ってのは何事にも代え難いものだど実感した。あと、ハトとか居たら完璧なのに。

ともかく、争いはもう終わつたんだ：。だから俺は、この世の自由を謳歌するんだ！：ってあれ、そういえば誰かが言ってたよな：自由とは眩しいものだな、と。

俺の脳裏には、世間を騒がせたネコ好きな：ほら、あの人だよ。あ

のメガネを掛けた男の人！。ともかく、そのメガネの人の微笑む姿が過ぎった。

何故だろう…すつごい嫌な予感がする。

ハツと我に返り、一色に視線を移すと、その視線の先には机の上の書棚が…。 “やばい！” と思つた時にはもう遅かつた。一色は “へえ…こんな薄いマンガなんてあるんですね♪” と言いながら、書棚から1冊の本を取り出すと、パラパラと捲り始めた。

ちなみにその本は、有明にある某ブックサイトで開催された大規模なお祭りで購入したものだ。まあなんだ…平たく言えば “薄い本” だ。くそつ、材木座めつ！

まあ、買ってきてと頼んだのは俺なんだけどな。

「……センパイ。」

「何だ？」

「今日から、エロマンガ先輩って呼んでもいいですか？」

それはやめてっ！勘弁してっ！

振り出しに戻っちゃったよ、ちくしょう。

「で、何しに来たんだ？」

ここに来て、一色に対してようやく核心に迫る質問が出来た。ここまで本当に長かった…。言うなれば、某人気イラストレータによるイラスト集の販売が予告され、意気揚々とamazonに予約を入れたものの、2ヶ月が過ぎ…半年が過ぎ…1年過ぎる頃には発売日が未定となってしまう、最後には予約がキャンセルされてしまったまである。

ブ○キ先生の安否が、私、気になりますっ！

「ほら私って、K大志望じゃないですかあ♪」

いやいやそれ初耳だから…って、俺の学校じゃないか。俺が言うのもなんだけど、結構難関だぞ。かつて俺が受験生だった頃、“死ぬまで特訓：かしら？”と、あどけない表情で首を傾げつつ、スパルタの限りを尽くしたゆきのん先生の猛特訓講座を思い出し、俺は背筋が寒くなった。

そんな俺を見て何か感じ入ったのか、一色は俺から1歩だけ距離を取ると、“うへえ…”と顔を歪めつつ一気に畳みかけた。

「ハッ！私がセンパイを追いかけて同じ大学を受けると思いましたか？それはセンパイが自意識過剰過ぎなだけで偶然同じになっただけですから、たった今告白してきてもまだ受験生ですのでそれをお受けする事は出来ません。半年先にまた出直して来てくださいゴメンナサイ。」

全くもって、誤解極まりない。つていうか…何も言っていないのに、振られるのは一体何回目だったろうな。ニコニコと楽しそうな表情を浮かべる一色に、半ば諦めムードの俺は、大きな溜息をつくのであった。

まあなんだ…9回2アウトに、最も打席に立った男として脚光を浴

びた元マー○ンズの某選手も、打席内ではこんな心境だったのかも知れないな。19点差とかじゃ、流石に心折れるわ。

「センパイ、なんだか反応薄くないですかあ？」

「人生の不条理を噛み締めてただけだ。さあ、続きを話したまえ。」

「むうーっ」

一色が不満そうに両頬を膨らませる。くそっ……あざと可愛いなっ

！

「で、オープンキャンパス代わりに、学園祭を見に来たんですよお♪」

なるほどな。カリキュラムは確かに重要だが、それと同じくらい生活環境も大切だ。オープンキャンパスとは違った雰囲気である学園祭で、多少羽目を外した在校生を見た方が、学生生活の雰囲気は掴みやすいのかも知れない。

一色が“うんうん”と首を縦に振る。そして、改めて俺と正面に向き合うと“そこ・で・え♪”と片手を口元に添えて、秘密の共有話をする様に囁いた。

「明日センパイに付き合って欲しいんです♪」

「だが断るっ！」

「早っ！センパイ断るの早いですっ！」

即断即決は俺のモットーなのだ。

学園祭は明日で終わりだ。つまりそれは、ダラダラとした一日を過ごせるのも、明日で終わりという事だ。本来ならば、後輩が遠路遙々やって来ているのだから、ここは付き合うべきだろうし、付き合っても良いという気持ちが無い訳でもない。だが、仮にも大学の学園祭だ。わざわざあの人ごみに飛び込むのも躊躇われる。

「そんな事言わないで、お願いしますよお」

なかなか首を縦に振らない俺をジツと見ていた一色は、“こうなったら、奥の手使っちゃいますっ♪”と宣言すると、ポケットからスマ

ホを取り出して、どこかへダイヤルし始めた。

『もしもし小町ちゃん？いろはだよー♪うん、今センパイのお部屋。んとね、センパイのお部屋ね、エ以チな本がたくさん・・・』

ストオオオオオオオオオオツプツ

何て恐ろしい事をしやがるんでけ!!!!!!!!
が震撼するレベルだぞ。もし小町にバレでもしてみろっ：次に帰省した時に”小町的に超ポイント低いわあ：”と、冷たい目で蔑まれるだろうがっ！

まさに奥の手だ：

ガン〇ム試作3号機だっ！

デント〇ビウムだっ!!

驚愕し絶句している俺に対し、これ以上ないくらいニコニコしている一色は、俺にスマホの画面を見せてきた。”小町ちゃん♪”と書かれた登録画面の番号は、間違いなく本物だ。

とりあえず通話ボタンは押されなかつたみたいだが、一色はいつでも小町に連絡出来る事を証明して見せた。つまりそれは、俺の名誉が守られるかどうかの運命が、一色の手に握られているという事の証明でもあった。

ってか、ここの住所を教えたのは小町だったんだな・・・

「明日一緒に学園祭回りましょうよお♪きつと楽しいですよ♪」

鬼だ・・・鬼がここにいる。

もはや断る術の無い俺は、真に遺憾ながら、明日1日一色に付き合っつて、学園祭を回る事になってしまった。”こんなに可愛い後輩と一緒になんですから、もつと喜んでくださいよお”とは一色の弁だが、こいつがこんな良い笑顔を浮かべている時は、大抵の場合、俺がロクでもない目に合うんだ・・・

その予感を裏付けるかの様に、大きく深呼吸をした一色が、お馴染みの敬礼ポーズを決めると、“ではではよろしくです♪・・・って、実はもう一つお願いがあるんですよ♪”と言いだした！

…なんだよ、まだ何かあるのかよ。

「もちろんです♪」

一色はそう答えると、俺との距離を一気に詰めた。そして、俺の右腕を抱き抱える様に自分の身体を密着させた後、その艶っぽい唇を俺の耳元に近づけ、鼻に掛かる様な甘い声でそっと囁いた。

「今夜はここに・・・泊めてくださいね？」

つづく

第3・5話 それからの俺は、肉まんを買うのが気恥ずかしくなった。

三月某日、卒業式の日。

私は某所で、葉山先輩を待っていました。

正直なところ：ほら、葉山先輩は告白ラッシュの中心的存在になりそうじゃないですかあ？だから、”時間通りには来られないだろうなあ：”なんて思っていたんですけど、こちらから呼び出したのにもかかわらず、ほぼ時間通りに来てくださったところに、葉山先輩の誠実さを感じます。ホント、そういうところはセンパイも見習って欲しいって絶対無理ですね。

だって、目がアレですし。

待ち合わせの場所に現れた葉山先輩は、しばらく辺りを見回して、やがて私の姿を確認すると、軽く右手を上げて駆け寄って来ました。

「いろは、待たせてゴメン。話ってなんだい？」

私は手のひらをキュツと握りしめ、顔を上げて答えます。

「葉山先輩、来てくださってありがとうございます。」

二人きりになるのは…

ディステイニールランド以来でしょうか。

第3・5話

それからかかれ
俺の
は、肉まんを買うのが気恥ずかしくなった。

—二月某日—

「それでも俺は、本物が欲しい」

そんな言葉に、心を激しく揺さぶられた私は、“本物”を渴望して
一步を踏み出そうと決意した結果、クリスマスのディスプレイニード
ドで葉山先輩に告白して、見事にフラれてしまいました。

ほら：私って、結構モテる方じゃないですかあ？ですから、コクラ
れた事もちよいちよいあるんですけど：そういう人たちも、きつと勇
気を振り絞ってくれてたんですね。私、葉山先輩にフラれるまで、全
然思いもありませんでした：好意を拒絶されるのって、とても悲しい事
だったんですね。その後不覚にも、センパイの前で泣いてしまいました
たし。

って私：今、気がつきました！泣いてるところをセンパイに、思
いつきり見られてるじゃないですかっ!!今まで全然気付きませんでした
したっ！

あああああああ：っ!!!

恥ずかし過ぎて悶絶しそうです…。

私は頭を抱えて、“ぐはあああーっ”ってなっていました。これが俗
に言う、黒歴史ってやつですね。違うんですっ！魔が差しただけなん

ですっ！あんなの、私のキャラじゃないんですっ！

そもそも、こんなにも純真で可憐な私が…どうしてこんな目に合わねばならないのでしょうか？いえ、実は分かっているんです。そもそもそんなの、言うまでもないじゃないですかあ。

これもみんな、センパイのせいです！センパイが全部悪いんですっ！

「センパイのバカっ！ボケナスっ！八幡っ！」

ホントは、本人の前で言ってやりたかったのですが、残念ながらここには居ません。でも、全くスッキリしなかったと言えば…嘘になります。本音を言う…ちよつとだけ、気が晴れました。やーいつ八幡

♪

「おい、人の顔を見るなり罵倒すんじゃないよ。」

へ？

声の方向へ顔を向けると、センパイが立っていました。ヤバイ…もしかして今の、聞かれてたんでしょうか？

「お久しぶりです、センパイ♪一体…何の事でしょうか？」

“はて？”と小首を傾げて、全力で可愛さをアピールする私。とりあえず、全力で無かった事にしました。けれども、センパイはバツチり聞いてみたいで、

「惚けるな。思いつきり”ボケナス…八幡”って悪態ついてたろうがっ。」

と的確に指摘してきました。いろはちゃん大失敗の巻♪てへっ…って、”八幡”が罵倒語に含まれてるんですね…センパイの辞書にも。

まあ、聞かれたものは仕方がないですね。

色々と検討した結果、私は力技で話を変える事にしました。

「とところで…なんでここにいますか。自宅学習期間なのに私の顔が見たいから登校するってのは悪い気もしなくもないですが、冷静に考えると私に執着し過ぎでちよつと引きますので出直して来てくださいゴメンナサイ。」

いけない、うっかりテンションが上がってしまいました。このトキメキはもしかして恋の予感…じゃないですね。完全にありえませんが、センパイと絡むと私、何故か遠慮が無くなってしまふんです。

けれども、阿吽の呼吸とでも言えはいいのでしょうか？”もはやお約束だな”といった表情を浮かべたセンパイ。

「ちげえし！って、事実無根過ぎるわっ！」

「またまたあ…ホントは私に会いたかった癖に♪」

「あーハイハイ、会いたかった会いたかった。」

「むうーっ！なんですか、そのテキトーな返しはっ！」

一見、馴れ合いの様に感じるかと思いますが、こんな些細なやり取りが、私の心を浮き立たせます。なんか久しぶりですね、この感覚…っていうか、おぎなり感たっぷりに”会いたかった”って言われたのに、ちよつぱり嬉しくなってしまうのが、とっても癪です。

ほらそこっ！ほんのちよつぱりだけなんですからねっ！！

むうっ…センパイの癖にナマイキな！

反撃したくなった私は、センパイの正面に回り込み、胸元の前で両手を組んで、瞳を潤ませながら見上げる様な視線を送りました。

「センパイ、もしかそて私と会うの…嫌ですか？」

自分の持つ可愛さといじらしさを、思いつ切り演出しましたよ？私。大抵の男の子は、これで確実に仕留められます♪もちろん、センパイにも効果テキメンだったみたいで、ちよつぴり顔を赤くして、目を泳がせながら…

「い、いや…迷惑なんかじゃ…ねえよ。」

そう言うと、照れてしまったのかソツポを向いてしまいました。ふふ♪そんなセンパイ、ちよつとカワイイですよ♪ともかく、私のプライドは満たされたので、良しとします。

いろはちゃん大勝利♪

その後“今日は家族がアレなんで…”というセンパイを無理やり連れ立って、寄り道する事になったんです。遠まわしに断ろうとするなんて、地味に傷付きますね。そもそも、家族がアレって何なんですか。

こうなったら、何かご馳走してもらいましょう…絶対に！

結局、“俺は、県内全てのサイゼの位置を把握している(どやあー)”と言うセンパイの右手を引っ張って、前から気になってたカフェに入りました。

ここのザツハトルテ、一度食べてみたかったんですよねー♪

「そういや、葉山の奴はKO大に決まったみたいだな。」

「ハイ、そうみたいですな。」

センパイは、運ばれてきたコーヒーに、大量の砂糖と、これまた大量のミルクを投入して“うん：やはりコーヒーに限るな”と一口飲んで呟きました。ちよつと待ってください：通ぶってますけど、もはやコーヒーじゃないですよ、それって。

まあ：いいですけど。

それにしてもこのザツハトルテ、めちやくちや美味しいです♪。私の目に狂いはありませんでした！次に来る時は、何を頼みましょうか…。

「まあ、都内なら会う機会もあるだろうし、良かったな。」

「ハイ♪」

葉山先輩の進路は、戸部先輩経由で知ってましたけど：そういうば、センパイはどこへ行くのでしょうか？居場所は抑えておかなければ。

そりやもちろん：これからも、センパイにはドントン使いつぱ：じゃなくて、責任を取ってもらわねばなりませんから。え？もちろん他意はありませんよ？

「センパイは、どんな感じですか？」

するとセンパイは“んー”と伸びをした後、さらっと言いました。

「俺も・・・千葉を離れる事になるかも知れんな。」

「へえー、センパイも都内なんですね。てっきりCB大志望かと・・・」

「いんや、関西圏だ。」

「・・・はい？」

一瞬、時間が停まったのかと思いました。

ちよ、ちよつと待ってくださいよ。

関西は修学旅行で行きましたけど…めちやくちや遠いじゃないですか！

ホント、洒落になってませんよ。大体、何百キロ離れてると思ってるんですか。

センパイが大学生で、私が高校生のままで…そのうえ何百キロも離れてしまったら…

簡単に連絡を取り合う事なんて出来なくなって、そしてどんどん疎遠になって…

センパイとの繋がりが、消えちゃうじゃないですか！

そうなってしまったら

責任を取ってもらうことも…

お話しすることも…

そして、そつと触れることだって…。

さあつ…と血の気が引いて、急激に体温が失われていく様な錯覚を覚えると同時に、身体からガツクリと力が抜けていく気がしました。そんな様子に気がついたのか、心配そうな表情を浮かべたセンパイが、私の顔を覗き込んできます。

「おい、大丈夫か？具合でも悪いのか？」

けれど、それを悟られたくない私は、平静を装うしかありませんでした。

「だ、大丈夫です。センパイが芸人デビューして、ぼっち漫談で駄々スベリする所を想像してたら、寒くなってきただけです。」

「想像力豊かだな、オイ…って、ぼっち漫談って何だよ。」

それからの事は、あまり覚えていません。

ただ、胸にぽつかりと穴が空いてしまつて…それを埋めるピースを無くしてしまつた様な感覚が、私の中から消える事ありませんでした。

そして心の片隅に、違和感を抱えたまま迎えたのが、今日。

センパイ達が卒業する日です。

実は、生徒会長として送辞を送る予定でして、ちよつと早めに登校してきたんですけど…学校に着くなりセンパイの姿を探してしまう自分が、とつても腹立たしいです。

だつてほら、負けた気になるじゃないですか？

とはいえ、この数日間ずっと抱え込んでる違和感が一体何なのか、正体が分からないまま…いえ、本当は何となくと分かつてるんです。ただそれを認めてしまうと、きつと今までとは、何かが決定的に変

わかってしまつて…。

得体の知れない不安を抱えたまま、センパイと顔を合わせたとしても、何を話せば良いのか全然分からず…結局あれから、1度も会えていません。

この様に、柄にもなく小難しいことを考え込みながら生徒会室へ向かう私。入口で立ち止まつて“ああんもうっ…!”と、もやもや感に支配された頭を掻き毟っていたところに、誰かが声をかけてきました。

「よお、いろはすじゃん」

「…はい？つてなんだ、戸部先輩じゃないですか。」
忘れてましたけど、戸部先輩も卒業生でしたね。

「いろはす、それないわー」

まったく…相変わらず騒がしい人ですね。まあ、悪い人ではないんですけど。けれど、仮にも先輩ですので、ここはキチンと挨拶しておく事にします。

こう見えて、私はそのあたり…しっかりしてるんですよ？

「戸部先輩、卒業おめでとうございます。」

「おお、ありがとな」

「卒業できて良かったですね。」

「お、おお、ありがとな…」

考えてみれば、これまで戸部先輩を色々とコキ使…お世話になりました。主に荷物運びとか、生徒会室の模様替えとか…そうそう、プロテインまとめ買いの時もお世話になりましたよね。

「戸部先輩、本当にありがとうございました。」

「いいってことよー！」

今振り返ると、結構雑な扱いをしてしまったと思うんですけど、
そんな事は全く気にしてないぜ！」といった感じ（※個人的な感想で
す）で返事する戸部先輩は、とても懐が深い人だと思えます。ちよつ
と騒がしいけど。

僅かな沈黙が訪れた後、戸部先輩が不意に遠くを眺めました。つら
れて私も同じ方を眺めてみると、正門の辺りで見知らぬ男女が、照れ
くさそうにモジモジしています。

ほほお：どちらかが告白して、見事カップル誕生といったところで
すね…。

リア充は、今すぐここで爆発してください。

一方、戸部先輩は「いいわー青春だわー」と言うと同時に、右手を
高々と上げてサムズアップをし、無駄に爽やかな笑顔を浮かべまし
た。戸部先輩は、単純で何も考えてはいませんけれど、他人の幸福を
素直に喜べる良い人です。ちよつと暑苦しいですけど。

私は、なんとなく聞いてしまいました。

「戸部先輩には、好きな人っていますか？」

「へっ、いろはす…もしかして俺の事が!？」

「いえ、それは無いです。全く無いです。」

「いろはす容赦ないわあー。」

大事な事なので、もう一度言っておきますが…これっぽっちもあり
ません。微塵もその気はありません。可能性ゼロです。取りあえず、
20回くらい生まれ変わってから出直してきて下さい。

「で、いるんですか？」

戸部先輩は、一旦間を置いて視線を遠くへ向けた後に

“ ああ、いるべ ”

と言いました。

「告白をしようとして失敗したんだけどさあ？ いや、正確には出来て

ないんだけど…ってかそもそも、ヒキタニ君にチャンスを貰った様なもんだし…みたいなの?。」

センパイ、一体何をやらかしたのでしょか…。私、とっても気になります…けどっ、とりあえず今回それは、後回しです。

「誰かを好きになるって、なんなんでしょうね。」

“そんなん、いろはすの方が良く知ってるっしょー”と、のたまう戸部先輩。それは…確かにそう思われても、仕方ないですけど。

「好きって色々あるっしょ? 親愛だったり、敬愛だったり、友愛とか…。ああ、憧れってのもあるでしょー」

今まで、なんとなく“良いなあ”と思ったら、取りあえず粉を振りかけていたので、そういう事をあまり深く考えた事が無かった私には、興味深い話です。

「でもさ、えび…げふんげふん。十年先も、百年先も、おじいおばあになっても…一緒に居られたら良いって思うんだったら、その“好き”は最高っしょー?」

最高の“好き”ですか…。

自分の気持ちが一体どうなのかを知る事は、とっても難しいと思っていたんですけど、戸部先輩の単純明快な“好き”は、私に軽い衝撃を与えたのと同時に、それは驚く程すんなりと私の中で消化されていききました

それじゃあ、私にとっての“最高の好き”って…

ああ・・・。

そっかあ・・・。

そういうことだったんですね。

「…ってごめんな、いろはすー。よく分かんないっしょ？」

戸部先輩は、先ほどのシリアスモードからは完全に脱却し、いつものウエーイな調子に戻っていました…3分くらいが、限界なんですね。

「いえいえ、大変参考になりました！」

「そう言ってくれるとありがたいわー。」

いえ、こちらこそ感謝です。なんと言いますか…そう、目から鱗が落ちまくって、後で掃除が大変なまであります。さて…そうと決まれば、早速行動しなければ！です。

「では行きます！あ…そうそう。海老名先輩とずっと一緒にいられたら良いですね♪」

「ちよっ、何でっ!？」

うろたえる戸部先輩を残し、私はその場を後にしました。

新たな一步を踏み出す為に、私がしなければならぬ事…。私はポケットからスマホを取り出し、ダイヤルしました。

『もしもし、葉山先輩ですか？』

「いろは、待たせてゴメン。話ってなんだい？」

私は手のひらをキュツと握りしめ、顔を上げて答えます。

「葉山先輩、来てくださってありがとうございます。」

二人きりになるのは…

デイスティニーランド以来でしょうか。

「葉山先輩はあの時、既に気が付いてたんですね…。。」

私は“カツコイイ葉山先輩”のうわべに憧れていたに過ぎなかったんだ…。

「ああ。」

葉山先輩はそう返事をするだけで、あとはただ微笑みを浮かべていました。

周りの人を、誰一人傷つけない様にするには、相手の立場や心情を人一倍配慮し、読み取らなければいけません。さつき私が、ようやく

気付いた私自身の気持ちも、葉山先輩は、あの時既に感じ取っていたんですね…。

少しの沈黙の後、葉山先輩は私に問いました。

「いろは、これからどうするんだい？」

「これから…と言いますと？」

全部見透かされるのも悔しいと思ったので、少し恍けてみようと思っただんですが、相手は1枚も2枚も上手…ど真ん中の直球を投げってきました。

「見つけたんだろ？本物の気持ちを、さ。」

結局、全部お見通しなんです。流石はおにいさま…じゃなかった、葉山先輩です。こうなったら、もはや取り繕うのは無意味ですよ。私は大きく胸を張って、宣言しました。

「もちろん、アタックあるのみです！」と。開き直った乙女は、とつても強いんです！

「そっか。頑張れよ、いろは。」

葉山先輩は穏やかに、けれども力強いエールを私にくれました。

「でも、ライバルが二人もいるんで大変なんですよねー。」

「まあ、確かにあの二人は強敵だけど、一番の強敵は…。」

「比企谷八幡」

「だな」

「ですね♪」

私たちは顔を見合わせると、思わず嘖き出してしまいました。センパイ、朗報です！安

心してくださいね？アナタの存在感、たっぷりありますよ♪

「じゃあいろは、サッカー部の事をよろしく頼むな」

恐らく今後、葉山先輩とお会いする機会はぐっと減ることになりそうです。

「葉山先輩！」

「なんだい、いろは？」

私は万感の想いを込めて、感謝の念を伝えました。

「ご卒業おめでとうございます！今までありがとうございます！」

葉山先輩は軽く右手を上げると、校門の方へ駆けていきました。

さようなら、葉山先輩。

由比ヶ浜が言った。

“奉仕部で打ち上げするからね。来なきや泣くよ？”と。

いやお前、絶対泣かないだろう…っていうかむしろ、俺が泣かされるまでである。

無論、雪ノ下にな。

でも、まあなんだ…参加する事もやぶさかではないんだけどな。

集合の時間まで余裕があったので、3年もの間、雨の日を除いてほぼ毎日の様に、俺を支え続けてくれた場所へと足を運ぶ事にした。

そう、ベストプレイスだ。

ベストプレイスを訪れるのは、恐らく今日で最後だが、そんなの関係ねえと言わんばかりに、いつもと何一つ変わる事のない時間が、ここには流れていた。

生徒達の声色は風に乗って、あらゆる方向からやって来る。それらの喧騒がここで交わり、それはあたかもオーケストラの様に反響し、波の様に響き渡るのだ。

俺は、いつもと同じ様に段差に腰掛け、マッ缶を開けた。

きつとこの場所は、俺がいなくなった後も何一つ変わらずに。風が全てを包み込こんで、辺りを静かに見守ってゆくのだろう。

さて、時間も時間なのでそろそろ向かうかな…と腰をあげた時、遠くから誰かが息を切らして駆けてきた。

「はあーっ…んっ…もうセンパイっ…探しましたよお…はあっ…はあっ…」

俺の前で立ち止まったのは、一色だ。そんなに慌てて、一体何があつたんだ？

「はぁん…あ…ん…い、息っ…息が整うまで…待ってください…んふう」

…。

わかった、いつまでも待ちつづけようじゃないか！可愛い後輩の為だ、うん。

決して…一色の息遣いにドギマギしてるんじゃないんだからねっ！

しばらくすると、落ち着きを取り戻した一色が、俺に話しかけてきた。

「センパイ、卒業おめでとうございます！」

「ああ、ありがとうな」

「ハイ♪」

「…。」

「…。」

「あれ？もしかして、態々それを言いに来たのか？」

「ハイ♪もちのろんですっ♪」

「イマドキ”もちのろん”って、昭和か！でもまあいいや、これくらいなら。いや、まてよ…一色の事だから、この土壇場でまた何か面倒な事を…」

「センパイ、何か失礼な事を考えてませんか？」

「いえ、考えていません。マジ済みませんでした。」

「なら宜しい♪」

一色の視線が怖かったので、つい敬語になっちゃった…。

「それにしても、よく俺の居場所が分かったな。」

「センパイの行きそうな場所なんて、まるっとお見通しですよ♪」
「そう言うと、一色はお馴染みの敬礼ポーズを決めた。もちろん、
「きやるん♪」とした笑顔ももれなくセツトだ。うん、あざといのはい
つも通りだ。いろはす的にポイントたかーい。」

「ちよつと、なんでそんなに反応薄いんですかつ!」

「いや、流石に慣れたわー。」

「はっ!それは、俺にとって慣れ親しんだ女性はお前だけだから付
き合って欲しいって事ですか?!お気持ちは大変嬉しいのですが受験
が終わってない今の状態だとセンパイの集中力が乱れてしまうので
終わってから出直して来てくださいゴメンナサイ」

卒業式の日には、どの学校でも多かれ少なかれ、告白ラッシュが巻
き起こる。したがって、そこでフラれてしまう事は決して珍しい事
ではない。ただしそれは、告白したけれど想いが叶わなかったというな
らば…だけどな。日本中で俺くらいじゃないか?告白もしてないの
にフラれるのは。

まあ…こんなやり取りも今日で終わりなんだけどな。

「何言ってるんですか!?!終わりになんてさせませんよ?」

いやいや、高校を卒業したらここには来なくなるし、何より、お前
との接点は殆どなくなるじゃないか。大体、お前の為に張り切って
くれる下僕予備軍なんて、沢山いるだろうに。

「いいえ、センパイにはこれからも責任をとってもらいます。」

「いや、そりやお前が生徒会長に…。」

生徒会長に当選させた責任をだな…と言いつつ終わる前に、言葉を遮ら
れた。

「ディスプレイニールランドの帰りに、責任取るって言ったじゃないで
すかあ」

「いや、あれは俺が言ったんじゃないよ、お前が俺の耳元で…。」

そう言い終わらないうちに、一色が俺との距離をきゅつと詰めて来た。そして、俺のシャツの裾をぎゅうつつ…と掴むと、しつとりと潤んだ瞳を俺に向けて、絞り出すような声で俺に問いかけてきた。

「せんぱあい…やっぱり…私の事…嫌いですか？」

一色さん！ちよつ、それ反則っ！そんな顔されたら、何も言えないじゃないか！

「い、いや、決してそんな事はないんだが…」

どもりながらも、当たり障りのない俺の返事を耳にした一色は、シャツを掴む力に“ぎゅつ”と一層力を込め、元々大きな瞳をさらに大きく開くと、俺にとどめを差しに来た。

「じゃああ…これからも…ずっとずーっと…責任とつててくださいいね？」

こいつズルい！お前、絶対分かっててやってるだろっ。自分の可愛さが何なのか分かってないと、ちよつとこの仕草は出てこないぞ…平塚先生！一色さんがズルしてきますっ！

あざといからといって、可愛くない訳ではないから始末が悪いのだ。

「わ、わかった、わかったから。なんかあつたら連絡しろ。」

その言葉を聞いた一色は、ぱあああつと表情を明るくしたかと思うと、これ以上ないというくらいに元気よく、弾んだ声で“ハイっ♪”と返事した。

ったく…現金なやつだ。

そのあと一色は、間髪入れずに一色は、ポケットからスマホを取り出すと、目をキラキラさせながら、“それではセンパイ…家電に携帯、メール、LINE…ありとあらゆる連絡先を教えてくださいいね♪”と

興奮を隠さない。

ありとあらゆるって…下僕にする気マンマン過ぎるだろ。どんだけ外堀埋めんだよ？

登録を済ませた一色は、にんまりとした表情を浮かべると

“えいつ”

という掛け声とともに、俺の右腕に自分の両腕を絡ませてきた。女の子特有の、甘い香りと柔らかい感触が俺を支配する。

以前の俺ならば、勘違いして確実に惚れていたな。そして高確率で、フラれていた違いはない。だがここは、決して同じ轍は踏むまい！そうだ、こいつをカボチャと思おう…

そうだ一色、お前はカボチャだっ！

だが俺の思惑とは裏腹に、2つの柔らかな膨らみが俺を惑わせる。ああ…そうか。そもそも、こんなに柔らかいカボチャなんて、ある訳が無かったんだ…。

どう考えても、これは肉まんなんだ…そう、肉まんなんだ!!

そんな心の葛藤など知る由もない一色は“さあ、皆さん待ってますよ♪”と言うと、俺を伴って歩き始めた。

ってか、そろそろ腕を開放してくれませんかね？

「あ、そうだ…センパイ。」

一色が、何かを思い出した様に立ち止まった。そして、俺の右腕を解放するや否や正面に回り込んでいつもの敬礼ポーズを決めると、屈託のない笑顔を浮かべて言った。

「これから、ずっとずっとよろしくです。」

おわり

第4話 別腹でも、太るんだからな？

「大家さん、これとってもおいしいですよ♪」

一色が大口を開けて、凄い勢いでモリモリと食べている。皿の上の食材は、次から次へと一色の口へ…みたいな生易しいものではなく、一口でペロリと平らげられて一瞬で消えるといった具合だ。それはあたかも、ジンベエザメの食事タイムを彷彿とさせる様な、凄まじいものだ。

海遊館のホームページによると、ジンベエザメに与えるエサは1日2回、その量は合計で8kgにも達するそうだ。そこへいくと、この一色の食べっぷりでは、1日どころか1回の食事で軽々と平らげてしまうのではないだろうか？

1日の食事が24kgだとすると、3日で72kg…という事は、42日を過ぎる頃には、一色の体重は1tを軽々と超えてくる計算だ。この分だと来場所の新弟子検査では、一色はぶつちぎりの合格を果たす事になるだろう。未来の大横綱“いろは富士”の誕生である。

一方、それを満足そうに眺める大家のおばちゃん。普段俺が少食な分、その食べっぷりに“作り甲斐があったわあ”といったところなのだろう。

「こんによく炊いたん食べえ」

「ジュース飲みい」

「林檎食べるかあ？」

気を良くした大家のおばちゃんが、料理を次から次へと卓に並べ、それを片っ端から食べ尽くしていく一色。こうしてあつという間に、並べられた食料の大半が、一色の胃袋へと消えていった。ほぼ間違いない、俺の3倍は食ってるな…

まさに食のベルトコンベアーやー。

“一色いろはは、お砂糖とスパイスと素敵な何かでできている”

以前デートの真似事をした時に、そんな事を思ったのだが…断言しよう。

今のこいつの大半は、どんぶり飯で出来ているに違いない。

第4話

別腹で

も、太るんだからな？

「今夜はここに…泊めてくださいね？」

いつもとは違い、あざとさの欠片もない一色。その真意を量りかねた俺は、思わず視線を逸らしてしまった。だが目を逸らしても、腕に伝わる彼女の温もりが、その存在をより一層意識させて、余計に俺を混乱させる。

「ちよっ、それはまずいだろ！」

こいつは一体、何を考えているんだ？ 目がマジで、ちよっと怖いんですけど…。ちよっと待て…もしかして、俺が動揺する姿を一頻り愉しんだ後に

『どうですか？ センパイ、絶対ドキドキしましたよね♪』

なんてオチをぶちかまして来るんじゃないの？ っていうか、むしろネタであってくれっ！

しかし一色の眼差しは、俺を捉えて離さない。それどころか、俺の右腕に絡まっていた一色の両腕に、より一層“ぎゅうううつつ”と力が込められた。

「ふふふ♪せんぱい…何がまずいんですかあ♪っ」

当たってるって！ 当たってますってば!!

2つの膨らみが、俺の腕に押し潰されて歪な姿に形を変えていた。一色は、やや妖艶さを含んだ”にやり”という微笑みを俺に向ける
と、

「もしかしてセンパイ、エッチな事・・・考えてます?」

俺の耳に”ふうふう”と息を吹きかける様に囁いた。

「か、考えてねえよっ!ただほら、世間体つてものがだな...」

俺が言い終わらないうちに、一色は再び俺の耳元に顔を近づける。

「私:センパイの事、信じてますから♪」

甘い囁きと一緒に、もわあつとした生暖かい吐息が俺の耳をくすぐり、またその艶っぽい声色に反応してしまつて、それらは俺の背筋をゾクゾクと震えさせた。

大体お前なあ、そんな凶悪な物を押し付けておいて”信じてます♪

”つて:あんだ鬼ですか!

”つていうか近いよ! 近すぎんだってば!!

そんな俺の、アタフタした様子に気を良くしたのか、一色は一瞬”ふふふ”とご機嫌な笑みを浮かべ、甘い声で俺に囁いた。

「ねっ?今晚は隣にいても:いいですよね?」

一色に力強く抱きつかれた事によつて、元々ほのかに感じられていた甘い香りが、”

ぎゆうううつと”搾り出されたかの様に、凝縮されて漂ってくる。

それはまるで、上質なワインの香りの如く、俺の脳を刺激しクラクラとさせた。

ワインで思い出したんだが、ボ○ヨレー・ヌヴォーのキャッチコピーは、毎年の様にパンチの効いた文言なんだけど、2010年だけ”2009年と同等の出来”と、控えめだったのは何でだろうな。

「キャッチコピーの締め切り、今日なんだけど」

「申し訳ございません」

「申し訳ないじゃ、済まないんだけど?」

「申し訳ございません申し訳ございません」

：…みたいな遣り取りがあつたのかも知れんな。いくら頑張つたつて、思い付かない時は思い付かないものだ。だがそれでも、締め切りは必ずやって来る。

確かに締め切りは延ばせる…けど、それにだつて限度があるからな。

まあ、今のは俺の勝手な妄想だ。軽く聞き流してくれよな？ 苦情の電話とか、裁判とか、マジ勘弁してください済みません済みません。けど、そんなウキウキ社畜ライフとも呼ぶべき日常が待っているのならば、そんな場に身を投じるのは人生の浪費であり…つまり働きたくない。そこへいくと、専業主夫は間違いなく最強の存在だと言えるな。

いやいや、そんな事より今は、この状況を如何にして打破するかだ。そこで俺は、一色に”とにかく一度離れろ”と促したのだが…

「イヤです。泊まって良いって言うまで離れません(きつぱり)」

あつさりと断られた。だから何でだよ！

その”何でだよ！”にお答えします”と言わんばかりに、一色は胸を張って答えた。

「センパイの処に押しかけるのを前提に、ホテルは押さえてないですし(えっへん)」

なんでそんな事が前提なの！ そして、なんでそんなに誇らしげなの！

それでも、ようやくいつもの調子を取り戻しつつあつた俺に対し、それを察したであろう一色。変わりつつあつた風向きを、再び掌握せんと言わんばかりに、作戦再開と…捨てられた子猫の様な、憂いを含んだ表情を浮かべ、適度に潤ませた瞳で俺を見つめた。

「センパイ…私の事…キライですか？」

「キライじゃないが、可愛く言ってもダメなものはダメだ。そしてあざとい。」

「むううーっ、あざとくないですっ!」

その思惑をあっさりとへし折られた一色は、まるで理不尽な仕打ちを受けた狸の様な、恨めしいといった表情で俺を見る。ふっ、北斗○拳の前では同じ技は二度も通じぬっ! って、あれは一度見た技が使える様になるんだっただか?

なんかさ…あざと八幡です♪って、ポイント高くね?

「センパイ…ちよつとキモいです。」

…

どうやらこいつも、冷静さを取り戻してきたみたいだな。けど何故だろう…望んでいたはずなのに、バツキリと折られた様に心が挫けそうだ。

だがここは、説得のチャンスだ。乗るしかない! このビッグウェーブに!!!

「ホテル代は俺が持つし、明日は付き合うから、大人しく言うことを聞いてくれ。」

“えーっ”と、一色はすこぶる不満げな声を上げて抗議したが、ダメなものはダメだ。もう子供ではないんだから、頼むから聞き分けてくれ。

『コンコン』

そんな時、ドアがノックされた。その主は、言うまでも無く大家の

おばちゃんだ。

「比企谷さん、夕御飯が出来ましたえ？」

部屋の時計は、夕方の6時半を指していた…って、あれからもう4時間以上たってたの!? 4時間もあつたら、長編アニメが2〜3本観られるぞ。

それにしても、考えてみれば今日の午後は、ひたすら正座とひたすら説教に費やされたって事だよな…ああ、なんて不運な1日だったんだろうか。ここ数年で、こんなに疲れた日曜日の午後は他に無いぞ。でもまあ、ここに泊めるといふ選択を回避出来たのは御の字だ。とりあえず飯を食ったら、一色の宿探しをしようだなんて思っていたのに…

「いろはちゃん、今晚は泊まつていかはるやんねえ？」

全米が震撼した。

っていうか、おばちゃんの手酷い裏切りに俺が震撼した。ずっと味方だ…とは流石に思ってたけどさ、何故そんな発想になるんだよ！

「何でって…兄の処に身を寄せるのは、当たり前やないのですの？」
「そーいや一色のやつ、妹って事になってたんだっけ…その事を思い出し、俺は一瞬言い淀んでしまった。多分その時…隙が生じたんだろーうな。」

一色の目が、キラリと光を放った瞬間、俺から離れ素早い動きで大家のおばちゃんの背後に身を隠すと、そこからはもう…こいつの独断場だった。

「大家さん聞いてくださいですうーっ。兄が酷いんですうーっ。ここに泊まつちやダメって、イジワルするんですうーっ。」

おばちゃんには、あざとさを見極める能力など無い。そして、一色の演技には一点の曇りも無く、比べて俺のは演技では無いが愛想も無

い。無い無いばかりでもう止まらない。つまり、戦火が俺を目掛けてやって来たのは、自明の理だった訳だ。

「いろはちゃん、可哀想に…。比企谷さん、血を分けた妹さんなんやから、いけずしはったらアカンのとちやいますか？」

おばちゃん、騙されてるよっ！ 血を分けた妹どころか、こいつには輸血さえした事無いよっ！ けれども、俺の心の声は誰にも届かない。一方、強力な援護射撃を受けた一色は、大家のおばちゃんの後ろに隠れながら、“そうだそうだー”とシユプレヒコールをあげた。

こいつ・・・やっぱイイ性格してるわ。

って、“妹の比企谷いろはです”って名乗ったのは、この為の伏線だったのか…。

いろはす、マジ策士っ！

もはや、ぐうの音も出ない。一切の抵抗を諦めた俺の様子を確認したのか、

「という事でいろはちゃんには、今晚泊まっていってもらいます。いろはちゃん、御飯も作ったし早よう下においでな。」

そう言うと、大家のおばちゃんは一足先に1階へと下りて行った。

おばちゃんが下りていったのを見計らうと、一色は振り向き

「じゃあセンパイ、そういう事でよろしくですっ♪」

いつもの敬礼ポーズをびしっと決めた。お前、ホントそれ好きだな。もはやルーティンワークと化した感もあるが、その仕草だけ見ると可愛くない訳ではないんだよな…あざといけど。

むしろ一色の半分は、あざとさで出来ているまである。

おい…“素敵なか”ってのは、まさか、あざとさじゃないだろうな!?

まあ、今更決定事項が覆るとも思わないので、俺は甘んじて、この敗北を受け入れる事にした。無駄な抵抗ほど、無駄な事は無いのだ。俺は早々に諦めをつけて一色に促した。

「ああ、こうなったら仕方ねえな。とりあえず、飯にしようぜ」
完全勝利を手にし、上機嫌で“ハイ♪”と返事する一色。色々も含むところもあつのだが、あまりにもニコニコとする一色を見ているうちに、そんな気持ちも霧散していった。

こうして、一色を伴って1階へ下りようとしたのだが、一色は“ちよつと待つてください”と足を止め、意を決したかの様な表情を浮かべると、俺の胸元に“ぼふっ”と自分の額を沈めてきた。

「ここに居る間は…いろはって、呼んで下さいね？」
そう言いい終わると顔を上げ、俺を置いて1階へと下りて行った。

…つたく、耳まで真っ赤になる程恥ずかしいなら、そんな事言わな
きやいいのに。

…。

「い、いろは…。」

ちよつ、これっ…想像以上に恥ずかしいわ。

つづく

【おまけ】

「いろはちゃん、ケーキもあるけど、食べへん？」

「ケーキですか!? 頂きます♪」

「甘いものは別腹やもんね」

「ですよー♪」

まだ食べるのかよっ！

第5話 てへぺろって何？って言われた・・・

騒がしい夕御飯を終えると、一色のヤツはしばらくの間

「流石に、しばらくは何も食べられませんか♪」

と、何かをやり遂げた様な満足な表情で、ゴロゴロと床の上を転がったり、

由比ヶ浜ん家の犬の名前、えーっと・・・なんていうんだっけ？

サブ・・・マリリン、サブ・・・カル女子、サブ・・・マシガン・・・
ともかくだ、由比ヶ浜ん家のサブなんかさんの様にメチャクチャ
伸びたりと、

初めて訪れた家とは思えない程に、くつろぎまくっていたのだが、
やがて大家のおばちゃんに促されると、一番風呂へと洒落込んで
いった。

「やれやれ、ようやく静かになったな。」

俺は読書でもしようかと、居間のソファアに腰を据えた。

下宿での大半は自室で過ごすのだが、晩飯を食べた後だけは
居間のソファアでくつろぐのが日課だ。

そして

“今日は、色々と大変な1日だったな・・・”
なんて、ぼけーっと考えていたのだが・・・

程なくして“ドタドタドタ・・・”と、廊下を走る音が辺りに響
き渡った。

つたくあいつは・・・。廊下を走つちや駄目だろ。

そう言えば渡○廊下走り隊が“廊下を走るな！”ってアルバム出
してたな。

廊下を走る事を運命付けられた子供達と、それを阻止する為に
立ち上がった教員達との、宿命の戦いを描いた作品だ。

例えるならば、呼び出しに応じずに逃走する、腐った目をした男子
学生を、

アラサーの女性教諭が“待てえええ比企谷ああ”と追い掛け回
す、あの感じだ。

・・・抹殺のラストブリットって、リアルに存在するんだぜ。知ってたか？

「ごめんなさい嘘です。適当な事を言いました。」

取り消してお詫び申し上げます。マジすんませんでした。」

話を戻そう。

やがて、ドタドタと廊下を走ってきたであろう一色が、

居間へと続く扉を勢いよく開け放つと、

「センパ・・・兄さん、お風呂メチャクチャ広いですよ!!」

興奮を隠せないです♪とばかりに、そう叫んだ・・・

タオルを1枚、身体に巻いただけの格好で。

第5話

て

へ

ペ

ろ

っ

て

何

？って言われた・・・

「な、な、なんで、そんな格好で出てくるんだよ!!!」

水着なんかより、よっぽど肌色面積は小さいのに

こっちの方が、圧倒的に劣情を掻き立てられるのは何故だろうな？

っていうか、隠せてないから！色んな部分が隠せてないから!!

今度は、俺の方が動揺を隠せなかった。

八幡、目のやり場に困っちゃうつ。

一色は、初めこそ無邪気な笑顔を爆発させていたのだが、

俺が取り乱している様子に気が付くと、

“ニヤリ・・・”

と悪い事を考えている人の笑みを浮かべ、俺との距離を詰めてきた。

「せんぱあい♪あれえ、意識しちゃってますかあ♪？」

そして自分の両手で、左右の胸を下から持ち上げる様に支えようと、

“もにゆもにゆつ”と、その谷間を強調し始めた。

ばっ、そんな風に強調されたら、意識せざるを得ないじゃないか。

その“もにゆもにゆつ”とした膨らみは、アンサイクロペディアで

“男が夢見る約束の地。もしくは見果てぬ切ない故郷の一種。

”

と定義されている。従って、俺の目が釘付けになってしまうのは、

飽くまでも浪漫への渴望がそうさせるのであり、止むを得ない事な

のだ。

つまり、決して邪な気持ちを抱いている訳ではない。

ホントだよ？

一方、面白がって胸の谷間をもにゆもにゆしていた一色だったが、

俺の視線が想定以上に揺ぎ無かったせいか、

急に顔を赤くしたかと思うと、くるりと俺に背を向けた。

「センパ・・・兄さん、じっくり見過ぎです・・・」。

「す、すまん……。」

気まずい空気が流れる。

「センパイ。」

「……。なんだ？」

「これから、エロスサンダー大王って呼びますね（きつぱり）」

やめてっ、勘弁してっ……。って、このパターン何度目だよ！

今日はこんなおぼっかりだな、オイ。

その後……

“ 約束の地？全く意味が分かりません。 ” とか

“ 故郷の地って何ですか!? 千葉愛はどこへ行ったんですか! ” とか

“ 胸元を凝視するなんて、その……私を……。に、妊娠させる気で
すか!! ” とか

言いたい放題ぶちまけた一色は、スッキリした表情を浮かべると

「それではお風呂行って来ます♪……。覗いちやダメですよ♪? 」

軽くウインクして “ てへぺろっ ” と舌を出し、浴室へと戻って
いった。

やれやれ、嵐はようやく過ぎ去ったか……

って、胸を “ もにゅもにゅ ” やってアピールしてたのはお前じゃね
えか!

あれから一色は、本格的に風呂を満喫しだしたらしく、

今度こそ俺に静寂がもたらされた。

再びソファーに腰かけた俺は、読みかけだったラノベを開く事にし
た。

もちろんその傍らに、愛すべきマツ缶を添えてだ。

本の内容はこうだ。

どこかにある辺境の惑星を巡り、主人公と3人の少女達が

所有権を争っていくうちに、やがて恋心が芽生えハーレム化してゆくというものだ。

この話で凄いのは、恋のライバル同士であるはずの女の子達が、主人公をみんなで仲良く共有し、幸せになる事で一致団結しているところだ。

まさに男性の夢を具現化したような話だが、現実はそうそう甘くない。

それは、葉山を挟んだ、三浦と一色の鏝迫り合いを見ていれば一目瞭然だ。

だってあいつら、超ニコニコしてんのに、その目は底冷えする程寒々しいんだぜ？

それはもう、桂○枝を立てさせてカイロのCMやっても違和感ないレベルに。

八幡、超怖いよお……。みんな仲良くしようよお……。

“幸せ”は“辛い”と似ている。“夢”に“にんべん”を付ける
と儂い。

つまり、人生は儂く辛いものだという事だ。

こんな現実、知りたくなかっただろ？

大丈夫、俺も知りたくなかった……。

だから俺は、マツ缶で味覚的な甘味を補い、ラノベで精神的な甘味を補うのである。

この様にしばらくの間、周りに誰もいないにも関わらず

人生の有り体について講釈を垂れていたのだが、不意に、

“ You’ve got mail!”と

な○坊の声で、スマホがメールの受信を知らせてきた。

最近思ったんだけど、な○坊の声って由比ヶ浜に似てるんだよな。

今度、“とんだシスコン野郎ですね”とか言ってもらっちゃおうかな。

「ヒツキー・・・マジきもい」とか言われてドン引きされそうだけ
ど。

さて、メールの主は雪ノ下だった。

From: 雪ノ下雪乃

待っている訳ではないのだけれど

獅子丸の写メール、今日はおやすみかしら？

獅子丸というのは、大家のおばちゃんの飼っているネコの事だ。

ライオンの様に鬣がワサワサ生えているので、そう名付けられた。

ちくわが好物の、あの忍者犬から取ったわけじゃないぞ？

まあ・・・ネコ用ちくわは滅茶苦茶食べるけどな。

以前、ネコに興味のない素振りをしていた雪ノ下も、

流石に知り合って3年も経つてくると、

もはや、ネコキチ・・・ネコ好きっぷりを隠そうとはしなくなった。

以前獅子丸が、ティッシュの箱に入ったまま出られなくなった写メ
を、

つい出来心で、雪ノ下に送ってしまったのだが、それが引き金に
なったのか、

それからほぼ毎日の様に、獅子丸の写メを要求されるようになった。
た。

あいつ、どんだけネコ好きなんだよ・・・。

それはさて置き、獅子丸は生憎ここにいない。

実は、大家のおばちゃんの孫宅にお泊りに行っているのだ。

俺は雪ノ下に、上記の事象に加え、昔に撮影したかまくらの写メ（か
まくらが

直立不動で寝ているというものだ。）を添付し返信した。

ネコ職人の朝・・・じゃなくて、雪ノ下のメールは速い。俺がメールして、2分も経たないうちに返信されてきた。

From：雪ノ下雪乃

ありがとう比企谷君。

その・・・もし良かったらなのだけれど、まだ他にもあるのだったら、全部貰えないかしら？

かまくら写メのおかわり、キマシタワーツ。

俺は、スマホに撮り貯められていたものを、全て雪ノ下にする事にした。

・・・全部で1GBくらいあるけどな。

きつと今晚、目をキラキラさせながら眺めるんだろうな・・・無意識のうちに”にやーっ♪にやーっ♪”とかいいながら。

ただ、余りにも数が多かった(枚数だと200枚くらいある)ので、

”えーどうしよっかなあ・・・?”みたいに焦らしていたら、

”比企谷君、勿体ぶるのはやめなさい”と怒られた。

マジすんませんでした。

ドジでノロマな亀だけど、八幡頑張るっ！

こうして今日も、雪ノ下の携帯電話に

ネコ写メコレクションが追加されたのであった。

10分程過ぎて、

From：雪ノ下雪乃

本当にありがとう。

御礼といたら何だけけれど、

こちらからも1枚送ります。

今日もありがとう。また明日。

というメツセージと共に、
アビシニアンの子猫を抱いた、雪ノ下の写メが送られてきた。
その写メに、俺は釘付けとなった。もちろん子猫も愛くるしいのだ
が、
普段見せない、穏やかな微笑みを浮かべた雪ノ下に、
不覚にもドキリとさせられてしまったのだ。
これを見ちまうと、もう氷の女王なんて呼べねえな……。

「せえええんぱああああいいいい……何見てるんですか？」
不意に後ろから、ダークマターを磨り潰して混ぜ込んだ様な
不吉な声が響き渡って来た。

ああ・振り返りたくない……後ろにも、そして過去の自分にも
！
だがそういう訳にもいかず、恐る恐る後ろを振り返ると、
仁王立ちした一色が、俺を思いつき見下ろしていた。
おかしいな……。

とつてもイイ笑顔なのに、鋭い目付きがまるで獣の様だ。
つていうか、風呂から上がってきたのね。

「あの……一色さん？何故そんなにお怒りに……」
と言いつつ終わらないうちに、一色にスマホを引っ手繰られた。

「これは、雪ノ下先輩……むむむ」
俺から強奪したスマホの画面を、なんだか唸りながら凝視している
一色。

フレームがミシミシいってて超怖いんですけど……。
「センパイ、何で雪ノ下先輩の写メ持つてるんですかつ！」
やがて一色は、ダメ亭主の浮気を見つけた古女房の様に問い詰めて

来た。

それ、雪ノ下というよりは、子猫の写真なんだけどな……。
「ネコの写メ送ったら、御礼についてアビシニアンが写ってるそれが来たんだよ」

「それにしても雪ノ下先輩の笑顔、良過ぎじゃないですかー……。」
ああ……。これは納得してないって顔だな。

その後も一色は、俺の顔をじっと凝視しつつ

“むうううーっ”と唸っていたのだが、やがて

「センパイ……。」

「なんだ？」

「……。ここに正座してください。」

さつきとは打って変わって、

拗ねた様な不満げな表情を浮かべつつ、床に指をさした。

「またかよっ！そしてなんでだよー！」

「とにかく正座ですっ！正座っ！」

一色は両頬を膨らませ、思いつきりむくれていた。

なんだか今日は、正座ばっかさせられる日だな……。

そう思いつつ、渋々ながらも正座してしまう俺には、
間違いなく、社畜としての高い才能が秘められているに違いなかつた。

つづく

第6話 俺の歌う番に、みんなは曲選びに没頭する。

「全く・・・何をしているのかしら、あの男は。」

私は「新着メール0件」と表示された、携帯電話の画面に毒付いた。

コホン・・・決して、比企谷君からのメールが待ち遠しい訳ではないのよ？

全く・・・ネコ好きの私に、あんなに愛くるしい写真を送りつけてきて、

散々私を悶絶させた比企谷君には、今後！毎日！未来永劫！

ネコの写真を撮影して、私に送ってくる義務があるはずだわ。

っ、つまり・・・私は彼に、責任を取ってもらいたいだけなの。

そう・・・これは責任なのよ！

さあ今日も義務を果たしなさい、比企谷君！

だから・・・全然待ち遠しくなんて無いのよ？本当よ？

比企谷君から送られてきた写真は、200枚を優に超えていた。

最初に送られてきた、直立不動でスヤスヤと寝ているカットを含め、

溢れんばかりの愛くるしさが、私の頬をだらしなく緩ませる。

「にゃーっ♪にゃーっ♪」

写真に写ったかまくらちゃんを指で撫でながら、思わず鳴き声が出てしまった。

ピンと尖ったお耳、くりくりとしたお目々、まんまるのお鼻……
ああっ、ちっちゃな掌の肉球をふにふにしたいっ！
真綿の様なフカフカした毛並をもふもふしたいっ！

はっ……私とした事が、我を忘れてしまったわ。

仮にこんなところを、比企谷君に見られでもしたら……

私が今まで築き上げてきた、知的なイメージがっ！クールなイメージがっ！

そして、何より私の威厳がっ！

危険だわ……これは危険な事なのよ。

この対処を誤れば、間違いなく命取りになってしまうわ。

そう……ネコをこよなく愛している事を、

彼だけには、絶対に知られてはいけないのよ。

……取りあえず、落ち着かなければいけないわね。

“ピロリロリン♪”

気を取り直そうと深呼吸した時、再びメールの着信音が響き渡った。

早速中身を確認してみたのだけれど、それは……

“すまん、1枚忘れてた”

という文言と共に、かまくらちゃんの写真の添えられたメールだった。

「ねこすきいいいいいいいいいいいいいい」

結局、私が再び自分を取り戻すのに、
更に10分もの時間を費やす事となってしまった。

はあっ……はあっ……比企谷君……。
まさか貴方……ワザとやっているのではないでしょうね？

第6話

俺の歌の番号
に、みんなは曲選びに没頭する。

遠い異国の地にいる雪ノ下を、囚らずも悶絶させていた事など、
露程も知らなかった俺は、暖かい風呂にどっぷりと浸かっていた。
大昔、温泉ペンギンをペットに持つ、エビチュビールが大好きなあ
の人が、

“風呂は命の洗濯よん” などと言っていたが、今日程それを実感し
た事はないな。

そう言えば、次回予告で“次回もサービスサービス♪”って台詞あつたけどさ、

どの当たりがサービスだったんだろな。最後の方なんて紙芝居だったし。

「♪新劇なんて〜私の中ではノーカンよ〜♪」

完全にリラックスモードへ切り替わった俺は、

思わず（スレスレでアウトな感じの）自作の歌を口ずさむ。

風呂に入ると、歌いたくなるのはなんでだろうな。

完全無料！順番無し！気分良し！

何より、誰にも気を使わなくても良し！

まさに究極のぼっちカラオケだ。

カラオケで熱唱してる時と、店員さんが飲み物を運んでくれた時が被ったら、

ちよつと恥ずかしくなって、声が小さくなっちゃうよな。

なんで俺・・・あの時、ラジオ体操の歌なんて選曲しちゃったんだろうな・・・。

この様に、比企谷八幡ソロコンサート（無観客試合）は盛り上がっていたのだが、

それに水を差す様に、風呂の扉がガラガラと開けられた。

誰が開けたのかって？そんなの、言うまでもないだろ？

「センパイ♪お背中流しに来ちゃいました♪」

犯人は、大方の予想通り一色だった。

きやーっ、覗きですっ！おまわりさん、こいつです！

「むーっ！こんな可愛い子を捕まえて、覗きとは何ですか！」

一色は、頗る不満そうな声をあげたのだが、ここは譲れん。

今のここは、俺にとって安息の地、言わばサンクチュアリだ！

そうだよな？アルデバラン。俺たちはアテナの聖闘士だもんな！

という訳で、ここで選ぶうる選択肢は“一色を排除”の一択だ。

俺は湯舟からザバアーンと立ち上がると、その場で仁王立ちとなり

“異議あり!”の如く一色を指した。

「一色っ、ハウスっ!」

“犬扱いですか!?”

と一色が突っ込みを入れ・・・なかつた。

それどころか、驚くほど押し黙ったままだ。

いくらなんでも無反応過ぎるだろ・・・と思いつつ一色の様子を伺うと、

一色は両手で顔を覆いつつ、指の隙間から覗く様に俺を見ていた。主に凝視しているのは、顔よりも下の部分だ。

一色の視線の先にあるもの・・・それは、

風も無いのに“ぶらぶら”している・・・そう、股間に付いてるアレだ。

一色はしばらくの間、顔を真っ赤にしながら、

その状態で固まっていたのだが、やがて我に返ったのか

“セ、セ、セ、セ、センパ、ンパ、パイ”と、壊れたミニコンポの様に呟いた後・・・

「きゃあああああああああああああああああああーっ」

絶叫が、風呂場に響き渡った。

「くすんくすん・・・センパイひどいです。そしてグロイです。」

風呂から上がった後、二人で俺の部屋へと戻ったのだが、

一色は延々と泣き続けた。まあ、見るからに嘘泣きなんだけどな。

そもそも、指の隙間からガン見してたのは、どこの誰だよまったく。

「くすんくすん・・・この人、全然悪いと思ってるないいい・・・び

ええええええん」

口で“びええええん”って言っちゃってるし。

ああっ、もうどこから突っ込んだら良いのか分かんねえ・・・。

「くすんくすん・・・という訳でセンパイ、純真可憐な乙女に男性生殖器を

これ見よがしに見せ付けて、大泣きさせた償いをすべきだと思っ
てです。」

「ちよつと待った！それだと俺、変態だよな？そもそも、見せ付けてな
いからね？」

俺は、必死に抵抗を試みた。あれは事故なんだ！不可抗力なんだ！
そもそも、純真可憐な乙女が、淀みもなく“男性生殖器”なんて言
わねえよ。

だけどな・・・圧倒的な力の前には、人間なんて無力なものなんだ。

部屋の空気が2℃〜3℃下がった様な気がして・・・一色を見たら
さ、

すっごい可愛い笑顔を浮かべてんの。

きれいだろ？これ・・・怒ってるんだぜ？

「センパイ・・・償いますよね？」

「ハイ、喜んで。」

何の抑揚もない、氷の様に冷たい声とのギャップがとても怖かった
俺は、

二つ返事でその言葉を肯定した。

「それじゃ、制限時間は30分だ」

一色は、掛け声とともに問題を解き始めた。

提案された償い内容、それは今晚、一色の勉強を見るという事だった。

俺はてつきり”下僕になって下さい♪”とか”高級イタリアン♪”とか

”腐った目を何とかしろ”とか、ろくでもない要求をされると思ってただけに、

勉強を教えるくらいで済むなら、正直安いもんだと安堵した。

・・・腐った目は治しようがないからな。

それにしても、思ったより順調に解いてるな。

今こいつが解いている問題は、決して易しくはないんだが・・・。普段とは違った精悍な顔つきをした一色は、黙々と課題をこなしている。

考えてみれば、こいつ受験生だったよな、忘れてたけど。

やがて、残り10分を切ったくらいのところだ

”センパイ、出来ました♪”と、一色は自信満々に早期終了を宣言した。

俺は解答用紙を受け取ると、早速答え合わせを始める。

その様子を正面で見ている一色は、心なしかウキウキしている様に見える。

「センパイ、どうですか？満点採れてますか♪？」

結果が待ち遠しいといった様子で、一色はしきりに問いかける。

きつと自信があるんだろうな。

「ああ・・・今のところ答えは全部正解・・・ん？」

ここまで、順調に正解を重ねていた答案だったのだが、

15問目に差し掛かったところで、俺の手が止まった。

「一色・・・。」

「何ですか？センパイ♪」

「藤原ローランドって……何だ？」

問題文はこうだ。

中大兄皇子の腹心として活躍し、藤原氏繁栄の礎を築いたのは？

(ウィキペディア)

正解は当然、中臣鎌足、もしくは藤原鎌足だ。

ところが……残念な答えが、解答欄に堂々と記入されていた。

一色さん……藤原ローランドって誰っすか？時代背景は完全無視っすか？

日本屈指の名門家の祖が、シンガーソングライターみたいになっちゃってるよ。

とりあえず、鎌足さんには後で謝っておこうな。

「いやー、何か書いておけば、当たる可能性があるかとも思いました……」

一色は気まずそうに顔を背け、誤魔化す様に答えた。

そんな可能性、これっぽっちもねえよ！

次はせめて、もう少し当たりそうな名前を書こうな？

結果を言うと、藤原某以外は全問正解だった。

「……なかなか頑張ってるな。」

それを聞いた一色は「エッヘン」と大きく胸を張った。

腰に手を置いた時に「むにゅん」と揺れた胸も誇らしげだ。

何故だろう……それ程大きい訳ではないのに、吸い寄せられる様に見てしまう。

いやいや、決して大きいのが一番って訳じゃないんだぜ？

大きくないのだって、それはそれで味があるって、八幡は思うんだ。

それに、とある著名な占いの先生が仰っていたんだ。女性を胸の大きさに判断する事は、良くない事ですよ・・・と。つまり、俺の言いたい事はそういうことだ。

「センパイ、私の話し聞いてますかあ？」

一色が、注目を促す様に、机の上をコンコンとノックした。どうやら、俺がバストについて脳内演説している間に、

一色が話し掛けてきていた様だ・・・いかんいかん、煩惱退散。

「え、ああ、うん・・・すまん。なんだっけ？」

一色は、上の空だった俺に「もおーっ」と抗議の声をあげつつも、このままでは前に進まない事を悟ったのか、話を続けた。

「だから、結果を出したなら、それに見合ったご褒美が必要だと思っんです。」

確かに、只の小テストとはいえ、こいつの言う事にも一理ある。

まあ・・・ローランドのあたりに、一抹の不安を覚えなくてもないが・・・。

「わかった。ご褒美って、何をして欲しいんだ？」

それを聞いた一色は、急に顔を真っ赤にして俯き、両手をきゅつと握り締めた。

そして口を噤んだまま、何か言い難そうな顔をしている。

なんだ？そんなに頼みづらい事なのか？それとも・・・

「一色、トイレなら階段を下りて右だ。」

我慢なんて必要ないんだ・・・と、精一杯の優しい眼差しを送ったのだが、

一色は、ガバツと勢いよく顔をあげると、目を見開き眉を吊り上げた。

「ち、違いますよー！バカっ！ボケナスっ！八幡っ！」

思いつきり怒られた。この罵倒、流行ってるの？

「デリカシー無さ過ぎです！あと目の濁りが普段の3割増で、ちよっ

とキモいです。」

全力で優しさを込めたのに、あっさりダメ出しされてしまった。まあ、デリカシーが無いのは認めるけどな。

一色は、ジト目で俺を眺めていたが、やがて色々と諦めた様な表情を浮かべると、

“ふう”と小さくため息をついた後、俺と向き合った。

「……撫でてください。」

「はい？」

撫でるってどこをだよ。いや、それ以前に撫でるって何？

そんな、ポカーンとした俺の雰囲気には焦れたのか、

一色は大きく息を吸い込んで

「だ！か！ら！私の頭を撫でてくださいっ！」

今度はハッキリと言い放った。

ちよっ、おまつ！なんだよ、その甘々青春ラブコメみたいな展開は！

そういうのは俺じゃなくて、葉山の役目だろうが！

だが、俺の心の叫びは届かない。

一色は、じりじりと俺との間合いを詰めると、そっと目を閉じた。

本人の了承はあれど、果たして、本当に触れても良いのだろうか？

俺は、一色の頭を撫でるのを躊躇していた。

もちろん嫌では無い。ただ感覚的には、むしろ畏敬に近い。

簡単に言えば“俺なんか気安く触れても良いのだろうか？”といった感じだ。

ラノベの主人公たちは、いとも簡単にヒロイン達の頭を撫でるけどさ、

あれって、鈍感だとかそういうレベル越えてね？ジゴロ的な意味で。

そりゃ、葉山レベルならハードルは低いかも知れないが、

主人公達の大半は極普通……むしろ俺寄りのポジションだ。

はっ……どうやら俺は、衝撃的な真実に気づいてしまったらしい。

お前ら騙されるな！あいつらの鈍感っぷりは、九分九厘”なんちやって”だ。

鈍感なフリして、ヒロイン達を掌の上で転がしているんだ！間違いない。

まあ、そんな真実を暴いたところで、踏ん切りなど付く訳も無いんだけどな……。

俺は自分の掌を一旦見つめた後、恐る恐る手を動かしたものの、しばらくの間、伸ばしたり引つ込めたりと、それは何度も宙を彷徨い空を切った。

俺が一向に撫でて来ないからだろうか。

俯き加減の一色は、俺のシャツの胸元をギュツと掴んだかと思うとくいつとその顔を上げ、様子を確認する様に俺の顔を覗き込んだ。俺をじつと見つめる眼差しには、不安と期待が入り混じった様な、複雑な心境が込められている様に思えた。

きつと、慣れない事をしているのは、一色も同じなのだ。
……。

やがて俺は、意を決して一色の頭にぐつと手を伸ばした。

中指の先が髪にそつと触れた時、一色はビクツと小さく肩を震わせたが、

耳まで真っ赤になっている以外は、特に大きなリアクションはない。

抵抗がない事を確認すると、そつと手のひら全体を乗せ、

産まれたばかりの仔猫に触れる様に、頭全体をゆつくりと撫でた。

肌理細やかな髪の手触りや、生暖かい一色の体温……

手のひらから伝わる、その生々しい感触に

俺の心臓は、かつて無いほど激しく鼓動を打ったのだった。

5分程経つただろうか。頭からそつと手を離すと、

一色は”あつ……”と小さな声をあげ、その後すぐに顔を背け

た。

「こ、こんなもので良かったか？」

一応、お兄ちゃんスキルとしての頭撫では、LV10を誇る俺だが、小町以外の頭を撫でるのは初めてなので、その感想が気になるころだ。

一色は“はあ・・・んっ”と甘い吐息を漏らした後

「ハイ・・・とっても・・・。」

と小さな声で呟いた。

その後、大家のおばちゃんがやって来た。

先だって“空き部屋を使わはったら？”と氣遣って貰っていたので、

俺の部屋を一色に譲って、俺は寝袋持参でそこに寝ようと考えていたのだが、

おばちゃんは、空き部屋に布団をセッティングしてくれたのだ。時計は午後の11時を少し回ったところだが、

明日の事もあるので、今夜はこれでお開きだな。

一色はその提案を受け入れると、30分程で寝支度を整えて、

「それではセンパイ、おやすみなさい♪」

先程の余韻を若干保ったまま、本日の寝床へと消えていった。

ドアがパタンと閉められると同時に、それまで立っていた俺は、張り詰めていた緊張の糸がぶつとりと切れ、床にへたり込んだ。

「やれやれ・・・。長い一日だった・・・。」

明日も一色に付き合っつて学園祭を回る予定だから、

早く寝床について英気を養う事にしよう。

俺は、終電帰りのサラリーマンの様に

よたよたしながら布団へと潜り込んだ。

そして、5分もしないうちに眠気に襲われ、やがて夢の世界へと引き込まれた。

ドリー○ランド・・・モノレールで約8分・・・ドリちゃ・・・ん
それを最後に、俺は意識を手放したんだと思う。
明日は良い日でありますように。

ところが、それから数時間も経たないうちに、
今度は、長い夜の始まりが待ち受けている事など・・・

大口を開けて鼾を掻いていた俺には、知る由も無かった。

つづく

【おまけ】

「でも藤原ローランドって、ビジュアル系みたいでカッコ良くないで
すか♪？」

「それは認めざるを得ないな。そこへいくと、比企谷ローランドって
のも悪くない。」

「それ、センパイのご先祖様ですか？時代背景がおかしい系ですね。」

「それをお前が言うのかよっ！」

第7話 俺はもっぱら、シ〇ツクスへ行く。

とある日曜の昼下がり。

普段なら、束の間の自由を謳歌しているところなのだが、今日は、由比ヶ浜と雪ノ下に連れられて、

ハニトーでお馴染みの某カラオケ店に赴いていた。

誰かに連れられて外出だなんて、らしくないって？

奇遇だな。実は今、俺もそう思っていたところだ。

でもまあ・・・なんだ、ここへ至るまでには、色々あったんだよ。

事の発端は、由比ヶ浜からの

“ヒツキー。ゆきのんと一緒に、パ〇ラ行こー？”というお誘い電話だ。

外に出たくなかったので、当然の様に“家族がアレなんで・・・”と断ったんだが、

その時には既に、二人とも俺の部屋の前で、スタンバってやがったんだ・・・。

「比企谷君、家族がアレって・・・何かしら？」

電話を切った直後に背後から声がして、腰が抜けそうなくらいに驚いた。

「わたしメリーさん。今、貴方の後ろにいるの・・・」的な感じで、

でもって結局、家族がアレでも何でもない事がバレてしまい、

二人は再び俺を誘い始めた。

「ヒツキー、ハニトー食べに行こうよーっ」

「比企谷君、無駄な抵抗は止めなさい。」

って雪ノ下さん・・・それちよつと、意味合い違うくないですか？

このまま立て籠もってたら、命が危なそうなんですけど・・・。
けどな、たとえ無駄だと分かっているても、高みに挑むのが男つてもんだ。

だから俺は自由を死守すべく、一応の抵抗は試みたんだ。ワイルドだろ？

でもな、結果から言えば、雪ノ下の方がずっとワイルドだったんだ・・・。

「もし、どうしても来ないと言い張るなら・・・」

「・・・言い張るなら、何だ？」

「ここで泣くわ。全力で（きつぱり）」

そのひとことに、俺は敢え無く轟沈した。

「ヒツキー、ほら早くっ！」

由比ヶ浜は、俺のシャツをキュツと摘まんて俺の入室を促した。

こいつの場合、一色と違って素でやってそうな分、余計に意識してしまう。

修学旅行あたりから、こいつのパーソナルスペースは、どんどん狭くなってな。

俺じゃなかったら、一発で勘違いしているところだ。

連れられた部屋は、3人で使うには少々贅沢な広さで、しかも何気に豪華だった。

「なんと言うか・・・凄い部屋だな。」

雰囲気にもまれた俺は、落ち着き無くソファアートをフニフニしたり、

無駄に辺りを見渡したりと、小市民つぷりを露呈した後、手持ち無沙汰になって、ソファーに腰掛け小さくなった。一方、雪ノ下と由比ヶ浜は、俺とは対照的に動揺する事も無く、手慣れた感じで、マイクのセッティングをしている。

由比ヶ浜はともかく、雪ノ下までリア充に見えてちよつと悔しい。そして二人は、“うわーキレイ”とか“思ったよりもいい部屋ね”などと、

ひとしきりキャツキャウフフした後、“ぼふっ”とソファーに腰掛けた。

・・・俺を挟む様にして。

ちよつと待て。何でそうなるんだよ!?

俺の狼狽つぷりを見た由比ヶ浜は、キョトンとした表情で

“ヒツキー。そんなにオロオロして、どうしたの?”と小首をかしげ、

雪ノ下は、心配そうな表情を浮かべながら、

“比企谷君、目がいつも以上に濁っているけど、大丈夫かしら?”と、のたまった。

まるで、二人とも何事も無かったかの様に振る舞っている。

あれ・・・俺の方がおかしいの?

結局、少数派たる俺の意見は黙殺され、配置は維持される事となり、その結果、俺はますます小さくなる事となった。

その後も

“ヒツキー。こっち狭いから、ちよつと詰めるねー”と密着してきたり、

“比企谷君、メニューが届かないわ”と、手を伸ばしつつ寄って来る感じで、

俺と二人の距離は、どんどん無くなっていった。

他にスペースがあるのに、お前らなんでそんなに詰めて来るんだよ

！

「さあヒツキー、あーん♪」

あーんって何？と思つて振り向くと、由比ヶ浜がフォークに刺さつたハニートーを、俺の口元に運んで来ていた。

・・・ただし、1斤丸ごとだ。

ちよつ、一口で食えるかつ！

それ以前に、いつの間にハニートー来たの!?

「由比ヶ浜つ、待てっ！ストップだっ！」

だが由比ヶ浜は、俺の様子などお構いなしに、ハニートーをぐいぐい押し付けてきた。

なんか、ちよつと様子おかしくない？

そうだ、雪ノ下はどうした？こうなつたらお前だけが頼りだ！

だが、そんな期待はあつさりと裏切られた。

「由比ヶ浜さんだけズルいわ。私のも食べなさい。」

由比ヶ浜と同じ様に、雪ノ下の手に握られたフォークにも、

1斤のハニートーが突き刺さっていた。

雪ノ下・・・お前もか！お前もなのかつ！

「比企谷君、ツベコベ言わずに食べなさい。」

雪ノ下はそう呟くと、無表情で反対側からハニートーをぐいぐい押し付けてきた。

「あはは」

「ういふふ」

由比ヶ浜と雪ノ下の瞳からは光彩が失われ、静かなカラオケルームには、

二人の発する、抑揚のない笑い声だけが響き渡っていた。

さつきまでの甘い空気は、一体どこへ行ったの?!。

俺は、左右からハニトーに顔を挟まれて息が出来ず、
やがて意識が、どんどん遠のいていった。

どうしてこうなった……。

B A D E N D

はっ！

カチツ、カチツつと、秒針が時を刻む音が、部屋に響き渡っていた。
ぼんやりしていた意識が、徐々にハッキリとしてきた頃、
さっきのアレが夢だった事に、ようやく気が付いた。

まあ……ちよつとホラーっぽくて怖かったが、こんな事もあるさ。

だが、何かがおかしい。確かに夢から覚めたはずなのに、
まるで、金縛りに遭っているかの様に身動きが取れない。

何より、ハニトーみたいな柔らかい何かが、顔に押し付けられたま
まだ。

夢と現実の狭間にいる様な、妙な感覚に捕らわれつつも
一先ず、身動きの取れない状態を脱却すべく、顔を左右に動かした。

「あ……っ………んっ」

何だ？…今の。

なんとなく想像がついてしまったが、再び頭をもぞもぞ動かしてみ

満面の笑みで宣告されるシーンが、容易に想像できるな……。

そんな事を長々と考えていたのだが、一色が

「ん……もにゃ……せんぱあい……」

と寝言を呟いた後、俺を力強く「ぎゅううううっ」つと抱き締め
きて、

その結果として俺は、一色の両胸に顔を埋める様な形となった。

俺の顔に押し当てられ、圧迫されて盛りあがった2つの膨らみが、

大きく「むにゆり」と形を変えて、自身の存在を艶めかしく自己主
張している。

ほんの僅かに固さが残っているのは、まだ発育途中だからだろうか
？

そして石鹸の香りを押しつけて、甘い中にも微かに酸っぱさの含ま
れた、

むせ返るほどの強烈な、女の子特有の体の匂いが辺りを漂いはじ
め、

俺を包み込み、鼻腔をくすぐった。

Tシャツ1枚隔てただけの、一色の柔らかな体の感触と、生暖かい
体温が、

体の匂いも相まって生々しく感じられ、たまらない気分になつてく
る。

いい加減離脱しないと、色々とヤバいな……。

俺は脱出を試みようとして、軽く身をよじったのだが、

一色のキープ力は相当なもので、なかなか抜け出せない。

こいつ、ブンデスリーグとかでも充分通用しちゃうんじゃないの？
顔の向きを変えるだけでも、一色に刺激を与えてしまうらしく

「んっ……っ……あん」と呟きながら、ぎゅつとされてしまうの
だ。

これはどうしたものか・・・と為す術なく途方に暮れていると、
「むにやむにや・・・」という寝言と共に、一色の瞼がピクリと動いた。

やばいつ、目覚めるっ！この状況をどう説明すりやいいんだ!?
つて、そもそも、俺の布団に勝手に潜り込んで来たのは、こいつなのに・・・

打開策らしい打開策を見つけられないまま、泣きそうな俺を尻目に、

やがて一色の瞼は、うつすらと開かれた。

ブラック企業に入ってすらいらないのに、俺はもうダメかも知れない。
い。

いや、むしろ完全にアウトだ・・・。

覚悟というより、諦めムードが俺を支配していたのだが・・・

「むにや？・・・せんぱ・・・い？」

眠そうな目を擦りながら俺を見た一色。

少し間を置いた後、にんまりとした表情を浮かべて

「もにや・・・せんぱいだよ♪・・・うふふ、せんぱあい♪」

そのまま俺の首筋に、自分の頬をピタツと押し付け擦りしだした。

・・・ちよつと驚いたけれど、要はこいつ・・・未だ半分、夢の中にいるらしい。

一色は一旦動きを止め、俺の首筋に鼻を当てるとクンクンし、

「むにや・・・センパイの匂いがしますう・・・。」

匂いを確かめた後、また嬉しそうに頬擦りを続けた。

一色の鼻息が首筋に当たり、ぞくりとした感覚が背筋を走った。

だが、そんな事など構っていられるか！とばかりに頬を擦りつけて、

自分の匂いを染み込ませる様に、ぎゅっと体を密着させる一色。

俺の胸元と、一色の胸の2つの膨らみがピッタリと密着し、

こねくり回されて、零れ落ちそうな程に激しく形を変えている。

「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・」

一定のリズムを保ちつつ、一色の息遣いが荒くなってきた。

そして、自分の体全体を俺に擦り付ける様に、より大きく動き出した結果、

Tシャツが大きく捲れ上がり、露になった両胸が俺の胸板と直に密着した。

「はあ・・・っ・・・あんっ・・・あ・・・ん」

ピンと固くなった胸の先と、俺の胸板とが密着して、

こりゆこりゆと擦りあわされる刺激に、一色は甘い声を上げた。

やがて、体と体が密着している部分が汗ばみ、そこから

にちやつ・・・にちやつ・・・と音をたて始め、部屋中に響き渡る。

なんていやらしい音なんだ・・・。

腹の底が熱くなり、こみあげてくるような興奮が、俺の胸を詰まらせる。

いつの間にか、一色のリズムに合わせて俺の息も荒くなっていた。

それまでの一色は、ゆっくりとした動きだったが、

俺の太ももに自分の両足を絡めて、押し付ける様に擦りだすと、

それを境に、動きがより激しくなった。

「んっ！・・・はあん・・・あん・・・はあっ・・・はあっ・・・」

しばらくして一色は、俺の首筋に自分の顔をぐっと押し付けると、

俺のシャツの襟元を力強くギュツと掴んで、体をグイツと引き寄せた。

そして、「んっ・・・んっ!!」と力んだ様な声を発したかと思うと、

丸めた体を小さく硬直させ、俺の太ももを自分の両太ももでぎゅうつと挟み込み・・・

「はあ・・・ あ・・・ んっ・・・ あ・・・ っ・・・
くうううううううううううううううううう」

小さいながらも、ハッキリとした唸り声を上げ
その直後に、一色の体から“だらり”と力が抜け落ちた。

「はあっ・・・ はあっ・・・」

しばらくの間、激しい息遣いが部屋に響き渡り、
それに合わせて、一色の胸が大きく膨らんだり、小さくなったりし
ていたが、

「むにゃ・・・ せんぱ・・・ い・・・」

やがてそれが治まると、一色は再び夢の世界の住人となり、
再び静寂がその場を支配した。

かなり際どかったが、一線を越えずに済んだのは、
お互いにとって幸いな事だったろう。

なにせ、こいつは葉山が好きなんだ。

そして俺自身、もし勢いで手を出してしまっていたならば、
行為が終わった後、死にたくなる程後悔しただろうしな。

体の拘束が解けた俺は、そつと布団を抜け出すと、

本来、一色の為に用意された空き部屋へと移動した。

まだ10月の半ばに差し掛かったところだが、流石に夜は肌寒く感
じる。

俺は、大急ぎで敷いてあった布団に潜り込んだ。

俺の部屋に迷い込んでくるまでは、一色は確かにここで寝ていたの
だろう。

頭がくらくらしてくる程ではないが、布団から甘い匂いが微かに感
じられ、

先程の生々しい光景が思い出された。

「ダメだ……全然寝られねえ……。」

時計は、深夜の3時を過ぎたあたりを指していた。

このまま、寝るのを諦めるしかないか……なんて思っていたら、

“You’ve got mail!”と

俺のな○坊が、メールの着信を知らせて来た。

From: 雪ノ下雪乃

貴方が、200枚もネコ画像を送りつけたせいで、
眠れなくなっただわ。責任取りなさい。

さては、ネコ画像にテンション上がり過ぎて、眠れなくなったな？

雪ノ下……お前、ネコ好き過ぎんだろ……。

ってあれ……あいつは今頃、どのあたりに居るんだっけ？

結局、俺が寝付いたのは

うつすらと夜が明けそうになった頃だった。

「ぎやああああああああああああああつー！」

俺は、悲鳴とも絶叫とも付かないで声で目が覚めた。

……一体何があったんだ？

目を開けると、口をパクパクさせた一色が真横にいた。

・・・なんで？

一色は慌てて布団から飛び出すと、部屋の隅へと移動した。

「セ、セ、セ、セ、センパイっ！どうして同じ布団に寝てるんですか!？」

それはこっちの台詞だ。お前こそ、何でここにいるんだ。

昨日、最後はオマエさん・・・

俺の部屋で大きな口を開けて、イビキかいてたじゃないか。

けれど、心の呟きは伝わらない。

一方、一色の奴は“まさか昨日のつて・・・”と小さく呟いた後、顔を真っ赤にさせつつも、キツとした目で俺を見つめる。

「さては夜這い・・・夜這いしましたねー！」

してないって！そもそも夜這いして来たのはお前・・・と言いかけたところで、

一色が満面の笑みを俺に向け、発言をさえぎった。

こいつがイイ笑顔を浮かべている時って、

大抵の場合、目が氷のように冷たいんだよね・・・。

顔にさ、ツベコベ言うなって書いてあるもん。八幡わかるもん。

ああ・・・次に何を言われるか予想がついてしまった。

予測できても、回避は出来ないんだけどな。

一色は、きやるんとした表情を浮かべ、あざとさ全開で言い放った。

「センパイ、責任とって（地獄に落ちて）下さいね♪」

マジか・・・ホントに言いやがったよ。

つづく

【おまけ】

雪乃さん「あたし、雪乃さん。今、ハバロフスクに居るの。」
メリーさん「・・・!？」

第7. 5話 クリぼっち？いいえ、常にぼっちです。

「ほら、クリスマスプレゼントだ。」

久々に帰省してきた兄から渡されたプレゼントには、赤いリボンが特徴的な、可愛いラッピングが施されていた。

「うわあ〜！お兄ちゃんありがとう〜♪開けていい？」

兄の首が縦に振られたのを見計らって、丁寧の開封していく。

ここ数年は、雪乃さんと結衣さんチョイスだったけど、

今年はどうだろう？なんて思ってたら・・・

思いのほか期待出来そうなラッピング！。何が出るかな〜♪

その様子を見ていた兄が

「そこまで丁寧にやらんでも・・・お前、包装紙とか大事にとって置くタイプなんだな。」

やれやれ・・・といった表情で呟いた。

いやいや、こっちこそ”やれやれ・・・”だよ。

分かってないなあ、お兄ちゃんは。

「お兄ちゃんからの贈り物だからに決まってんじゃない。あ、これって小町のポイント高い♪」

「はいはい、高い高い。高過ぎて、富山の主婦達が暴動起こすレベルだな。」

お兄ちゃん・・・そのネタ分かる人、あんま居ないよ・・・。

って、イカンイカン・・・。

いちいち突っ込んでたら、開封するのに300年くらいかかったやうよ。

そんな訳で、“それでだ、平成の米騒動の時は宮路社長が・・・”などと、

長々とウンチクをかましている兄に、“はいはい米騒動米騒動”と

空返事をしつつ、

小町は、丁寧にラッピングを開けていったのです。

「って、聞いてるのか？ここからがヤマ場なんだよ。」

「はいはい。今度、ふさおとめ買ってあげるから……って何コレ！凄
いカツコイイ!!」

袋から出て来たものは、女子高生御用達ブランドの、淡い紺色の長
財布だった。

ちよつと、これって……お高いんじゃないですか？

「……どうだ？使えそうか？」

テンションがあがりつつも、お兄ちゃんの懐具合を心配していた小
町に、

お兄ちゃんが恐る恐る訊ねてきた。

「もちろんだよ！すっごく嬉しい!!」

その言葉を聞いたお兄ちゃんは、

“……そうか”と呟くと、安心した様に瞳を閉じた。

おっさいふくおっさいふくうれしいなあ♪

でもまさか、お兄ちゃんのセレクトが、

こんなにドンピシャだなんて、思いもしなかったよ。

ホント、意外過ぎるというか、らしくないというか。

下手したら、現金とか渡しかねないもん……この人。

ち？いいえ、常にぼつちです。

今年もクリスマスがやって来た。

ここ数年は恒例の様に、雪ノ下と由比ヶ浜セレクションの中から、ピンと来たもの買い求め、小町に渡していた。

一度だけ

「俺のセンスで選ぶ位なら、現金渡す方が良くね？断然喜ばれそうなんだけど。」

と相談してみたところ・・・

「呆れた！貴方・・・本当にセンスが無いのね？」

「良いわけ無いじゃん！真面目に考えろし！」

と、散々怒られた挙句、2時間程正座させられた。

こんなやり取りがあつてから、奉仕部活動の1つに

“小町のクリスマスプレゼント選び”が加わった。

だが今年は・・・

由比ヶ浜には、とある事柄で大きな山場を迎えていたので、余計な手間を掛けさせたくなくて、相談しなかった。

雪ノ下からは・・・一応提案はあつたんだ。

From：雪ノ下雪乃

バッファローの角なんてどうかしら？

もし必要なら送るから言いなさい。

確かにあいつなら、バッファローくらい倒せそうだな……。毒舌で、バッファローの精神的急所を的確に攻撃するとか……。合気道で遠くに投げ飛ばして気絶させる、物理的攻撃とか……。やばい……。雪ノ下には（ネコ以外に）死角が全然見当たらない!! もはや、マ○ターアジアだ! 東○不敗だ!

いやいや、バッファローの角って何よ？

送るって……。それってもしかして、自前調達なの!?

遠い異国の地で……。何かはっちゃけちまったんだろうな……。青い宇宙（そら）を見つめたまま、俺はそつとスマホをポケットに戻した。

次は雪ノ下さん（姉）だ……。誠に遺憾ながら、

帰省途中に、駅でばったり会ってしまった。

顔を合わせた瞬間、

「お元氣そうで何よりです。それじゃ。」

と颯爽と立ち去ろうとしたのだが……

右腕を「ガシッ……」と捕まえられてしまった。

「比企谷君、つれなくい。ちよつとお話しようよ♪」

笑顔のまま、ズルズルと俺をス○バまで引きずる雪ノ下さん。

「ちよつ……。待ってくださいって」

色々と抵抗しようと試みたのだが

「妹ちゃんの贈り物、悩んでるんでしょう? 相談乗るから♪」

という一言に、俺は固まった。
なんであんたが、それを知ってるの!?

「成程・・・雪ノ下がね。」

ガムシロップとフレッシュを、2個づつ入れたコーヒーを一口飲んだ後、

俺はそう呟いた。うん、これぞ大人の味だな。

色々話を聞いてみると、雪ノ下も陽乃お姉様に相談していたみたいだ。

“友達の話なのだけども・・・”と言葉を濁したみたいだが、残念・・・雪ノ下も、俺同様に友達がいないのでバレバレだ。

「で、何故バッファローの角だったんですか?」

「ああ・・・それはね?」

要約すると、幸運のお守りとして、アクセサリーにバッファローアローというものがあるそうだ。

・・・てつきり、原型を留めた角を、プレゼントに提案されたと思っ
てたわ。

雪ノ下スマン・・・マ○ターアジアとか言っ

「そこで、お姉ちゃんから提案があります!」

にんまりと笑う雪ノ下さん。キレイなのに邪悪さが全然隠せてない。

「えーっと、却下で。」

だからあつさりと断った。あれ絶対あかんやつや……。だが、雪ノ下さんは嘘くさい泣きまねをしつつも、全然折れない。「くすんくすん……。比企谷君、冷たい！まあ、却下でも言っちゃうんだけど♪」

と、俺の意思などお構いなく自分のプランを説明し出した。

「妹ちゃん、お姉ちゃんを欲しがってるでしょ？」

「そうですね。」

ダメだ……。出だしだけ聞いても、ろくでもない案だと断言できるわ。思わず苦笑いを浮かべる俺。

「だから、比企谷君が私をお嫁に貰ってくれたら良いのよ。」

な？ろくでもなかったろ？

って……。なんで!?

「ほら、そしたら私が妹ちゃんのお姉ちゃんになるじゃない？」

「断固却下で！」

小町に教育上、そして人間性の形成上、悪影響を及ぼす恐れがある上に、

俺の一生が、玩具とか下僕で終わってしまうのが目に見えている。そんな、あたふたとした俺の様子を眺めていた雪ノ下さんは軽く“ぷつ”と吹き出した後、ニツコリと微笑んだ。

「そうだね♪比企谷君には、雪乃ちゃんがいるもんね♪」

その後しばらくして、お茶会という名の拷問大会が終わり、店の前で、一旦立ち止まった雪ノ下さんが、

「じゃあね比企谷君。またお茶しようねー♪」

“バイバイ”と右手を振りながら街中へと消えていった。強化外骨格な外面とはいえ、決して可愛くないわけではなく、つついっい俺も手を振り返してしまった。

そんな時だ……。

肩に“ぽん”と手を置かれると同時に、底冷えする様な声が、後ろから聞こえた。

「センパイ……あの女は誰です?」

何?やだっ……絶対後ろへ振り向きたくないっ!

俺は逃走を試みたのだが、右腕をガツチリと決められてしまった。おかしいな……さつきも似た様な事があった気がするんだけど。

「センパイ、お帰りなさい……と言いたいところですが、お話を伺えますか?」

真横に現れたのは……皆様のご想像通り、一色だ。

そして俺は、冷たい笑顔を浮かべた一色に、

元居たス〇バへと引きずられていった……。

「成程……雪ノ下先輩のお姉さんだったんですね。早く言ってくれれば良いのに。」

一色は、克蘭ベリーブリスバーをパクつきながら、

納得した!といった感じでそう言った。

いや、早く言うも何も、さっきの俺には一切発言権がありませんでしたよね！

言い分を聞きましょう・・・からの、言い訳なんて聞きたくありません！のコンポだったよね！

まあいいや・・・こぼしたミルクを嘆いても仕方がない。
丁度良い。どうせ手詰まりだったのだから、一色にも相談してみよう。

「えっ？まだシスコン拗らせてるですか？」

相談した結果、このぎまだ。

“ないわー。ヒキタニ君それないわー”という

戸部の声が聞こえて来そうなくらい、一色はドン引きした。

シスコンで悪かったな！

だが一色は、しばらく思案する様な素振りを見せ、

やがて、俺の方に顔を向けると力強く宣言した。

「分かりました。私に任せて下さい♪」

小町は、生徒会の役員をしているらしく、一色とそれなりに接点があるらしい。

そして一色によると、小町はどうかやら財布を欲しがっている様だ。

そんな経緯もあり、プレゼント選びの場所は、駅前のショッピングモールに決定した。

そういう訳で、俺たちは早速モールへと向かったのだが、

ここからが長かった・・・。

「センパイ♪見てください。この服、超カワイクないですか？」

「うわーっ♪このバッグ、とっても素敵です♪」

「何これっ、ブーツがめちやくちや安いです!!」

服屋、かばん屋、靴屋・・・モールの中を縦横無尽に駆け回る一

色。

それに、息も絶え絶えな俺が追走する構図だ。

華奢な体のどこからそんな体力が……。

体育の時に“センサーもう走れませんか♪”は絶対嘘だ。

一部の男性教諭に言いたい……鼻の下伸ばしてんじやねえよ、と。

散々寄り道を重ねた結果、ようやくお目当ての店に辿り着いたのは、

モールに来てから2時間程経つてからの事だった。

パトラツシユ……疲れたろ？なんだかとおつても眠いんだ……と、ルー○ンスの絵を見てないにも関わらず、天に召されそうになったら、

「ほらほらセンパイ、コレなんかどうですか？」

先行していた一色が、店の中から大きく手招きししてきた。

その声がめちやくちや大きかったので、

視線の先にいる俺に、周りの客の注目が一気に集まった。

ぼつちには、あまりにもキツイシチュエーションだったのだが、

居心地の悪さを感じながらも、俺は一色の元へと向うしか無かった。

「私の見立てでしたら、このあたりを押さえておけばバッチリですよ。」
ショウケースの中には、トップカースト御用達な財布が揃っていた。

やたらとキラキラしているディスプレイが、とても眩しい。

ギンギラギンなだけに、全然さり気なくない。

むしろ存在感は、人間であるはずの俺を遥かに凌駕していた。

まあ……この敗北感はともかく、値段も手頃だしこれにするか。

という事で、この中にある紺色の財布を包んでもらう事にし、

早速俺は、店員さん呼び止めようとしたのだが……

「あ……あの……」

しまった……いきなりドモってしまった。

もし、相手が三浦とかだったら“ヒキオ、超キモいんですけど!”
とか言つて、

的確に俺の心を抉ってくるころだな。

いや、既に何度か抉られてるんだつた……嫌な事を思い出しちまつたよ。

しかし、俺の様子に気がついた店員さんは、

「ハイ！お伺いいたします。」

営業用に磨き上げられた笑顔を向け、丁寧に応対してきた。

流石は社会人といったところか。

「ありがとうございましたー。」

店員さんは、俺に品物を手渡すと深々と頭を下げた。

こうして俺は、きよどりながらも“リア充御用達ショップで物を買う”という、

ここ数年で最も難易度の高いミッションの1つを、なんとかクリアした。

ともかく、一色に礼を言わねばならんな……つて、どこ行つた？

辺りを見渡すと、一色は通路をはさんで反対側のコーナーで、
アクセサリーを、とつかえひつかえ試着していた。

もう少し具体的に言えば、ネックレスを試着した一色が、鏡に向かつて

が、
グラビアアイドルさながらに、懸命に胸の谷間を作っていたのだ

やがて何かを悟りがつくりと肩を落とす……という切ない光景が、
何度も繰り返されていた。

……めちやくちや声掛けづらいわ！

一方で“可哀想な生き物を見るような”俺の視線に気がついた一色は、

“・・・ハッ”と我に返ったらしく、慌てて鏡の前から離れた。

「・・・。」

「・・・。」

二人の前に重い空気が流れる。

何とかしたいのは山々だが、ダメだ・・・気まず過ぎる。

結局、そんな空気を破りにかかったのは、一色の方だった、

「セ・・・センパイ、買い物は終わりましたか？」

若干きよどりながらも、“えっ・・・何かありましたか？”みたいな顔の一色。

ああ、全力で無かった事にしてるな・・・気持ちは分かるけど。

そして散々考えた挙句・・・

「ああ、お前のおかげで良いものを選べたよ。ありがとうな。」

俺も、何も見なかった事にした。

「今日は本当に助かった。ありがとうな。」

一色を、家の近くまで送り届けた俺は

別れ際に、改めて今日の礼を言葉にした。

「いえいえ♪お役に立てて良かったです♪」

一色は、いつもの敬礼ポーズを決めて得意げな表情を浮かべた。

「で、礼と言ってはなんなんだが……」

俺は、鞆から小さな包み紙を取り出すと、それを一色に手渡した。

一色は、一瞬キョトンとした表情を浮かべたが

「ありがとうございます♪今開けてもいいですよね？」

それを受け取ると、包み紙を開封しだした。

「……これってさっきの？」

一色は、中身を取り出すと目の前に近づけてブラブラさせた。

そう、さっきまで一色の胸元で揺れていたネックレスだ。

「まあ……半日、付き合わせちまったからな。良かったら取っておいてくれ。」

一色は一瞬目を丸くしたが

「……嬉しいです！ありがとうございます！」

すぐに溢れそうな笑みを浮かべ

愛おしそうに、そのネックレスをひと撫でした。

そんなに高いものではないだけに恐縮なのだが、

まあ……喜んでたみたいだから、ひとまずセーフだな。

俺は、ホッと胸を撫で下ろした。

「それじゃあ、センパイ。また遊びましょうね♪」

「ああ。またな。」

こうして俺は、別れを告げて家路についた。

・・・のだが、少し離れたところで一色が大声で叫んだ。

「せんぱああーい、またお部屋へ行きますねーっ」

そして、最後にこちらへ大きく手を振った後、家の中へと入っていった。

やれやれ・・・それじゃあ、また騒がしくなるのか。

俺は、なんとも言えない表情を浮かべながら、

再び家路へと急いだ。

「小町の新しいお姉ちゃん候補って、いろは先輩だったんだね。」

それを聞いたお兄ちゃんが、MAXコーヒーを盛大に噴き出した。
なんでそんなに驚いてるの？ 思いつきりフラグ立てて来てんじゃないん。

プレゼント選びの一部始終を聞いて、ようやく納得したよ。

小町のお義姉ちゃん候補が、どんどん増えていくね！

「マジか・・・」

マジだよ、お兄ちゃん。

「Nooooooooo!!!」

いつぞやの、アイデンティテイクライシスの時の様に、お兄ちゃんが、床をゴロゴロとのたうち回っている。

ああ・・・久々に見るなあ・・・このダメな光景。でも、懐かしくてちよつと和むかも。

それにしても・・・

雪乃さんに結衣さん・・・そしていろは先輩まで。

今まで、好かれる事の少なかった兄を、憎からず思ってくれる人がいる・・・

その事実が、小町の心をほのかに暖かくさせる。

だから小町は、兄に言ったのです。

♪ “その報告こそが、小町にとって最高のクリスマスプレゼントだよ”と。

あつ、今の小町的にポイント超高い！

おわり

第8話 人工衛星なら、たまに落ちて来るけどな。

歳を重ねれば重ねる程、年月の経過が早く感じられるとはよく言ったもので、

先日、年が明けたばかりだと思っていた今年も、既に10月半ばに差し掛かっていた。

冬の足音が、ぼちぼち聞こえてきても良さそうなこの時期にしては、

今日の陽射しはとても暖かい。小春日和と言っても良いだろう。

それまでトボトボと歩いていた私は、道の隅っこでふと立ち止まり、

ぼかぼかと、穏やかに大地を見守るお日様を見上げ呟いた。

「あの太陽・・・落ちてこないかなあ。」

恐らく、今この瞬間・・・私は、かつての教え子であった

あの少年よりも、腐った目をしていただろう。

まあ・・・聞いてくれたまえ。

私にだって言い分はあるんだ。

今月は、連休が多いからかも知れないが、

友人や知人の結婚式が、やたらと多い。

聞いて驚くなよ？その数、なんと5回だ！

おかしいな・・・結婚なんて、都市伝説じゃなかったのか？

同窓会や、婚活パーティーで知り合った戦友達との女子会では、

誰もがみんな“えー私なんて全然だよお”とか言ってたのに・・・

どうしてみんな・・・そんなに容易く伴侶を見つけれらるんだ？

もちろん私だって、黙って手をこまねいていた訳ではない。

顔だってそんなに悪くないと思うし、スタイルだって同世代の中で

は悪くない方だろう。安定した職業に就いているし、貯金だってある。

スペック的に・・・大きな穴は無かろう？

けれど、いざ婚活パーティーへと繰り出してみても、大概の場合

“ 貴方は、ひとりでも生きてゆける ” と言われて終わってしまうんだ。

なんだか・・・海が見たくなってきたな・・・。

コホン、話を戻そう。

友人の祝い事だから、ケチケチせずには・・・とは思うものの、

こうも重なってしまうと、ご祝儀だけでも手痛い出費だ。

でもまあ・・・そのあたりの気持ちの整理は、付かなくもない。

何より辛いのは・・・花嫁たる友人達が皆、

気を利かせて、私に向かってブーケを投げってくる事だ。

そして、難なくブーケをキャッチした私に

「次は静の番だね（にっこり）」

と言いながら、例外なく屈託のない笑顔を向けてくるんだ。

他意が無いだけに、かえって心が痛い。

おかしいなあ・・・。

ブーケを受け取ったら、次の花嫁になれる筈なのに、

もう何度目になるんだろう・・・こうしてブーケを受け取るのは。

ブーケを受け取った後、考えなければならぬのはその処遇だ。

生花なのでやがて枯れてしまうのだが、縁起物なので捨てるのは躊躇われる。

そこで色々と考慮された結果、私の部屋の押し入れには、

加工を施され、ドライフラワーとなったブーケがやたらと増えていく事となった。

ブーケは沢山持つてるのに、なんで結婚出来ないんだろう……。空を見上げた私は、再び呟いた。

「あの太陽……落ちてこないかなあ。」

第8話

人 工 衛 星
な

ら、たまに落ちて来るけどな。

「驚くほどに、有りのまま写るよー♪変に写ったって……それも自分さ♪」

目の前にあるプリントシール機から、抑揚はあるのに

感情はまるで感じられない声が発せられた。

こいつらは、なんの前触れも無くいきなり話し掛けてきて、生意気にも

人の不意をズバツと突いて来るので、俺はしばしば“ビクツ”ってなってしまう。

街を歩いていて、“えっ、誰だ？”と思って振り向いたら、

コイツが一人でしゃべってた……なんてオチだって、1度や2度ではない。

いないのは分かっているんだけど、“友達かな？”って思っちゃうんだよ。

あれ・・・俺に話し掛けてくるのって、人間より機械の方が多くね？

こんな具合に、顔を合わせれば挨拶する程度の接点しか無いのだが、

まあ色々あつて、一色と共に1台のシールプリント機の前に立っていた。

「センパイ、ここまで来て往生際が悪いですよ？」

俺はその場で呆然と立ち尽くし、一色は俺の右腕に自分の両手を絡め、

逃がすまいと言わんばかりに、関節をガツチリ極めている。

「マジか・・・」

この俺が、こうも容易く関節をとられるなんて・・・お前は藤○喜明か。

いや、それ以前にこの華奢な体のどこからこんなパワーが！

そういえばかつて、モン○ルマンは自らの技が1000万パワー相当だから、

パートナーのバッファ○ーマンと足して、2000万パワー○ズだ・・・と言ってたな。

もしかしたら一色のパワーも、モン○ルマン的な何かなのかも知れないな。

でもさ、モン○ルマンさん・・・3万パワーほど、鯖読んでねえか？

“私の超人パワーは1000万”とか言ってたけど、中の人は97万だったろ・・・確か。

いや・・・あの作品に、細かい事をつつ込むのはナンセンスだ。

何せ、天に召されたはずのキャラが、しれつと登場してきたりする

のだから。

逆に、生きてそうだけど全然出てこない奴もいるけどな・・・カニ
〇ースとか。

チヨキしか出せない奴にジャンケンさせるなんて、主催者は鬼だな。

こんな下らない事を考えている事など、知る由のない一色は、

“ワクワク感の抑えられない”といった笑顔を俺に向けると、

「じゃあセンパイ、早速撮っちゃいましょう♪」

そのまま俺を伴って、プリントシール機の中へと歩みを進めた。

戸塚とも撮った事あるけど、目が腐って写んなきゃ良いけどな・・・

そこで、集合写真に俺が写ると、周りがどんな反応をするのか振り返ってみた。

千葉県にお住いの、“PN小町的に超ポイント高い”さん。

『お兄ちゃん、小さい頃は濁ってなかったのにね・・・』

続いて、同じく千葉県の“PNビッチって言うなし”さんから。

『目が腐ってても・・・ヒツキーはヒツキーじゃん!』

続いて“PN猫がねころんだら・・・カワイイ”さん

『口にするのは憚られるけれど、凄い目力だわ・・・』

海浜高校の“PN葉山君、実際に会ったけど感じ悪かった”さんから。

『比企谷? 誰それ。』

最後に、総武高校にお勤めの“PN結婚? 何それ美味しいの?”さん。

『つたく・・・君の目は、魚の死んだ様な目だな。』

まあお察しの通り、一部を除いて大概は否定的なものだ。

だから、写真を撮る事はちょっと苦手なんだよな。

一色に引きずられながら、俺は窓の向こうに見えるお天道様を、
焦点の定まらない目で眺めながら、心の中で呟いた。

「あの太陽・・・落ちてこないかなあ。」

話は朝まで遡る。

「次にまた何かやらかしたら、八幡じゃなくてフェチ幡って呼びますね。」

不名誉な事この上ない名を俺に押し付けた一色は、ようやく落ち着きを取り戻した。

次にまた何かやらかすも何も、夜這い云々は冤罪なのに・・・。
いや、ちよつぴり”いかがわしい事”になったのは、真に遺憾なんだけどさ。

無論、特殊な性癖など持ち合わせない俺にとって、理不尽極まりない話なのだが、

比企谷フェチ幡です・・・と名乗っても、大して違和感が無いのが悔しいところだ。

むしろ脳内で、戸塚が手を振りつつ”ふえちまーん”と言いながら駆け寄ってくるシーンが何度も再生され、俺は気付いてしまったんだ。

”これはこれでアリじゃね？”と。

そうか・・・”俺が戸塚のサンタ”じゃなくて”戸塚が俺のサンタ”だったんだ！

昨日から一色に振り回されっ放しの俺に、天使が幸せを運んで来たに違いない。

「神様・・・ありがとうございます。」

俺は早速、空（と言うか部屋の天井）に向かって感謝の祈りを捧げたのだが、

その幸せな時間は、そう長くは続かなかった・・・。

「センパイ、何を考えているんですか？ニヤニヤしててちよつとキモいです。」

一気に現実へと引き戻される、容赦の無い一言だ。

いや・・・実際その通りなんだろうけどさ。

続けて一色は、“それに目も腐って・・・いるのはいつもの事か”と呟いた後、

「そんな事はどうでも良いですから、そろそろお出かけしましょうよ♪」

と提案してきた。まるで、それまでの辛口批評が無かったかの様な甘い声でな。

さつきまでの辛辣さはどこ行ったの？変わり身早えよ。

“ふえち幡も目がヤバイのも構わないが、戸塚だけはどうでも良くない！”と、

声を大にしたかったが、話がいよいよ本格的に進まなくなりそうなので断念した。

「わかった。じゃあまずは腹ごしらえだな。」

大家のおばちゃんが作ってくれるのは晩飯だけなので、

必然的に朝・昼は自炊か外食になるのだが、俺はもっぱら外食派だ。最初の頃は、ちよくちよくと作っていたのだが、

その、段々と面倒になってきてだな・・・って言わせんな、恥ずかしい。

専業主夫志望としてはどうかと思うが、仕方がない。

そもそも、今の俺は主夫ではなくて学生なのだから問題はないはずだ。

そんな、茶番たつぷりな事を考えていた俺に、

「そうですね♪それじゃあセンパイ・・・40秒で支度しなっ！」

という一言を残して、一色は洗面室へと消えていった。

・・・って、ドー〇かよ！

で・・・あいつの支度は、かれこれ40分は掛かっている訳なんだが。

40秒とまではいかないものの、割と早めに支度を整えた俺は、外を出た下宿の門の前で、一色を待っていた。

気だるさを身にまといつつ、待ち人を根気よく待つ俺は

あたかもご主人様を、駅前で健気に待ち続ける忠犬ハチ公の様だ。

まあ、あつちは人々に愛され、リア充の地位に登り詰めたのに対し、俺はぼっち・・・じゃなかった、皆が畏怖している孤高の存在なん

だけどな。

そうそう、ハチ公の銅像に向かって“お手”っていう奴が稀にいるけど、

あれって一体、何が面白いんだろうな。

お寒い上に、リア王たるハチ公様に対して無礼千万じゃないか。

そこで俺は、そんな不屈き者どもに声を大にして言いたい。

“むしろ貴様が、ハチ公様にお手して差し上げろ”と。

まあ・・・ハチ公をはじめ、周りの人々は更に戸惑うだろうけどな。

そうだな、機会があれば材木座あたりにやらせてみるのも悪くない。

ハチ公の尊厳を(仮想敵から)守る戦いにピリオドが打たれてから、更に15分程過ぎた頃に、ようやく一色がやって来た。

「遅くなって済みません。お待たせしました♪」

これって、お約束のお答えで良いのかな？

押すなよ押すなよーって言われた時は、押さなきゃダメみたいな。だったら、答えはひとつしか無いだろう。

「すっごい待った。待ちくたびれて、ハチ公も心が折れるレベルだ。」
もし由比ヶ浜だったら、「そんなになんだ!？」と驚愕するところだろうが、

一色は場慣れしているからだろうか、冷静に返してきた。

「むう・・・そこは」全然待つてねえよ」じゃないですかあー。」

拗ねた様に、可愛らしく頬を膨らませてアピールしているが、
まだまだ甘い一色。俺にその程度のあざとさなど、通用せんわ。
修行を極めた高僧の様に、微動だにしない俺を

面白くない・・・といった表情で眺めていた一色は、

「むううーっ、こうなったら奥の手ですっ♪」

「えいっ」と声をあげると、俺の右腕に自分の両腕を絡めてきた。

そして、俺の耳元に自分の口元をぐっと近づけると、

「今日の私・・・どうですか？センパイの為に、ちよつと頑張ったんですよっ。」

と、吐息交じりに囁いてきた。だから耳は止めてっ！そこは弱いのだ！

舌と唾液が絡み合い、「にちゃっ・・・」という微かな音が

昨日の光景を思い起こさせ、俺の心臓を再び大きく高鳴らせた。

「なっ・・・!」

多分その時の俺は、相当あたふたしていたんだろうな。

その様子を見た一色は、満足そうな弾んだ声で

「あれえ？センパイ♪お顔が真っ赤ですよ？」

と言いながら、人差し指で俺の頬を突っついてきた。

ああもうっ、あざとカワイイなこんちくしょう!

俺は、色々と複雑な心境を悟られたくなくて、一色の視線から顔を背けると

「ほら、そろそろ行くぞ。」と告げて、さっさと道を歩き出した。

「あーんもう、待つてくさいよおー♪」

一瞬、鳩が豆鉄砲を喰らった様に、動きを止めた一色だったが、
すぐに追隨してきて、再び俺の腕に自分の両腕を絡めた。

こいつは・・・また無造作に引っ付きやがって。

もはや俺は、諦めにも似た境地でされるがままになっていた。

「で、センパイ♪何食べます?」

一色は「どこに連れてつてくれるのか、とつても楽しみです♪」という

声が聞こえてくる程の、期待に満ちた眼差しを向けて俺に問うた。うわあ、全然期待に応えられる自信が無え。

・・・やつぱパスタとかが無難なのかね、朝だけど。

「うーん、まだ府内のサ○ゼやジョ○パは網羅してないんだよなあ・・・。」

それを耳にした一色は、「心外です」といった様子で

「前にも言いましたけど、なんでパスタばかりなんですか!？」と言った。

えっ、だってパスタとか好きそうじゃん?

それでもパスタなら・・・パスタなら何とかしてくれる!・・・んじゃねえの?

「今度こそ、私が何を食べたいか当ててください♪」だと思ったんだけどな。」

前回のデートでは、俺の行きつけである「な○たけ」へ行ったので、

てつきり「今回は空気読めや、ふえち幡・・・。」って感じなのかと。

ところが、どうやらそうではないらしい。

一色は首を横に振ると、俺の目をジッと見ながら言った。

「もはやセンパイを試すまでも無いので、いつも行く所へ連れて行ってください。」

えっ・・・ホントに良いの?

「いいんですっ!」

川平○英を彷彿とさせる、力強い返事だった。

よろしい・・・お前の覚悟はよく分かった。それなら選択肢は3つ

だ。

「じゃあ、吉〇家か、すき〇．．．あるいは、なか〇だな。」

俺は自信をもって提案した。何故なら、彼らもまた特別な存在だからです。

けれど、一色は即座に突っ込みを入れてきた。

「ちよつと、牛丼ばつかじゃないですか!？」

えーっ、あんなに力強く“いいんですっ!” って言ったじゃん．．．裏切りだ．．．。平塚先生! 僕は一色さんから、手酷い裏切りを受けました!

「そうじゃなくて、毎朝牛丼だけだと、全然野菜が取れてないじゃないですか!」

ああ、牛丼云々じゃなくて、俺の体を心配しているのか。

なんか前よりも、扱いが幾分マシになってるんだよな。

戸部以上葉山未満．．．みたいな。

まあ、ここは素直に忠告を聞き入れる事にしようかね。

一応、サラダも毎朝食べてるのだが、ここは言わぬが花だな。

ところが一色は、俺が“一色ありが．．．” と言い終わらないうちに、

「．．．って、このお店素敵ですね!ここに入りましょう!」

5 mくらい先にある小さなカフェを見つけると、

返事を待たずして、俺の手をぐいぐいと引つ張りだした。

ちよつ、おまつ! 人が折角、感謝の意を表そうとしたのに!

たまには俺にも発言権をくれっ!

“カランコロン”

入り口の戸を開けると同時に、今時懐かしい音色のドアチャイムと、

こほこほ．．．という音、そして珈琲の良い香りが俺達を出迎えた。ワんテンが遅れて、マスターの“いらっしやい” という渋い声が発

せられ、

それから更に遅れて、俺達と同世代の女性が“パタパタ”と駆けて来たかと思うと、

「いらっしや・・・って八ちゃん、今日はえらく早いなー！」

“ホンマにびっくりぽんやあ”と、感嘆の声をあげた。

・・・びっくりぽんっていう人、朝ドラ以外で初めて見かけたわ。

「まあ、色々あつてな。朝飯をここで食べることになった。」

ホント、ここまで色々あつたんだよ。

まあ・・・聞いてくれるな。武士の情けだ。

「そっかー・・・ってあれ？今日はぼっちや無いんやね。」

いつもとは違い、今日は一色を連れているのだ。

“あれ・・・友達いたんだ？”みたいな表情は止めてね、地味に傷つくから。

「ぼっちじゃない。ただ皆が俺を畏怖・・・」

「はいはい、ちよつと黙つとき。あつ、初めまして！うち、円（まどか）います」

円は、一色の方へ顔を向けて自己紹介をすると、軽く会釈した。

一方、一色の方も“にこつ”と笑顔を浮かべると

「比企谷いろはです、兄がお世話になっています。」

と、大してあざとくもない無難な挨拶を返した。

って、ここでも妹設定なんだな。

円は、俺と一色の顔を交互に見比べ

“なんや、あんまり似てへんなあ・・・特に目とか”と呟いた。

そりやそうだろうな。なんてったって、兄妹じゃないんだからな。

って、判断基準が目の腐り様かよ！もつと他にも色々あるだろうが

！

更に円は、何やら色々と思案する様な素振りを見せていたが、やがて“納得した”という顔になり、

「一瞬、彼女か思ったけど・・・考えたら八ちゃん、ぼっちやもんな」

と、失礼極まりない一言を告げた後、ひとしきり“けたけた”と大笑いし

「んじや、ごゆっくりい〜」

という一言を残して、カウンターの奥へと引っ込んで行った。
やれやれ・・・台風みたいなやつだ。

さあ俺達も席に着こうぜ、と一色の方へ振り向くと・・・

「むううううううううーっ」

一色は両頬を大きく膨らませて、思いつきりむくれていた。

えっ・・・台風一過かと思ったら、今度は一色が爆弾低気圧に!?

そんな様子におろおろしていると、一色の右手が“にゅっ”と伸びてきて

俺の左頬を摘んだかと思うと、“ぎゅううううううう”っと思いつきり引つ張り始めた。

「いふあい、いふあいれふ」

顔が伸びるって!そして痛いってば!

だが、そんな言葉など気にかけない・・・といった冷たい笑顔を浮かべた一色は、

自分の顔を俺の顔にぐっと近づけると、底冷えするほどの寒い声で言った。

「センパイ・・・随分と仲がおよろしいんですね？」

10月もまだ半ばだというのに、俺には早くも初霜が降りてきていた。

つづく

【おまけ】

静「スミマセーン、ハイボールおかわりくださいーい。」

店主「スミマセンお客さん、そろそろ看板なんですよ。」

静「ん？産婆さん？妊婦どころか、まだ独身だっちゅーのっ。」

店主「産婆さんじゃなくて、看板ですってば。ささっ、水でも飲みましよっ」

静「うぷっ…気持ち悪い…」

店主「ちよ、お客さん?!待ったっ!」

静「う、うまれる…。(以下、自主規制)」

店主「ぎやあああ…」

第9話 混ぜるな危険（人間関係的な意味で。）

『最近、朝食をとる人が少なくなっている』

俺が子供の頃から、あるいは更に昔から：例えば、平塚先生がうら若き乙女だった頃には、既に言われていたかも知れない言葉だ。

そんな古い時代から言われ続けているのであれば、俺の様な“必ず朝飯を食う人間”は絶滅危惧種並みのSR（スーパーレア）的な希少種であるはずなのに、巷では“一度は行きたい絶品モーニングベスト10”みたいな特集が頻繁に組まれ、人気を集めている。それでは一体、どれくらいの人々が朝食を採らないのであろうか？

似た様な疑問を持つ人は意外と多いようで、様々なサイトで同様のアンケートが実施されている。それを覗き見てみると、性別や世代、それにサイトによって多少の誤差はあるものの、概ね65%〜80%くらいの人が朝食を採っているらしい。

あれ？それって意外に多くね？

分かり易く言えば、奉仕部が全部で3人だから、そのうち多くて2人、4人：つまり雪ノ下、由比ヶ浜の2人と、俺0人。4人分が朝飯を食ってきている事だ。

：つてちよつと待て、0人4人ってなんだ？なんか俺、ジ○ングミたいになっちゃってるんだけど…足なんてただの飾りですよ！みたいな。ちなみに、俺にとつての偉い人は平塚先生だから、足が飾りだなんて事はよく分かっているはずだ。

話を戻そう。つまり“少なくなった”というのは、決して実データに基づいた結果ではなく、あくまで慣用句に過ぎないという事だ。ほら、近所の酔っ払った爺さんが、俺によく言う“最近の若い者は…”と同じだ。爺さんだつて若い頃には、その時代の年長者に“最近の若い者は”と言われてたに違いない。だって、昼間から酒飲んでんだから。

ただし：俺が色々説教されるのは、若者云々以外に理由がありそう

だけどな。

まあなんだ、朝飯をゆったりと採る時間は決して悪いものではない。まだ実家に住んでいた頃は、主に小町とのコミュニケーションの場として重宝したもんだ。小町の機嫌が良い朝なんて、卵焼きにカマクラの絵をケチャップで描いてくれたりしたんだぜ。

それにしても、メイド喫茶で描かれるケチャップアートは凄いな。“メイド喫茶 ケチャップ絵”でググってみると、簡単なメッセージから萌えキャラまで凄い作品が目白押しだ。もう100年くらい経ったら、人間国宝とか伝統芸能の域に達するんじゃないの？

この様に、俺の中で“朝飯”というものは、和やかな時間だったはずだ。でも何故だろう：今日の朝飯タイムに限っては、俺の知っているそれではない。

一色も円の奴もニコニコとされていて、一見穏やかそうな時間ではあるんだ。でもな、ピリピリとした空気が漂っていて、和やかさの欠片も見当たらない。内面から滲み出る険悪さっていうのかね、それが隠されるどころか思いっきりハミ出している感じだ。

無論、俺に何とか出来るハズも無く、空になったカップを口元に運んではテーブルに置くという動作を、ただただ繰り返すしか無かった。人間はちっぽけで無力な存在だ：という事を思い知らされながら、な。

やめてっ！仲良くしてっ！

第9話

混ぜるな危険
(人間関係的な意味で。)

事の発端は、円が自分の朝飯を持ってきて

「あたしも混ぜたってなー」

と、俺の隣に“どしっ”と腰かけた事から始まった。その瞬間、向かい側に座る一色の眉が“ぴくっ”となったのを、俺は見逃さなかった。おそらく、さっきの不機嫌タイムは継続中なんだろうな。一切崩れない笑顔が、かえってその怒り具合が強調されている様で、ちよつと怖い。

一方円の方はといえば、そんな様子に“ニヤリ”と不敵な笑みを浮かべると、自分の皿に盛り付けられていたプチトマトを、箸でつまんで“あーん”と俺に向けて来た。

「ちよ、ちよつと待て。俺はトマトが苦手なんだ。」

そんな、俺のささやかな抵抗を“好き嫌い言うとなら、大きくなられへんで”と一刀両断する円。いやいや、もうとつくに成長期は終わってるからーっ。

だがそんな事はお構いなしに、円はどんどん箸を近づけて来る。やがて、俺の口元にトマトを付き出し、“んっ”と食べる様に促した。色々な意味でハードルの高いこの状況に、俺はなかなか追いついて行けない。

さて、どうしたものか…と考えていたその時、横槍が入った。無論、一色である。一色は、俺に突き付けられていたトマトを“はむっ”と一口で平らげ、

「うわぁーとつても美味しいですよ、このトマトー！」
と、大げさなくらいに感嘆した声を上げた。つてお前、向かいの席からよく届いたな。

それを見た円は一瞬目を丸くしたが、今度は、“ふっふーん”と悪い事を考えている人の顔になった。一体何を企んでいるのだろうか…まあ、ろくでもない事なんだろうけど。

「じゃあ…これなんかどうかいな？」

今度はウインナーを箸で摘むと、再び“あーん”と俺の口元へ運ぼうとする円。そして、すかさずそれを“はむっ”とインターセプトする一色。

「もしやもしや…ブラックペッパーがすっごい効いてますね。」

店内は驚くほど静かだった。唯一、一色がウインナーを咀嚼する音だけが、周りを支配している。それにしても良く噛んでるな。噛めば噛む程味が出るっていう位だから、きつと一色の口内には、ウインナーの持つ旨みの総てが引き出されている事だろう。

やがて、咀嚼の音も止むと、辺りはシンと静まりかえった。そして一色と円は、互いに視線を合わせると、どちらからともなく微笑みあつた。

あれ…これってもしかして、嵐の前の静けさってやつじゃね？

「……にこっ」

「……ニコッ」

まるでそれが開戦のゴングであったかの様に、箸を握り直した円は「じゃあ、今度はこれなんてどうやる？ハイ、あーん」

と言うと同時に、千切りキャベツ、レタス、フライドポテト…等々、次から次へと摘んでは、凄い速さで俺の口元へと運びはじめた。

一色も負けじと“はむっ…ぱくっ…ほむっ”と片っ端から口に咥えて、S G G K（すっごい頑張るゴールキーパー）の森○君もビックリな好セーブを連発していく。

すげえ…鉄壁過ぎる。もうジ○フでもどこでもいいから向こう（J1）にやっちゃってよ！…まあジ○フ千葉って、もうかれこれ6年くらいJ2なんだけどな。

それからしばらく、品目は次々変われども攻防は続いていたのだが、メインデイツシユたる卵焼きの攻撃を一色が凌いだ時、ようやく円の箸の動きが止まった。

箸を持ったままの円と、箸を咥えたままの一色。2人の動きは完全に固まり、その造形は金剛力士像を彷彿とさせる程のダイナミックなものだった。

「……。」

「……。」

しばらく、2人は固まったまま無言で見詰め合っていたのだが、

「……ぷっ」

円が軽くフキ出したかと思うと、それを切欠に堰を切ったように大笑いし始めた。“ぶははははは”と笑い転げる円に、口をぽかーんと開けたまま呆気にとられている一色。基本的に笑い上戸なこいつは、1度笑い出すとそれを止める事はなかなか難しい。

その後、更に5分くらい笑い転がり続けた円は何とか落ち着きを取り戻し、それまでとは一転して“にかっ”と人懐っこい笑みを浮かべると、一色に向かって言った。

「はあっ…はあっ、ゴメンゴメン。可愛かったし、ちよつとイジつてもうたわーっ。」

俺の背中をバシッバシッと叩きながら、再び“ぶはははは”と大笑いする円。関西人特有のノリというかテンポというか…こっちの人々の多くは、話の切り替えが早い。それを目の当たりにした一色は

“ははは……”と乾いた笑いを浮かべている。

そして、このビツクウエーブに乗るしかない！という事で、ここで俺も笑う事にした。

「ぶはははは」

「あはっ……ははは♪」

「へっ……へへっ」

さっきの様なピリピリムードは収束を迎え、代わってリラックスした空気が流れ始めた。さっきまで全然耳に入らなかつた“コポコポ……”という音が、店内のBGMが、俺の心に穏やかさを与えてくれる。やれやれ、これでようやく一息つけるな。

だが、そんな希望を打ち砕く様に、円はこれから悪戯を仕掛ける子供の様な笑みを浮かべた。

「あんたら、ホンマは兄妹やないんやろ？」

全米が震撼した。

「なるほどな。八ちゃんどこ下宿やから、兄妹設定になつとったんか。」

一色の説明に、納得した様子の円。そして俺も納得した。一色のや

つ、やっぱり計画的犯行だったんだな…ホテルニュー八幡ってなんだよ。それにしても円は、どうやって見破ったんだろうな。やっぱり目か？目かのか？!

「そんなんバレバレやん。八ちゃん、いろはちゃんの事」一色「つて呼んでたし。」

円は、ケタケタ笑いながら種を明かした。一色は「あちゃーっ」と声をあげ、額に手を当てた。えっ、流出元は俺なの？つてお前あの時、奥に居なかったか？…どんだけ耳が良いんだよ。

「センパイ…これはお仕置きが必要ですね♪」

一色が、きやるんとした声で物騒な事を言う。だから、無駄に目をキラキラさせんじやねえ…。(腐った目の持ち主である事の)劣等感を刺激されるじやねえか、このDS後輩め。

「それにいろはちゃんも、八ちゃんの事」センパイ「つて呼んどつたしな。」

絶妙なタイミングで補足事項を入れてくる円。これで過失割合は5対5に持つて来れそうだ。お前ら、ネットでも良いから自動車保険には入っておけよ？

「二色、お前もお仕置きだな。」

俺の言葉に、「うへえ…。」と一色は顔を大きく歪めると、自分の両肩を抱きしめつつ上半身を大きく仰け反らせた。

「お仕置きと称して私を散々デートに付き合わせた挙句海の見えるホテルの最上階レストランで愛の言葉を囁いて不覚にもコロツといきそうになった私の隙を突いて部屋に連れ込んでちよつと大きな声では言えないようなあんな事やこんな事を」これもお仕置きだよ「つて優しく諭しながらするつもりなんでしょうけれどもまだ受験が終わってないので無理ですごめんなさい。」

あまりに想像力豊かな内容に、カウンターの向こうに居るマスターが「ぶほお」とフキ出した。慌てて此方に背を向けつつ、「げふんげふん」と咳をカモフラージュするマスターと、何も取り繕わずに笑い転げる円のセットを目の当たりにし、一色は顔を真っ赤にして視線を外へ向けた。

普段寡黙なマスターと快活な円。正反対な性格だけど、初めて似たもの親子だつて思ったよ。何せ、笑いのツボが同じなんだからな。

「そやけどな、そもそも八ちゃんの妹さん、〝小町ちゃん〟っていうんやろ？ほぼ毎日、〝小町可愛い〟とか〝目に入れても痛くない〟とか言つとるし。だからさつき、〝比企谷いろはです〟つて聞いた時〝ほえ？〟つてなつとつてん。」

更なる円の補足事項に、一色は気の毒そうな目で俺を見ると、
「シスコン…まだ拗らせたままだったんですね。」

と、心底残念そうに呟いた。おいこら、拗らせたとか言うな。

「そやさかい、過失割合は7対3で八ちゃんの方が大きいな。」

続けてしれつと私見を述べる円。ねえ、シスコンだから過失が大きいつておかしくない？…つて、そもそも俺はシスコンじゃない、ただ溺愛しているだけなんだ。だが、多数決という数の暴力に抗う術無く跪く俺に、ドヤ顔を浮かべた勝利者たる一色は追い討ちを掛ける様に言い放った。

「じゃあセンパイ♪罰ゲーム…楽しみにしてて下さいね？」

それはそれはとても嬉しそうに。一体何をさせる気なんだ、お前は。

そんな様子をニヤニヤしながら眺めていた円が、さらなる爆弾を投下した。

「そつかあ。いろはちゃん、愛しい先輩に会いに来たんやね♪」

〝ひゅーひゅー熱いね〟つとからかう円。リアクションが昭和だな。今時そんなリアクションする人なんて…いた、平塚先生がいたな。まあ、平塚先生なら仕方ないな、うん。けれど、その平塚先生ばかりの昭和のリアクションが効果テキメンだったのか、一色は激しく動揺した。

「な、な、な、なんて事を言うんですかっ！そ、そんなのありえませんかっ！」

顔を真っ赤にして否定する一色。不本意だつてのがひしひしと伝わって来るな。仕方がない、ここは可愛い後輩の為に助け舟を出して

やろう。

「こいつの言う通り、それはありえん。ただの先輩と後輩ってだけだ。」

完璧な返しだった筈なのに、それを聞いた一色は「キツ」と俺を睨み付けてきた。

「ありえないって何ですかっ!?!ただのって事はないんじゃないですかっ!!」

おいおいお前、なんで怒ってるの?俺は良かれと思って、こいつのフオローしたはずなのに、何故なんだ…。なんか、雲行きが怪しくなってきたんですけど。

「そもそも夜這いまでしておいて…責任とるべきじゃないですかっ!!」

それを聞いた円は「うっひやあ〜」と、新しいおもちゃを得た子供の様な笑みを浮かべる。ああ…また余計な燃料を投下しちゃったよ。

「うっわあ〜。夜這いなんて八ちゃんてば大胆やねえ」
だから、夜這いなんてしてねえって。

「ちよつとセンパイ!聞いてるんですかっ!」

こうして、円が煽っては一色が俺に詰め寄るといふ凶悪なコンビネーションが完成し、俺は2人が飽きるまで、無抵抗に屠られ続けるのだった…。

どうしてこうなった…。

つづく

【おまけ】

円「さて、そろそろウチ勉強してくるわ。」

いろは「そつかあ…円ちゃんも受験生なのかあ。お互い頑張りうね
♪」

円「ありがとうなー。また遊びに来てなー。」

いろは「よし…負けずに私も頑張りますよ、センパイ♪」

八幡「なあ一色…。」

いろは「なんです？センパイ♪」

八幡「アイツは確かに受験生なんだが…高校受験だぞ？」

いろは「…は？マジですか!？」

第10話 本当は師範並だけど、本気出してないから無級

「わ、我は剣豪將軍…材木座義輝である。」

サークルの懇親会に、不本意ながらも参加する事になった我(われ)が、自己紹介を済ませた途端に“シーン”とその場が静まり返った。明らかに異質なものを見る様な周りの目に、時間が経つにつれて段々といったまれない気持ちになって来る。

だ、だめだ…これはだめなやつだ。きつとこの後”何?大学生なのに中2?…クスクス”と陰口を叩かれるパターンに違いない。くっ…そもそも我に馴れ合いなぞ不要なのだ。従って、懇親会だけではなく、半ば強引に押し切られたサークル入会も辞退すべきだったのだ…。

この様に、後悔の思いでいっぱいになっていたのだが…恐らく、顔を青くしている我に御加勢下されたのだろうな。そんな空気を打破するかの様に、サークル長らしき御方が我に問うてきた。

「材木座君って、剣道が得意なんだね!段とか持つてるのかい?」

フツ…愚問だな。源平の世に編み出され、幾百年の刻を超えて現代に伝えられし我が剣に、その様な等級など存在しないのだ。だがここは、平易な表現で伝える必要があるだろう。

我はサークル長殿に向かって、こう言い放った。

「い、いえ…何も持ってませ…ん…。」

卑屈になって、つい素に戻ってしまった。

我の答えに、サークル長殿をはじめその場の者全てが啞然となっ

た。折角御加勢頂いたのに、サークル長殿には申し訳ない…。今日の我には、八幡大菩薩のご加護が全く効いてない様だ。

ああ、今すぐ（総武線で）故郷に帰りたい。

だがその直後、“ぶわっはっはっ”と大きな笑いが起こり、我の横に座っていた長髪の青年が、我の背中を軽くバシバシ叩きながら話しかけてきた。

「材木座君、キミ面白いなー！俺も1年なんだ。仲良くしようぜ！」それを切欠に、周りにいた者も次々と

「私も。文学部1年なんだ♪よろしく」

「俺は理工学部さー！」

「私は2年生だよ♪分からない事があれば聞いてね」と、我にシエイクハンドを要求してきた。

“えっ、えっ？セーフ？セーフだったの？”と、今までに無い経験に戸惑っていた我に、サークル長殿は大きく右手を掲げサムズアップをしてみせた。それはあたかも“今日からお前は、俺達の仲間さっ”と言わんばかりに。

『アタシは普通の人間に、興味がありません・・・』

やがて、自己紹介が再開され懇親会はつつがなく進行してゆき、会の終わりを迎える頃には、我もすっかり“アニメ研究会”の一員となっていた。

仲間というのは、良いものだな。

こうして“ちよつとキモいけど、面白い奴”というポジションを不動のものとし、無難に大学デビューを飾った我は、まさかそれから数か月後に、その生まれ変わらる我が相棒に“材木座、ハチ公様にお手して差し上げろ”と、全く以って意味不明な要求をされる事になるうとは露ほども知らず、八幡大菩薩に心から感謝の祈りを捧げるのであった。

第10話

本 当 は 師 範 並 だ け
ど、本気出してないから無級

騒がしい朝飯タイムを終えて店を出た俺たちは、大学へと向かうバスに揺られていた。すっかり落ち着いた俺とは対照的に一色は、見慣れない車窓にテンションアゲアゲな様子で、右を見ては

「センパイ！あのマイクロバスの中のお侍さん、コココーラ飲んでました！」

と大興奮で報告してきたり、また左を見ては

「なんか…あのタワーって、ボーリングのピンみたくないですか？」

と、ど真ん中の直球な感想を俺にぶつけて来たりした。いや…あれは一応、この街全体を照らす灯台のイメージだから。まあ確かに、ピンのごとく倒された事はあるけどな…ゴジ〇によって。

それにしても、満腹で電車やバスに揺られると途端に眠くなるな。更に一色の声色が良い感じのBGMになって、俺の意識はどんどん遠くになってゆく。一色の“もう！私の話、聞いてますか？”の問いかけに“ああ、聞いている聞いてる…。”という空返事をしつつ、やがて俺は完全体たる夢の住人となっていた。

「お客さん、終点ですよー。」

聞きなれない声で寝覚めを促され、ゆっくりと瞼を開いてみると、俺の目の前に制服を着た初老の男性が立っていた。あれ？俺は何をしてたんだっけ？”と眠たい目を擦りつつ、大きなあくびを1つすると俺の頭は急激に覚醒してきた。

ああ：目的地に着いたんだな。

周りを見渡すと、既に俺達以外の乗客はいなかった。そして一色もまた、俺の肩に頭を預ける様にし、口を僅かに開いたままスヤスヤと寝息を立てていた。

「済みません。すぐに降ります。」

俺が目覚めた事を確認したバス職員は”慌てなくても結構ですよ”と片手を挙げると、

「終点のK大前です。お忘れ物のございません様に。」

と俺に告げ、一礼して運転席へと戻っていった。さて、さつさと一色を起こさないと。

「一色、起きろ。着いたぞ。」

俺は一色の肩を軽く揺さぶりながら、そう声かけた。一色はしばらくの間、(俺視点で)頑なに目を覚まそうとはしなかったが、それでも粘り強く声を掛け続けた結果、ようやく薄目を開いて”・・・んあ？”と声をあげた。

「おはよう一色。ついに辿り着いたぞ：惑星プロメシウムに。」

俺は再び、終着駅に着いた事を一色に告げた。ちなみに、原作だと惑星大アンドロメダが終着駅だ。ところで：エターナル編っていつ再開されるんだろうな。そういや、web連載が途絶えて何年経ったたのだろう：松本先生、続きをオネシヤスツ！

「もにゃ：：ネジの身体なんて、私はイヤですよお：：」

一色はまだ寝ぼけている様だったが、返事は的確だった。ってかお前、よく話について来れたな。大丈夫、メートルが助けてくれるから。そして無事、五体満足で地球に帰れるから。まあ：半開きの口から涎が垂れているから、取り敢えず拭けな？

すると一色は”もにゃ：はあくい”と返事をする、”ごしごしと口を拭き始めた：

俺の上着の袖口で。

「うおおい、なんでやねん！」

こつちへ来て初めてののツツコミが、鮮やかに炸裂した。

「うう…：センパイ、済みませんでしたあ…：」

バスを降りて正門へ辿り着くまでの間、一色は何度も俺に頭を下げた。申し訳ない気持ち半分、やらかしてしまったバツの悪さが半分といったところだろう。俺も、たまに寝ぼけてやらかすから気持ちは分からんでもない…：いやむしろ、寝ぼけたら何かをやらかさねばならないまである。

「まあ…：気にするな。」

もう何度目になるか分からないが、俺の返事を聞く度に一色が安堵の表情を浮かべる。とまあ…：しばらくの間、こんな感じのやり取りが繰り返されていたのだが…

「やけにあつさり許しちゃうんですね…：つてまさか、私が千葉に帰った後で袖口をクンカクンカして、匂いを楽しむ気なんじゃ…：！」

一色は「凄い事に気が付いた！」と言わんばかりに、俺から大きく

後ずさった。

「んな事しねえよ！って言うか楽しめねえよ！」

2回目にして切れ味の鋭くなった俺のツツコミに対し、一色はニコリともせず、感情を押し殺した様な表情で更に追い打ちをかけてきた。

「…永久保存するですか？センパイは変態さんですね。」

事実無根の言いがかりで、俺がどんどん変態認定されていく。永久保存なんてしねえよ！いや、それ以前にキャラ違ってね？…っていうか、作品自体違ってんじゃねえか。ああ…もうどこから突っ込んだらいいか分かんねえ！

困惑した俺の様子をじっと見ていた一色は、突如優しい微笑みを浮かべ俺の肩をポンと叩くと

「冗談ですよ、センパイ。クンカクンカしても咎めたりはしません。」

と、生暖かい眼差しで俺を見つめた。

…って、冗談なのはそこなのかよっ！

もう一生分ツツコミを入れたんじゃね？とぐったりしてきた頃に、俺達はようやく正門前に辿り着いた。おかしいな…5分くらいの道のりなはずなのに、2時間くらいかかった気がする。

こんな、残業を終えた会社帰りのサラリーマンの様な俺とは対照的に、

「センパイ♪ここが入口ですよね！うわーっ、めちやくちや敷地広いです!!」

と、一色のテンションはウナギ登りだ。確かに、高校の校舎に比べたら広大だよな。何せ、学生の数だけ比べても10倍くらいは違うんだ。入学して半年くらい経つけど、まだ入った事のない場所とかあるもんな。

『第1221回 K大祭』と書かれた、前衛的な装飾を施された門をくぐると、サークルや部活動が運営している模擬店のテントや、研究室の紹介パネル等が所狭しと並んでいた。

“たこ焼きいかがつすかー”

“焼きそば300円やでー”

“から揚げくから揚げく”

そして、いかにも“リアルが充実してます”って連中が、威勢の良
い掛け声をかけて客引きをしている。そんな様子を“ふむふむ…”
と、値踏みする様に眺めていた一色が

「カッコ良い人がいっぱいですね…私、絶対ここに合格してみせま
す！」

と、目をキラキラさせて力強く宣言した。つたくこいつは…全然ブ
レねえな。まあ、不純過ぎる志望動機に、面接官が鉄槌を下さなきや
良いけどな。

時刻は、午前の10時半を少し回ったところだ。夕方には一色を帰
さねばならないからと、少し早めに来てみたのだが、流石に午前中か
ら“全力で学園祭を楽しむぜ!”という層はあまりいないらしく、来
園者は疎らだ。

だからなのか、目つきの悪い俺を従えているというアクセント効果
も加わった一色は、(主に男子大学生から)中々の注目を集めていた。
そんな視線に敏感な一色は、“えっへん!どうですかセンパイ♪
私って、結構凄くないですか?”と推定Cカップの胸を大きく張つ
て、得意げな顔で俺に問いかけてくる。

「ああ、凄い凄い。それを自分で言わなければもっと凄いのにな。」

そんな俺の答えに、一色は不満そうに“むう…”と声をあげたが、
すぐに気を取り直して“こんなカワイイ子と歩けるなんて、センパイ
は幸せ者ですね♪”と、再び胸を張った。

本当にイイ性格してるよ、お前は。

その後も2人でぶらぶらしていると、一色が“あつ、あそこにお手
洗ひがありますよ?センパイ”と、8号館に貼られた“トイレ”の案
内板を指差した。ん?別に今は催してないんだけど…?

そんな不思議な顔をしている俺に、一色はポケットから取り出したハンカチを手渡すと、

「センパイの上着はナイロンですから、濡れたハンカチで拭くとマシになると思うんです。」

と、申し訳なきように説明した。そして、“ホントなら、私がハンカチを濡らしてきたいところなんですけど…”と、一色は女子トイレの方を顔を向けた。釣られて俺もそっちを向くと、少し見回っているうちに客足が増えたのか、女子トイレには軽く行列が出来ていた。

こいつ、まだ気にしてたのか…こう見えて、意外と気にするタイプなんだな。俺は一色の厚意をありがたく受け取る事にし、トイレへと足を進めた。まあ、折角だから用も足しておこう。

男子トイレは、女子トイレに比べるとそこまで長い行列は出来にくい。何故なら1回に掛かる時間が短く、回転率が良いからだ。けれども、だからと言ってトイレが混雑しないという訳ではない。今日みたいな日は、やはりそれなりに時間が掛かるのだ。従って、俺が用事を済ませるのに思いのほか手間取ったのは、不可抗力であると言えなくもない…つまり、世の中が悪い。

トイレに10分程費やした俺は、遅くなった言い訳を考えながら一色の元へと向かったのだが、一色の待つロビーの手前で一色が、2人組の男性に捉まっているのが遠目に見えた。

「ねえねえ、お名前なんていうの？良かったら僕達と回ろうよ」

葉山程ではないが無駄にキラキラしていて、イケメンにカテゴライズされても不思議ではない2人組だ。こいつらも自覚があるのか、自信たっぷりといった感じで一色に声を掛けている。

逆に一色は、笑顔を崩さないものの、若干迷惑そうな感じで“すみませえーん♪人を待ってるんで♪”とけんもほろろなのだが、それでも彼らは引き下がらない。

「えーっだってもう10分以上も待ちぼうけじゃない?」

「そうそう。そんな薄情な猫背野郎なんて放っておこうよ。」

なんだこいつら、結構前から一色に狙いを付けてたんだな。それに、男連れって分かってて声を掛けるなんて、自分に余程自信がないと出来ないぞ。まあ：連れてる男が俺だから、勝てそうと思われても無理はないが。

そんな、粘り強いと言うかしつこいと言うか：そんな彼らのアップローチに、一色の笑顔がどんどん冷たくなっていく。だめだ、お前ら：早く逃げろ。

一方で俺の姿を確認した一色は、ずかずかと大股で俺に近づいて来て“センパイ遅いーつ。むうつ”と拗ねた様子で俺の右腕に自分の両腕を絡めると、俺の肘関節を極めたまま2人組の所へぐいぐい引つ張っていった。だから、いちいち関節を取るなつてば。

そして、再びナンパ2人組と対峙する一色(と俺)。一色は、絡めた両腕に“ぎゅつ”と力を込めると、過剰なまでに甘い声で、

「私にはあ♪こんなに素敵なお敵なダーリンがいるんです♪ですから私達2人の甘い時間を邪魔しないでくださいねかあ？そもそもお私が10分待ってるとかあ待ってる相手が男性とかあ：それって結構前から後をつけてないと分かんないですよねえ？だとしたらちよつとキモいんですけどお♪しかもお：超しつこいですしい声を掛けるなどは言いませんけどおナンパの成功率を上げたいんですいたらあもうちよつと空気を読んで出直してきた方が良いですよお：みたいな♪」

と、全然甘くない毒を炸裂させた。なまじ笑顔と声色がカワイイだけに、その口から吐かれた猛毒は威力倍増だ。すんげえ怖ええ：。ほら見ろ、あいつらも顔が真っ青になってんじゃねえか。

“え：あ：”と動揺する彼らに一色は、“それでは失礼します。行きましょう、センパイ♪”と一声かけると、両腕を絡めたままの俺を伴って彼らの脇をすり抜け歩き出した。

8号館を離れ再び屋外へと繰り出した俺達は、広々とした中庭エリアへと足を運んだ。今日は日差しが暖かく、日向ぼっこにはもってこ

いの良い天気だからか、芝生にござりと寝っ転がっている学生もちらほら見かけられる。

「あ、センパイ♪あそこに座りましょうよ♪」

一色は、空いているベンチを指さした。俺はその提案に乗りベンチへ腰掛け、一色も俺の隣に腰掛けた。まあ、一服してスケジュールを見直すのも悪くないな。午後になれば人も増えるし、そこまで一色に注目が集まる事も無くなるだろう。それにしても…

「さっきのお前、容赦無かったな。」

さっきのマシガントークと、それに真っ青になってる彼らの光景が再び脳裏をよぎった。俺だったら、シヨックで2〜3日は自室に引き籠もるな。

それに対して一色は、“だって、仕方ないじゃないですかあ。超しつこかったんですもん！”と、鼻息を荒くした。ああ：やつぱりイラついてたんだな。

「それに、大きい方をしに行ったセンパイも、中々戻って来ませんでしたし…」

ちよつぴりイタズラ心を込めました！みたいな笑顔を浮かべる一色。いや、う〇こじゃないからね？…って、こう言うとまるで俺が“うん〇野郎”みたいじゃねえか。

一色は“確かにう〇こ野郎的な要素はありますよね♪”とクスクス笑った。おい、そこはちよつとフォローしろよ…まあ、心当たりが無いわけではないから、俺自身ちよつと困る。

“それに彼ら…”と前置きして、一旦深呼吸した一色は話を続ける。

「センパイの事を何も知らないくせに、薄情だとか猫背野郎だとかシスコンだとか目が腐ってるだとか言いたい放題で…」

ちよつと待て。あいつら、シスコンとか目が腐ったとかは言っただったよ？つまりそれって、偽らざるお前の“※個人の感想です”だよね？そうだよね？

そんな俺の悲痛な叫びを遮るように、“で・す・か・ら”と大きな声で強引に話を進めようとする一色。話の腰を折るな…というオー

ラが、ひしひしと伝わってくる。

と、とりあえず…話を聞こうか。

一色は“それじゃあ、気を取り直して…”と話を続ける。

「センパイの事を悪く言われて頭にきてしまつて…気がついたら罵倒しちゃつてました♪」

“ やっちやつたつ♪テヘペロっ♪” みたいなノリの一色。可愛く言つても罵倒は罵倒だ。でもまあ…気持ちはあるがたく受け取つておく事にするか。

「…サンキューな、一色。」

素直に礼を言つた俺に驚いたのか、一色は一瞬目を丸くしたのだが、すぐに我に返ると“ どういたしまして♪センパイ。” と、穏やかな笑顔を浮かべ答えた。

それにしても、ここに来てからの一色は様子が変わる。憎まれ口や、辛辣な事言葉を浴びせて来るのはいつもの事だがその反面、甘えてきたり、何かとくつついてきたり、円と張り合つたり…そして俺の事を悪く言われたからと反撃を加えたり。まあ…これまで色々な事があつたから、少しは情みたいなものが湧いてるのかも知れないけど。

材木座じゃないが…お前、俺の事好き過ぎんじやねえの？

それに対し一色は、“ ほえ？今更何言つてんの？” と呆れた感じで“ バカっ！ボケナスッ！ふえちまん！” と呟いた。なんか、“ はちまん” から“ ふえちまん” にクラスチェンジしてるんですけど…。

一色は“ふう”と1度大きなため息をつくと、俺の方へ顔を向けてハッキリと言いつ切つた。

「そうですよ？センパイの事、好きに決まってるじゃないですかあ。」

つづく

【おまけ】

サークル長「材木座君、たった今…気づいた事があるんだけど…。」

材木座「うむ、是非ともご教授頂きたい。」

サークル長「あ…うん。材木座君って…。」

材木座「うむ。」

サークル長「冷静に考えてみたら…。」

材木座「うむ…。」

サークル長「剣豪でも、増してや將軍でもないよね…。」

材木座「ぎゃふん」

第11話 格闘家の武○選手は、新右衛門さんの子孫らしい。

恋や愛を語る手立ての1つとして、これまで幾億もの…そう、それこそ星の数ほど膨大な数のLOVE SONGがこの世に生み出されてきた。ジャズやロックはもちろん、ヒップホップや演歌、大きく時代を遡ると和歌や短歌に至るまで…時代やテイストは違えど、人という生き物は、自分の想いをメロディに乗せて表現してきたのだ。

また、お気に入りのLOVE SONGの1つや2つは、誰しもうが心の中に抱えているだろう。例えば、メリケンオールスターズの“いとしのペリー”だったり、おはよう娘の“ケッタマシーン”だったり、末法思想の“昏睡姫”だったり、数え挙げればキリが無い。

そんな中、俺が思う最強のLOVE SONGは“とんちんかんちん一休さん”だ。何故ならば、俺の知っているLOVE SONGの中で、あれだけ“好き好き”連呼しているものは他にないし、しかも“好き好き”連呼するだけでは飽き足らず、更に“愛してる”とダメ押しするのである。これほど強烈に、愛する気持ちを表現している歌は他にあるだろうか？（いや、無い！）

ただし：仮にカラオケ、あるいはギターを片手に意中の相手に歌って聴かせたとしても、決して甘いムードとなりはしないだろう。ギャグだと思われて流されるならまだしも、“何でアニソン熱唱してんの？オタガ谷。”と生暖かい目で見られるまでである。

何気に、とんちんかんが不発でモヤモヤしたまま話が終わったり、湖に身投げを決行したりと、お茶の間を騒然とさせる展開も多かった一休さん。俺はてつきり、紆余曲折を重ねつつも最後には一休さんとさよちゃんが結ばれるという“とんちんラブコメ路線”だと思っていたんだが、まさか、一休さんが修行をする為に、寺をあとにするという、放浪ENDになるとは思わなかった。

あれ？これって、ドラゴ○ボールの天津飯みたいじゃね？

それはさておき俺も例に漏れず、これまで数々のLOVE SO
NGに胸を打たれてたのだが、その全てが吹き飛ばくらいに一色の言
葉は強烈だった。

「そうですね？ センパイの事、好きに決まってるじゃないです
かあ。」

そりゃ、多少は好かれてるだろうとは感じていたけどさ…。でも
それは、せいぜい戸部以上葉山未満といったレベルの話だったはず
だ。そうだお前、葉山はどうしたんだよ？

さらっとした口調とは裏腹に、微笑みを浮かべつつ真剣な眼差しを
向けてくる一色を前に、頭の中が真っ白となった俺は、呆然とその場
に立ち尽くしていた。

一休さん…一大事でごさる！

第11話

格闘家の武

○ 選 手
は、新右衛門さんの子孫らしい。

「・・・センパイ？」

少しの間続いた沈黙を、一色が破った。そりやあ一色にしてみれば、さりげなくではあるが好意を口にしたにもかかわらず、俺がノーリアクション（の様に見えるだけで、動揺して言葉が出なかった）では居心地悪く感じるのも無理はない。

「え…ああ、うん。」

何とか言葉にしようと声を絞り出したが、この有様で本当に悪いな。

その後も、頭に血を集めてフル回転させようとしたのだが、健闘虚しく俺の思考は空回りするばかりだった。そして一色はというと、変な唸り声をあげている俺に、文句ひとつ言わずにしばらく様子を窺っていたんだが、やがて“ハッ”とした表情を浮かべると、早口で一気に入り立てた。

「センパイ！もしかして、好きって言われたからといって“俺の嫁だ”なんて思ってるんじゃないですか？好きには違いないですけど付き合うとかそういうのは懸案事項が片付いてないのでまだ無理ですっていうか私の気持ちを知ったからといって調子に乗らないで一度滝にでも打たれて修行してから出直してきてくださいごめんなさい。」

あれ？何も言っていないのに即フラれてるんですけど…。

俺も色々な（主にフラれる）経験をしてきたが、“好きに決まっ

るじゃないですかあ”と言われた相手から、間髪入れずに”ごめんなさい”というのは流石に初めてだ…っていうか、人類史を照らし合わせても、前代未聞の出来事じゃね？俺、マジ革命児。

ともかく、ずっとノーマリアクション状態つてのもなんなので”あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ”的な、軽くポル○レフ状態に陥りつつも、俺はなんとか声を絞り出した。

「えつと…なんか、すまん。」

いや…俺らしくない返事だったとは思うんだよ…普段なら”ちげえし！”で済む話だからな。だが今回は、一色の意図が全然読めない。これまでも何度となく繰り広げられてきた一色の”ごめんなさい劇場”なのだが、今回はいつもと違って、俺のリアクションには萎んだ風船の様に、全くキレが無かった。

「あ、あのっ！センパイ…その…そう！い、今のは違うんです！」
逆に、それに対して慌てたのが一色だ。今考えると、一色なりに変な空気を打破しようと、いつものノリで話を振ってきたのだろう。

だが、打破するどころか俺の返事がアレだったからな…。冗談のノリをマジっぽく返されたら、そりや立つ瀬がないだろう。”しまった！”ってのが思いっきり顔に出ていて、ちよつと申し訳なかった。

その後一色は、何かを伝えようと口を開くも”えつと…違うとうか”とか”その…違わないとうか”といった調子で、なかなか考えている事を言葉に出来ない様子だった。

一色でも、取り乱す事くらいはあるんだな…。

そんな、テンパっている姿を見て逆に冷静になった俺は、とりあえず一旦の水入りを提案すべく一色に話しかけた。

「なあ一色、分かったから取り敢えず落ち着こう…お互いにな。」

俺が口を開いた瞬間、一色はびくつと体を震わせた。その後一旦俺に背中を向けて、2〜3度大きく深呼吸をすると再びこちらへ向き直

り、

「ハイ。」

と小さく返事をした。

「ほら…マッ缶じゃなくて悪いが。」

俺は、自販機で購入してきた”京都〇山名水ロイヤルミルクティ”とパッケージに書かれた缶を一色に差し出した。ちなみに”ロイヤルミルクティ”ってのは和製英語だ。海外のカフェかどっかで”ロイヤルミルクティ、プリーズ”って注文したら、確実に首を傾げられるから気をつける。

差し出された俺の手を見た一色は、”いえ、むしろこっちの方が嬉しいです。”と、信じられない様な事を言いつつそれを受け取った。おいおい一色さんよお、あまりマッ缶を甘く見ない方が良いぜ？いや、甘いんだけどさ…とつても。

全日本コーヒー協会のホームページによると、コーヒーの香りには癒しと集中力向上の効果があるそうだ。つまり逆説的に考えると、マッ缶を毎日の様に飲む俺は、常に”集中力”と”癒し”を兼ね備えた存在であると言える。

…まあ、癒し効果はあっても、ぼっちだからあんまり意味無いけどな。

俺は一色の横へ再び腰掛けると、自分の缶コーヒーのプルタブを開けた。”ぱしゅっ”と音を立てると同時に、コーヒー豆の香ばしい空気が俺の鼻腔をくすぐった。マッ缶ではないが、これはこれで悪くない。

また、一色のやつはちよつと熱かったのか、缶の飲み口に”ふうっ”と息を吹きかけながらも”とつても…暖かいです♪”と、一口こくりと飲んだ後に呟いた。

こうしてしばらくの間、俺達は互いにティータイムを楽しんでいたのだが、やがて“よしっ!”と呟いたのを皮切りに、一色はポツポツと話し始めた。

「センパイ：クリスマススの時の事、覚えてますか？」

多分：も何も、葉山に告白するも玉砕した一色が、電車の中で俺に決意表明したアレだよな…。それならば、当然YESだ。縦に首を振る俺を確認した一色が、話を続ける。

「あれから、本物って何だろうって：ずつと考えてました。」

ぐはあ：かつて、雪ノ下と由比ヶ浜の前で大泣きしてしまった記憶が、鮮明に蘇る。うわあん：アイデンティティクライシスが再びやってくるよう。

「一色：俺、アイデンティティクライシスだから、前にも言ったがそれは忘れてくれ。」

俺は黒歴史を刺激され、悶絶しつつ懇願したのだが、一色は“前にも言いました、それは無理です：忘れられませんよ、今でも。”と、真剣な表情を崩さない。

「だって、あの件がきっかけで、私の価値観が大きく変わりましたもん。」

まさか、廊下に漏れ聞こえたような言葉が、人の価値観を左右する程の影響を与えるとは…。なんか俺って、未踏の地に布教に来た宣教師みたいじゃね？高校時代の俺、マジ伝道者。

一色は、なおも話し続ける。

「時間が経つと、本物だった気持ちがい出になってしまいかも知れません…。だからこそ、今を大切にしたいんです。かけがえの無い気持ちを、古ぼけた思い出になんてしたくないから、一歩踏み出そうと思っただけです。」

そして、それまでのシリラスな空気を吹き飛ばす様な、弾けた笑顔を俺に向けて

「だから安心してください。私の気持ちは本物ですよ♪」

と、ハッキリ言い切った。

ここまでハッキリと、好意をぶつけられた事があまり無かった俺は、どうして良いのか分からなかった。ただ、淀みの無い笑顔と真っすぐな視線が眩し過ぎて、俺は一色から目線を逸らしつつ、

「あ…ああ。分かった。」

と返事を返すのが精いっぱいだった。

そんな俺の様子を見た一色は、先程とは打って変わって“にやあ”と顔を崩すと、

「あれえ？センパイ照れてますか？照れてますよね？ねっ？」

と、嬉しそうに俺の頬つぺたを人差し指で突つきだした。俺は顔を背けるも、それが火に油を注いだ形となったのか、“えいっ！えいっ”と余計に手数が増えてゆく。ええい、うっとおしいっ！

こんな様子で、一色が突っついて俺が避けるという攻防が繰り広げられていたのだが、やがて一色は手を止めると、満足そうに“ふう”と一息ついた。

そして俺から視線を外すと、遠くを眺めながら話を続けた。

「返事は要りません。私…長期戦でいきますから、覚悟しておいて下さいね♪」

ん？長期戦？

「そうですね。時間を掛かるかも知れませんが、私もセンパイの本物になってみせます。それに…強力なライバルが2人もいますから、手抜きは一切許されません。という訳で、これからビシバシアタックしていきますから♪」

ライバル2人って…どう考えても、あいつらの事だよな。っていうか、ビシバシアタックって、物理的な攻撃じゃないだろうな？アルゼンチンバックブリーカーとか。痛いのは勘弁してくれ。

そんな事を考えている俺を余所に、一色は高らかに宣言した。

「絶対に…一色、お前がいないとダメだ””って言わせてやるんで

すからっ♪」

その後、昼ご飯代わりに模擬店で焼きそばとタコ焼きに舌鼓を打ち、校内を適度にブラブラして回ったところでタイムアップとなり、俺達は駅へと向かった。

バスを降りたその足でみどりの窓口へと向かい、切符を購入する一色。それにしても、迷わず「グリーンをお願いします」とか：「凄いなお前。」

一色の抑えた新幹線が出る時間まで、あと30分って所だ。まあなんだ：名残惜しくない訳ではないのだが、ここまで来たらあとは電車を待つだけだ。とりあえず、お茶でも飲んで時間を潰すか：なんて思っていたら、一色が恐るべき提案をして来た。

「センパイ、プリ○ラ撮りましょうよー♪」

おいおい、目の死んだゾンビが写った心靈写真が増えるだけだぞ。だから止めておいた方が良くと説いたのだが、結局押し切られてしまった。

ここにきてようやく、延ばし延ばしになっていた話に、時系列が追いついたのである。

「あの太陽・・・落ちてこないかなあ。」

「センパイ、どのフレームにしますかあ？」

「正直分からんから、任せろ。」

まあ滅多に撮らない上に、メカの進化には全く追いついていけない俺だ。ここは一色に全てを委ねるのが妥当だろう。出来れば俺の目もなんとかしてくれ。

「えっ、お友達と撮ったりしないんですか？…って、ごめんなさい。ぼっちですもんね。」

一色は、心から気の毒そうに呟いた。いや、だから撮った事はあるからね？戸塚（と材木座）と。ぼっちなのは否定しないがな…。

“それじゃあ、これにしましょう…えいっ”と一色は慣れた手つきでコンソールに入力していく。そして一色が、“ちゃんと決めポーズを取って下さいよお？”と俺に促したのと同時に、プリントシール機が“んじや撮っから。3・2・1…”と、気だるそうにカウントダウンを始めた。

えっ、マジでもう写すの!?!ちよっ…タイムっ！

“ばしやり”

1回目の撮影が終わり、モニターに画像が映し出された。画面の中の一色は、ウインクをしていつもの敬礼ポーズを決めている。流石に馴れているだけあって、どうすれば自分が可愛く写るのかを熟知してらっしやる。そしてその横には、虚ろな目をしたゾンビが、笑顔を引きつけて写っていた。

「…後で、目を弄りましょう。」

一色がぼそつと呟く。えっ！そんなん出来るんですか？

そんなやり取りをしている間に、“んじや2回目撮っから。3・2・1”と、プリントシール機が再びカウントダウンを始めた。ええいっ、同じ轍は踏むまい！

“ばしやり”

2枚目は、1枚に比べると比較的穏やかに写った。目も腐ってはいないが死んではない。笑顔は極めて不自然だが、きつとこれ以上まと

もには撮れないだろう。一色のやつは、てへぺろっとポーズを決めていた。出来上がりに全くの隙が無い。

「センパイ…次でいよいよラストですよ?」

一色の囁きに続いて、プリントシール機が“んじや、泣きの1回な。3・2・1”とカウントダウンを始めた時に事件は起こった。

一色は“えいつ”と俺の右腕を引き寄せたかと思うと、自分の顔を俺に近づけて、俺の頬…というより唇のほぼ真横に、“ちゅっ…”と自身の唇を押し当てた。

しつとりと湿り気を帯びた一色の唇の感触が、俺の胸を破裂させんばかりに高鳴らせる。想定外の事態に、腰が抜けるほどに驚いた俺は、一色からの身体的接触に一切の抵抗が出来ず、されるがままになつていた…つて、何故このタイミングでっ!

“ばしやり”

シャツター音が鳴り止んだ後も、一色は押し当てた唇を離そうとはしなかった。俺の右腕を抱きしめる一色の両腕に“きゅーっ”と力が込められ、強く押し当てられた胸から伝わる鼓動は“とくんとくんと”と生々しい音を立てている。そして唇の触れられた部分から、一色の体温がダイレクトに伝わってきて、その部分が発熱したかの様に高い熱を帯びていた。

“ザ・ワールド”

あまりに想定外の出来事に、完全に思考が停止する俺。まるで、時の流れが止まってしまったかの様に錯覚してしまう。

だが、時間とは限りあるものだ。やがて“ちゅぷっ…”という音を立てて唇が離され、最後に唇の触れていた部分を、一色の舌先が名残惜しそうに“ちろっ…”と軽くひと撫でした。

その未知なる感触は、耳元で話しかけられた時とは比較にならないくらい、俺を官能的に刺激した。俺は思わず、衝動的に一色を抱きし

めそうになったが、既の所で思いとどまった。いかんいかん…今の衝動は、ただの勢いだ。

一方、自分から仕掛けてきたにも関わらず、一色は一色で余裕が無かったらしく、顔を真っ赤にしながら、“ホントは唇を狙ってたんですけど…ヘタれちゃいました…。”と、小さな声をなんとか絞り出して囁いた。

そして、タイミングを見計らったかの様に、全ての仕事を終えたプリントシール機が、“おいお前ら、エロいの撮ってんじやねえだろうな？”と、見透かしたような台詞を吐いてきた。

…まさか、中に誰か入ってんじやないだろうな？

プリクラを撮り終えた俺達が、新幹線の改札を通ってからしばらくすると、16時24分発のぞみ270号東京行きが、風を切るような音を立てて12番ホームに入ってきた。

「センパイ、本当にありがとうございました♪」

一色は俺に向き合おうと、バカ丁寧に頭を下げた。まあ…ようやく台風一過だな。

「あーっ、私にあんな事やこんな事をしておいて、そんな事を言うんですね！」

ちよっ…一色さん、声が大きいですっつばっ！っついうか、“あんな事やこんな事って…具体的にどんな事だったでしょうかね？八幡わかんない”と恍けてみたのだが…

「それを私に言わせるなんてっ！セクハラです！今すぐここで土下座してください♪」

あつさりと返された。勘弁してくれ……。

俺が軽く頭を抱えた様子を見て、プツと噴出した一色は“冗談ですってば。土下座は次にお会いした時までお預けです♪”と笑いなから言った。

土下座は確定事項なのですね……まあ、スライディング土下座の練習でもしておくか。

“ぶるるるるるる……”

まもなく、発車を告げる音がホームに響き渡った。

それを合図に、一色は新幹線のデッキへと足を進めた。そして再度俺と向き合うと、“それではセンパイ……しばしのお別れです。”と頭を下げた。

「ん……まあ気をつけて帰れ。」

「ハイ。」

「それと……」

「……？」

これは、言おうか言うまいか少し迷ったのだが……まあ、言うだけならタダだよな。

「まあ……なんだ。良かったら……また来いな。」

それを耳にした一色は、ぱああつと向日葵の様な笑顔を浮かべると、“ハイッ!”と元気良く返事した。俺らしくないだろうけど、喜んでみるみたいだから大目に見てくれ。

“ぷしゅー……”

ドアが閉まり、ゆつくりと列車が動き出した。その動きに合わせて俺も歩き出すが、列車の速度が徐々に上がり始め、それと共に俺も少しずつ駆け足となっていく。

車内の一色は俺に向かって、名残惜しそうに小さく手を振っていたのだが、列車は更に速度を上げ続け、やがて俺を振り切るとホームから旅立っていった。

俺は、何かをやり切ったような心地よい疲労感を身に纏いつつも、一色が去った事によって急激に訪れた静寂さに、若干の物寂しさを感じていた…。い、一色がいなくなっただからって、全然寂しくなんてないんだからねっ！

それにしても…やれやれ、穏やかなる連休のはずだったんだけどな…。

そう独り言を呟きつつ、俺は一色と過ごしたこの二日間を思い出しながら、ホームの端に佇んだまま、列車が小さくなって見えなくなるまで見送り続けた。

第1章 おわり

第11・5話 かまくらは猫である。

吾輩は猫である。名前は…言いたくない。

そりや、俺にだつて名前が1つや2つはあるさ。この比企谷家で世話になるまでは〝千葉(せんよう)の黒き白虎〟って名乗っていたんだ。どうだい、カツコいいだろう？

まあ…偶に〝黒いのか白いのかハッキリしろ〟とか〝白虎？お前ネコじゃないか！〟などと、野暮つたい事をほざいてくる輩がいるが、そんな事を気にしては、俺達お猫様を住処に迎え入れる事なんて一生出来やしないぜ？

確かに俺の毛色は白だが、心の奥底に闇が潜んでいて…ってそうそう、黒き白虎の前は〝復讐の天使☆闇猫〟なんて名乗ってた事もあったな…。まあそんな訳だから、白かろうが黒かろうがなんら矛盾はない。それに、虎は我々ネコの仲間だと聞いた事がある。つまり逆説的にいえば、我々ネコもまた虎なのである。

ただし、そんな密林の王者の血を引く俺も、今では歯牙ない飼ひ猫に過ぎない。だがそれは、俺のライフスタイル上、理に適った事なのだ。そもそもこの家では、俺の縄張りを狙う様な不屈な輩はいないし、犬つころやカラスの奴らといった組織の連中も出没しない。俺の仕事といえば、ふかふかのソファアール上で〝ごろり〟とねっころがって、たまに〝みやあ♪〟と愛想を振り撒くだけなのである。

それだけで3食昼寝付きの生活が保障されているのだから、一生懸命歯牙を磨く必要性など皆無だ。誤解を恐れずに言えば、今の俺は全ネコ類の〝進化の過程〟の最先端にいますと言っても過言ではない。

そう：俺は、カーストの頂点に君臨しているのだ！

第11. 5話

か
ま
く
ら
は猫である。

昼下がりの午後たる今の時間は、窓からお日様の光が射し込んできてぼかぼかと心地が良い。俺は大きな欠伸を1つすると、背中を丸めて目を瞑った：そうそう、忘れていたが寝るのも仕事のうちだ。

こんな感じで、普段ならばこのまま睡魔に身を委ねて、夕方まで昼寝をするところなのだが、今日はいつもと勝手の違う出来事が、俺を襲う事となったのである。

「かーくん、ただいまあー！」

声の主は、俺のご主人様たる小町坊だ。小町坊は、俺が“みゃー”と返事するや否や：俺の頭を両手で挟んで、いつもの様にわしゃわしゃと撫で回し始めた。

「よーしよしよしよしよしよしっ」

この様に、毎度毎度激しく撫でまわされる度に、毛並みもつまもさに波立ってしまうのだが、俺はいつだってされるがままで。えっ？ “密林の王者はどこへ行つた？” だつて？ おいおい：何も知らないから、お前はそんな事が言えるんだよ。

このお嬢ちゃんはな、見た目はとても愛らしいし性格だつて悪くはないが、そのなんだ：結構アレなんだ。一度、ダンボール箱に押し込まれて外に連れ出された時は、捨てられるのかと思つて心が折れそうになつたぞ。

結局は、小町坊のダチの姉貴を更生させるとかで、借り出されただけだったらしいのだが、それがトラウマとなつてしまい：それ以来、俺は極力逆らわない様になっている。

それに、わしゃわしゃされる事自体は…そんなに悪い気はしない。もちろん、ネコとしてのプライドがぐらぐらと揺れなくもなかったが、“仕方がないから撫でさせてやっても良いか…”と毎回妥協してやっているうちに、終(つい)には小町坊のわしゃわしゃが日課となつてしまった。なんでも、以前テレビに出ていた白髪メガネの老人が、そうやって犬ところを撫でるのを見て以来、すっかり伝染したらしい。

…つという事は、あれ？それって何気に、犬扱い？

余談ではあるが、動物王の名を欲しいままにした彼は、現在ペット禁止のマンションに一人暮らしをしているらしいと人伝…もとい、ネコ伝で聞き及んだ事も追記しておく。

陸奥ゴローさん…マジかよ…。

それはさておき、そんな俺の心の葛藤など知る由もなく、小町坊の手は休まる事無く“わしゃわしゃ”に余念がなかったのが…

「よしよしよし…つて、こんな事をしてる場合じゃなかったっ！」

いつもは10分近く撫でまわすのに、今日は2〜3分程度で切り上げられた。おいおい、いつも好きただけ俺の肌触りならぬ毛触りを堪能するのに、“こんな事”と斬つて捨てるとは一体どういう見だ！

俺は抗議の声をあげた。

「みゃー。」

かーくんの鳴き声は、なんだか物足りなさげだ。いつも“お腹も撫でて♪”って感じで、全力で身を預けて来るくらいだから、よっぽど気に入ってるんだよね。でも、今日はこれでおしまいだよ。だって、お客様が来てるんだもん。

「かーくん、お客様にご挨拶しましょうねー♪」

小町は、かーくんを後ろから抱える様に“ひよい”と持ち上げました。そして、じたばたする訳でもなく、脱力したまま身を委ねるかーくんを連れて、玄関へと向かったのです。

こういうトコは、全然手が掛かんないんだよね：ちつとはお兄ちゃんも見習ってほしいよ。

お客さまとは、私と同じ学校に通う一色いろは先輩の事です。我が総武高校の生徒会長を、1年生から今まで2期連続で勤め上げた人なのですが、何故かうちのお兄ちゃんとは浅からぬ縁があるみたいで：

「お願い小町ちゃん！センパイの住んでる場所を教えてください！」

と頼まれたのが、つい2週間程前の事。余りに真剣だったので、つい反射的に教えちゃったけど：大丈夫だったよね？

いろは先輩は、お兄ちゃんの住所を手に入れるや否や、“行き先を言わずに引越すなんて：携帯だつて滅多に出ないしっ！たまに出たかと思ったら家族がアレって：。そもそも、家族がアレアレ言うけど、一人暮らしじゃないですかっ！”と一頻り愚痴り倒した末に、

「これはもう、お仕置が必要ですね：」

と物騒な事を呟いたのを、小町は聞き逃しませんでした。

お兄ちゃん：無精が過ぎるのは小町的にポイント低いよ？いろは先輩：ここは兄に代わって、心よりお詫びします。全力でお詫びします：けれども、あんなでもたった一人の兄ですので、出来ればお手柔らかにして頂けたら、小町的には嬉しいなあ：なんて。

お兄ちゃんの住所を手中に収めたいろは先輩は、携帯を操作する手を途中で止めて何やら思案し始めたのですが、その後すぐに何かを思いついた様子で、

「サプライズってのも、面白そうですねえ：」

と呟くと、ニヤリと不敵な笑みを浮かべました。

うわあ…何か企んでる悪い笑顔だなー。

そして昨日、お兄ちゃんから“おい、俺の個人情報だダダ漏れなんだが…”という電話が掛かってきました…。その辺りも併せて考えた結果、いろは先輩があつちを訊ねたのかな？という仮説に思い至ったのであります。もちろん、明言はされてないですけど。

あれ？これってもしかして、フラグが立ってんのかな？

「いろは先輩、お待たせしましたっ」

壁に飾られていた絵を眺めていたいろは先輩は、“ううん、こつちこそ急でゴメンネ♪”とこちらへ顔を向けたかと思うと、抱えていた紙袋を小町に差ししました。

「昨日、大学のオープンキャンパスへ行ってきたんだ♪。これ、お土産♪」

「わーい、ありがとうございます♪」

その紙袋には生八つ橋とあぶらとり紙が入っていて、大きな文字で“京みやげ”と書かれています。京みやげって事はやっぱり…。

ここはひとつ、検証してみましよう♪

「と…こ…ろ…で…え♪あつちで兄にお仕置き出来ましたか？」

「…?!」

いろは先輩は心底驚いた様で、口をあんぐりと開けたまましばらく固まっていたのですが、やがて口を2〜3回パクパクさせると、驚愕の声をあげました。

「な…な…なななななっ何で知ってるのっ!!」

「いえ、とある情報筋から耳にしまして…っっていうか、バレバレですよ♪」

情報筋と言いますか鎌をかけただけなんですけど、どうやらビンゴの様ですね♪…という事はもしかや、いろは先輩が新たなお姉ちゃん候補に!?

やるなあ、お兄ちゃん。

「えつとね、そ、その…偶々…そう、偶々なの! 志望校が偶々センパイの学校だったのと、学校へ向かおうと思ったら偶々センパイの下宿の前を通りかかったのと…それからえーつと…そう、これは、その他もろもろの沢山の偶然が折り重なっただけなの!」

“だから私は無罪なの!”と顔を真っ赤にしつつも、一気に捲し立てるいろは先輩。ハリのある声とは対照的に、気の毒なくらいにあたふたしていて、ぱつと耳にした感じでは全否定に聞こえる言葉も、これ以上無いくらいにカミカミでした。

何?この人、超カワイイんですけど!

「いろは先輩…」

「な、何かな?」

「これからも、兄の事をよろしくお願いしますねっ♪」

その答えにいろは先輩は、“え、えつと、別にそんな私は…”とか“これには色々と事情が…”とアタフタしていました。やがて真っ赤になった顔を伏せると小さな声で頷きました。

「…うん。」

新たなお姉ちゃん候補、キマシタワアー!

「うわぁーっ！何この生き物っ！超カワイイ!!!」

いろは先輩にとつては居た堪れない空気だったのか、それを打破するかの様に努めて明るく振る舞うと、かーくんに手を伸ばして頭を撫で始めました。かーくんはと言えば、じつと目を閉じたまま心地良さそうな鳴き声で、ただ一言“みゃー♪”とだけ。

「うわぁー、大人しい♪ねっ小町ちゃん、ちよつと抱っこしてみてもイイ？」

いろは先輩の胸元に抱っこされたかーくん。最初は所在無さげな顔をしていたのに、いつの間にやら普段のふてぶてしさが完全に消えうせて、余所様の仔みたいに愛くるしい顔をしています。やがて“みゃー”とひと鳴きすると、喉をゴロゴロ鳴らしながら、いろは先輩の胸元に頬をスリスリはじめました。

「ちよつと、くすぐったいってばぁーっ♪よしよし♪」

いろは先輩も大満足の様子です…って、かーくん！心を開くの、ちよつと早すぎない？

「みゃぁー」

「なんだ、この感触はー!」

俺は、未だかつて経験した事のない程の心地良い感触に、思わず感嘆の声をあげた。その感触は、以前八幡の奴が俺に献上してきた“人間どもを駄目にするクッション”の肌触りをはるかに上回る。

小町坊や、以前の“捨てられ騒動”の時に出会った黒髪の少女の胸

元も、“ふにつ”とした感触が無い訳ではなかったが、この娘さんのものは“もにゆもにゆつ”としていて、それはあたかも、人肌に暖められたフカフカクツシヨンの様で、まさに別格だといえるシロモノだ。

「これは…行かねばならぬな。」

俺は、その別格たる2つの山の谷間へと侵入すべく、そこに頭を押し付けてグリグリとねじ込む作戦に出た。そのフカフカクツシヨンに包まれば、さぞかし心地良いに違いないからな。

俺の頭の上で“くすぐったいってばあ”という声があるが、ここは敢えて気にせず我が道を進む事にする。その先にあるのはガンダーラ…そう、きつと素晴らしいユートピアが俺を待っているはずだ！

ところが…である。

「あー、可愛かった♪ありがとう、小町ちゃん♪」

「いえいえ、どういたしまして♪」

ほんの一瞬、俺の体がふわりと宙に浮いたかと思うと、あとは加速度的にぐんぐんとユートピアから引き離されていった。何なんだっ…このお約束な展開はっ！

待ってくれっ！あとちよつとなんだ！

俺は前足をにゅつと伸ばし、身をよじって懸命に抵抗したのだが“ほらほらかーくん、いい子だから大人しくしようね？小町が抱っこしたげるからさ♪”と小町坊は取り付く島もない。

やがて愛の国ガンダーラは、果てしなく遠い憧れの地へと変貌を遂げ、俺は小町坊に後ろから抱えられた形となり、そしていつもの“ふにつ”とした感触が、俺の背中を支配した。

…。

まあ…これはこれで悪くないな。

「おつかしいなあ…普段はこんなに暴れはっちゃくじやないんですよ？」

いろは先輩から引き上げる時、珍しく激しい動きを見せたかーくん。普段はぐーたらな分、結構驚きましたけど、それでも小町が後ろから抱き寄せるとようやく大人しくなりました。

やれやれ…でも、なんでジタバタしたんだろ？

「もしかしたら、いろは先輩を気に入ったのかも知れませんね？」

それを聞いたいろは先輩は、にこりと笑顔を浮かべて言いました。

「そうだと嬉しいなあ♪ねえねえ、また会いに来ても良いかな？」

「もちろん、いろは先輩なら大歓迎です！」

そうですねえ…出来れば、お兄ちゃんと一緒に菓子折り持参で両親にご挨拶…みたいな♪

けれど小町の心の声が聞こえるはずも無く、いろは先輩は無邪気に“やったあー♪”と声をあげると、かーくんの頭をわしゃわしゃ撫でて“かーくん、よろしくね♪”と声を掛けました。

「みゃー♪」

かーくんは、“わかったニヤン♪”と言わんばかりの一声。その鳴き声は、いつもよりも可愛さ2割増量中といった感じでした。それを耳にしたいろは先輩は、一層大きく目を輝かせると“よーしよしよし♪可愛いね♪”と声をあげながら、かーくんの頭を更にダイナミックに撫で回しました。

5分程経ったでしょうか…いろは先輩は、最後に“めちやくちや堪能したし！”といった満足な表情を浮かべると、

「今日はありがとう！じゃあ、そろそろお暇するね♪」
という一言を残して、お家へ帰っていきました。

いろは先輩を見送った後、胸元へと視点を落としてみると…わしやわしやされ過ぎて、毛並みがライオン…と言うよりは、エリマキトカゲみたいになっているかーくと目が合いました。

「かーくん、いろは先輩また来るって♪良かったね？」

何か、全てが満ち足りた様子でじっと目緒閉じているかーくん。しばらくするとゆっくりと目を開けて、尻尾を2〜3回くるりと振った後に、

「みゃー♪」

感慨深そうにひと鳴きしました。

かまくらさん…なんだか、恍惚としてませんか？

「それじゃあ…かーくん、おやすみ♪」

そう俺に告げると、小町坊は自室へと戻っていった。丑の刻を少し回ったところだから、そろそろ夢の世界へと誘（いざな）われても不思議はあるまい。かく言う俺も、鉛で出来ていると錯覚する程に、瞼が重くなってきた。

俺は定位置であるソファアへ“ひよい”と跳ね上がると、1つ大きく欠伸をした後に背中を丸めて目を閉じた。こうやってその日一日をぼんやりと振り返るのもまた日課だ。それにしても、今日は色々な出来事があったな…。

何と言っても、あの“もにゅもにゅ”としたフカフカクツションは大発見だった。あんな素晴らしい世界は、きつとまだ他の奴らには知られてないに違いない。そんな未知との遭遇を果たした俺は、ネコ

界のコロンブスだと言つても差し支えないだろう。今日は、既の所で上陸を果たせなかったが、あの娘さんはまたやって来るそうだから、チャンスはまたすぐ訪れるに違いない。

だから、焦る必要は無い…。

ただ願わくは…

今宵は夢の中で…

これを最後に、俺は意識を手放した。

おやすみなさい。諸君らにも良い夢を。

吾輩は猫である。名前は…かまくらだ。

昔は色々あつたが、それらの全ては忘却の彼方へと捨て去られ、俺は比企谷家の一員となった。そして今日も俺は、自分の任務を遂行すべく、いつもと同じ様にふかふかのソファアーの上で“ごろり”とねっころがり、“みやあ♪”と愛想良く鳴き声をあげるのだ。

おわり

第2章 結衣の逆襲

第12話 彼女が出来ません。どうしたら良いですか？（千葉県 剣豪将軍）

皆さん、“お子様電話相談ルーム”というのをご存じだろうか？

簡単に言えば、子供達の様々な疑問に対して“先生”と称する偉ぶった大人のみなさんが、それらに答えるという形式のラジオ番組だ。聴いた事は無いまでも、そういう類のものがあるという事くらいは、ご存じの方も多いのではないだろうか。

番組に寄せられるそれらの質問は大変バラエティーに富んでいて、例えば“変化球の投げ方”や“ドライブシユートの打ち方”といったスポーツに関するものや、“夏休みの宿題”や“蘭姉ちゃんの髪型のセツトの仕方”という様な身近なものから始まり、“生きる事とは？”とか“死んだら魂はどこへ行くのか？”といった、人生のテーマと言っても良いくらいの哲学的なものまで、そのジャンルはとても幅広い。

また子供を対象としている性質上、空気の読めないクソガキ：ゲフンゲフン、子供達の中には、“先生のギャラはおいくら万円ですか？”とか“ゲスの人とベ○キーはクラブっていたのでしょうか？。”などと、ふざけた質問をしてくる者いるかも知れない。そして、そんな輩も真面目に相手しなければならぬ相談員の皆様は、さぞかし気苦労が絶えない事だろう。

ただ最近では、ちよつとした疑問であれば、パソコンやスマホで手軽に調べられてしまう為に、相談件数は減少傾向にあるそうだ。現に、半世紀も続いた某局の番組が、時代の流れに沿ってリニューアルを繰り返した末に、つい先日その長い歴史に終止符が打たれたのも、記憶に新しい。

ネットは手軽だし、何より俺の様なぼっち…じゃなくて孤高の存在からすれば、人と直接やり取りせず情報を得られるのはありがたい。だが、ある程度の経験を持つ中級ユーザー以上ならお分かりだと

思うが、ネットには“嘘を嘘であると見抜けなければ…”というデメリットもある。だから材木座ではないが、“ネットに書いてあったからな!”という報道を、大した裏付けもせずに行うテレビ番組を見る度に、俺は何となくモヤモヤするのである。

さて、この電話相談室なのだが、何故か最近、俺のスマホをホットラインとして開催される事態が急増した。先生役はもちろん俺なのだが、それに対して頻繁にLINEしてくる子供役…じゃなかった、いや、俺の解説が適当だとわーわーうるさいから、ある意味ガキだと言えなくもないが、その程々にいい歳をした彼女は、大体いつもこれくらいの時間…つまり午後9時を少し回った頃に、決まって連絡を入れてくる。

『P u r u r u r u r u r u r u 』

ほら、こんな感じにな？

ディスプレイに表示されているのは“★☆ゆい☆★”という文字。察しの良い方なら既にお分かりかも知れないが、相手の名前は自称“ゆいゆい”こと由比ヶ浜結衣だ。こいつとは、高校時代のクラスメイト兼同じ部活の仲間…とだけで済ませてしまうには、ちよつと足りないくらいに色々あった。まあ…その色々とやらも、そのうち話す機会もあるかもな。無いかも知れないけど。

さて、今日も悩める子供…じゃなかった、由比ヶ浜のお悩みにお答えする事にしよう…程々適当にな。だってほら、ライオンですら心を鬼にして、我が子を千尋の谷に突き落とすじゃん？ だから俺が、由比ヶ浜を手取り足取り手助けするのではなく、心を鬼にして全力で適当に済ませるのも、ある意味愛情なんだよ。つまり…いわゆる“奉仕部の理念”というやつだ。分からなければ調べる手段を教えるとか…ってあれ、これってもしかして“ググレ!”で全部解決しないか？

・・・。

げふんげふん…ともかく、決して面倒な訳ではないんだよ、多分。

おつといけない…！ っいつい電話に出ないで放置してしまった。先から鳴りつ放しのまま、一向に途切れる事の無い呼び出し音は、もう何度コールされているのか分からなかった。以前の俺なら、「こうなったら根競べだっ！」と言わんばかりに放置を決め込んでいたに違いないが、流石に二十歳を目前にしてそんな稚拙な事はしない。

俺は颯爽とスマホを手に取り「通話」のボタンを押すと、丁寧な口調で応答した。

「お客様のおかげになった電話番号は、現在使われておりません。」

スピーカーから発せられた、「むがーっ」という由比ヶ浜の絶叫が部屋中に響き渡った。

第12話

彼 女 出 来 せ
ん。 どうしたら良いですか？（千葉県 剣豪將軍）

『もう！ ヒツキーのバカっ！』

由比ヶ浜の怒りは凄まじく、機嫌が直るまでに20分程費やした。まあ、長々とコールを放置した上に、“使われておりません”だったからな…。由比ヶ浜からしたら、自分が雑に扱われたと思つてへそを曲げるのも無理はない。

ほんの出来心だったんだよ。何というか…ほら、魔がさしたつてやつだ。誰にだつて”ついうっかり…”なんて事の1つや2つ、経験あるだろ？ それは、由比ヶ浜とて例外ではあるまいに。

だから俺は由比ヶ浜に言つてやつたんだ！

「正直すまんかつた…。」

俺は、由比ヶ浜の怒りが静まるまで、ただひたすら恭順した。

「で、今日はどうしたんだ？」

由比ヶ浜の怒りがようやく静まり、落ち着きを取り戻したのを見計らつて俺は問いかけた。由比ヶ浜は、“なんか誤魔化された気がするー”とイマイチ納得してない様子だったが、気を取り直して弾んだ声で答えた。

『うんとね、また沢山教えて欲しい事があるんだー♪』

つい先日、一色が来た次の日あたりから、ほぼ毎日こんな調子だ。因みに、初めての質問は

『黄門様の場合、印籠を見せたら敵は降参して平伏するのに、何故暴

れん坊將軍の場合は、正体が分かってても敵は無駄に齒向かって来るの？」

という、ひどくデリケートな問題だった。そりや…仮にも暴れん坊を名乗っている以上、暴虐の限りを尽くさねば、TVの前で手に汗握って待っている爺さんや婆さんは納得しないだろうし、一方で黄門様が元気ハツラツと大暴れしてしまつては、隠居世代から“我々の様な老人が、そんな動きできるか！”というクレームが続出するかも知れない。いや、そもそも共感を得られない可能性だつてある。

よつて、俺の出した答えは“ご老人のご期待に沿う為のルーティンワーク”という事で決着を見たのだが、由比ヶ浜は“うわあ…なんかイヤな理由だなあ…”と顔をしかめた。まあ…パツと見た感じ、そんな印象は全然受けないからな。

仕方が無いので俺は、

「威光つてのは、次第に衰退していくもんだ。黄門様の時代には、その威光がバリバリに効いていたんだろうよ。」

と、説得力のありそうな考察をでつち上げた…つて、そもそも黄門様は全国を漫遊してはいないし、暴れん坊將軍だつて実際は全然暴れてないのだから、でつち上げるも何もないだけだな。けれどそれ故に、由比ヶ浜さえ納得すれば、それが真実かどうかなんて些細な問題とも言える。

俺の返答を耳にした由比ヶ浜は“ほええ…”と呟いたあと、感心した様な声をあげた。

『私さあ、てつきり黄門様が影で將軍を操っている、闇將軍か何かだと思つてたよお…』

天下の先の闇將軍…何だよ、その中2設定は。

…つてな具合に、それが口火となつたのか、事あるごとに由比ヶ浜から質問が来るようになった。それに従い、本来ならば孤高な存在たる俺にLINEなど必要ないのだが“LINEだと、通話が無料にな

るよ♪”の進言により、遅蒔きながら俺もLINEデビューする事となった。

ほら、学生さんには金が無いんだよ。

こうして金銭的な憂慮が取り払われて、由比ヶ浜との通話時間も少しずつ延びていったのだが、それに合わせて質疑内容も高度に：というか、学問的になっていったんだ。ちなみに今日の質問は、

『徳川家達は、何故総理大臣の候補を辞退したの？』

というものだ。以前の由比ヶ浜なら、“とくがわいえさと”という人物ではなくて、“徳川家の人たち”と解釈して前後の文とが繋がらなくなってしまう、意味が分からずに“むきーっ！”っと頭を抱えていたに違いない。ところが今では、賢くなったというかなんというか：ともかく由比ヶ浜らしくない。

おいおい：まさか、背中にフラスナーとか付いてたりしてないだろうな？

それから1時間程して、電話相談室にひと段落着いた。

由比ヶ浜が“ヒツキー、今日もアリガトね？”と言うのが終わりの合図だ。決してアイシテルのサインではない。そもそも、ブレーキを5回踏む以前にあいつは無免だ。でもさ、よくよく考えると由比ヶ浜に免許ってちょっと怖いよな。なんか“きやーきやーっ”とテンパった挙句に、どつかの店舗に突っ込んだりしそうだ。

『ヒツキー、心の声が漏れてるし！　っていうか突っ込んだりしないからっ！』

由比ヶ浜が全力でツツ込んできた。突っ込んだりしないからっ：とツツコむとはこれ如何に？

：俺のくだらないボケはともかく、由比ヶ浜のツツコミスキルは、関西在住9ヶ月目の俺を遥かに凌駕していた。

「済まん。つい本音を吐露してしまった。」

『発言内容に対して、一切のフォローが無いっ!?!』

またしても、切れ味鋭いツツコミを俺に叩き込んできた由比ヶ浜。だがその直後、それまでの鋭さとは打って変わって、”・・・ん”と一旦間を溜めて、恐る恐る話を続けた。

『あ、あのさ、そ、そんな事言うんだったら、な、なんだけど…』

「なんだけど？」

『ほ、ほら、私が運転するの…危なっかしいんでしょ？』

最近の車は、由比ヶ浜よりも賢いんじゃないかって思えるくらい高性能だ。けれど、車が”こいつにステアリングを握らせたらヤヴァイ！”と、エンジン掛けてもブレーキ解除させない位に空気が読めてたら完璧なんだが、流石にそこまで求めるのは無理な話だ。それらの機能は飽くまでアシストであって、ステアリングを握るのは人間なのだ。

「つまり、由比ヶ浜はヤヴァイ。」

『なんか、私が危険な人みたくなってるんですけどっ!』

まあ、ある意味危険と言えなくも無いな…盗塁失敗の多い、暴走憤死王って感じで。ほら、昔タイ〇ースにいたアノ選手みたいに！だが、流石に今回の俺の心中は漏れなかったみたいで、由比ヶ浜は話を続ける。

良かった…逆に”ああ〇波選手ね♪”と話を通しても、こつちが動揺するからな。ニワカだつてのがバレちまう。

『それでね、もし心配してくれるんだったら…』

「くれるんだったら？」

『その…ヒツキーの助手席に…座っても…良いかな？』

由比ヶ浜は一旦間を置いた後、そう俺に問いかけた。何か深い意味が込められてそうな気がする言葉なのだが、俺の答えは既に決まっていた。

「うん、それ無理。」

『あっさり拒否されたっ！なんで断ったしっ!』

俺は、これ以上無いというくらい完璧な理由を、由比ヶ浜に打ち明けた。

「だって俺…無免だし、車も持っていないからな…。」

『…。。』

「…。。。」

『ヒツキー?』

「…なんだ?」

『なんかその…ごめん。』

「ああ…気にするな。」

あつれー?　なんか似た様なやり取り、前に1回無かつたっけ?

「でもや…」

『…うん?』

確かに今は無免許だし車も持っていないけどさ、けれどそのうち両方揃う日が来る事になるだろう。何だかんだで日本は車社会だし、専業主夫にだって運転スキルは必要だ。

「だからまあ、その時が来たら…乗せてやる事も、やぶさかではない…な。」

『…!?!』

由比ヶ浜は、俺の言葉が予想外だったのか受話器の向こうで大きく息を呑んだ。けれどすぐに落ち着きを取り戻したのか、何か意思を込

める様にゆつくりと言った。

『うん…絶対に、約束だからね?』

『ところでヒツキー、冬休みはこっちに帰ってくるの?』

閑話休題といった感じで、由比ヶ浜が尋ねてきた。まあ、こっちにいても特に用事はないし、何より小町がいない。

「もちろん、そのつもりだ。俺しかない正月なんて、クリープしか入ってないコーヒーみたいなもんだからな。」

『もうそれ、コーヒーじゃないしっ!』

確かに由比ヶ浜の言う通りだ。むしろクリープ飲んじやってる感じだもんな。コーヒーを無しにしてお湯だけ混ぜたら、どんな味がするのだろうか…私、気になりますっ!

『それでね? もし帰って来るなら、相談があるんだけど…』

俺の好奇心を完全スルーの由比ヶ浜さん。いや、まあ良いんだけどさ。

「ああ、相談って何だ?」

『こっちにいる間だけで良いから…さ』

由比ヶ浜はそこまで言ったあと、しばらく押し黙った。おいおい、ここで止めたら凄い気になるだろうが。無茶な事でなければ、助力も考えないわけではないから言ってみろ?

由比ヶ浜は一言「うん、わかった」と呟いた後、1拍置いて声をゆつくりと搾り出した。

『私と…付き合っしてほしいな。』

つづく

【おまけ】

「由比ヶ浜…お湯にクリープだけ溶かして飲んでみてくれ。」

『えーっ、イヤだよお。だってあれ、全然味がしないもん。』

「既に経験済みかよっ！」

第13話 501蓬〇と蓬〇本館つてのは、別の会社
なんだな…。

『お兄ちゃん♪小町はですね、501の豚まんを食してみたいの
ですっ!』

小町は、受話器越しに高らかと宣言した。

事の発端は、大学に入って初めての冬休みを迎えるにあたり、小町
へ“帰省するけど、土産は何が欲しい? リクエストはあるか?”
と、LINEの登録がてらに電話を入れた事だった。

俺はてつきり、“やったー、お兄ちゃんが帰ってくるよ!”とか
“お兄ちゃんのプレゼントなら何でも良いよ…って今の小町的にポ
イント高い♪”といったリアクションが返って来るものだと思っ
ていたのだが、小町の第一声は、その予想を大きく覆すものだった。

『あのぼっちだったお兄ちゃんが…LINE!?!』

そこかよっ! それに何だよ、その失礼な驚きっぷりは。俺の帰省
は全力スルーかよ!

…お兄ちゃん泣いちゃうよ?

まあ…気持ちはこちらからなくもない。もし由比ヶ浜に登録を促され
ていなければ、LINEとはずっと縁遠いままだったろからな。しか
しながら、慣れてみるとなかなか面白いもので、あれからしばらく使
い続けた結果、今では、1人グループを作成してぼっちスタンプを楽
しむ事くらい造作も無くなる程に、俺は手練れへと変貌を遂げた。

「つまりコミュニケーションツールさえも、1人遊びの道具へと昇
華させる俺って超凄い。」

それを聞いた小町は、

『はあ…お兄ちゃんてば、相変わらずなんだねえ。』

と、呆れた様に大きなため息を付いた。

そりや、人間は早々変わるものでは無いのですよ？ 小町さん。自分が自分であることの証…それがアイデンティティというものなんだと、お兄ちゃんは思うな。ところが小町は、それを耳にした途端“ふっふくん♪”と何やら含んだ鼻息を漏らすと、直後に剛速球を投げ込んできた。

『でもさ、色々変わった事もあるでしょ？ いろは先輩とか♪』

なん… やて…？

ニワカが関西弁を使って、ホンマすんませんでした。

まあ…正直なところ、この間の件で小町と一色との間に、ホットラインの存在が明らかになったので、この展開はある程度予測が付いていたのだが…あざと計算高いこいつらが、強力なパートナーシップを築いているかと思うと、ひんやりと首筋が寒くなってくるな。果たして、小町はどこまで知っているんだらうか？

ともかく、俺は全力で惚ける事にした。

「さて？ 何のことだか、お兄ちゃんさっぱり分かんない。」

仮に詳細が漏れてないのであれば、下手に関与を仄めかしたりすると、ヤブヘビになりかねないのでここは慎重に…と、初球は外角低めに外れる変化球を投じた。だが、そんな思惑などお見通しだと言わんばかりに、小町は話を続けた。

『またまたあ〜♪LINEだって、いろは先輩とお話する為でしょう？ いやー、ついにお兄ちゃんにも春が来たんだねえ。ああつ、小町の目に思わず涙がっ！』

目に溜まった涙を手で拭う様な、しおしおとしたワザとらしい仕草が目に見えかぶ。けれど、ご期待に沿えなくて申し訳無いのだが、春な

んて来てやしないし、そもそも一色に促されてLINEを始めたわけではない。

『へっ？ 小町はてつきり…。じゃあ、なんでLINEしてるの？ …ぼっちなのにああ。』

小町は、キョトンとした感じで俺に尋ねた。おいおい：ぼっちつてのは余計だ。それに何度も言うようだが、俺はぼっちじゃない。ただ皆が俺を畏怖してくるだけなんだ！

“えーっ、それをぼっちつていうんじゃない。”と気だるそうに答える小町：つてお前、全然容赦しないのな。まあ：本来であれば、俺の尊厳に関わる場所ではあるのだが、覆ったところで大して尊厳が向上する訳でもないの、気にせず話を進める事にした。

「子供電話相談室を絶賛開催中だ。子供役は由比ヶ浜だけだな。」
その瞬間、小町は“ほえっ、結衣さん！？”と驚いた声をあげたが、一旦間を空けた後に不敵な笑みを浮かべてそんな声で呟いた。

『ほほお、これは面白くなってきましたねえ♪』

こいつにとつて面白い展開になるという事は、俺にとつては高確率で、ひどく疲れる展開になるという事だ。また何か、良からぬ事を思いついたんじゃないだろうな…。

そんな不安を一層掻き立てるかの様に、小町は嬉しそうに語りかけてきたた。

『いろはお姉ちゃんに結衣お姉ちゃん：どちらも捨てがたいなあ。あ、そうそう、雪乃お姉ちゃんつてのも悪くないよね…お兄ちゃん、小町のお姉ちゃん候補がどんどん増えてるよ！』

やれやれ：勘弁してくれ。大体、お姉ちゃん候補など存在しないんだ。そもそも、お前には俺がいるじゃないか：兄貴という、唯一無二の存在がな！

そんな俺のリアクションに、小町は不満そうな声をあげた。

『お兄ちゃん、つまんなーい。』

その御、電話が更に1時間近くに及んだ末に、ようやく俺は土産のリュクエストを聞き出す事に成功した。それが冒頭の“豚まんを食してみたいのですっ！”だ。

そしてその3日後、俺は小町の要望に応えるべく、5〇1の豚まんをしかたま買い込んで、意気揚々と新幹線に乗り込んだ。そう、乗り込んだままでは良かったんだ…。

俺は、5〇1謹製豚まんの暴力的なまでの存在感を、非常に甘く見ていたと認めざるを得ない。窓際の座席に腰を掛けてからしばらくすると、何やらヒソヒソとした囁きがこちらから挙がり始めた。

“なんか、5〇1の匂いしてへん？”

“うわあ…めっちゃ腹減ってくるやんか！”

“誰やねん！ テロリストは！”

俺が気が付いた時には、お口が恋人のあの某社製ブルーベリーガムよりも、存在感のある匂いが列車内に充満し尽くしていて、もはや手遅れの状態だった。

ああ…これはヒソヒソされても仕方ないやつですわ。

俺はこの後、東京駅に着くまでの3時間余りを、肩身の狭い思いで過ごす事になったのである。

第13話

5

○

1

蓬 ○ 蓬
と

蓬○本館つてのは、別の会社なんだな…。

『私と…付き合つてほしいな。』

由比ヶ浜の問いかけに、俺は思わず“ごくり”と生唾を飲み込んだ。こいつはアホの子ではあるが、人を陥れる様は事は絶対にしない。それだけに彼女の発したこの言葉は、とても重みのあるものに感じられた。

『その、だめ…かな?』

しばし言葉に詰まった俺に、由比ヶ浜は再度俺に返答を促した。恐る恐るではあるが、その実逃げ道の無い問いかけに、いよいよ俺はテンパってしまった。

「くあwse d r f t g y ふじこーp…」

『ヒツキーがぶつ壊れたっ!?!』

俺の様子に、由比ヶ浜が驚きの声をあげた…つて、ぶつ壊れたとは失礼な。そもそも、テンパらない方がおかしいだろうに。だってさ、そ、その、付き合つて欲しいって事はだな、つまりそれって…

『!?!』

その瞬間、由比ヶ浜は“何か重大な事に気が付いた!”と言わんばかりに大きく息を飲み込んだ。そして、受話器越しに大声で“ち、ち、ち…違うのっ!”と叫んだあと、今度は“あわわわわっ、ど、どうしよ…”とテンパりだした。

何でお前までテンパってるんだよ…。だがどこことなく、名○屋章を彷彿とさせる取り乱しっぷりを耳にしているうちに、逆に俺の方は平静さを取り戻していった。まあ…アキラの場合は“ななななっ…!”だけだな。知らないお友達は、1度ググってみてくれ。

「ともかく1度、大きく深呼吸して落ち着け…な？」

“うん、分かった！”と返事した由比ヶ浜は、大きく息を吸ったり吐いたりし始めた。受話器越しから聞こえて来る“はあ…んっ…はあ…っん”という息遣いが、ちよっぴり艶めかしい。

やがて、落ち着きを取り戻した由比ヶ浜は、大声で叫んだ。

『そのっ…違うくないけど違うからっ！ 付き合って欲しいのは“勉強に”だからっ！』

「つまり…そっちにいる間、お前の家庭教師をすれば良いって事か？」

その問いかけに“その通りっ！”と力強く肯定した由比ヶ浜。おおい、口調が見〇清のモノマネをする博多〇丸みたいになってるぞ。まあ…それはともかく手短にまとめると、由比ヶ浜はこれまで仮面浪人を続けてきたが、本腰を入れる為に専門学校を休学して、再び大学受験に挑む為に勉強に励んでいるという事だった。

だから、俺が帰省している間だけで良いから、勉強に“付き合っただけ”欲しい”…と。

危なかった…また新たな黒歴史が、心の奥底に刻み込まれるところだった。仕掛けられてもいない罠に引っ掛かってしまったのは、立つ瀬が無いからな…っていうかぶつちやけ恥ずかしい。ああっ、さっきまで勘違いしていた俺自身を“バーカバーカ”と罵ってやりたいっ！

“ヒツキー自意識過剰過ぎだし！”と、俺は心の中で自分自身を戒めた。

けれど、この由比ヶ浜の再受験は、俺にとっては意外なものに感じられた。確かに、並々ならぬ努力を重ねつつも、去年の由比ヶ浜は惜しくも涙を呑んだ。だが、彼女本人から聞き及んでいた範囲では、専門学校での生活は充実そのものといった具合だったので、まさかそれを投げ打って、再受験に踏み切るとは思いもしなかったのである。

その理由に関しては、普段快活な由比ヶ浜にしては珍しく口籠ったのだが、ただ一言だけ

『…負けたくなかったから』

と呟いただけだった。

由比ヶ浜が、誰に負けたくないのかは分からない。だが、その意思…というか決意は、受話器越しからでも充分に感じられる程に力強いものだった。ただそれだけに、俺は軽々しく返事など出来なかった。

俺は、由比ヶ浜の期待に副える程、しっかりと教えてやれそうな気がしないし、そこまで真摯に向き合っているのであれば、予備校の冬期講習へ行った方が効果は大きいだろう。何より、由比ヶ浜の決意や頑張りに対して、それをガツチリ受け止めてやるには、俺では器が小さ過ぎる様に思われた。

けれど、俺のそんな思惑を見透かした様に、

『ヒッキーはね、ただ一緒に居てくれたら良いんだよ？ それで私、

頑張れるからっ！』

と力強くアピールし、その後で慌てて“ほ、ほらっ、ヒッキーは監督役っていうか…”と付け足した。その上で、一生のお願いだと言わんばかりの勢いで

『ただ付き合ってくれただけでも良いから…ねっ？ お願いっ、ヒッキー！』

と、ダメ押ししてきた。

何というか…由比ヶ浜の気の使い様が痛いほど伝わってくる。まったくこいつは…アホの子の癖に、人の事ばかり気にしやがって…。

ここまでお膳立てされたならば、俺も腹を括らねばならないだろう。

「分かった。付き合うだけなら構わん。」

俺の答えに、由比ヶ浜が声を弾ませた。

快速列車の扉がゆっくりと開かれ、俺は駅のホームに降り立った。おおよそ9ヶ月ぶりに踏みしめた故郷の地：その街並みは、以前と何1つ変わること無く日常の時を刻んでいた。そんな見知った光景は俺を著しく安堵させ、そして感慨深くさせた。

もちろん、今住んでいる街も悪くはない。愛着も湧いて来たし、もう何年か時を重ねれば、恐らくは第2の故郷と呼べる程の存在となるだろう。けれども、生まれ育った街というものはやはり別格だ。そう：詰まるところ、俺の千葉愛は少しも損なわれてはいないという事なのだ。

ああ：故郷ってのは良いものだな。

そんな気持ちを噛み締めながら、俺はコインロッカーに荷物を押し込んだ。小町のクリスマスプレゼントを探すには、邪魔になるからな。あつちで買う事も考えたのだが、久々の千葉を堪能しつつ探すのも悪くないだろう：なんて思ったのだ。

けれども、荷物を押し込んでいる最中に、まさか雪ノ下さん(姉)に捕縛されるとは思わなかったし、更に一色にまで捕まるとは予想だにできなかった。まあ、そのお蔭でプレゼント選びは上手く捗ったんだけど。でもおかしいなあ：千葉の面積ってのは結構広くて、確か51

56平方キロくらいあるはずなんだが…。

俺が考えるよりも、世間というのは意外と狭いものなのかも知れないな。…つてまさか、俺に発信機なんか取り付けられたりとか…してないよね？

そんな、中2病的妄想を重ねながらも、俺は実家へと辿り着いた。まだ9ヶ月しか経ってないのに、実家の佇まいが、こんなに新鮮に感じられる事に軽い驚きを感じながらも、俺は意気揚々と玄関のドアを開いた。

「ただいまあ。」

覇気のない俺の声が、廊下に響き渡る。その直後、かまぐらの尻尾が床を“ダンツ”と叩く音が返事のように返ってきて、更に1テンポ遅れて“お兄ちゃんが帰ってきた！”という小町の声が聞こえて来た。そして、ドタドタと廊下を駆ける音が響き渡る。

さて、感動の再会だ。きつと小町の事だから、テンションMAXで“お兄ちゃん♪おつかえりい〜♪”と満面の笑みで俺を出迎えてくれるに違いない。そうだ、俺の妹がこんなに可愛いわけがないことでもない…つまり小町はカワイイ!!

だが、廊下を駆けてまで出迎えてくれた小町の第一声は、その予想を大きく覆すものだった…。

「うわっ！お兄ちゃん豚まん臭いよっ！」

帰宅して尚、501の豚まんの匂いは褪せる事なく、その存在感を誇示し続けていたのだった。

つづく

【おまけ】

「もぐもぐ…この豚まん、とつても美味しいね！ お兄ちゃん♪」

「そうだろう？ まあ、俺も食うの初めてだけどな。」

「今度ネットでお取り寄せしよーっと♪」

「えっ!?!お取り寄せ出来るの?」

「うん♪全国配送可能だって。」

「マジか…俺、車内で匂いテロリストとか言われながら持ってきたの。」

「まあまあ♪小町的にはポイント高いから♪」

「なあ…ちなみに今、何ポイントくらいあるんだ?」

「んー…分かんない♪」

「数えてないのかよっ!」

第14話 今年是不発弾とか出て来ませんように（ストフエス）

家庭教師と聞いて、皆様は一体どんな事を想像するだろうか？

例えば、こんなのはどうだろう？ 勉強嫌いな主人公の将来を危惧した母親が、切り札として連れてきたのは3歳年上の美人家庭教師だった。だが男子中学生たる主人公は、思春期真っ只中という事もあり、内心ではテンションが上がりまくりにも関わらず、中々素直に講義を受けようとしない。しかしながら、紆余曲折を繰り返していくうちにお互いどんどん惹かれ合い、やがてふたりは…みたいな感じの事を想像したやつは、1人や2人ではあるまい。

けれども、現実はそのなにごくくない。実際は、同性のむさ苦しいアルバイト大学生が講義の片手間にやって来て、派遣元から渡された教材をもとに淡々と授業を行うのだ。そこには絆を生むような接触は一切ない…いや、むしろ要らない。また自分の締め切りが危なくなると、生徒に問題をさせている間に、せつせと自分のレポートに勤しんだりするのである。

その家庭教師ってのは俺の事だろうって？ バカ言うなよ。勤勉家たる俺の場合、レポートなどは計画的に片づけるのがデフォだから、締め切りに慌てた事などない。そもそもコミュ障…じやなかった、孤高の存在たる俺が、他人様の勉強を見て差し上げる事など出来る筈がなからう？

良く知らない他人と長時間机を並べるなんて、ハードル高えよ…。つまりだ…冒頭で述べた様な展開が訪れるのは、マンガかラノベの中ではない。だから、変な希望に胸を膨らませて、家庭教師を派遣してもらおうと考えている男子中学生諸君よ…早く目を覚ませ。教員として仮に、雪ノ下みたいなのが来ても、やっぱり材木座みたいなのが来ても、スパルタかうザいかの違いはあれど、辿り着くの先は等しく地獄だ。

つまり、いくら家庭教師を召喚したとしても、君たちの目の前に（ラ

ブコメ的な）はっぴいが直前に迫ってくる事など無いのである。

断っておくが、これは飽くまでも1例だ。世の中には素晴らしい教員もきつといるに違いない…と予防線を張っておく。そう、きつと俺がハズレを引いただけなのだ。

克・○樹先生、前から大ファンでしたっ。

さて、色々あつて由比ヶ浜の勉強に付き合う事になった訳だが、引き受けた以上は俺も心を鬼にして、スパルタ教師の仮面を被らねばならないだろう。ちなみに由比ヶ浜の受験校は、筆記試験はセンターのみで残りは実技だ。芸術系の大学を選択すると耳にした時はとても驚いたのだが、顔を合わせなかつたこの半年ちよつとの間に、由比ヶ浜の中の芸術心が爆発したらしい。

『なんかね…ある日突然どっかーんって爆発したしっ！』

この言い回しだと、芸術ではなくて由比ヶ浜本人が木っ端微塵でアフロヘアーなのだが、そこを突っ込むのは野暮というものだろう。それに、下手に突っ込んだら俺が木っ端微塵になりかねないからな…物理的に。

それにしても、あいつのイラストなんて顔文字くらいしか見た事無い（ほら、奉仕部の入部届けのアレとか）のだが、本当に大丈夫なんだろうか…。まさか、画用紙にデカデカと

（…ω…）シャキーン

とか描いたりしないだろうな？

多分描かないと思う。

描かないんじゃないかな？

まあ…ちよつと覚悟はしておこう。

『描くわけないしっ！ ヒツキー、私の事バカにし過ぎだからっ!!』

第14話

今年不発弾と

か出て来ませんように（ストフェス）

「ふっふーん♪お兄ちゃん頑張つてきなよー♪」

何やら含んだ笑みを浮かべた小町に見送られながら、俺はそそくさと家を出た。あの手の表情を浮かべた小町を相手にすれば、大概は碌な事にならないという見立ては、長い年月一緒に暮らしてきた中で経験則に基づくものだ。そして、こんな時には何も考えずさっさとズラかる方が良いという判断もまた、長年養われてきた俺の防衛本能の賜物なのである。

（俺がゲームで勝つと小町が不機嫌になるので、敢えて俺が）負ける事、（働きたくないから就職活動を）投げ出す事、そして（平塚先生が婚活パーティーから）逃げ出す事：一見、後ろ向きにも見える行動の数々が、時には一番大事になりうる事だつて、長い人生を生きていればいくらだつてある。そして今の俺にとって一番大事なのは、この場からさっさと逃げ出す事だ。

小町：頼むから、変な気を起こさないでくれよ。

さて、戦略的撤退を無事完遂した俺は、そのまま由比ヶ浜の家へと足を向けた。由比ヶ浜との例の勉強会は今日からなのだ。ただ、小町の件もあったとはいえ俺としては珍しく、気持ちがソワソワと落ち着かず、早めに家を出てしまった：約束の時間まで、まだ2時間近くあるというのに。まあ、これが“女子の家へ行く”という事なのだろう。

そんな訳で、時間もたつぷりあったので、俺は小町の“お兄ちゃん、女の子の家に行くんだつたら、手土産買って行かないと小町的にポイント低いよ？”という教えを忠実に守り、駅前にあるマリエさんの店でケーキを買う事にした：のだが、いざ門前に立ってみると、店構えからして俺にはいささか敷居が高い。

だから、“ま、またの機会に”とへたれて：じゃなかった、戦略的に考えて店を後にしようとしても、誰も俺を責める事は出来ないはずだ：うん、俺は充分に頑張った。

それに、冷静に考えてみれば“焼き八つ橋”という最強の土産を、俺は既に持参しているジャマイカっ！。俺とした事が、とんだハマをやらかすところだったぜ。

俺は、誰にアピールするかも不明慮なまま“ただ通りがかつただけですよ？”的な風貌を装い、そのまま店の前を素通りする事にした。マジ、危ないところだったわー。

だが、そんな小細工など無駄だと言わんばかりに、あっさり俺を引き留める輩が現われた。

「あれえく？ ヒキオじゃん。」

振り返るとそこには、白い制服を身に纏った百獣の王が立っていた。

結局あの後、百獣の王こと三浦優美子に引きずられる様に店へと連れ込まれ、“バイト上がったから、そこに座ってちよつと待てし”と凄む三浦に逆らう度胸も無く、俺は渋々と適当なテーブル席に着いた。高校を出ても、あの白蛇の様な眼光の鋭さは健在なんだな。

そして俺は、睨まれてもいないのにカエルの如く微動だに出来ず、またリア充過ぎる店の雰囲気も相まって、ただただ落ち着かない時を過ごしていた。リア充過ぎる環境にひとりで放置プレイなんて、バツゲームにも程があるのだが。

っていうか俺、何で待たされてるんでしょうか…。

俺の放置プレイが始まってから15分程経った頃、先程とは違い私服に着替えた三浦が、カップの乗ったトレイを手に持ちやって来た。そして、俺の向かい側の席に勢い良く“ドシつと腰を掛けると、そのほかほかと湯気を立てている2つのカップのうち、1つを俺の前へと差し出した。

「…ん。」

これは、俺に飲めと仰っているのでしょうか？

真意を量りかねて落ち着かない俺を尻目に、三浦は何事も無かったかの様に、っていうか他には誰もいないかの様に、ティータイムを堪能しはじめた。

えっ、放置プレイはまだまだ続くんですか!?

俺達の間には延々と沈黙の時間が流れ、その流れに沿うように（主に俺の）気まずさが積み重なっていく。こいつとは、膝を合わせてお茶を飲むほど親しくも無いから尚更だ。むしろ、何で俺を引き止めちゃったの？

こうして、無言のままの時間が延々紡がれ続けた結果、俺のカップに注がれていた紅茶は、見る見るうちにその量を減らしてゆき、あつという間に底をついた。だが他にやる事も無く、手持ち無沙汰な俺は、空になったカップを壊れた機械の様に、何度も口に近づけたり遠ざけたりする動作を繰り返した。

ところで全く関係のない話だが、“手持ち無沙汰”を“手持ちブタさん”と言い間違えると、途端にメルヘンな感じになるよな。例えば、由比ヶ浜や小町あたりが“手持ちブタさん♪手乗りブタさん♪むしろブタさん♪”とはしゃぐ姿を想像すると微笑ましいというか、生暖かい気持ちになる。だが、これを一色が言えば、“ブタさん♪ブタさん♪とはしゃぐ無邪気な私カワイイ”アピールにしか聞こえないし、雪ノ下に至っては“：ブタがどうかしたの？”といった具合に、はしゃぐ姿を全く想像する事が出来ない。同じ言葉でも、発する人間によって大きく印象が変わってくるから不思議だ。

それから更に時間は流れ、もう何度口にカップを運んだのか分からなくなり、俺の手持ちブタさん感がピークに達した頃、ようやく三浦が口を開いた。

「あんさあ、アンタ結衣の家庭教師すんだって？」

よくご存知で。そう言えば由比ヶ浜のやつ、三浦や海老名さんと時々遊ぶって言ってたな。

「まあな」

俺は短く肯定した。無駄を一切省く事は、口から出される二酸化炭素の量も少なくて済み、ひいては地球温暖化への防止に繋がるのだ。おお…俺って地球に超優しいじゃん。

「ふうーん。じゃさ、雪ノ下さんとは連絡取ってたの？」

こいつと雪ノ下って犬猿の仲だった気がするんだが、それでも気に

なるもんかね？ まあ、雪ノ下には毎晩と言っていいくらい、猫の写メを送りつけているから答えはYESなんだけど…ってか、送らないと途端に不機嫌になるんだぜ、あいつ。ったく…どんだけ猫好きなんだよ。

「まあな」

俺は再度短く肯定した。無駄を一切省（以下略）

「じゃあ、生徒会長だったあん子は？」

一色の事か…一色の事かあーっ！！！！

「ま、まあな。」

くっ、ちよつと動揺しちゃった…。

「何ドモってんだし。じゃあ戸塚は？」

「無論だ（きつぱり）」

「何で戸塚だけ返事違うしっ！」

何故なら、彼もまた特別な存在だからです。あと材木座は知らん。恐らく、即答した時の俺はドヤ顔だったんだろうなあ…。三浦のやつは、ちよつと引き気味に“うわっ…キモ”と小声で呟くと、自分の両腕で両肩を抱きしめる様に身を振った（よじった）。

…地味に傷つくだろが、オイ。

それから三浦は、暫くの間“とつはち”とか“あの子はどうしてこんな変態なんかを…”などと、色々聞き捨てならない言葉を呟いていたのだが、“ふう”と一度大きなため息をつく、改めて俺に向き直った。

「あんたはぼつちの癖に、人との繋がりが切れないんだね。」

ぼつちは余計だが、言われてみればそうなのかも知れない。以前、千葉村でルミルミこと鶴見留美にでっち上げた“卒業後もクラスメイトと顔を合わせる確率は、ほとんど0%に等しい”という結論から考えると、今の繋がり具合は驚異的だと言っても差し支えない。

「そういうお前だって、由比ヶ浜達とちよいちよい遊んでるんだろ？」

そうだ。俺なんかよりも、こいつの方がよっぽど交友関係が広いじゃないか。なんてったって、トップカーストのリア充様なんだか

ら。

けれど、三浦はその問いかけに苦笑いを浮かべると、俺から視線を逸らして窓の外を眺めた。

「結衣は海老名はそうなんだけど…隼人が…ね。」

高校の頃、奉仕部の部室で泣きながら、葉山の進路を調べて欲しいと懇願した三浦。それは、出来るだけあの繋がりを維持したかったからに他ならない。だが結局葉山は、三浦や一色達に正面から向き合う事はなく、“みんなの葉山隼人”を貫いた。きつと、あいつは東京でも“みんなの葉山隼人”を演じているのだろう。言ってみれば、あいつにとっての“繋がり”とは、アイドルとそれを取り巻くファンの関係に極めて近い。

「そうか…葉山とは会ってないのか。」

「うん。」

あの当時、三浦が感じていたであろう繋がりへの儂さは、恐らくそのあたりが原因なのだろう。ただ、薄々そのあたりを感じていたにも拘わらず、三浦は葉山との繋がりを望んだ。葉山はどう考えていたのかは知る由も無いが、そこまで強く思えるのなら、三浦の気持ちもまた“本物”だったと言えるのではないだろうか。

「なんとというか…。」

「…何？」

「その…とりあえずお疲れ。」

「駒〇かよっ！　ってかまだ諦めてないしっ！」

そうだった。こいつは女王様気質の癖に打たれ弱くて、しょっちゅう雪ノ下に泣かされていたけれど、意志が強くまっすぐな性根の持ち主だったな…おかん体質だけど。きつとこの先、転んで泣いてへこたれても、また立ち上がってこいつは前へと進んでゆくのだろう。

なんだか、奉仕部の延長みたいになってしまったが、恐らくこいつ

は、自分が何をすべきかを分かっている。だから俺は何もせずに、言葉で背中を押すだけで良い。

「まあ…頑張れ。」

俺の言葉にきよとんとした三浦だったが、すぐに我に帰ると“フン”とそっぽを向いて、語気を強めて宣言した。

「アンタに言われなくても、そうするっての！」

それから30分ほど、近況などをぼつりぼつりと交換し合った末に、このティータイムはお開きとなった。店を出て別れ際に、

“くれぐれも結衣の事、よろしく頼んだし。ってか泣かせたらぶつ殺すっ”

と、極めて物騒な言葉を残して去っていった三浦。その乱暴な言葉の中に、由比ヶ浜への友情が強く込められているのが分かる。まったく：言葉というものは不思議なものだな。なんだかんだで、三浦は良い人なのだ。

あれ：スパルタ過ぎて泣かせたら、俺ぶつ殺されちゃうのかな？

怖いなあ…家庭教師も、ゴルゴ並に危険な職業なんだなあ。

っていうかむしろ、どの職業について危険でないものは無いのだから、専業主夫を志すという俺の考え方は、長年培われてきた防衛本能から来るものなのかも知れない。だとすれば、世の中の仕事に秘められた危険を察知する能力が身についたのは、我が妹のお陰だ。ああ…ありがとう小町。お兄ちゃんは無事に、この世の中を生き抜いてみせるぞ！

小町が聞いたら、頭を抱えそうだけだな。

そんな事を考えているうちに、俺は由比ヶ浜の家の前へと辿り着いた。時間的には、約束の15分程前といった感じで、少々早い気もするがそろそろ訊ねても良い頃だろう。

俺は一度大きく深呼吸すると、恐る恐るドアベルを鳴らした。

『ピンポン』

ベルが鳴り響いたと同時に、“ドタドタドタ”と廊下を駆ける音が聞こえてきた。それにしても、外にいる俺に聞こえるくらいに響いてくるなんて：ちよつと見ない間に、あいつはマジで“由比ヶ浜関（前頭3枚目くらい）”になったのではあるまいな？

だが俺の予想に反して、出迎えてくれたのは由比ヶ浜ではなかった。勢い良く玄関ドアが開かれたと同時に、由比ヶ浜の声よりも幾分低い声の持ち主によって、歓迎交じりの声色で盛大に話しかけられたのである。

「いらっしやーい♪ヒツキー君、待ってたわよ？」

そこに立っていたのは、由比ヶ浜のおふくろさんだった。

つづく

【おまけ】

結衣「今回、私の出番が全然ないしっ！」

八幡「落ち着け由比ヶ浜。きつと次回は大丈夫なはずだ。」

結衣「ヒツキー：ホントかな？」

八幡「た・・・多分な。」

結衣「ちよつ、なんで目を逸らしたしっ！」

第15話 ウイ〇ビー国民的美魔女化計画（中の人的に）

「チエケラツ♪東山〇央が♪お届けしてます♪ニセ〇イラジオっ♪
HEY ♪」

優美子がバイトしている店でケーキを買った帰り道、私こと由比ヶ浜結衣は、周りを憚る（はばかり）事無く青空の下で東〇ラップを口ずさんでいた。もしかしたら、誰かに聞かれているかも知れないけど、今日の私は、そんな事なんて全然気にならないくらいの超浮かれモードだ。

だつてさ、今日はヒツキーがうちに来るんだよ？ 昨日の晩くらいからさ、ずーっとその事で頭がいっぱいになっちゃってて、胸の高鳴りが全然止まらないんだ。だつてさ、LINEや電話はしてるけど、直接会うのはすつごい久しぶりなんだもん。仕方無いじゃん？

ああっ、このぶわあーってなった気持ちを聞いて欲しいっ！

そんな想いを抱えた私は、優美子のバイトが終わる頃を見計らつてお店へ向かったのだけど、残念ながら優美子は既に退勤した後だった。ただ、ちよつと驚いたのは、同じバイトのしーちゃん曰く“男の子と一緒だったよ”って言ってた事。

その男の子って、もしかして隼人君なのかな？ そうだったら良いなあ…。（※八幡です）

実はこの前、色々あつて高校の時には相談出来なかった“ヒツキーへの気持ち”を優美子に打ち明けたんだ、私。最初、優美子はすつごいびつくりした顔をしてたんだけど、すぐに真顔になって

「あんた…正気なの？」

と酷く心配された上に、熱は無いかとおでこに手を当てられてしまった。

い、一時の気の迷いなんかじゃないんだかねっ！ そりゃ、優美子がそう言う気持ちも分かるけど、ああ見えてヒツキーにだって、良い所いっぱいあるんだよ？ ちよつと分かりにくいけどさ。

私、知ってるもん。

それからの私は“あの時だってヒツキーがつ！”とか“実はあの時はヒツキーが暗躍してて”といった感じで、ヒツキーの頑張った事を沢山アピールした。だって、す、す、好きな人がさ、誤解されたままって…なんか嫌じゃん？

一方、私の話をジツと聞いていた優美子は、怪訝そうな表情を崩さなかったけれど、私の話が終わってしばらくすると、“やれやれ”といった感じで私に言ったの。

「ホンキなんは分かった。」

そして、後から付け加える様に“結衣がどうしてもつてんなら…応援するし。”っと小声で呟いた。そんな優美子の気持ちに、私はとても嬉しくなっちゃって、思わずギュッって抱きついちゃった。

「やったー！ ありがとう優美子お母さーん♪」

「お、お母さんじゃねえしっ！」

じたばたと軽い抵抗を試みる優美子。でも、照れているだけで、全然嫌がって無いのはバレバレだよ？ 何だかんだで、面倒見が良いんだよね♪

以前ヒツキーが“三浦はおかん体質だ”なんて言ってたけど、今ならその意味が分かるかも。

そんな事があってから、優美子と私は戦況を報告しあう様になった。今日は優美子と会えなくて残念だったけど、優美子も男の子（※八幡です）と一緒に一緒だったみたいだし、お互いに良い報告が出来るの良いなあ…。

東○ラップをひと通り歌い終わって時計を見ると、約束の時間まで

残り20分を少し切るくらいだった。危ない危ない…ヒツキーがうちに来る前に帰らないと。

一応ママが家にはいるけど、うっかり2人にさせてしまうと、ヒツキーに何を言い出すか分かんないしなあ…。余計な事を根掘り葉掘り聞き出した挙句に、下手したら

「うちの結衣をお嫁に貰ってくれるのよねー♪」
なんて、言い出しかねないしっ！

どうしよう…イヤな予感って言うより、むしろ予定のレベルだっ！

さつきまでとは一転して、駆け足で帰り道を急いだ。きつと、今まで生きてきた中で最速だと思われるペースで疾走する私。うん。今の私、超速いっ！ この勢いだったら、メロスの人にだって…きつと負けないっ！

こうして、心臓が飛び出しそうになりながらも懸命走った結果、私がかの前に辿り着いたのは、約束の時間の10分前の事だった。はあっ…はあっ…、こ、これなら超余裕だよねえ…。

ちよつと安心した私は、息が整うのを少し待ってから、玄関ドアを勢い良く開けた。

「ハア…ハア…っ、ただいまあー」

…。

返事がない…おかしいな？

いや…よおおく耳を澄ましてみると、私の部屋の方からママの楽しそうな笑い声が微かに聞こえてくる。そして、足元を良く見てみると、見慣れない黒色のスニーカーが揃えて置かれていた。

まさかこれって…

《ヒツキー君のおかげね、ありがとう♪》

ヒツキー既に來てるしっ！

これはヤバイやつだーっ！ 私は急いで靴を脱ぎ捨てると、揃えもせずに慌てて自分の部屋に向かった。“廊下を走っちゃダメよ？”と普段は注意されるけど、そんな事には構っちゃいられないって感じで“どたどたどた”と地響きを立てて疾走する私。部屋に近づくとつれて、会話の内容が鮮明になってくる。

《なるほどね♪ところでヒツキー君、うちの結衣なんてどうかしら？》

うわあああつ！ ちよつ、待ってってばっ！ ママってば、なんて事を聞こうとしてんのっ！

私は大慌てでノブを掴むと、勢い良くドアを開けそして叫んだ。

「すとおおおおおおーっつっつっつっつっびっ！」

あちやつ…ちよつぴり噛んじやった。

第15話

ウ

イ

○

ビー国民的美魔女化計画（中の人的に）

「ごめんなさいねえ。すぐに帰ってくると思うから、ここで待ってね♪」

由比ヶ浜のおふくろさん、通称ガハママさんはそう言い残して部屋を退出し、俺は由比ヶ浜の部屋に一人で：じやなかった、俺の膝の上には1匹の犬が、まるで自分の居場所であるかの様に鎮座しているから、正確には1人と1匹で由比ヶ浜の帰りを待つ事になった。

以前、車に轢かれそうになったこいつを助けた事があったのだが、そのせいか、顔を合わせる度に猛烈に懐いてくる。今日だって俺の姿を見かけた途端、弾丸の様に駆け寄って来た。そして、その後の熱烈なる歓迎っぷりの結果、俺の顔はすっかり唾液まみれになってしまったのである。

ところで：お前の名前、何ていうんだっけ？

「・・・？」

俺の方へ顔を向けて、不思議そうに首をひねるサブなんとかさん。こいつなりに、俺の話の間こうとしているのかね。ひとまず、思いつく限り一通り呼んでみる事にした。

「サブ：マシガン？」

「ワン！」と元気良く返事するサブなんとかさん。おいおい、ここは返事しちゃダメだろが：。

「サブカル女子」

『ワン！』

「サブダックション」

『ワン!』

「サ〇ちゃんと歌仲間」

『ワン!』

「材木座」

『・・・?』

流石に“材木座”では返事しなかったが、他の呼称に関しては完璧に返事してるよな、こいつ。という訳で、もはや“材木座”では無いという事以外に判断が付かないので、勝手に呼び方を決めつける事にした。心なしか、こいつもワクワクしてそうに見えるし、問題は無いよな?

「お主に真名を授けよう…。千葉（せんよう）の赤き狂犬! チー…」

『コンコン♪』

中2病全開のネーミングを阻止するかの様に、寸でのところでドアがノックされた。そして、その音を耳にした途端、何かに取り憑かれていた…っていうか病がぶり返していた俺は、一瞬にして正気に戻った。

落ち着け俺。もうあの頃の俺とは違うんだ! こういうのは、もう卒業したじゃないか! 政府秘匿報告書は、古紙回収に出してこの世には存在しないし、闇を掌る（つかさどる）能力なんて、俺は持ち合わせてなどいないんだ!

こうして俺が、過去の自分と向き合って悶絶している間にチー〇君…じゃなかった、サブなんとかさんは、ドアの前までテクテク歩いていくと、ピンと姿勢を正して俺の代わりに“ワン! ワン!”と元気良く返事した。

こいつ…もしかしたら、由比ヶ浜よりも賢いんじゃないの?

そして、その返事を待っていたかの様にドアが開かれ、湯のみとお茶請けの乗ったトレイを手にしたガハママさんが、部屋に入ってきて

た。

「ヒツキー君♪結衣が帰ってくるまで、ちよつとお話しない？」

「うちのサブレを助けてくれてありがとう。具合の悪い所とかはなにかしら？」

由比ヶ浜のおふくろさんは、俺にそう尋ねた。そうそう、言われて思い出したけど、サブレって名前だったよな。喉の奥に突き刺さった小骨が取れたかの様にスッキリした。

「あ、いえ、全然問題ないです。」

もちろん後遺症など無いし、その他特筆すべき影響も無い。そもそもあの事故は、俺の助け方が下手クソ過ぎたが故の自爆だ。雪ノ下家の運転手さんも、頭の悪いガキの乗った自転車が全速力で車体に向かってきたのだから、生きた心地はしなかっただろうに：本当に悪い事をしたな。

「そうなのね、よかったわあ」

俺の返事を耳にして、由比ヶ浜のおふくろさんはホツと胸を撫で下ろした。

「1度、結衣と一緒にお見舞いに伺ったのだけど、ご両親と妹さんしかいらっしやらなくて：。本当は直接お礼を言わなければならなかったのだけど、遅くなってしまっでごめんなさい。」

そう言えば小町が、由比ヶ浜の事を「お菓子の人だ！」って教えてくれたんだっけな。俺を除く家族3人で：いや、親父はありつけてないだろうから、小町とお袋の2人でそのお菓子は消費され尽くしたのだろう。

それはともかく、小町は仕方ないにしても、お袋は「由比ヶ浜さんって方がお見舞いに来たわよ」くらいの情報をくれても良かった

んじゃね？ 確かに、今となつてはとつくに済んだ話だし、騒いだところでの後の祭りなだけどさ。

「いえ、学校の方で由比ヶ浜さんから感謝の言葉を頂きましたので…」

「ねえねえ♪それって、2年生の頃じゃない？」

そう俺が言い終わらないうちに、大きな目を輝かせて尋ねるガハマさん。テンションが1UPした感じた。その様子は、かつて戸部が奉仕部に“海老名さんに告りたい”と相談に来た時の、由比ヶ浜のテンションの上がりっぷりを彷彿とさせる。

なるほど…こういうところは、おふくろさん譲りなんだな。あとおっぱいも。

「実はね、2年生でヒッキー君と同じクラスになってから、あの子つたらね、ほとんど毎日アナタの話をしてるのよお？」

おいおい、他に話す事が沢山あるだろうに。よりによって、何で俺の話なんだよ。一体どんな話されてたんだろ…って、想像するまでも無いな。目が死んでたり、性格が捻くれたりしている自覚はあるので、皆まで言わなくても大丈夫です。私、知ってますから！

「例えば…行動が斜め下過ぎるとか、ぼっちなのに凄く目立つとか。」

ぐはあつ、だから言わなくても大丈夫ですってばっ！

その時の俺は、罰の悪そうな顔をしてたんだろうなあ…。そんな心の叫びを見透かした様に、クスクスと笑う由比ヶ浜のおふくろさん。

「でもね、ヒッキー君の事をお話する結衣って、とても楽しそうなのよ。」

えっ、マジで？…ってまさか“ヒッキーをデイスるの楽しいな♪”なんて事はないだろうな？ まあ由比ヶ浜の事だから、流石にそれは無いと信じた…雪ノ下ならあり得る話だが。

「それにあの子、周りを気にし過ぎて八方美人なところがあつただけど、最近は自分の気持ちをしつかり言う様になってきたわ。きつとヒッキー君のおかげね、ありがとう♪」

「いえ、俺は特に何も…。」

そう、もし由比ヶ浜を変わったとするならば、それは間違いなく雪ノ下の影響だ。俺の影響を受けたとすれば、きつと碌な事にはなっていないだろうからな。

…小町に悪影響が出ない様に、気をつけないと。

「またまたあ、謙遜しちゃって♪」

そう言いながら、軽くウインクをするガハママさん。ぱつと見た感じ、由比ヶ浜の姉さんだと言われても何とか信じられる程の若々しさだ。

だが、そんな若々しさを盛大にぶち壊す様に、おばさん全開な事を言いだした。

「と・こ・ろ・で・え♪あつちで彼女とか出来たりしちゃった？」

丁度、湯呑みのお茶を口に含んでいたところだったのだが、ぶほと盛大に嘔き出してしまった。この人は、一体何て事を聞いて来るんですかねっ！

爆弾低気圧の様に、ワイドショーネタに食いつくおばちゃんへと急激に発達したガハママさん。きつと、まともに戦っては太刀打ち出来ない…それを裏付ける様に、俺の第六感の警報音が“危険だホーっ”と、けたたましく鳴り響いていた。ここは、被害を最小限に留める必要があるだろう。

「いえ、そんなのはいません。」

俺は、これ以上無いくらい簡潔に答えた。ここは、極力相手に情報を与えない事が定石だ。何せ、相手は百戦錬磨の兵(つわもの)だ。余計な事を言えば、墓穴を掘りかねない。だがその思惑とは裏腹に、ガハママさんは追及の手を全く緩めようとはしなかった。

「フリーなのかあ♪じゃさ、好きな人はいるのかな？」

「い、いや…それはノーコメントで…。」

その瞬間、ガハママさんの目がキラリと光った。獲物を見つけた

チーターの目って、こんな感じなのかもな。平塚先生は“3歩進んで2歩下がる”と言ってたけれど、今の俺は3歩下がって更に2歩下がりたい気分だ。

「じゃあ、どんな感じの子がタイプかな？」

「いえ…特には。」

「芸能人と言えば、だれが良い？」

「ん…テレビ、(アニメ以外)あんまり見ないんで。」

「じゃ、じゃあ、年上と年下だったらどっちが良いかな？」

「うーん…基本あまり気にしません。」

ぼっち…じゃなかった、孤高な存在である俺にとって(一色の事があるまでは)、この手の話は縁遠くハードルの高いものだったが、矢継ぎ早に放たれる問いかけに対し、何とか無難に答えきった。

おお…もしかして、俺のコミュニケーションスキルがアップしたのでは？

一方、ガハマママさんは“ふむ…”と小首を傾げて何やら思索していたけれど、やがて、何か良からぬ事を思いついたかの様な“ニヤリ”とした笑みを浮かべて、再び俺に向き合った。

「なるほどねえ♪ところでヒッキー君、うちの結衣なんてどうかしら？」

うおおい、そんな事聞いちやうのかよっ！と、心の中で思わず突っ込んだ。

そんな時だった。部屋の外から“どたどた”とけたたましい音が響いてきた。そして、その音源が部屋の真ん前あたりで途切れたその直後、“ダンっ！”と勢い良く扉が開かれた。

「すとおおおおおおーつつつつつつっぴっ！」

目を向けると、そこには“はあっ…はあっ…”と肩で息をしている

由比ヶ浜が立っていた。

ガハマさんキターっ！

このタイミングの登場は、ピンチに陥った時に颯爽と現れるヒーローのそれと、ほぼ同質のものだ。今日の由比ヶ浜は、仮面○イダーやウルト○マン、そしてギ○バンといった、俺の心の中にいるどのヒーロー達よりも頼もしい。

つまり由比ヶ浜：お前がナンバーワンだっ！

俺のヒーロー（ただし一日限定）こと由比ヶ浜は、部屋に入ってくるや否や“もうママっ！　そういうのはいいからっ！”と、ガハマさんに抗議の声をあげた。

ガハマさんは“あらあら、でも結衣だっけ気になるで…”と言いかけるも、由比ヶ浜の“うわああああっ、ダメダメっ！　ストップだっけばっ！”という声に遮られる。

こんなに騒がしい事になってるのに、俺の膝の上で“我関せずといった感じで”イビキをかいているサブレ。こいつは愛くるしい顔をしているが、これでなかなか大物なのかも知れない。

俺もこいつを見習って、対岸の火事を決め込むべきだろう。とつてもなかのいいおやこだなー。

それから由比ヶ浜は、しばらく消火活動に勤しんでいたのだが、やがて、何かに気が付いた様で“ハッ”とした表情を浮かへるや否や、俺の方へクルリと顔を向けると、あたふたとした様子で懇願した。

「ヒ、ヒッキーっ、ひ、ひまのはなひは聞かなかった事にひてっ！」

（※和訳：ヒ、ヒッキーっ、い、今の話は聞かなかった事にしてっ！）

9ヶ月ぶりくらいに、俺に向けられた由比ヶ浜の生声は、盛大なくらいにカミカミだった。

つづく

【おまけ】

結衣「ねえ、ヒツキー。」

八幡「なんだ？」

結衣「頭に強い衝撃を与えたら、記憶が飛ぶって本当かな？」

八幡「お、おいつ！ その右手のビール瓶はなんだっ！」

結衣「大丈夫：痛くないようにするからさっ♪」

八幡「大丈夫じゃねえよっ！ ってか、痛いので済まねえよっ！」

結衣「だ、だよねえー：あはは、冗談だよ、冗談。」

八幡「お前の目、全然笑ってないからな？」

第16話　ねえねえ、ヨーロッパの首都ってどこにあるの？

カリカリカリカリ：

文字の書き込まれる音が部屋中に響き渡る。

由比ヶ浜に見せてもらった模試の成績表には、思ったよりもまたもな偏差値が並んでいた。この調子であれば、本番で相当やらかさない限り、良い結果が期待できそうだな。

ただ、不安材料が全く無い訳では無い。全体的に見れば悪くないのだが、各科目ごとに目を向けてみると、とりわけ日本史だけは、他の教科に比べると見劣りする。まあ、こいつは暴れん將軍や水戸黄門を史実だと思っていたくらいだから、その点は推して知るべし…と言ったところなのかも知れないが。

そこで俺は可能性の間口を広げるべく、他の選択科目の実力はどうか…もう少し突っ込んだ言い方をすれば、選択科目の変更が可能かどうかを検証してみる事にした。

「由比ヶ浜、ここで問題だ。ルイ14世が、後世の人々に何と呼ばれているか答えよ。」

「…ほえ？」

こいつにとつて、この問いは寝耳に水だったに違いない。なんてつたつて、選択科目外の問題だからな。俺だって、選択科目以外は決して勉強しなかったし。

由比ヶ浜は、多少驚いた表情を浮かべたものの“ちよつと待ってつ”と、意外と前向きに考えはじめ、それから5分程“うーん”と唸り続けた末に、消え入りそうな声で答えた。

「ル、ルイルイ…とか？」

正解は太陽王な。

なんか、友達にニックネーム付けてる感じになっちゃったよ。そう言えば大分前に、こいつは自分自身に“ゆいゆい”ってニックネームを付けちゃった事があったよな。あまりのセンスに、あの雪ノ下も“自虐癖があるのかしら…”と困惑してたけど。

そうだ、こいつの新しいニックネームなんだけどき、もう“山田ユイ53世くらい”とかで良くね？ 決め台詞は『ルネツサーンスだしっ!』で。

「……ってか、そのルイさんって誰？ 外国の人？」

「……。」

はい、世界史消えたー。

「オーケー。じゃあ、気を取り直して次の問題だ。」

「ちよつとっ！ 何で完全スルーだしっ!」

こうして色々と検証を重ねた結果、消去法で日本史が一番マシだという結論に辿り着いた。

やはり、日々の積み重ねるのは大事なんだな。

パ ッ ロ ー ヨ 、 え ね え ね
の首都ってどこにあるの？

「できたーっ！」

何かをやり遂げた！ といった感情を込めて、由比ヶ浜は感嘆した。あたかも、フルマラソンを完走したかの様な喜びっぷりに対して、俺はあくまで冷静さを保ったままだ。

落ち着け由比ヶ浜、俺達の戦いはまだ始まったばかりだ。

しかもこのマラソン、場合によってはゴールまでの距離が際限無く伸びる。例えば、アニメやマンガ、ラノベ等で“浪人”と設定されたキャラクターの多くには、大概悲惨極まりない運命が待っている。何故なら、物語の流れが遅かったり、作品の人気に火が着いて話が長期に及ぶと、彼らは季節が廻る（めぐる）たびにそのキャリアを重ね続け、下手をすれば何十年もの間、浪人し続ける事になるからだ。

サ○エさんに出てくる甚六さんは設定上2浪だが、実質的にはもう何十年も浪人生活を送っているし、キテ○ツ大百科の勉三さんに至っては6浪と、設定がリアル過ぎる。

俺だったら、確実に心をへし折られているまでである。

ともかく、これから物語を紡ぐ皆様には、くれぐれもお願いしたい。確かに現実世界は厳しい：だから、せめて創作物の中だけでも、彼ら

の様な不遇に喘いでいる者には報われて欲しいのだ。

ノーモア甚六！ ノーモア勉三！

まあ、勉三さんは大学に入った途端、ミニクーパーを乗りまわしたり、カワイイ彼女が出来たりと、それまでの不遇が嘘だったかの様に、リア充へと変貌を遂げて行くんだけどな。

って事は…あれ？ 甚六さん、まさかのひとり負けじゃ…。

げふんげふん…、話を戻そう。

こうして、甚六さんにシンパシーを感じて感傷的になった俺は、それとは対照的に、爽快感に満ち満ちている由比ヶ浜から解答用紙を受け取った。

「あれ？ ヒツキー、何か元気くない？」

向かい側に座っていた由比ヶ浜が、身を乗り出して心配そうに覗き込んでくる。その結果、ただでも大きな由比ヶ浜の胸が、こたつの上にドンドンと乗っかって、その圧倒的な質量がより強調される事となった。一色のが肉まんだとすれば、こいつのは…そうだな、大きなメロンが2個並んでいる感じだ。

なんか、前より大きくなってませんか？

「ねえ…ホント大丈夫？」

俺が、そんな邪な事を考えている事など露知らず、由比ヶ浜は再度心配そうに問いかけてくる。そんな由比ヶ浜を見て、急激に冷静さを取り戻した俺は、コタツの天板によって押しつぶされそうになっている、2つの大きなメロンから慌てて視線を外した。

混じり気の無い由比ヶ浜の視線がとても痛い…って、ガン見してたの、バレてないよね？

ともかく俺は、全力で誤魔化す事にした。

「だ、大丈夫だ。甚六さんが不憫過ぎて、涙してただけだ。」

「全然意味分かんないしっ！ ってか、甚六さんって誰っ！」
由比ヶ浜が驚愕した。

こいつ…日を追うごとに、ツツコミの切れ味にどんどん磨きが掛かってきてるな。ってか、甚六さんって誰か…だって？ そんなのは決まっているじゃないか。王者の中の王者、つまりKing of Kingsだ。

…ただし、浪人のな。

ただ、おっぱいの圧倒的な存在感を前に、甚六さんへの興味など微塵も無くなった俺は、その解説を早々に打ち切って、由比ヶ浜から渡された答案の採点に勤しむ事にした。

まあ、そもそも架空の存在だしな。 煩惱退散、 煩惱退散。

「……。」

「……。」

…おお、記述式なのに結構埋まってるじゃないか。

「……。」

「……。」

「ちよつ、何で途中で説明打ち切ったしつ！ このままだと、気になつて夜眠れないよーっ」

ほんのりと放置された事に気づいてしまった由比ヶ浜が、ここでようやく抗議の声をあげた。やれやれ仕方がない、少し相手をしてやるか。

「大丈夫だろ。だつてお前、いつも部屋で大口開けて、グーグーいびきかいてたじゃん。」

由比ヶ浜は“ なっ!?”と一声あげた後、顔を真っ赤にして口をパクさせた。けれど、すぐに気を取り直したかと思うと、今度は拗ねた様に“ふうっ”と頬を膨らませた。

「お、大口なんて開けないもんっ!」

いやいや、めちやくちや開けてたよ? なんなら、どばーつと盛大に涎を垂らしていたまでである。雪ノ下なんて“握りこぶしが入らんじやないかしら:”って、毎回ソワソワしてたしな。

恥らっているあたり、自覚はあるんだろうけどさ。

由比ヶ浜は、その後も“私の事バカにし過ぎだからっ!”とか“よ、涎は垂れてないもんっ:多分”といった具合に、散々悶え続けた。そんな由比ヶ浜を余所に、俺は黙々と採点を進めていく。

「つてヒツキー、私の話聞いてる?」

「聞いているホー。」

「絶対聞いてないしっ!」

つたく、このかまつてちゃんめ。

このままだと全然前に進まないの、俺は切り札を出す事にした。ダウンジャケットのポケットをゴソゴソと弄る(まさぐる)俺を、不思議そうな顔で見つめる由比ヶ浜。

おっ、あつたあつた。

「良い子だからちよつと待ってる。ほら、コレをやるからさ。」

俺が取り出したのはもちろんヴェル〇ースオリジナル。何故なら、彼女もまた特別なおっぱいだからです。まあ、平たく言えば飴玉だ。

由比ヶ浜はしばらくの間、掌の上に乗せられたヴェル〇ースオリジナルを“きよとん”とした表情で見つめていたのだが、やがてワナワナと身を振るわせた。

「むーっ! 子供扱いしてっ!」

おかしいなーゆいがはまは、なんでこんなにすねているんだろうなー。

もし、相手が小町だったら“小町にこんな手が通じるとでも:”と言いながらも、そのまま静かになるんだが。まあ:いくらあの由比ヶ

浜とはいえ、もう19歳だ。流石に飴玉1つくらいでは静かにはならないだろう。

「すまん、俺が悪かった。」

俺は、由比ヶ浜に差し出して出していた飴玉を、再びポケットの中に戻した。ヴェルダー○オリジナル…めちゃくちやウマいんだけどな。

それを見ていた由比ヶ浜は、後ろ髪を引かれるかの様に、小さく“あつ…”と漏らすと、心の中で何かと戦う様に“うーん…”と唸りだした。

その後もしばらく、由比ヶ浜は心の葛藤に翻弄されていたのだが、やがてそれも治まったのか、俺から顔を背けたままぶつきらぼうに呟いた。

「…ちょうだい。」

欲しいのかよっ！

由比ヶ浜は、ヴェルダー○オリジナルを“ぽいつ”っと口に放り込むと、“あたしにこんな手が通じるとでも…”と呟いて、そのまま静かになった。

由比ヶ浜といい小町といい、ヴェルダー○オリジナル…何気に凄えな。

さて…こいつが静かなうちに、さつさと採点を終わらせてしまうとするか。

「…。」

「…。」

「…じーっ。」

「……。」

「……じーっ」

「……。」

それまで順調に採点を進めていたのだが、なんとなく由比ヶ浜の視線を感じて落ち着かない。どうしても気になった俺は、そつと顔を上げて様子を窺ってみたのだが…

「……!?!」

バツチリと目が合った。

目が合った瞬間、由比ヶ浜はビクツとなった慌ててそっぽを向き、俺はそそくさと解答题紙に視線を戻した。なんか、めっちゃくちゃガン見されてたしっ！

その、気配で分かる程の視線の力強さに、俺の頭頂部がハゲたりしないだろうかとか心配になってくるんだが…だ、大丈夫だよな？

「……じーっ。」

「……。」

それからも、“じーっ”という由比ヶ浜の視線を気にしつつ採点を続けていたのだが、ようやくその作業も終わりに差し掛かった頃、急に由比ヶ浜がソワソワとしはじめ、やがて意を決したかの様によしっ！つと気合を入れて勢い良く立ち上がった。

そんな様子に、俺は“トイレに行くにしても、随分気合が入っているなあ。”なんて呑気に考えていたのだが、由比ヶ浜はトイレどころか、逆にこちらへ近づいて来たかと思うと、そのまま俺の横に“ドシっ”と腰を下ろした。

なあんだ、トイレじゃなかったのか…って、な、なんで隣に座ったしっ！

「ほ、ほらっ、折角だし…それに、と、隣の方が見やすいかなあ…なんて。あはは…。」

あくまで機能性重視なのだと言張する由比ヶ浜。普段なら、色々と茶々を入れてしまうところなのだが、なんとなく水を差すのは憚られる（はばかりれる）様な気がした。

「な、なるほどな…そういう事か。」

「う、うん…そういう事…。」

「…。」

「…。」

緊張するやら気まずいやら、色々な感情がごちゃ混ぜになりながら、沈黙した時間が流れた。触れるか触れないかギリギリの距離となった事で、由比ヶ浜のぬくもりが放射熱となって俺に伝わってきて“由比ヶ浜”という女の子の存在が、より生々しくリアルに感じられた。

それに、なんかイイ匂いするから余計にな。

「ね、ねえ…何点だった？」

そんな沈黙を破ったのは、由比ヶ浜のそんな一言だった。これまでの時間、甚六さんやらおっぱいさんの存在感が際立っているが、本来の目的は勉強なんだ。もう少し気を引き締めないと、このままだとダメ過ぎんぞ…俺がな。

俺は、採点の終わった解答用紙を一通り見直すと、それを由比ヶ浜に手渡した。

「70点つてところだな。」

「ふっふーん！ 凄いでしょー♪」

由比ヶ浜のドヤ顔がうっとおしい。確かに、高校時代のこいつの成績を考えると、考えられない程の正答率なんだけどさ。まさか、由比ヶ浜を見直す日がやって来ようとは…。

「確かに…期末テストで『徳川もんが』って書いたやつだとは思えねえ。」

断っておくが、解答欄じゃなくて氏名欄にだからな？

「むがーっ！ そ、その話題禁止いいっ！」

由比ヶ浜は両手で頭を抱えると、激しく悶絶した。まあ…通常だったら、間違いなく黒歴史認定ものだよな。色々と間違え過ぎだし…お前はもんがでも、増してや徳川でもない。

本当は色々と聞いてみたかったのだが、そんな事をしてはどっぷりと日が暮れてしまうので、ここはぐつと我慢してフオローを入れることにした。

「落ち着け由比ヶ浜…昔の話じゃないか。」

俺は、出来るだけ爽やかな笑顔を浮かべて力強く語りかけた…目は死んでたけど。

「…ええ？」

悶絶していた由比ヶ浜が、ふと動きを止めてゆっくりと顔を上げる。

「今はそれなりに点が採れているんだ。もうあの頃のお前じゃない。」

「ヒッキー…。」

ちよっぴり感動したのか、目に涙を溜めた由比ヶ浜がとても嬉しそうに微笑んだ。

「それに…」

「それ…に？」

由比ヶ浜が、期待に満ちた眼差しを俺に向け、次に紡がれる言葉を待った。

「良かったじゃないか…徳川もんがなんてDQNネームを付けられた人は居なかったんだ！」

「むがーっ！」

由比ヶ浜は、再び悶絶した。

そんな悶絶中の由比ヶ浜を余所に、俺は今後の指針を練り始めた。70点という点数は、決して悪くはないが、飛び抜けて良くもない。本番はマーク式だから、もう2、3点の上積みも期待出来るとはいえ、全体的に見れば8割は欲しいところだ。

とりあえず、他の教科は程良く出来ているから過去問重視で、日本史は一度全体を見直しつつ底上げを計る方向で、この冬休みの間は頑張って貰う事にしよう。

よしっ…由比ヶ浜、あとはお前次第だ。

そう思い、由比ヶ浜の方へ視線を戻してみたのだが…

「ううっ…だからあたしはもんがじゃないしい…」

由比ヶ浜は、未だ絶賛悶絶中だった。こいつの抱える黒歴史の闇は、想像以上に深いものなのかも知れないな。気持ちには分かるけどさ…俺も半日くらい悶絶する時あるし。

おーい由比ヶ浜あ、さっさと戻ってこーい。

「もうっ！ ヒツキーのバカっ！」

ぶん剥れた（むくれた）由比ヶ浜が、ぷいっつとそっぽを向いた。深淵の底から帰って来てくれたのは良かったんだが、さっきからずっとこの調子だ。まあ、凶らずもこいつの黒歴史を刺激してしまった俺が悪いのだが。

「俺が悪かったからさ、いい加減機嫌を直してくれ。」
「…。」

由比ヶ浜は、一度だけこちらをチラ見したただけで、相変わらず“っーん”と拗ねたままだ。

「ほら、飴ちゃんやるから機嫌直してくれよ。」

俺が取り出したのはもちろんヴェル…(略)

由比ヶ浜は“また子供扱いする…”と言いつつ、俺が差し出したヴェルダー○オリジナルを嬉しそうに受け取った。やれやれ、これだようやく機嫌が…

「…って、こ、こんなので誤魔化されたりしないしっ！」

ねえ…今、思いつきり誤魔化されそうになってませんでした？

「……。」

「……。」

誤魔化されないもんと言いつつ、それを口に放り込んだ途端に静かになる由比ヶ浜。

そう言えば、カニ鍋やってる時も人は無言になるよな。つまり、カニ鍋を食べたいけど金がない時は、ヴェルダー○オリジナルを2〜3個舐めておけば、“お金が浮いて超お得じゃないですかあー♪”という論理が成り立つのではないだろうか…

成り立ちませんね、失礼しました。

俺がまた何か下らない事を考えているんじゃないか…そんな空気を薄々感じた取ったのか、由比ヶ浜は“はあ…”と小さくため息をつくと、自分の顔と俺の顔をぐいっと突き合わせて、念を押すように言った。

「本当に…反省してる？」

ようやくお許しが出そうな雰囲気だ。雪解けムードの到来に、俺の返事は決まっていた。

「ああ、もちろんだ。反省しすぎて、反省猿が軽く引くレベルだぞ。」

「また訳の分かんない事を言い出したしっ！」

反省猿とは、“反省だけならサルでも出来る”でお馴染みのあれだ。ちなみに今の次郎さんは4代目だそうだ。スケ○ン刑事で言えば、あや○みたいなポジションってところだな。更に例を挙げるならば、相棒の反町○史、プリ○ス4WD、フレッシュアップ○キュアもそうだ。そうそう、今のタイ○ーマスクも4代目だ。

そんな、ぶつくさと考えている俺の様子をじーっと眺めていた由比ヶ浜は、しばらくして

「まったくもう…相変わらずだなあ。」

と呟いた。言葉とは裏腹に、その口調はすこぶる穏やかなものだ。

「まあ、人間つてのは早々変わったたりしないんじゃないかね?。」

まあ、長いスパンで振り返った時、“ああ…昔はこんなだったっけなあ”と実感出来る様な変化はあるかも知れないけどな。

だが由比ヶ浜は、その言葉に首を軽く横に振る。

「ううん、ヒツキー…ちよつと大人っぽくなつててビックリしたもん。」

「ん?。俺が?。」

「うん♪」

たった9ヶ月程度で、そんなに見た目は変わらない気もするが…なんて思ったのだが、以前よりも2回りくらい大きくなった、由比ヶ浜のデカメロン様をしげしげと眺めてみると、意外とそんなものなのかも知れないな…なんて思えてくる。

「まあ、捻くれた性格は変わってないけどな。」

「うん。中身は全然変わってなくて、ちよつと安心したかも♪」

「おいおい、そこつて”捻くれてなんてないよつ”とかつてフオローするとこじゃね?。」

「ぶっ…それは無い無い♪」

由比ヶ浜は、しばらくの間嬉しそうに笑っていたが、真顔に戻ると同時に今度は俺のシャツの袖をキュツと掴んで、俯く様に視線を床に落とした。

「でもね…ヒツキーが凄いい変わってたらどうしよう…つて、ちよつと不安だった。」

俺のシャツを掴む手により一層“きゆうううう”つと力が込められる。

少し間が置かれた後、由比ヶ浜は何か強い決意をしたかの様に顔を

上げると、真っ直ぐな視線を俺に向けた。そしてもう片方の手を自分の胸元に置くと、ひとつ深呼吸した後にその目を大きく見開いた。

「あ、あたしね…ず、ずっと前からヒツキーの事が…」

その時だ。

“コンコン”とノックされたかと思うと、俺達の返事を待つ事無く勢い良くドアが開け放たれ、それと同時に超ハイテンションなヴォイスが部屋中に響き渡った。

「ばんぱかぱーん♪そろそろおやつ時間よーっ♪」

この声の主は…言うまでも無いよな？　そう、ガハママさんだ。

「…!？」

あまりに突然の出来事に、俺と由比ヶ浜はその場でビシツと固まってしまった。だが、そんな事はお構いなしに、ガハママさんは勢い良く部屋に入ってくると、ケーキと紅茶の乗ったトレーをコタツの上に置いて、それらを手際良く並べ始めた。

「今日は優美子ちゃんこのケーキよお…って、あれ？」

ここに来て、俺達が並んで座っている事に気がついたガハママさん。それまでニコニコしてたのがニヤニヤに変わった瞬間を、俺は見逃さなかった。

「あらあ、2人はとっても仲が良いのね♪」

その視線が、シャツの掴まれた手に注がれている事に気付き、慌ててその手を離す由比ヶ浜。そんな仕草に、ガハママさんの目が鋭く光る。

ああ…あれは格好のネタを仕入れた人の目だ。俺には分かる…だって、小町がそうだから。

「もう、結衣ったら♪恥ずかしがらなくても良いのに♪」

「な、なんの事かなあー？」

由比ヶ浜は全力で恍ける（とぼける）事にしたみたいだが：何しろ相手が悪過ぎた。

それまでニヤニヤしていたガハマママさんは、急に取り繕った様な穏やかな微笑を浮かべると、その表情からは想像出来ない様な、大きな爆弾を投下した。

「仲が良いのもいいけど、気をつけるのよ？ 私、まだお婆ちゃんにはなりたくないもの♪」

その言葉に、顔をみるみる真っ赤にする由比ヶ浜。

「あつ、でもね？ どうせなら男の子と女の子、一人ずつが良いとママは思うなあ♪」

「なっ!?!」

畳みかける勢いのガハマママさんを前に、由比ヶ浜が口をパクパクさせたまま絶句する。落ち着け由比ヶ浜：それ、揶揄われ（からかわれ）てるだけだからな？

しばらくして、再起動を果たした由比ヶ浜が、耳までピンク色に染めつつ絶叫した。

「ま、ま、ま、まだそんな事しないしっ！ ママのバカあああああつ！」

そんな、部屋中を木霊する絶叫に、サブレはビクツと体を震わせた。

つづく

【おまけ】

「ねえヒツキー?」

「なんだ?」

「ワイマールけんぽうって…何？」

「ああ、ドイツの憲法だ。もう消滅しちゃったけどな。」

「そっかあ…。」

「まあ、消えちまったものは仕方がないな。」

「うん。でも残念だなあ…。護身に習おうと思ってたのに。」

「…はい？」

第17話 インド人もビックリ（色々な意味で）。

皆様は、絶体絶命の危機に瀕した（ひんした）事があるだろうか？

例えば、センチン○スプリングから目を付けられてしまったり、また、それが切っ掛けで経歴詐称がバレてしまい、全ての仕事の降板を余儀なくされてしまったり、更にその挙句〃4月から、どうやって生活していけば…〃といった具合に、今後の生活の見通しが立たなくなってしまうたり…と、人間というものは、生きていけば多かれ少なかれ、思わず身も竦む（すくむ）様なピンチと遭遇する事がある。

葉山レベルのリア充ともなると、そういう場面に陥った時には〃ピンチをチャンスに！〃と鼻息を荒くするのだろうが、それを全ての事柄に当て嵌められる訳ではない。『一度失った信用は永久に取り戻せない事もあるわ。特に男が生涯をかけた…大切な仕事の信用はね』って、メーテルも言ってたからな。

仮に、運良くチャンスが廻って来たとしても、それは、天界から垂らされた蜘蛛の糸の如く儂く脆い。だが、その強度が材木座のメンタル程度しかないと分かっているとしても、それを手繰り寄せんと誰もが必死に手を伸ばすのは、その糸こそが僅かに残された一縷（いちる）の望みであるからだ。だからこそ一発逆転、起死回生、V字回復といった言葉が、一際輝いて見えるのだろう。

まあ…大概は〃人生最大の賭け〃に敗れた挙句、開拓民として哀愁を漂わせながら、ただひたすらルーレットを回し続ける事になるんだけどな。

さて、俺の目の前には今、何やら禍々しい妖気を放つ物体を盛り付けた皿が置かれている。その皿は、火に掛けられている訳でもないのに、時より大きな気泡を噴出させ、その気泡が弾ける度に発せられる〃こぼっ…〃という音が、その禍々しさをより一層際立たせていた。

「ヒ、ヒツキー、無理して食べなくても…良いからね？」

テーブルを挟んだ向かい側には、複雑な表情を浮かべた由比ヶ浜が

座っていた。余程バツが悪いのか、髪の毛を人差し指で弄りつつ、俺から目を逸らしたままだ。

以前、由比ヶ浜の作った“自称”和風ハンバーグは、材木座を一撃で葬る程の破壊力を誇っていたのだが、覚悟して無理すれば食えなくも無かった。だが今回は…

「なあ由比ヶ浜、これって…」

俺の問いかけに、ビクッと肩を震わせる由比ヶ浜。

「カ、カレーだよ？…多分。」

多分って何だよ、多分って。あと、頼むから目を合せてくれ…不安になるから。

作った本人ですらカレーである事を確信出来てない時点で、天界から垂らされた蜘蛛の糸が、切れるどころか端から存在などしていなかった事を思い知らされる。

「そ、そうだったな、カレーだった…よな。」

だが、料理が苦手にも拘らず、一生懸命作ってくれていたのを間近で見ていた俺には“喰えない”の4文字を、どうしても口にする事は出来なかった。

「……。」

期待と不安を滲ませた由比ヶ浜が、俺をじっと見つめている。

……。

ピンチをチャンスに変えるどころか、もはや退路の断たれた決死隊である事を悟った俺は、生唾をぐくりと飲み込んでから、目の前にあったスプーンを手を取った。その瞬間、ここに至るまでの経緯…というか人生そのものが、俺の頭の中を走馬灯の様に駆け巡る。

そう…俺の人生はたった今、大きな山場を迎えていた。

第17話

イン

ド
人

もビックリ（色々な意味で）。

「ねえヒッキー君、うちで晩御飯食べていかない？」

ガハマママさんがそう俺に告げたのは、今日の勉強会がお開きとなつて、せつせと帰り支度を整えていた矢先の事だった。急な申し出に、俺はちらりと由比ヶ浜の方を見たのだが、由比ヶ浜には既に話を通つていたらしく“うちのママのカレー、すつごく美味しいんだよ♪”と、こつちを見ながら声を弾ませた。そして、その言葉を補足する様に“そうよお？ いつもよりすつごく、腕によりを掛けちゃうんだからっ♪”と言う、ガハマママさんの鼻息も荒い。

俺は、キラキラした眼差しを向けて来る由比ヶ浜親子の目力…というか圧力を感じながらも、折角なのでお言葉に甘える事にした。由比ヶ浜が腕を振るうのならともかく、ガハマママさんであれば命に拘わる事はないだろうからな。

まさか、料理の腕も遺伝…なんて事はないよね？

俺の返事を聞いたガハマママさんは、“それじゃあ、7時くらいに出来ると思うから、それまで待っててね♪”と言い残すと、軽やかな足取りでキッチンへと向かって行った。由比ヶ浜の部屋にある時計は、5時を少し回ったあたりを指していたので、晩御飯までおおよそ2時間弱といったところだろう。ならば、それまでもう少し勉強を詰めておくかと由比ヶ浜に提案しようとしたのだが、それよりも早く由比ヶ浜が口を開いた。

「ねえ、ヒッキーんここに、いろはちゃんが来たってホント？」

勉強が終わってゆるゆるだった部屋の空気が、一瞬にして凍りついた様な気がした。

おいおい、なんでオマエさんがそれを知ってるんだ？　つていうか、この間の雪ノ下さんの事といい、一色の事といい、最近俺の素行が周りに駄々漏れな気がするんだけど、気のせいだろうか。まさか、俺にもあのセンチン○スプリングが張り付いてるんじゃないだろうな？

「あ、ああ。大学のオープンキャンパスを見に来たついでにな。」

ともかく、下手な小細工は身を滅ぼすので、動揺を悟られない様可能な限りシンプルに答える事にした。それに対して由比ヶ浜は「ふ、ふーん：オ、オープンキャンパスかあ。な、なるほどね。」と、なんとなく歯切れが悪い。

「じゃ、じゃさ…いろはちゃんがヒツキーの部屋に泊まったって…ホント？」

「!？」

俺の脳内で、嘉門○夫が「鼻から乳牛」と連呼した。

さっきのは軽いジャブだったのかっ！　核心に迫った感じの問いかけに、俺は思わず絶句した。そして、この絶句を由比ヶ浜は肯定と捉えた様で、「ヒツキー…ホントにいろはちゃんと組んず解れつの爛れた(ただれた)肉体関係につ…」と呟きながら、わなわなと肩を振るわせ始めた。

おおおいっ、ちよつと待て。組んず解れつの爛れた肉体関係って…オマエさん、ドロドロした昼ドラばっか見過ぎなんじゃね？　そのうち、「役立たずの豚っ」とか言っつて罵りだしたりしないだろうかコイツは…って、しないか。雪ノ下じゃあるまいし。

確かに、同じ屋根の下で男女が一晩過ごしたと耳にしたならば、あんな事やこんな事を想像してしまうのも無理はないんだが…。ちよつとエロっぽくなっただけど、ギリセーフだったんだからね？　大きな声では言えないけど。

ともかく、ここは補足を入れておかないと、後々面倒な事になりそうだ。

「落ち着け由比ヶ浜。不適切な関係には至ってない…多分。」

そうだ、俺はクリ○トン元大統領とは違うんだ…Yes, we c

a n. そんな思いを言葉に詰め込んだのだが、それに対する由比ヶ浜の返事は、間髪入れずのツツコミだった。

「多分って何だしっ、多分ってっ!!」

まあ：そりやそうなるわな。

その後の俺は、一色が泊まる事になったのは、俺の妹だと騙った上で大家のおばちゃんと結託した結果である事、大家のおばちゃんが客間を提供してくれた事、一色のやつが深夜寝ぼけて俺の布団に潜り込んで来た事、色々あったが無事脱出して、俺が入れ替わりで客間で寝た事：等々を大雑把に説明した。

俺の弁明（？）を怪訝そうな顔をしつつ、それまで静かに聞いていた由比ヶ浜だったのだが、

「なんか嘘くさい…。」

と、全ての話を耳にしても疑念を隠そうとはしなかった。まあ、決定的な事は無かったが、何も無かった訳でも無かったから始末が悪いのだ。そもそも“気がついたら、半裸の一色が隣で寝ていました”なんて、言える筈も無い。

それに：色々と際どかったしな。

「際どかったって何だしっ!？」

しまった。ついうっかり、心の声が漏れ出てしまったみたいだ。

その後、再び追及心に火が着いてしまった由比ヶ浜を宥める（なだめる）のに、大層骨を折る事となってしまうた。

「分かった：ヒツキーの事信じる事にする。」

由比ヶ浜は、顰めた（しかめた）顔でそう言った。その顔を見ていると、“いまいち釈然としないんだけど…”という声が聞こえてきそうだ。まあ：信じてくれるならそれに越した事はないんだけどさ。

それにしても、こいつがこんなに追及してくるなんて…まるで、浮気した駄目旦那を締め上げている鬼嫁みたいだな。もしかしてオマエ、俺の事が好きなんじゃねえの？

「は、は、は、はあぁあぁあつ!?」

その瞬間、由比ヶ浜は顔を真っ赤に染めると、手元にあつたクツシヨンを二つ折りにして“バフツ、バフツ”と俺を殴打し始めた。

「バ、バ、バ、バカッ！ バカッ！ ヒツキーのバカッ！」

「痛えって、分かった分かったつ。俺が悪かったから勘弁してくれつ」

「またもや心の声が駄々漏れになっていた様だ。自重しないと、命がいくつあっても足りないな…そう実感しつつ、由比ヶ浜を必死に宥め（なだめ）続けた。」

「冗談だよ、冗談。分かっているから落ち着けてば。」

その言葉を耳にした由比ヶ浜は、眉を“キツ”と吊り上げた。

「ヒツキーのバカッ！ ぜ、全然分かってないしっ！」

俺を殴打する手に、更に力が込められた。ちよつ、何でだよっ！

増々状況が悪くなってんじやねえかつ。あぁつ、もうどうすれば分かるねえつ。助けてドザ○もん!!

それから10分程俺を殴打し続けて、由比ヶ浜はようやく落ち着きを取り戻した。取り戻したのは良いのだが、さっきまでの騒がしい雰囲気とは対照的に、今度は恐ろしく沈黙した気まずい空気が部屋を支配していた。

「……。」

「……。」

「あぁ、さつきみみたいなテンションで、“御飯出来たわよーん♪”ってガハママさんが乱入して来ないかなあ…なんて思ってはみたもの

の、そういう時に限ってご期待通りに現れてはくれない。でも、スターダストボーイズは駄目じゃない。

「な、なあ由比ヶ…」

ともかく、他力本願はやめて自力で状況を打破するか…と、声を掛けようとした時、ほぼ同時に由比ヶ浜も口を開いた。

「ヒツキー…。」

「な、なんだ?」

由比ヶ浜は、若干不安な表情を浮かべながら、俺の目をじっと見つめ、

「も、もし、私がそっちに行つてたとしたら…と、泊めてくれてた…かな?」

そう言い終わると、下から覗き込む様に俺を真つすぐ見上げてきた。若干潤んだ瞳は、気を抜けば引き込まれそうな程の深いオーシャンブルーの輝きを帯びていて、まるで魅了の魔法に掛かってしまったかの様に、俺はそこから目を逸らす事が出来ない。

「…ヒツキー?」

そんな由比ヶ浜の呼びかけに、俺はようやく我に返った。ほんの数分程度の時間であつたはずなのに、まるで何時間も引き込まれていたかの様だ。

「あ、ああ…すまんすまん、その…」

「…その?」

由比ヶ浜が、自分の顔をぐいっと俺に近づけてくる。一気に詰まる距離に、思わずドキリと胸が高鳴った。それに加えて、その瞳に俺の姿が映し出されるのが気恥ずかしくなったのもあって、思わず目を逸らしてしまった。だが由比ヶ浜も、負けじとその逸らした方向へ移動すると、再び俺の顔を覗き込んだ。

「ヒツキー、泊まつても…良い?」

由比ヶ浜の大きな瞳から逃れる術がない事を悟った俺は、もはや観念するほか無かつた。

「ああ…そういう状況だったらな。」

その返事を聞いた由比ヶ浜は、ぱあつと明るい表情を浮かべたのだが、すぐに何かを思いついた…というか何かイタズラを企んだ（たくさんだ）様な笑みを浮かべると

「じゃさ、受験の時はヨロシクね♪約束だよ？」

などと、とんでもない事を言い出した。おいおい、さっきまでは仮定の話だったじゃねえか。俺は異議申し立てをすべく、口を開こうとしたのだが、いろはちゃんは泊まったのに…”としょんぼりと（した演技を）する由比ヶ浜に対して、何も反論出来ず…

「ああ…わかった。」

と答えるのが精一杯だった。

「ごめんなさいっ。パパに届け物をしなきゃなくなっただのっ」

6時を少し回った頃、部屋にやって来たガマハハさんが、胸元で小さく手を合わせて詫びてきた。なんでも、由比ヶ浜のパパさんが、数日会社に泊まりこむ事になり、着替えやら何やらを届けねばならなくなっただのっ事らしい。

本来であれば、そういう事ならばまたの機会に…となるところなのだが、ここで予期せぬアクシデントが発生した…というのも、由比ヶ浜がドヤ顔を決めつつ”アタシが作るーっ！”と訳の分からない事を言い出したのだ。その瞬間、部屋全体が驚きに包まれた…というよりも、戦慄が走ったと言った方が正しいな。意思とは関係なく、俺の体がビシツと硬直したしな…全く、生き物の本能ってスゴイよな！

そんな様子を見ていたガハママさんは、”大丈夫♪あとはルーを入れて煮込むだけだから♪”というのだが…もうこれ、フラグ立ってるかんね？

俺の懸念などお構い無しに、”そっかあ♪じゃあ楽勝じゃん♪”と意欲に燃える由比ヶ浜と”頑張っつて、結衣♪”とエールを送るガハマ

マさん。頑張ってたってのは“死人を出さない様に！ ガンバっ”みたいな意味が込められてる気がするのは、俺だけだろうか。

でもまあ…以前作ったクッキーも、それまでに比べれば随分上手く出来ていたし、あれから更に時が進んだ現在ならば、もしかしたら由比ヶ浜の腕前も、格段に向上しているかも知れない…

そんな事を考えていた時期も…俺にはありませんでした。

走馬灯の様に駆け巡ってきた俺の人生の軌跡が、ようやく現在地に追いついた。どうやら、お別れの時がやって来たらしい。

「…よしっ。」

仕上がりか物体Xとはいえ、頑張った事には変わらないのだ。料理の不得手な新妻を貰った新婚ホヤホヤの夫の様に、俺は覚悟を決めてカレーらしき物体を口の中へと勢い良くかきこんだ。

このオレが 千葉のどっかで 果てんども 留め置かまし ぼっ
ち魂 (辞世の句)

「ヒ、ヒツキー、しっかりしてっ!?!」

泣きそうな顔の由比ヶ浜の絶叫が部屋中に響き渡った辺りで、俺の意識はぶつつりと途切れた。

それからしばらくの記憶が、俺には無い。

つづく

【おまけ】

「辞世の句って、英語で何ていうか分かるか？」

「うーん：辞世の句って何？」

「うん、分かった。」

「ちよつと何、その暖かい眼差しはっ！ 超ムカツクしっ！」

「ちなみに正解は、デスポエムな。」

「ほええ：何かデスソースみたいだねえ。」

「ちなみに、辞世の句はソースじゃないからな？」

「そ、そ、そんなの知ってるしっ！ あたしの事バカにし過ぎだからっ！」

第17. 25話 因みに俺は千葉県生まれアニソン
育ちな。

「やれやれ、今日は色々あつたな…」
特にカレーとかカレーとかカレーとか…むしろカレーとか。

あの後、ガハママさんが帰って来てからが大変だった…というのもガハママさんが、死んだ魚の様な目をして完全に生気を失い放心していた俺を見るや否や、“結衣…まさか貴方、毒を盛ったのっ!?”と騒ぎ出して、状況は一気に混沌(カオス)とした方向へと流れていったのだ。

“ど、毒なんて盛るわけ無いしっ!”と涙目になりながら、必死に自分の身の潔白を主張する由比ヶ浜に対し、容赦なく雷を落とすガハママさんを宥める(なだめる)のには、かなり骨が折れた。

結局“目は元々こんな感じなんっス”という俺の説明によって、なんとか收拾がついたのだが、割とあっさりとなんて納得してしまったガハママさんの反応と、由比ヶ浜の“そうだもん。ヒツキーの目が腐っているのは前からだもん。”という主張に、俺はいまいち釈然としない思いを抱える事となった。

アパム!アパム!弾っ!弾持って来いっ!アパアアムっ!

それにしても…見た目が若いのと、ゴツシツプネタ好きなおばさんパワーに包まれていたから分かり難いのだが、考えてみればこの人って親だったんだよな。NOと言える日本人がここに居た。たとえ過失であっても、叱るべきところではしつかりと叱る様子に、由比ヶ浜親子の絆の強さを垣間見た気がする。

まあ…それでもやっぱり、カレーに酔だこは無いわ。

俺は自室の布団に包まりながら、そんな事を考えていた。時刻は既に深夜1時を大きく回り、さつきまでの出来事全ては、既に昨日という過去へと追いやられていた。本来であれば、とつくに眠りに就いていてもおかしくない時間帯なのだが、柄にも無く若干気持ちが高ぶっているのか、なかなか睡魔がやって来ない。まあ無理も無い、あんなに人と話をしたのは久しぶりなのだ。

それにしても、たった9ヶ月やそこらで、人つてのは色々変わるもんなんだな。由比ヶ浜は依然アホの子のままではあったのだが、コタツの天板に押しつぶされて、むにょんと形を大きく変えていたおっぱい様は、明らかに俺の記憶をはるかに上回る大ききさだった。しかも、一色とは違い、由比ヶ浜の場合は無邪気に距離を詰めてくるから始末が悪い。俺の肘に押し掛かる様に押し付けられた胸の質量が、今になって生々しく蘇って来た。

それと同時に、“Hey, Yo, 君の大きなおっぱい♪胸に希望がいっぱい♪(作詞作曲・すずきえすく)”というヒップホップ育ち(東京生まれ)な楽曲を、だいたい友達になつた悪そうな奴らが大挙して来たかと思うと、俺の脳内でけたたましく合唱し始めた。

ああっ、全然寝られねえ…っ！

ともかく落ち着かねば…色即是空、空即是色。だが、マテリア○バーストを食らった某敵艦隊の末路とは違い、俺の煩惱はなかなか撃沈されてはくれない。成功すれば、雪ノ下への声に少しだけ似ているあの方の“さすがはお兄様ですっ”という賞賛が得られそうなどころなのだが、今は“やっぱごみいちゃんだねえ…さすがだよお。”という小町の呆れ声ばかりが、頭の中を木霊(こだま)する。つまるところ、俺の溺愛する妹は小町だけ…そう、たった1人の特別な存在なのである。

おいそこ、“シスコンマジキモーい♪”とか言うな。

話を戻そう。

それに、変わったのはおっぱい様だけではない。料理の腕前だつて、以前に比べると格段に向上した。無論、味ではなくて攻撃力が：だけどな。まったりとしていてそれでいて：みたいな感想を思い浮かべる暇（いとま）も無く、いきなり意識を根こそぎ刈り取られたのは、流石に初めての経験だった。

一時期は、味の方も確実に向上していたはずなのに：進化するにあたって、一体どの様な過程を経れば、この様な結果に辿り着くのであろうか。教えて、ダーウィンさんっ！

ダーウィン 「ワカリマセーン（日本語的な意味で）」

第17・25話

困みみに俺は千葉県
生まれアニソン育ちな。

話は、高校時代に遡る（さかのぼる）。

その日も、これといって依頼を寄せられるも無く、いつもと変わらない時間が放課後の部室に流れていた。雪ノ下は、やはりいつもの様

に窓際の席へ腰掛けて読書に勤しみ（いそしみ）、俺は同様に、廊下側の席に着いて読書を楽しんでいた。由比ヶ浜の場合は、いつも教室で三浦たちと少し駄弁つて（だべつて）から来るのだが、その例に漏れずまだ部室には来ていない。

そして一色のやつは、時より“せんばあい、わたし超暇じゃないですかあ。だから何か面白い事してみて下さいよお。”と俺に無茶振りしつつ、手元にあるスマホを一生懸命弄って（いじって）いた。

いや、だからお前：生徒会とか部活はどうした？ と、以前ならばツツコんでいたところなのだが、“えっ？ 何か問題でも？”と言わんばかりに毎回無言で首を傾げられているうちに、何だか俺の方がおかしい事を言っているのではないかという気になってしまい、現在に至っている。それに、雪ノ下や由比ヶ浜だつて何も言わないしな。

まあ：なんだかんだで、そこまではいつもの静かな日常だったんだ。

だが、そんないつもの平穏な日常をブチ壊すかの様に、“バタバタ”と廊下を疾走する足音がけたたましく響き渡り、そして奉仕部の部屋の前でその音が途切れるや否や、今度は“ガラガラビタンツ”と勢い良くドアが開け放たれた。

「どうしようっ?! テレビに出る事になっちゃったよーっ!!」

声の主は由比ヶ浜だ。いつもなら、明るく“やつはろー♪”と挨拶してくるところなのに、珍しく慌てて駆け込んできて、開口一番“テレビガー”と叫んだ彼女の身に、一体何が起こったのだろうか。それに、テレビに出るって：まさか荒れる新成人的な感じで!?

ともかく、それなりに親しい者としてやれる事はやるべきだろう。俺は、可能な限り柔和な笑みを浮かべると、由比ヶ浜の右肩に“ポン”と片手を添えた。

「由比ヶ浜：悪い事は言わない。自首した方が罪は軽くなるぞ?」

そんな俺の気遣いに対し、真っ赤な顔をして怒りを露わにする由比ヶ浜。

「何でニュースに出る事前提だしっ！ 逮捕される様な事なんてしてないからっ！」

由比ヶ浜はそう主張しながら、軽く掌を握って“ボカッボカッ”と俺の背中を叩き始めた。言っておくが、リア充共の様にきやつきやウフフとした、じゃれ合う感じの叩き方じゃないからな？ 思いの他、腰の入った拳が次々と俺の背中に炸裂する。こらっ痛いって。冗談だよ冗談。このままだと、ホントにニュースになりかねないぞ。

「そうよ比企谷君。由比ヶ浜さんが、そんな事する訳ないじゃない。あと気持ち悪いから、その目は止めなさい。」

それまで様子を窺って（うかがって）いた雪ノ下が、読みかけの文庫本を“パタリ”と閉じるや否や、由比ヶ浜に同調した。盟友を援護しつつ、的確に相手へダメージを与えられるその手腕は特筆に価するのだが：肉体的には由比ヶ浜から、そして精神的には雪ノ下から屠られ（ほふられ）はじめた俺は、早くもノックアウト寸前だ。

そんな中、唯一この場面を冷静に見ていたのが一色だった。一色は“はいはい、皆さん落ち着いてくださーい”と俺達の中に割って入り、場が落ち着いたのを見計らって口を開いた。

「で、結衣先輩、何の番組に出られるんですかあ？」

そう聞かれた由比ヶ浜は、俺を叩き倒していた手を止めて“そうだった、こんな事してる場合じゃなかったし。”と我に返った様に吹き、そして雪ノ下も“確かに、比企谷君を屠るなんて、かえって本人を喜ばせるだけだわ…”と困惑した。

まったく、お前らときたら…。

ともかく、俺へ向けられた矛先が納められただけでも良しとしますかね。それにしても、まさか一色が居てくれて良かった、なんて思う日が来ようとは…などと感慨深く思っていた俺の耳元に、今度は一色が素早く口元を近づけてきた。

「このお返しは、マダム○ンボニエールのザツハトルテで手を打ちますね。」

一色、お前もか…。

「グッピースクッキング!?!」

部室内に戦慄が走った。出演するのって、よりによって料理番組かよ…。

驚愕する雪ノ下と俺に対し、「うん♪そうだよー♪」と無邪気な声で答える由比ヶ浜。その一切邪気の無い笑顔が、逆に怖さを助長させる。一方、由比ヶ浜の腕前を知らない一色は「うわあ、結衣先輩凄いですう♪」とテンション高く喰い付いた。由比ヶ浜も、一色のそんな様子にご満悦な様子で、

「もしかして、そのまま芸能界デビューとかっ♪」

「やだなあ、いろはちゃん。流星にそれは無いよお♪」
といった具合に、どんどん話が膨らんでいく。

そんな様子を生暖かい目で見守っていた俺に、雪ノ下が肘で軽く小突いた。

「比企谷君、このまま放って置いたら大惨事になるわよ?」

まあ…確かにそうなるよな。運良く時間内に料理を完成させたとしても、試食の段階で目を覆いたくなる程の凄惨な事態になるのは、目に見えているからな。そして、その結果として由比ヶ浜は、芸能界デビューよりも先に某巨大匿名掲示板デビューを果たす事になるだろう。そうだな…スレタイは、

【バイオテロ?】グッピースクッキングで放送事故【59】

みたいな感じで。祭りに沸く住人の姿が目には浮かぶ様だ。

「呆れた。そこまで分かっているのに、放置しているのね。」

やれやれといった感じで、雪ノ下が溜息をついた。そんな事言われ

たつて、本人があれだけ乗り気なんだから、黙って背中を押してやるのが人情つてもんだらう？

テレビの人達はとても優秀だ。きっと何とかしてくれるさ…多分。「…比企谷君。」

氷の様な冷たい目をした雪ノ下が、無言で俺をじつと見つめる。その顔にはまるで、

（ つ べ こ べ 言 わ ず 何 と か し な さ い ）

と書いてあるかの様だ。体感温度が2〜3℃下がるのを感じながら、慌てて背筋を伸ばす俺。何とかしろつたつて、一体どうやって…。何だかんだ言ったところで、俺もこいつも全くのノープランなのだ。

結局俺は、大した案も思いつかないまま、雪ノ下の無言の圧力に背中を押される格好となった。

“ やだなあ♪サインとか今から考えちゃうのお？ ” などと、後から思い出せば黒歴史確定な事を口走る程、頭がお花畑な由比ヶ浜に、俺は恐る恐る話を切り出した。

「あの、由比ヶ浜…さん？」

「あ、ごめんねヒッキー。まだサイン考えられてないんだ♪」

いや、お前のサインは要らないから。

だが、こんなところで一々ツツコんでいては、何時間あっても話が先に進まない。なので、俺は断腸の思いでツツコむ事を放棄して、話を進めることにした。

「んでお前、どんな料理作るんだ？」

そんな俺の質問に、それまで浮かれまくっていた由比ヶ浜は、急激に現実へと引き戻されたらしく、雪ノ下の方へ顔を向けると泣きそうな顔で“ ゆきのーん、助けてええっ！ ” と、そのまま大草原の小さな胸へ飛び込んだ。見る人がいなくても、町にいる時と同じ様にお行儀良くしなさい…と、キャ○ラインさんが注意しそうな程のお転婆っぷりだ。

「由比ヶ浜さん大丈夫？比企谷君に変な事されてない？ 警察は110番だったかしら。」

ポケットから携帯を取り出した雪ノ下は、今にもダイヤルしそうな勢いだ。こいつの行動は、冗談なのか本気なのか分からない時があるから始末が悪い。今回も、どちらなのか分からず判断に困っていたのだが、雪ノ下が「えつと…確か市外局番が必要だったわね。」と言いながら0・4・3とプッシュし始めたのを見て、瞬く間（またたくま）に俺の血の気がスーッと引いていった。

ヤヴァイ…こいつマジだ。

「ちよつと待て、俺は無罪なんだ！」

OK。分かったから、ちよつとお兄さんと話し合おうな。だが無罪を主張する俺に、今度は一色のやつが、俺を窮地へと叩き込もうと暗躍する。

「センパイ…素直に罪を認めれば、情状酌量があるかも知れませんがよ？」

それでも俺はやってない…やってないんだ！ そんなやつてもない事を認めてしまえば、それこそ俺が、お茶の間の皆様の前でテレビデビューしてしまうじゃないか…もちろん被疑者として。

そんな絶体絶命の危機に瀕した（ひんした）俺に、由比ヶ浜が不思議そうに尋ねてきた。

「ほえ？ ヒツキー、今度は何をやらかしたの？」

それをお前が言うのかあああああつ！

「つまり、カレーを作る特訓をすれば良いのね？」

雪ノ下の問いかけに、由比ヶ浜が首を激しく縦に振った。由比ヶ浜に与えられたテーマは、カレーライスだそう。由比ヶ浜どうこういう以前に、3分でカレーは作れないよな？なんて野暮な事は言いっこ無しだ。番組の尺自体は10分あるし、何より伝家の宝刀である“さて、2時間置いたものがこちらです”みたいな感じのやつを多用すれば、どんなに手間のかかる料理でもあら不思議、尺の中に納まっちゃうのである。

ともあれ、料理の特訓とあれば俺に出来る事は何も無い。ここは雪ノ下と一色に任せて、そそくさと退散する事にするかね。じゃあ、家族がアレなんで俺はそろそろこの辺りで…

「待ちなさい。どこへ行く気なのかしら？」

雪ノ下の右手が、俺の肩を鷲掴み(わしづかみ)にした。その握力の強さに、俺の第2肩関節がミシミシと悲鳴をあげる。“私：体力だけには自信が無いの”と言っていたのは、一体どこの誰だったっけな。

「ほ、ほら、俺は料理なんて作れねえじゃん？だからさ…」

「構わないわ。味見して感想をくれれば良いのよ。」

間髪容れず、そう被せてくる雪ノ下。更に小声で“人柱は多い方が良いもの…”と呟いたのも、俺は聞き逃さなかった。物騒な発言だが、残念ながらそれは否定できない。

そこへ追い打ちをかける様に“ヒツキーからも感想もらえたら嬉しい：じゃなかった、助かるんだけどなあ？”と、由比ヶ浜が上目遣いに問いかけてきた。その期待に満ちた眼差しに、不覚にもドキリとさせられた俺は、思わずその視線を逸らしてしまう。

だが、由比ヶ浜は俺の頭を両手でガシツと抑えると、強制的に“グググツ”と自分の方向へと向けさせて、再度俺に懇願した。

「ねえヒツキー、おねがいっつ（はあと）」

随分と禍々しい“はあと”だな、オイ。

だが、そんな禍々しい由比ヶ浜を前にしても、ガツチリと頭をホルドされているせいで、俺は身動き一つ取れず逃げる事もままならな

い。それにしても、雪ノ下といい由比ヶ浜といい、その華奢な体はどこからそんな力が出て来るんだ？ 女子はか弱い存在だ…なんてのは、もはや都市伝説の部類になってんじやねえの？

結局それがダメ押しの一撃となって、俺はこのカレー作り特訓に味見役という名の人柱として参加する事となった。

つづく

【おまけ】

「じーっ。」

「…。」

「じーっ。」

「…。」一色、俺の顔に何かついてるか？

「いえ、結衣先輩みたいな視線を送れば、センパイがコロツといくのではないかと。」

「…。」

「…。」

「…。」

「…。」センパイ？

「俺さ、コロツと逝っちゃうのかな…カレーで。」

「…。」そんなにヤヴァイんですか。」

「ああ…。」

「…。」

「…。」

「…。」か、陰ながら祈っておきますね。」

「何を言ってるんだ、お前も食うんだよ…。」一色。」

「!？」

第17・5話 真顔でギャフンと言われたら、それはそれでむかつくよな。

誰かが言った。“カレーは かれ 辛え…”と。

もう、何十年も前から使い古されて来たと思われる、この古典的な親父ギャグは、その長い歴史において、多くの人を極寒の谷底へと突き落としてきた事は想像に難くない。だが、それにも拘わらず、21世紀の初頭に差し掛かったこの時代でも、懇親会などで場が盛り上がって来た時に、ついうっかり口にしてしまい…といった痛ましい事故が後を絶たない。

そんな惨事を避けたいが為に“こんなギャグを思いついたんだが…”と、前もって家族に披露してくるお父さん方もいるようだが、それは止めておいた方が無難だ。何故なら、それで運良く外部におけるリスクを回避出来たとしても、今度は家族間に隙間風が吹き込みかねないからだ。

例えば、それを最愛の妹に披露したとしよう。“うわあ…小町のポイント低い”と言われるだけならまだしも、無言で立ち去られた挙句、2〜3日は目を合わせてすら貰えない…なんて事態を招いてしまつて、心をバツキバキにへし折られてしまうまでである。

お兄ちゃん、ついうっかり放浪の旅に出たくなつちやつたよ…。

さて実際のところ、カレーは単に辛いものしか存在しない訳ではない。カレーの○子様をはじめとした甘口や、オーソドックスな中辛に辛口、そして変り種を挙げればバリ辛、ダ○シムさん家のカレーの様おもわず口からヨガファ○ヤーな ヨガ 辛といったものまで、その味付けはバラエティーに富んでいる。

そして今回、由比ヶ浜が挑戦するのは、知る人ぞ知るマッサマンカレーだ。何だか、どこかのご当地ヒーローみたいな名前が付いている

が、ウィキペディアによれば、実は“世界で最も美味しい料理ランキング50”にランクインする程の逸品だそうだ。これならきつと、キングジャーを誘き寄せる罠にだって使えるに違いない。

だか、そんな高難度のカレーに由比ヶ浜がチャレンジするという時点で、俺にはBAD ENDしか想像出来なかった…って言うか、もう少し易しいメニューでも良かったんじゃないのか？ 例えば…ほら、松山○子の写真がパッケージに載ってるボ○カレーとか。あれなら、3分温めるだけですぐに食べられるし、超お手軽じゃね？

「比企谷君…気持ちは分からないでもないのだけれど、レトルトはダメよ。」

そんな俺を嗜める雪ノ下。更に、そこへ補足を加える様に一色が呟いた。

「それじゃあ、バーモン○カレーとかジャ○カレーも使っちゃダメですよねえ…」

「そうね一色さん。ルーも自作するのが望ましいんじゃないかしら。」

まあ…確かに、市販品を多用してしまつては料理番組にはならないし、そもそも今更メニューの変更なんて効かないだろう。つまり撮影までのこの1週間を、俺は人柱として、悲壮な決意で臨まねばならないという事だ。右手が折れても左手で投げる…みたいな、アス○口球団っぽい感じで。

そんな俺の様子は、由比ヶ浜の闘争本能に火を着けるのに充分だつたらしく、顔を真っ赤に染め上げ、更にぷくーつと両頬を大きく膨らませるなどして、ご機嫌斜めつぷりを隠そうとしない。やがて由比ヶ浜は、

「ヒツキー失礼過ぎるしっ！ 絶対にギャフンって言わせてやるんだからっ！」

と、両手を腰に当てつつ大きな胸を更に大きく張って、俺にそう言い放った。

何か、別な意味でギャフンって言わされそうだけどな…。

第17・5話

真顔でギャフンと言わされたら、

それはそれでむかつくよな。

「お兄ちゃん、今日も晩御飯は食べてくるんだよね？」

小町にそう告げられた瞬間、昨日の惨劇が俺の脳裏に蘇り、それまで爽やかに感じられた眩しい朝日が、途端に暗黒時代の到来を告げる稲光の様に思えてきた。そっか…今日も地獄の特訓が始まるんだな。

「ああ…。」

気だるく返事をする俺。カレーの特訓は放課後に行われてるとい

う事もあり、家に帰って更に飯を食える程の胃袋を、俺は持ち合わせていなかった。えっ？ 毎日毎日カレーばかり食って、飽きが来ないのか…だって？ もちろん来るさ、人間だもの。ただしそれが、カレーと呼べるシロモノだったらの話…だけどな。済まない…そのあたりは、どうか察してくれ。

そんな様子に、小町は心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。

「お兄ちゃん、顔色悪いけど大丈夫？ それに、目も死んでるし…」

そう言いながら、小町は自分の額を俺の額に当ててきた。その生ぬるい体温が、額を通じてこちらに伝わってくる。何というか…上手くは言えないのだが、不安な時に感じる人肌ってのは、なんとなく落ち着くよな。

「うん、熱はないね。それに…考えてみれば、目がアレなのはいつもの事だし。」

小町は、俺が平熱である事を確認すると、安心した様に額を離れた。その判断基準の一旦にいまいち 釈然としなが、強く否定も出来ないのが辛いところだ。

「じゃあお兄ちゃん、本日もよろしくなのであります！」

小町が自転車の荷台に”どかつ”と腰かけたのを確認して、俺は自転車を漕ぎ出した。

あれから5日が経った。

初日はまだ良かった。”今日は、私がお手本を見せるわね。”と言った雪ノ下の作ったカレーは、それはそれは美味しいものだったからな。元々料理の出来る雪ノ下だが、由比ヶ浜に教える為に散々予習したのだろう、的確にポイントが絞られていた。それを一字一句聞き漏らすまいとメモる由比ヶ浜も、真剣そのものだ。

そして2日目は、由比ヶ浜がメインであったものの、雪ノ下が傍についていた為か、完成品はどうかカレーとしての体を成してい

た。

「ゆきのん、ありがとう！　ちよつと自信付いたから、明日は一人で作ってみるよ！」

だが：由比ヶ浜の健闘虚しく、3日目は鍋が火を噴き、4日目は材木座が火を噴いた。材木座の屍しかばねを余所に、罰の悪そうな顔で「さ、砂糖を入れ過ぎたからさ：し、塩で中和しただけだもんっ！」と言いつ張る由比ヶ浜を前に、俺は軽く眩暈めまいがしたのだった。

さて：今日はどんな困難が待ち受けているだろうか。

あつという間に本日の授業が終わりを迎え、早くも放課後がやって来た。普段ならば開放感に溢れて足取りも軽くなるところなのだが、忘れてはいけない：本当の山場はこれからやって来るのだ。

途中、「え、えつとお：今日はわたしい、生徒会が忙しくてえ：つてセンパイっ、離してくださいっ！　私、まだ死にたくないんですっ！」と、涙目になりながら必死に訴えかけてくる一色を捕縛しつつ、何とか調理実習室へと辿り着いた。

ようやく諦めのついた一色を伴い、「うーっす。」とひと声を掛けて部屋へ入ったのだが、何やら雲行きが怪しい。中では無言のまま仁王立ちした雪ノ下と、しよんぼりと肩を落とした由比ヶ浜が立ち尽くし、更には不自然なくらいに部屋がシンと静まり返っていたのである。

なんか：サービス終了が決まって、過疎ってるオンゲーみたいな雰囲気だな。

「どうした、何かあったのか？」

俺の問いかけに、雪ノ下はテーブルを指差した。

「見ての通りよ。」

雪ノ下の指し示したテーブルの上には、チョコレート、スイカ、よつ〇やんイカ、酢だこ、マダムシ〇コ…その他、様々な食材が並んでいた。何か、カレーには似つかわしくない物も、ちらほら並んでるんですけど…。

「…これは何だ？」

「隠し味…だそうよ。」

雪ノ下は、自分の額に軽く手を当てると“やれやれ”とため息をついた。

そうか、この二日間はこれらを色々ブチ込んだのか…どうりで死人が出るはずだ（※材木座は死んでません）。もはや、テロと言っても差し支えない有様に、俺と一色は言葉を失った。大体…マダムシ〇コはヤヴァイだろ、マダムシ〇コは！

「で、でもさっつ、レシピ通りだったら、何か愛情込めてないみたいじゃん？」

困惑を隠せない俺に対して、自分の意図を必死に訴えかける由比ヶ浜に、“それは、最低限の腕前になってからでも遅くはないわ。変にアレンジしても、混沌とするだけよ。”と、容赦のない雪ノ下。

双方の主張が出揃うと、一色は間を取り持つ様に“うーん…どちらの言い分も分からなくはないですよね。”と言いつつ、腕組みしながら何やら思索しだした。

そしてすぐに、一色は何かを思いついたらしく、くるりとこっちの方へと向き直ると“ニヤリ”と邪悪に顔を歪めた。

「センパイは、どう思いますう？」

おい一色っ、ここで俺に振るのかよっ！

その瞬間、雪ノ下と由比ヶ浜が一斉に俺の方へ顔を向けた。

「比企谷君…？」

「ヒツキー?」

「(アナタ) ヒツキーはどちらの味方なの (かしら) !?」

食い入る様に見つめてくる二人の圧力に押され、俺は思わず2と3歩後ずさった。だが、彼女達もその分距離を詰めてくる。本能をむき出しにした様な、どうもう 獯猛さに、俺のライフは こかつすんぜん 枯渇寸前だ。一色のやつめ。さっきの仕返しのもりだな。

ともかく、これは非常に難しい問題だ。仮に雪ノ下の味方をした場合、犠牲者を出しているとはいえ、頑張っている由比ヶ浜がちよつと気の毒な気がする。かと言つて、由比ヶ浜の味方をしてしまえば、更に むくろ 骸が増える事になるだろう。恐らく俺の。

下手をすれば命取りになりかねない状況に、俺の身がキュツと引き締まった。

「えーつとだな…。」

俺がそう言葉を発した瞬間、二人の目が大きく見開かれた。かたず 固唾を呑んで見守るような雰囲気は、まるでオリンピック開催地の発表を待つ、組織委員会の面々のその様だ。思わず、カタコトで“トーキョツ” っつて言いたくなってくるが、ここは空気を読むべきだろう。

「確かに、雪ノ下の言う事が正しい。」

思わず右手を握り締め、“ふんすつ” と小さくガツポーズする雪ノ下。対照的に、由比ヶ浜は“ううつ…やつぱり” と落胆を隠さない。

「まあ、最後まで話を聞け。お前の気持ちも、決して間違いではない。」

「いーもん。どうせあたし、料理超下手だもん…。」
そう言つてしよぼくれる由比ヶ浜が、小動物の様に見えてちよつと

カワイイ。

「下手というより独特：規格外：いえ、個性的：かしら？」

雪ノ下のおんまりな呟きに、「フォローの仕方が微妙過ぎるっ!？」と驚愕する由比ヶ浜。まあ：雪ノ下にフォローらしいフォローを期待するのは無理というものだ。何せ、にっころがしでねっころがしなのだから。

「なあ由比ヶ浜：何がなんでも、ひと手間加えなきゃダメって事はないと思うぞ。」

そんな俺の一言にも「うーん、でもなあ：」と、いまいち踏ん切りのつかない様子の由比ヶ浜。かつては料理鑑賞が趣味だと豪語していたこいつも、いつの間にか作り手としての矜持きょうじというものが芽生えていたらしい：完成品はアレだけど。

仕方がない、もうひと押しするか。

「つまり何と言うか：あれだ。お前の場合、変に手を加えなくてもだな：一生懸命なのは、充分に伝わって来ると思うぞ？ 当然気持ちだつて込めるだろう、俺には分かる。」

だつてさ、考えてもみてくれ。死して屍拾う者無しがデフォルトの物体Xが、食える料理にまでクラスチェンジしてみる？ もうそれだけで、神がもたら齎した奇跡だと言つたつて良いんじゃないか？

俺がそんな事を考えているなど露知らず、「ヒツキー：」と感激した様に俺を見つめる由比ヶ浜。意外と：思つてる事の半分くらいしか伝えない方が、人間関係は上手くいくのかも知れないな：などと、その潤んだ瞳を見ながらしみじみ思つた。

まあ色々あつたが、何とか丸く収まりそうだ：なんて安心していたら、今度は一色のやつが俺の耳元へ、それも息が架かりそうなくらいに口元を近づけて、小声で囁きかけてきた。

「せんぱあい：どちらにも良い顔するなんて、ちよつとズルくないですかあ？」

そして、呆れた顔で「それって完全に、チャラ男かヒモ男の手口

じゃないですかあ」と最後に付け加えた。一色さん、それは誤解つてもんですぜ？俺が目指しているのは、専業主夫であつてヒモではない。それにお前さ…肝心な事を忘れてないか？

「もしあのまま盛られてみる。今頃火を噴いていたのは一色…お前だったかも知れないんだぞ？」

「!？」

その瞬間、一色の背筋が不自然なまでにシヤキツとした。きつと、昨日の材木座の凄惨な最期（※だから死んでません）が頭を過ぎつたのだろう。一色は、軽く顔を引きつらせつつも精一杯の笑顔を浮かべ、

「そ、そうですよ結衣先輩っ！ほ、ほらっ、Simple is best. って言葉もあるじゃないですかっ！」

と、必死に俺の言葉を補足した。更に雪ノ下もそれに続く。

「そうね。それが良いと思うわ。」

そんな、周りの声援に応える様に、由比ヶ浜は満面の笑みを浮かべた。

「うん…みんなありがとう♪あたし、頑張ってみるね！」

こうして、由比ヶ浜のマッサマンカレーは、特訓5日目にしてようやく、食べられるレベルへと到達したのであった。

本番まであと2日…なんとか間に合いそうだ。

めでたし めでたし。

「ちよつと待ちなさい、比企谷君。さつきチラリと聞こえたのだけれど、アナタが私のヒモ…というのは、どういう事なのかしら？」
雪ノ下は、感情を押し殺した様な表情で、俺との距離を1歩…また1歩と確実に詰めてくると、あつという間に俺を壁際へと追い詰めた。

ちよつと待て、ヒモ男だのチャラ男だの言ってたのは、一色だからね？ っていうか、目の光彩とか消えてて超怖いんですけどっ!?

雪ノ下は、今までに見た事がない程の、澄んだ輝きを放つ陶磁器の様に美しく、けれど全く感情の込められてない無機質な微笑みを浮かべ、俺に告げた。

「比企谷君…最期に言い残す事はないかしら？」

まるで、死刑宣告にも似たその言葉を最後に、俺は意識を根こそぎ刈り取られた。

つづく

第17・75話 マニアの財布は店のもの（某メイド
喫茶のスローガン）

「グッピー3分クッキングッ」

アナウンサーによるタイトルコールが済んだのと同時に、カウンターのの上に置かれたモニターから、あのお馴染みの音楽が軽快に流れ始め、また、マヨネーズのCMとかに出てくる、これまたあのお馴染みであるうセルロイドで作られた一糸まと纏わぬわぬ幼児人形が、画面の中を縦横無尽じゅうおうむじんに駆け回り、頗すこぶるるキレのある動きでロボットダンスを踊り始めた。

そう、遂に舞台の幕が上がったのだ。

その途端、控え室で様子を見守る俺達の間、張り詰めた様な緊迫した空気が流れはじめた。今日は“女子高生特番”と銘打たれた料理番組の収録日であり、またそれは由比ヶ浜が特別講師としてしょうへい招聘された本番の日でもあった。

「せんぱあい…結衣先輩、大丈夫でしょうかね。」

画面に映る、狂ったように踊り続けるモヒカン人形を“心ここにあらず”といった感じで見つめながら、一色は不安そうに呟いた。

まあ、一色の気持ちは分からなくもない。火を噴いて倒れ込んだ材木座が、奇跡的に意識を回復した途端“せ、拙者に毒を盛ったござるなっ!”と涙目で訴えかけてきたのは記憶に新しい。その凄惨な現場に居合わせた一色からすれば、いくら、ここ3日は食えるものに仕上がっているとはいええ、トラウマを払拭するに至ってないのも無理はないだろう。

「ああ…多分な。」

そんな一色に大してしてやれる事など無く、結局俺は自分の無力さに打ち拉がれながら、こんな気休めの言葉を掛けてやる事くらいしか出来なかった…。

すまん、ちよつと大きさに言い過ぎた。一色、お前もこの世の終わりにみたいな顔してんじゃねえよ。

一方、俺達とは対照的に雪ノ下は余裕のある様子で、人差し指を使ってリズムに合わせて“トントン”とリズムを取っていたが、しばらくしてそれが、聞き取れるか取れないかくらいの小さな鼻歌となり…やがてその鼻歌に歌詞が付いた。

♪ にゃん にゃかにゃか にゃん にゃん にゃん
にゃん にゃかにゃか にゃん にゃん にゃん
にゃ にゃん にゃん にゃん にゃん にゃ にゃ にゃ
にゃ にゃーっ

僕をナメると 荒ぶるぞっ シャツ シャツ シャツ
シャツ ♪

小声ながらもノリノリな雪ノ下さん。リズムにノッて、小首を僅かに“フンフン”と傾けながら歌う仕草が、不覚にも可愛く思えてしまつてちよつと悔しい。けれど可愛い分、即興で作られたと思われるその歌詞の殺伐さが、より一層際立っていた。雪ノ下の中の猫の人は、一体何に荒ぶっているのだろうか？

「…比企谷君、何をジロジロ見ているのかしら？」

そんな俺の猫々しい視線に気がついたのか、雪ノ下が不機嫌そうに俺を見返した。ってかお前、すっかり猫キチ○イつぶりを隠さなくなつたな。以前のお前だったら、場を誤魔化す為に罵倒の限りを尽くしたろうに…お前、少し性格が丸くなつたんじゃないのか？

「あなた…まさか罵倒されたいの？　そこまで変態だったなんて…予想外だわ。」

若干顔を引きつらせて驚愕する雪ノ下。前言撤回、切れ味鋭い毒舌っぷりは今も健在だ…っていうか勝手に思考を読むな、そして捏造

するな。

因みに俺の頭の中では、ザーさんがチキンの歌を熱唱していた。
香菜ちゃんマジ天使！

そうこうしているうちに、オープニングテーマが終わりを迎え、映し出されている映像がキッチン風のセットへと切り替わったと同時に、料理研究家の先生が登場した。

「お兄ちゃんお兄ちゃん、今日は曾野山先生だよっ！」

俺の耳元で、小町が若干興奮気味に小声で囁いてきた。曾野山先生とは、えんどう豆に煮干を突き刺して直立させたり、スライスした大根の上に生肉を乗せて食卓に並べるなど、斬新過ぎる料理の数々を発表して世間を騒然とさせている、新進気鋭の料理研究家だ。

何だか、急速に雲行きが怪しくなってきた気がするんですけど…。いやいや、革命的過ぎてネット住民達を騒然とさせているとはいえ、曲がりなりにも相手はプロだ。仮に由比ヶ浜が何かやらかしても、良い具合のストッパー役を果たしてくれるに違いない…と思いたいのだが、俺はいまいち不安を払拭出来ずにいた。

『本日は女子高生特番という事でえ…えっ？ 私女子高生だろ うって？ やだなあ♪違いますってばあ♪ホントにもうっ、激おこぷんぷん丸ですよ？ ぷんぷんっ♪』

曾野山先生は、激しく体をくねらせてモジモジしている。もしこれを戸部の奴が見てたとしたら「それはないわー。40過ぎてそれはないでしょーっ。」とさぞかし五月蠅いことだろう。

俺は思わず一色を見た。こいつが40を過ぎる頃には、このセンチと似たような感じになっているのかも知れんな…このふたり、何気にキヤラ被ってるし。

「センパイ…何か失礼な事を考えていませんか？」

笑顔すら浮かべず、刺す様な視線を向けてくる一色に、俺は抗う勇氣などない。

「い、いや…なんでもない。」

俺は慌てて視線をモニターへ戻した。

曾野山先生の自己紹介は恙無く終わり、続けて由比ヶ浜の出番が訪れる。

『さて、今日は特別講師として、由比ヶ浜結衣ちゃんに来ていただいています♪』

その紹介と同時に、画面がズームアウトして部屋全体が映し出され、かなりテンパった様子の由比ヶ浜が登場してきた。

『ゆ、ゆ、ゆいがはみや結衣でふっ！』

「！！!?」

控え室にいた俺達4人は絶句した。いや、自分の名前がカミカミだったからとか、テンパり過ぎて動きがペツ〇ーみたいになっていたからとか、そんな些細な事で絶句した訳ではない。

俺達が言葉を失ったのは、その姿だ。由比ヶ浜は、さっきまで身に着けていた服とは違い、白いYシャツにピンクのエプロン、大きなボンヤレース、細かい刺繍ししゅうなどが施された華のある西洋風の衣装によって着飾られていた。

何より、その服の性質上、大きく強調された由比ヶ浜の胸元を、雪ノ下をはじめとした3人が、死んだ魚の様な虚ろな目で眺めているのがちよつと怖い。お前ら、気持ちには分かんなくてもないが早く現実に戻ってこい。

ところで由比ヶ浜…なんでお前、メイド服着てんの？

第17・75話

マ
ニ
ア
の
財
布

は店のもの（某メイド喫茶のスローガン）

「お願いっ、明日一緒に付いてっ！」

由比ヶ浜が俺達にそう訴えかけたのは、撮影の前日：最後の試食会が行われていた最中のでの事だった。それに対して雪ノ下は“私で良ければ付き合うわ”と二つ返事で了承し、一色は“私テレビ局って初めてなんですぅ♪”と、もはや返事を聞くまでも無い。

まあ、付き添いなんて2人もいれば十分だろう。よって俺は、明日ゆっくりと寛がせてもらおう事にするかな…もちろん自宅で。

明日になったら俺… 流石はお兄様です さすおに全巻読破するんだっ！

「何を言っているの？ 貴方も来るのよ。」

寝言は寝てから言っ頂戴と言わんばかりに、雪ノ下はそう言い切った。えーっ、明日は折角のビューティホーなサンデーなんですよ？ 爽やかな日曜で、太陽が降り注いで来るんですよ？ まあ、太陽が本気出して本体ごと降り注いで来たら、地球は こっばみじん 木っ端微塵になるし全然ビューティホーではないけどな。

「だから、出かけましようよお♪手をとって！」

「そうそう、歌っちゃおうよお♪高らかにっ！」

一色と由比ヶ浜がそれに追随する。何だよ、そのミュージカルっぽいテンションは。そもそもお前ら、何で話に付いて来れるんだよ。

お前から50超だろ？
歳ごまかしてんじやないのか？

あと、その辺りにしておこうな？ これ以上は色々マズいから。

こうしてなし崩し的に、俺の日曜日が由比ヶ浜の付き添いに消費される事が決定し、更に俺の帰宅後〃何それ、小町も行きたい〃と、話を耳にしてテンションのダダ上がりな小町と合わせて、合計4名の由比ヶ浜応援団が結成される事となった。

そして本番当日を迎え、本番を前に俺達は控え室へと移動し現在に至る。

『それでは、始めて行きましよう♪由比ヶ浜ちゃん、お願いします♪』

『は、はいっ！』

緊張した面持ちの由比ヶ浜は、包丁を片手に急々と食材を並べ始めた。よかった：マダムシ〇コとかよっ〇やんイカは並んでないみたいだ。

『ま、まずは野菜を刻みますっ！』

由比ヶ浜はそう呟いたものの、震える手でよく研ぎ澄まされた包丁をじっと見つめたまま、ビシッと固まってしまい動かない。そんな、ピタリと時間が止まってしまった様な光景に対し、スタッフの間には緊張が走った。何せ、放送時間は10分しかないのだ。

誰かつ、早く由比ヶ浜の `ctrl + alt + del` ボタンを押してあげてっ！

スタジオ全体がザワザワと騒めきたつ中、しばらく固まっていた由比ヶ浜はなんとか再起動に成功した様子で、生唾をゴクリと飲み込んだあと〃えいっ〃と掛け声を掛けて、その包丁を景気よく振り下ろした。

『ぱっかーん』

そんな景気の良い音を立てて、まな板の上の玉ねぎは真つ二つとなった。もし中に桃太郎とかがいたら、火曜サスペンス劇場的なやつ目を覆いたくなる様な事態

になっていたと思われる程の見事な切り口だ。

やれやれ、これで何とか番組が進むな…などと、俺達をはじめその場にいた殆どの人間は安堵した。でもな、由比ヶ浜のテンパリレベルは、俺達の想定を遥かに上回っていたんだ…。

「ゆ、由比ヶ浜さん、それはダメっ!」

いきなり雪ノ下が大きな声をあげた…が、この場所からでは届かない。それにしても、雪ノ下は、何をそんなに慌てているのだろうか。俺は不思議に思いながら画面に視線を戻し、そしてその理由を即座に理解した。

由比ヶ浜は、まだ皮の剥かれていないジャガイモや玉ねぎの山に目を向けた後、次から次へと真つ二つに切っていったのである。山になつていく野菜の数々を見て、思わず顔を引きつらせる曾野山先生。だが、諦めるのはまだ早い。半分になっただけというのなら、まだリカバリーは可能…

『つ、続けて…ら、乱切りにしますっ!』

その瞬間、僅かな希望が打ち碎かれる様に、皮の付いたまま真つ二つに切られた野菜が、今度は細やかに切り刻まれていった。

『ちよっ…おまつ!』

曾野山先生が慌てて止めようとするも、時既に遅し。全ての野菜が、皮の付いたまま細切れとなつてしまっていた。なまじ、特訓積んだせいで包丁さばきが劇的に向上しまった事が、完全に裏目に出してしまった格好だ。

『…あつ』

どうやら由比ヶ浜も、それに気が付いた様だ。

気まずい空気がスタジオを支配する。だが。すぐに気を取り直した由比ヶ浜が、カメラに向かってはにかみながら補足した。

『え、えーつと…既に皮が剥いてあつたという設定で…』

「うわあーつ、結衣さんテキトーだなー。」

小町が驚きの声をあげる。確かにそれは否定出来ないが、現時点で

は他に打つ手が無いのも確かだ。それに、設定をきちつと定めておくのは大事な事なのだ。例えば、乗つても過去に行けないのであれば只のタクシーでしかないし、影の調査官でなければこれまたリストラ寸前な只の窓際職員でしかない。

だから思い込もうよ、”なんて皮の剥けたジャガイモなんだろう”と。

騒然とするスタジオを余所に、更に話を押し進める由比ヶ浜。

『つ、次にお鍋を火をかけますっ！』

強火で火にかけられる鍋に、次から次へと投入される野菜。油とか引いてないけど大丈夫なんだろうか…。

『あつ、油を引くの忘れてたーっ！』

俺の心が由比ヶ浜に届いたのか、慌てて油を取り出すと鍋に投入しはじめた。だが、由比ヶ浜は余程慌てていたらしく、”どぼどぼどぼどぼ…”と音を立てながら景気良く油を注ぎ込まれた鍋は、あつという間にそれによって、その中腹まで満たされる事となった。

「ちよっ、結衣先輩っ！」

その様子に一色が悲鳴をあげた。

一方、スタジオの方は蜂の巣を突いた様な大騒ぎとなった。中でも一番取り乱したのは曾野山先生で、どこかのツケメンな人の様に”スタッふうーっ、スタッふうーっ”と、大声で連呼している。お前ら落ち着け、まずは鍋の火を消そうな。

やがて、それに応えるかの如く、スタッフ数人により大きなボールが運ばれてくると、曾野山先生は由比ヶ浜に、油をそこへ空ける様に促がした。

『由比ヶ浜ちゃん、早くっ！』

『は、はいっ！』

ところが、具を受けるためのザルを展開しようとした時、曾野山先生の肘がサラダ油のボトルにヒットした。

「「あつ…！」」

その瞬間、雪ノ下と一色、そして小町の三人が同時に声をあげた。ボトルは、まるでスローモーションの様にゆつくりと2、3度頭を振った後、その速度を急激に上げて床へと落下した。恐らく蓋はしてなかったのだろう、由比ヶ浜は、その瞬間“ひやつ”と小さく声をあげ、曾野山先生は“は、早く拭かなきゃ”と慌てた声を出した。そんな2人に、更なる悲劇が襲い掛かる。

『うつひゃーっ！』

床が油まみれなせいで、足を滑らせてバランスを崩した曾野山先生が転倒し、それに巻き込まれる形で由比ヶ浜も転倒した。そして雪崩れる様に、カウンターの上に置かれた材料も、次々と派手に床へとぶちまけられた。

そんな惨事が繰り広げられ、しばらくスタジオ全体が呆然としていたのだが、比較的早く我にかえったスタッフ数人が、慌ててふたりに駆け寄った。そして、そのシーンが映し出されたあたりで、無情にも番組の終わりを告げるエンディングテーマが流れ始めた。

ちよっ…まだ全然料理出来てねえぞ、おいつ。

だが、時の流れは停まってはくれない。その非情とも思える展開の中、油まみれになって呆然とする由比ヶ浜と曾野山先生が、ドアップで映し出されたところで収録が終了した。

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」

あまりに衝撃的な結末に、しばらくの間誰一人言葉を発する事が出来なかった。

五分くらいしてから、やつとの思いで一色が“あ、明日のメニューの白玉ハンバーグって、どんなのなんでしょうね…アハハ…”と、なんとか声を振り絞ったのだが…

「そ、そうね…。」

「こ、小町気になりますう…。」

「まあ、謎だな…。」

結局、その空気を変えるに至る事は終つひに無かった。

それから後の話を、少しだけ補足する事にしよう。

結局、その後何度か撮影し直した上で、その中から良さ気なシーンを継ぎ接ぎしたものがオンエアされた。だが、冒頭のやらかしたシーンや“10分置いたものがこれです”と、作り置きした物が多用された番組構成は、放送事故を必死に回避しようと努力しつつも、その場に居合わせたスタッフ達の悲痛な叫びを連想させるには十分であった。

そして俺達は、“ああ…やはり放送事故スレッドが乱立するのだろうかなあ…”などと想像していたのだが、その大方の予想を覆して、ネットの住人達から予想もなかった切り口で、由比ヶ浜に注目が集まる事となった。

スレタイはこうだ。

【3分クッキング】ドジっこメイド降臨【おっぱいもあるよ】

着ていた服がゴスロリメイドだったのと、由比ヶ浜の可愛らしい容姿やリアクションも相俟って、スレッドは大いに盛り上がった。

“あちゃーっ”とか“うひゃーっ”と慌てふためくドジっこメイドな由比ヶ浜の動画は、あちこちのサイトへかなりの数が投稿され、その結果としてほとぼりが冷めるまでの数ヶ月の間、それはオタク共の心を鷲掴みにし続けたのであった。

そして由比ヶ浜はしばらくの間、スレツドやまとめサイトをみるたびに、頭を抱えて“ぐはあつ”と悶絶する日々を過ごす事となった。

あいつが料理に酔だこを入れたりするのは、方向性はともかく、おもてなしの精神だったんだよな…意識を根こそぎ刈り取られたけど。

俺は今更ながら、それを思い出していた。もし安西先生が、今日の出来事をVTRで見えていたとしたら、きつとこう呟くだろう。

「まるで成長していない…（料理の腕前的に）」

いや、成長はしてたんですよ、安西先生…攻撃力的には。

ただあいつの本質は、高校の頃からなら変わってなかった。ツツコミの鋭いところ、コミュニケーション能力の高いところ、料理の殺傷能力、そして優しい性根…。そう、個性というものは早々変わるものではないのだ。

ただ早々ではないにしろ、時間を掛けて少しずつ変化していくのも確かだ。だから、料理の腕が壊滅的であろうと、太陽王の事をルイルイって呼んじやったりするのも、やがては過去の出来事となるかも知れない。

でもまあ願わくば…いや、この先は言うだけ野暮ってものだ。

さて、明日も勉強会だ。それに、明日の会場は俺の部屋なのだから、早めに起きて少し片付けねばならないだろう。

そんな事を思いつつ、俺は再び夢の世界へと旅立っていった。

つづく

【おまけ】

「ヒツキー、ゆきのん、あたしまたテレビに出る事になるかも！」

「おいおい、やつとほとぼりが冷めてきたのに…また炎上するぞ？」

「ヒツキーのバカッ！ 炎上なんてしないもんっ」

「ところで由比ヶ浜さん…今度はどんな番組なのかしら？」

「実はねえ…高校生クイズだよお♪」

「……。」

「……。」

「ちよつとふたりともっ！ 何で絶句したしっ！」

「だ、だって…なあ、雪ノ下。」

「そ、そうね…。」

「ふたりともっ、無謀だって思ってるでしょっ！」

「ああ。」

「ええ。」

「即答したしっ！ ふたりとも、あたしの事バカにし過ぎだからっ
！」

「まあ…参加する事に意義があるとも言わよね。」

「今度は油を入れ過ぎない様にしろよ？」

「ちよっ！ 油なんて使わないしっ！……つもおおつ、絶対に見かえしてやるんだからっ！」

※この後、書類選考で落とされました。

第18話 勉強会という言葉の頭に「大人の」を付けると途端にエロくなるよな。

「ちよつとセンパイっ！ どういう事ですかあつ！」

受話器の向こうで、俺を頭ごなしに怒鳴り散らしているのは、一色いろはという名の女子高生：高校時代の俺の後輩である。この年の瀬の迫ったクソ忙しい時期に、いきなり電話を掛けてきたかと思えば、開口一番この調子でさつきから取り付く島もない。

そんな訳で、俺は割と平穩無事に過ごしていたこの1年の最後の最後というこの時期になって、年下の女の子から訳も分からず詰問されるという、理不尽極まりないな仕打ちを受けていた。

ところでお前、なんでそんなにお冠な訳？

「むつかあーっ！ 何慌とほけてけてるんですかつ、結衣先輩との事ですよっ！」

由比ヶ浜との事：だと？

もしかしたら：由比ヶ浜の家で、カレー喰って悶絶した話だろうか。それじゃこいつが怒ってるのって、“命を粗末にするなんてっ！ 超心配したんですからねっ、ぶんぶん♪尾木ママです。” 的な感じのやつなのかね？

。。。。

うん、無いな。一色の事だからそれは無い。あと口で“むつかあ”とか言うな、あざといから。

「ちよつ、それはそれで超ムカツクんですけど！」

一色が電話の向こうで剥^{むく}れてる様子が、手に取るように伝わってくる。

じゃあ、一体何だっというんだ？

「結衣先輩と、ほぼ毎日勉強会をしているそうですねえ？」

何か含んだ様に、語気を強める一色。毎日と言っても、まだ今日4回目を終えたばかりなんだけどな。それに、お前も受験生だから分かるだろうけど、勉強するのは大事なんだぞ？

ところでさ、その情報源なんだけど…

「小町ちゃんから聞きましたけど、それが何か？」

うん、知ってた。

最近、小町と一色の間にはホットラインが敷かれ、頻繁に情報のやり取りが行われているらしく、俺の行動のほぼ全てが筒抜け状態となっていた。俺の個人情報に関するセキュリティレベルが、ぬののふく並に低いというこの状況は、真^{まこと}に嘆かざるを得ない。

いや、そもそも何で俺が怒られなきゃダメなんだよ。

「…それを私の口から言わせますか？」

“うわあ：それないわあ”という心の声が聞こえて来そうな雰囲気、なんだか居た堪れない気分になってくる。なんか分かんが、正直スマンかった。

そんな俺の様子を察知したのか、一色は大きく息を吸い込むと、これまでとは打って変わって、ちよっぴり拗ねつつ甘えてくる幼馴染（ちよっぴりツンデレ風味）の様に訴えかけてきた。

「結衣先輩だけズルいですっ！ 私の勉強も見てくださいいよお…」
いつぞやのクリスマスイベントの時みたいに、“やばいんですう、

やばいんですう〃と連呼する一色。鼻にかかった様なあざと可愛い甘い声が、俺の庇護欲を刺激し思わずお兄ちゃんスキルが発揮されそうになるが、寸でのところで思い留まる。

「いやいや。ヤヴァイんだったら、サボらずに冬期講習に通えよ。」
そうなのだ。センターテストレベルならともかく、こいつの志望校を考えれば、予備校とかでビシバシ勉強した方が良いに決まっている。お前、うちの学校に来るんだろう？

だが、俺としては至極真つ当な事を言っただつてもりだつたのだが、一色にはそれが酷くご不満な様で、頬を大きく〃ぷうつ〃と膨らませましたよ…といった感じで〃ぷうつ〃と漏らした。

「センパイひどい、私に対する愛が感じられませーん。」

OK、ちよつと何言ってるのか分かりません。

「愛？ 何それ、美味しいの？」

そんな俺の返しに〃なっ!?!〃と声をあげた一色だったが、すぐに気を取り直した様子で思わせぶりの事を言い出した。

「良いんですかセンパイ？…そんな事言うんだったら、私にも考えがありますよ？」

抑揚のない声に、思わず背筋が伸びてしまう…ってか考えって何だよ、超怖いんですけど。

「そんな事言うんだったら…」

「言うん……だつたら？」

「…。」

「…。」

「またチューしますよ?…今度は、皆さんの目の前で。」

「やめてっ! 勘弁してっ!」

スマホに向かつて何度も土下座する俺。そんな異様な光景は、旗から見れば何かおかしな病を患っているとか、変な宗教儀式に身を投じている様にしか見えないだろう。くそっ、このえろはすめっ。

良かった…小町がここに居なくて。

正直な所、〃やれるものならやってみろっ!〃と胸を張って堂々と言い返せば、一色は怯むだろうし形成逆転出来そうな気がしなくも無いのだが、万が一…

「…分かりました。遠慮なくやっちゃいますっ!」

つてな具合に開き直られてしまったら、これまた面倒な事になる。そもそもこの間の一件で、こいつの中でのチューに対するハードルが、著しく下がってしまったとしたら…。

ああ…これアカンやつや。

もはや嫌な予感しかなかった俺は、渋々ここで折れてやる事にした…ってどうか、生意気言っつて済みませんでした。

「ふふん、分かれば良いんですっ!」

勝ち誇った様な鼻息は、受話器越しからでもトヤ顔っぷりが伝わってきてそうな程に荒いものだったが、そこはあえて触れない事にした。

だって、なんか怖いじゃん? 猛牛みたいで。

それから一色は、嬉しそうに一頻りしゃべり倒した後「じゃあセンパイ、よろしくお願いしますね♪約束ですよ？」という言葉で最後を締めくくって、程無く電話を切った。

結局押し切られてしまった…。

俺はしばらくの間、通話の切れたスマホをただ呆然と眺めていた。やれやれ、どうしたものか。だが、そんな呆然とした時間も束の間、そのうち不意にある事実へと思い至った。

あれ：お願いされたけど、具体的な日程とか決めてなくね？

…という事はだな、いざとなれば「家族がちよつとアレなんで…」とか言っただけで逃げれば完璧じゃないか。逃げちやダメだ逃げちやダメだ：なんて台詞もあるけどさ、場合によっては逃げなきやダメな時だってあるんだ。むしろ、人生の大半は逃げなきやダメまでである。

そりゃ一色から：その、なんだ。好意を向けられているのは分かっちゃいるが、あいつだつて受験生だ。今はみっちり勉強をしなければ駄目な時期だつて事くらい、分かってはいるだろう。

だから俺は決断した。

“よし、さっきの話は聞かなかった事にしよう！”と。

散々とあれこれ思い悩んだ結果、断腸の思いで心を鬼にした俺を、一体誰が責められようか（いや、できまい！）。一色よ、分かってくれ：これは全部、お前を思つての事なんだ！

こうして懸案事項が、折本かおりの言葉を借りれば“WinWin”？ それあるーっ！”という最高の形で片付いた事に、俺は胸を撫で下ろしたのであった。

け、決して面倒だつていう訳じゃないんだよ？…ホントだよ？

第18話

勉強会とい言葉の頭に「大人の」を付けると途端にエロくなるよな。

家庭教師の朝は遅い。

今日は俺の家に由比ヶ浜が来る番なのだが、勉強会を始めるのは午後からの予定だ。加えて昨日は夜遅くまで、撮り溜めていた深夜アニメを視聴していたものだから、いつもならばとつくに起きている時間にも関わらず、俺は未だに夢の住人だ。

途中、小町が「お兄ちゃん、いい加減起きてよお。小町、超つまんなーい。」と俺を起こしに来て、それに呼応した俺も必死に起きようと試みたのだが、「ZZZ…あと30年。」などと何度も繰り返しているうちに…

「もうっ、お兄ちゃんの馬鹿っ！ 朝ご飯、全部食べちゃうかんねっ！」

頗る機嫌を損ねた小町はかまくらを抱えて部屋を出ると、ドタドタと音を立てて階段を下りていってしまった。まあ…怒られても仕方

ないよな。確かに俺が悪い。この不甲斐ないお兄ちゃんを、どうか許しておくれ…心から詫び、るか、ら…もうす、こし…。

「比企谷、海賊王に私はなるぞっ！」

平塚先生は、素早い動きでスワンボートの屋根の上に攀じ登ると、そう高らかに宣言した。当然の事ながら、周囲からはその姿が奇怪に映ったらしく、平塚先生（と俺）は休日を公園で楽しんでる家族連れやカップル達の注目を、大いに集める事となった。

ちよっ、アラサーにもなつて何やつてるんスかつ。

母親らしき人物が子供の目を塞ぎ、シンデレイ“芯次威ちゃん、あんなの見ちゃダメよっ！”などというヒソヒソ声が聞こえてくると、同じスワンボートに乗船している俺としては、本当に居た堪れない気分になってくる。

まさか、DQNネームを名付けるような人種に、後ろ指を指される日が来ようとは…。

「先生、もうこれくらいに…！」

流石に堪え切れなくなつて、遠慮がちに止めに入ろうとした瞬間、サイドフレームに手を掛けた平塚先生が“えいつ”とタイミング良く屋根から降りて来た。そしてその加速度にブレーキなど掛かる事は一切無く、先生の右足が俺にヒットした。

「ぐはっ!？」

その結果、俺の体は思いっきり宙を舞い、平石の様に2〜3度くらい池の水面を切った後、留めと言わんばかりに“ザッバーン”と激しく音をたて、スタート地点から5mくらい先にて着水する事となった。この滑空距離だったら、鳥人間じゃなくて只の人間だ。

「ごつめえん比企谷っ（はあと）今のはその…過失なんだ♪大層な技とかではなくて、これは…そう、ただのキックなんだっ♪」

可愛く言ったって俺はごまかされんぞっ！　そもそも過失の意味

合いからして、色々ツツコミどころ満載だからっ！ 今、確実に“キック”って言ったよね、この人。

つまり、端から突き落とす気満々だったって事じゃないか：ってか、モジモジとワザとらしく乙女をアピールしてないで、早く助けて下さいよ！

ワザとらしい乙女：というあたりに気を悪くしたのか、平塚先生は“ワザとらしいもなにも、私は乙女だっ！”と言わんばかりに不機嫌な様子で、一向に俺を助ける気配が無い。ちよっ、見てないで早くっ：マジでヤヴァイって。

だが平塚先生はその後動く様子など微塵も無く、スワンボートの上で仁王立ちになると“努力と根性があれば自力でも大丈夫なはずだっ。オオタコーチも言ってたぞ！”と、ドヤ顔で言い放った。

そうだったんだ：パトラッシュ、僕はようやく分かったよ。この人、そもそも助ける気なんて全然無かったんだ…。

あと、オオタコーチって誰？

だが、そんなツツコミを入れる間も無く、俺の方は段々と余裕が無くなって来る。泳げないわけではないハズなのに、体が全然前へ進まない。それどころか、体が激しく左右に揺さぶられ、ズブズブと沈んでいく感じた。

マ、マジでヤバイっ！ た：たすけ、て。

平塚先生は修造の様に“熱くなれよっ！”とか“ワカメ喰えよっ！”などと暑苦しくテンションを上げようとするばかりで、正直役に立ちそうに無い。ああ、これはもうダメかもわからんね…。

だが、神様ってのはいるもんなんだな。

いよいよ意識が遠のき始め、“ああ：いい人生だったなあ”などと回想が始まった頃、突如として救いの手が差し伸べられた。男でも女でもない、第三の性を持つ人物：

「と、戸塚たんっ!？」

なんと、天使の格好をした戸塚が、ゴンドラに乗って空から降りてきたのだ。えっ？ 屋外にいたはずなのに意味が分からないだっ

？ そんなの、戸塚さえいれば些細な事じゃないかつ！

戸塚は、それこそ見る者全てを恋に落としてしまいそうな微笑を俺に向けると、大きな浮き輪を差し出した。

「八幡、これ使つてよ♪」

戸塚たんマジ天使っ！ もしかしたら、俺がキツクをぶちかまされたのも、きつとこの伏線だったのではないだろうか。そう思うと、あの平塚先生すら神様の様に思えてくる。俺はこの世の全てに、そして生きている事に感謝の祈りを心の中で捧げつつ、その浮き輪を受け取った。

だが、これで助かった…と安心したのも束の間、今度は俺の手の平に、ズシリと重い感触が押し掛かった。

へっ、なんで？

俺が呆気に取られている間にも、状況は更に悪化してどんどん身動きが取れなくなっていく。一方、それを満足そうに見届けた戸塚は“じゃあ八幡…またね♪”と一際可愛く微笑むと、ゴンドラに乗ったまま雲の向こうへと消えていった。

「ちよっ、戸塚っ…信じてたのにつっ！」

セントバーナードが引つ張るゴンドラに乗って小さくなっていく戸塚を、絶望の淵に叩き込まれた様な思いで見送る俺。一度は助かったと思っただけに、その反動が辛過ぎる。

「もがっ…」

動きを封じられ、遂には口まで押さえ込まれて呼吸を封じられた俺は、どんどん意識が遠くなっていた。

あれ、前にもこんな事が無かったっけ…。

ここにきて、ようやく俺の目が覚めた。

「・・・知ってる天井だ。」

結果から言えば、またしても夢オチだった。それにしても毎度毎度、何てご無体な夢なのだろうか。前は確か、ハニトーで窒息だったっけ。つてか・・・そもそも、戸塚が俺を陥れたりするわけがないじゃないか。もし本当にやられてたら：泣くぞ、全力で。

ともかく、今までの出来事が夢オチである事に酷く安堵した俺。良かった：スワンボートの屋根の上で仁王立ちする人や、罪も無いのに池に突き落とされた人も居なかったんだ。

けれど、現実には現実で想定外の連続だ。現に、目覚めてまだ5分と経ってないにも拘らず、かかわらず早くも俺は、思わず説明を求めたい事象に遭遇したんだ。そろう

「お前…ここで何やってんの？」

そこには何故か、由比ヶ浜がいた。

それも、俺の上に^の押し掛^かか^った状態^たで。

「ちよつ、どつから入ってきたのっ!?!」

俺達の間^に遮る物は何も無く、由比ヶ浜の大きく見開かれた瞳と俺の濁った目とが図らずもかち合い、そこで俺の意識は、急斜面のゲレンデを直滑降で滑り降りる初心者スキーヤーの如く、急速に覚醒したのであつた。

「うっ、あつ、え、えつと…や、やつはろお!?!」

由比ヶ浜の、僅かに開いた口元から漏れる“もわあつ”とした熱い吐息が俺の鼻先を掠め、それが俺達の距離の近さをより一層意識させた。少しでも顔を上げれば、唇と唇が重なり合いそうなの近きに、思わずドギマギさせられてしまう。

一方由比ヶ浜の方は、俺がこうもあつさりと目覚めてしまった事こそが、この現実世界における想定外だったと言わんばかりに、顔を真っ赤にして口をパクパクさせている。つてか、驚きの声まで“やつはろお”つてのは正直どうよ?

まあ：旗から見れば、お年頃のお嬢さんが寝ている男性を押し倒している様な状況なのだから、それを見られて慌てる気持ちも分からなくはない。もし第三者に見られてもしてみろ：変な渾名^{あだな}を付けられるぞ。そうだな…明日から“えろがはま関”と呼ばれるまでである。まあ：その何だ。誰にも言わないから、とりあえずそこをどいてくれ。

だが由比ヶ浜は、俺の言葉など耳に入らない程にテンパっているのか、固まったままそこから離れる気配が無い。それに、よくよく耳を澄ましてみると“ヒ、ヒツキー、手つ…手つ”と小さな声でうわ言の様^にに呟^いている。

そう言えば、かまくらの機嫌が悪い時に“お手”を要求すると、無

愛想な表情でフロアリングの床を“ダンツ”って尻尾でやるんだよなあ…などとぼんやりと考えた時、ふと俺の両手に違和感に気がついた。

「あれ、この感触は…。」

そう、夢の中で戸塚から貰った浮かない浮き輪の手触りが、俺の掌われのてのひらに残っているのである。簡単に言えば、いつぞやの“人を駄目にするクッション”の様な、ふかふかとしつつズシリと重い、あの感触だ。

それは、俺の掌から零れ落ちそうな程の圧倒的な物量を誇り、また指と指との間から溢れてしまいそうな程に柔らかく、そして人肌のように暖かい。

ん？ 人肌…？

ああ、これは触ったらアカンあれですわあ…。

少し視線を下へ逸らすと、大方の予想通り、俺の両腕は由比ヶ浜の体を下支えする2本の柱の様にぐっと延び、その先でこれまた俺の両掌が由比ヶ浜の2つの胸の膨らみを、指がめり込む程に激しく鷲掴みにしていた。

おっぱいさんやつ！ おっぱいさんの降臨やつ！

只でも豊満な2つの膨らみは、下からの圧力に押し潰されてその形が大きく“むにゆり”と歪められ、また、激しく寄せて上げられた事によって谷間の輪郭がより強調された格好となり、扇情的な姿となつて俺の目の前に晒されていた。

更に、距離が近い事も相まって押しつぶされた胸元からは、ぎゅつと搾り出されたかの様な女の子特有の甘く生々しい体の香りが濃密に漂ってきて、俺の鼻腔をくすぐった。少しでも気を抜くと、このまま顔を埋めてしまいそうになる程にたまらなくなってくる。

ちよつ、早くどいてっ！ ホント、色んな意味でヤヴァイからっ！
潜在的な（主に俺の中のオオカミ的な）危なさを感じ取った俺は、ともかくこの状況を打破せねば…という僅かに残った理性を掻き集め、由比ヶ浜の体を起こそうと試みた。だが、俺の手に力を込めた瞬間、俺の掌は更に由比ヶ浜の胸にめり込んでしまい、凶らずも両胸を下から揉みしだく事となってしまった。

強く驚掴みにされた上に、下から捏ね繰り回される様に胸を揉みしだかれた由比ヶ浜は、強く目を閉じて僅かに“んっ…っ”と声をあげたかと思うと、体をびくんびくん…と軽く2度震わせた。

そして、薄く目を開けて軽く呼吸を乱したまま、まるで湯上り直後の様に顔をほんのりと上気させながら、弱々しい声で呟いた。

「あつ…ヒ、ヒツキい…ダメだよ…」

だが、その言葉や弱々しきとは裏腹に、由比ヶ浜の視線は力強く、俺を捕らえて離さない。それまでシンとしていた部屋には、“はあつ…はあつ…”という由比ヶ浜の荒れた息遣いだけが響き渡っていた。

やがて、由比ヶ浜は何かを決意したかの様に、俺のシャツをギュツと握り締める。

「ヒツキい…あのね…」

そんな時だ。勢い良く部屋の扉が開け放たれた。

「結衣さあーん、どうですか？ お兄ちゃん起きましたかあ…って、ええええっ!?!」

入ってきたのは、想定外の出来事に驚きを隠せません…といった感じの小町だった。

ベッドの上で寝ている俺と、その上に押し掛かっている由比ヶ浜。そして俺の両手は由比ヶ浜の胸を驚掴みにしたままだ。そして、その光景を目撃して固まった小町。

「……。」

「……。」

「……。」

まさにザ・ワールド：時が止まった感じだ。どっかにDIOとか居るんじゃないの？

気まずい空気が俺の部屋を支配し、しばらくの間誰もが声をあげられずにいたのだが、2〜3分してその沈黙を破ったのは、やはり小町だった。

「小町、お姉ちゃんも欲しいけど…甥っ子とか姪っ子も欲しいなあ…なあんて。」

“あ、あはは…”と乾いた笑い声を出す小町。だが、何とか状況を打破したいと全力で気を使った小町の奮闘も虚しく、部屋の空気はより一層気まずさが増していくばかりだった。

つづく

【おまけ】

「で、お前…結局何を言おうとしてたんだ？」

「え、ええっ!?そ、そんなのナイショだよお…」

「内緒って言われると、余計気になるよな。」

「ヒツキーっ、そこは気にしちゃだめっ！」

「いやいや、気になる事は意地でも吐かせたいだろう…人間だもの。」

「ちよっ！ みつおはそんな事言っていないからっ！」

第19話 俺の転職先が、こんなにブラックな訳がない（※ブラックです）

「ハイハイイ♪ちよっぴりお待ち下さいねえ♪」

インターホンを押ししてしばらくすると、家の奥からこちらに向かって放たれた小町ちゃんの小気味良い声が、辺りに響き渡った。

今日の勉強会、ホントはお昼過ぎからの約束だったんだけど…ほら、アレじゃん？ ヒツキー、冬休みが終わったらまた向こうに行っちゃうじゃん？

だから、会える時は極力会っておきたいなあ…なんて思ったアタシは、目が覚めるや否やせつせと身支度を整えると、朝ごはんもそこそこ家を飛び出した。

だけどヒツキーってば、昨日の帰り際に

「今晚は、撮り溜めたプ○キュアでも見るかな…13話分くらい。」

って言ってたから、もしかしたらまだ寝てるかもかなあ…だったら起こしちゃうの悪いかなあ…。

ってか、1クールも撮り溜めちゃってるしっ！

そんな思いが脳裏を過ぎって、遠慮のあまり思わずその場で立ち止まりそうになったけど、そんな思いを打ち消す様に私はブンブンと激しく首を横に振った。

いやいや、いくら休みだからってダラダラと寝てるのは良くないよね？ 生活リズムが狂っちゃうもん。そう、だからこれはヒツキーの為でもあるんだらっ！

こうして、色々と自分の行動に理由を付けながら先を急いだ結果、約束の時間よりも2時間以上前倒しして、私はヒツキーの家の前へと

辿り着いた。

勢い良く玄関扉が開かれたと同時に、私の立つ門前まで駆けてきた小町ちゃん。一目で大歓迎って分かるくらい、向日葵の様にペアッと映えたその笑顔に、私の“やつはろー”にも力が入る。

「結衣さん、お久しぶりですっ！ やつはろーってのも超懐かしいですねっ！」

「うん！ 超久しぶりだねっ！ 元気にしてたかなっ？」

前に会ったのは、確かゆきのんの送別会以来だから…もう半年以上前になるのかあ。時が経つのもってホント早いよねー。油断していると、うっかり婚期を逃しちゃうかも。

そんな空白の時間を埋めるかの様に、近況トークに花が咲く私達。良かった…小町ちゃん、前と全然変わってない！

「逆に、結衣さんは変わりましたねえ…すっごく。」

小町ちゃんはそう呟くと、なんだか遠くを見つめる様な、虚ろな視線を私の胸元へ落とした。それまでの穏やかなムードから一転して、辺り一面にキナ臭い空気が漂い始める。

あれ…小町ちゃん、なんか目が据わってない？

その光彩の消えた瞳をこちらに向けたまま、フラフラとした足取りで1歩、また1歩と私との距離を確実に詰めて来る小町ちゃん。それに合わせて、思わず私も2歩3歩と後ずさる。

ひえーっ、なんだか怖いよー。

こうして、私達の距離はゆつくりと…しかしながら確実に縮まっていった。そしてあつと言う間に私はフェンス際に追いやられ、袋小路へと追い詰められた格好となった。

その刹那…

“ニヤリ”

小町ちゃんの顔が怪しく歪んだのと同時に、その両腕が私の胸を目

掛けて”にゆっ”と伸びてきた。

「ひっ、ひゃーっ！」

言葉にならない声をあげる私。ちよっ、小町ちゃんっ！ それセクハラだからっ！

けれど、あまりの迫力に飲まれた格好となり、私は指先ひとつ微動だにする事も出来ず：結局、抵抗らしい抵抗も出来ないまま、私の胸は驚掴みにされてしまった。

「結衣さん：一体何を食べたら、こんなに大きくなるんスか？」

そう呟きながら、あたしの胸を弄ぶ小町ちゃん。まるで何かの生地を捏ね練り回す様なその動きに、一切の妥協は感じられない。ちよっ、どうしてこうなったのっ！あまりに突然過ぎて、身動きひとつ取れないよーっ。

そんな、フリーズしてしまった私を余所に、“ふむ：これは前年比5cmアップってところですかねえ：。”と呟きながら、まるでソムリエか何かの様に吟味する小町ちゃん。

：つて、触っただけでそんな事まで分かっちゃうのっ！？

つとこんな具合にしばらくの間、成す術無く揉まれ放題揉まれていた訳なんだけど、5分くらい経った頃、不意にとつかよいうかというか、小町ちゃんの目に再び光彩が燈った。

「・・・はっ!?小町は一体何をっ!!」

私の胸を驚掴みにしていた手を慌てて離れた小町ちゃんは、その自分の両掌を広げたり握ったりさせながら、ただ呆然とそれらを見つめていた。

さっきのアレって、無意識だったんだ：。

何とも言えず苦笑いする私に、正気に戻った小町ちゃんが慌てて頭を下げてきた。

「ゆ、結衣さんっ、ゴメンナサイっ。つい出来心でっ！」

何度も何度も練り返し頭を下げる小町ちゃんを、慌てて止める私。

そんなに気にしなくても大丈夫だよつ。ほら、女の子同士だからギリギリセーフじゃん？ そりゃあ…もしこれがヒツキーだったら、すつごい戸惑っちゃうところだけどさ…。

「全然気にしてないから、顔を上げてっば。ねっ？ 大丈夫だからさ♪」

努めて明るく振舞ったのが功を奏したのか、小町ちゃんはホツとした様に表情を緩ませて“結衣さん…すつごく優しいっ！ ありがとうございます！”と声を弾ませた。

うんうん、やっぱり小町ちゃんはこう…元気でないとねっ！

ただ…

「すつごく大きくてフカフカで…ビーズクッション触ってるみたい…に超気持ち良かったです！」

と、興奮気味に付け足された最後の言葉に、ほんのちよつぴりモヤツとした。

第19話

俺の転職先

が、こんなにブラックな訳がない（※ブラックです）

「済みません結衣さん、兄なんですけど…実はまだ寝てるんですよ。」

ソファーに腰掛けている私の目の前に、トレーに乗せた暖かいカップを差し出した小町ちゃん。

「もうさつきから何度も起こしてるつてのに、兄ときたら『あと30年…』なんて言うんですよっ！。そんなに寝られたら、兄の面倒見ている間に婚期を逃しちゃいますよお…」

といった具合に一気に捲くし立てた後、小町ちゃんは1つ大きな溜息をついた。

って、面倒見る気あるんだっ！

相変わらず変に絆の固い兄妹だなあ…なんて事を思いつつ、私は淹れてもらった紅茶を口にする。ふう…あつたかいなあ♪こういう寒い日は、あつたかいものに限るよねえ…和むなあ…。

すっかりとまったりモードとなっていた私。けれど、そんなのんびりした時間の流れは、5分もしないうちにあっさりと断ち切られた。

「そんな訳で小町の婚期を逃さない為、結衣さんをお願いがあるのですっ！」

小町ちゃんは勢い良く立ち上がると、真剣な眼差しをこちらへ向けて敬礼した。それまで対岸の火事を見ている様な立場から、一転して話の矛先がこちらに向いた事で、思わず私の体はビクツと震えてしまった。

それにしても、お願いって何だろう…。ま、まさかつ、ヒツキーの面倒を私に見て欲しいみたいな話じゃ…。

「ただいま、結衣。今帰ったよ」

「おかえりなさい、アナタ♪お食事にします？ お風呂にします？

それとも…」

「夕食、食べても大丈夫か…？ 生命の危険的な意味で。」

「ちよっ！ ヒツキーっ、それ失礼過ぎだからっ！」

…マズい、新婚なのに甘さが全然ないしっ！ 新婚なのにいきなり離婚危機!?

で、でも落ち着いて私っ！昔とは違うんだからっ。わ、私だっって頑張れば…

「5回に1回位は成功するもんっ！」

「はい？」

それまでの、新婚カップルのイチヤイチャ(?)シーンが一気に霧散して、我に返った私を待っていたのは、不思議そうに私の顔を覗き込む小町ちゃんだった。

い、いけないっ。いつの間にか、し、し、新婚生活を妄想しちゃっ
てたしっ！

「あ、え、えっとな、今の無しっ。な、何でもないんだよ♪」

心の奥底を悟られない様に、必死に誤魔化したけど…大丈夫だよね
?

あとヒツキー…妄想の中までデリカシー無さ過ぎだからっ！

小町ちゃんは、増々不思議そうに首を捻っていたけれど、しばらくすると小声で“まっ、いっか♪”と呟くと、何かを企てた時の様に不適な笑みを浮かべた。

「その、お願いなんですけど…」

「うん、お願いって何かな？」

私が話に食い付いた事で、まるで“にんまり”という音が聞こえてきそうな程に、小町ちゃんの笑顔に益々磨きがかかる…もちろん、悪

い感じに。

なんか、変な無茶振りとか来そうなんだけど…。

その直後、予感が的中した。

「その、兄を起こして欲しいんです。出来れば新婚ホヤホヤの新妻さんみたいです♪」

「し、新婚ホヤホヤのに、に、新妻っ!？」

「あなたっ、もう朝ですよ?」

ゆっさゆっさ (↑体を揺すっている)

「…なりなりでたけたけ…ZZZZ」

「ちよっ、なんで朝からラーメンだしっ!」

「……。」

「……。」

「…らっせの人、辞めちゃったのかよ…ZZZZ」

「なんか、すっごいシヨンボリしてるっ!」

「……。」

「……。」

「ほらっ、早く起きろし。朝ご飯冷めちゃうってばっ。」

「なっ…あ、朝ご飯…だどっ!？」

「あっ、おはよーヒツキー♪目が覚めたあ?」

「……。」

「……。」

「ちよっ、何でまた布団被ったしっ! 起きろしいいっ!」

(死にたくないっ、死にたくないっ…)

「もしもし結衣さーん、帰って来てくださーい。」

気が付くと、小町ちゃんが私の視界を遮る様に、目の前で手をヒラ

ヒラとさせていた。はっ…私ってば、またもや妄想の世界につ!?

「あはは…ゴメンゴメン。新妻つぼくは無理だけど、頑張ってみようかなあ…」

私がそう言い終わらないうちに、小町ちゃんは「ホントですか?」

「ありがとうございますっ!」と、両手で私の右手を包み込む様に手を合わせると、最後にこう付け加えた。

「それじゃあ…登校途中に、彼氏を迎えに来た彼女の感じをお願いしますっ♪」

「か、か、か…彼氏っ!?!」

こうして今度は、彼氏と彼女のシチュエーションが私の脳内で妄想されたのだった。

「それじゃ結衣さん、お願いしますね♪」

小町ちゃんは私をヒツキーの部屋へと案内すると、最後に「それじゃあ、幼馴染みが照れ隠しで怒ってる感じをお願いします♪」と言いつつ階段を下りていった。

ちよっ、何それっ! 意味分かんないしっ!

…って突っ込んだところで、部屋にいるのは私と未だ惰眠を貪っているヒツキーだけ。このふたりつきりというシチュエーションに気が付いてしまった私の鼓動は、否が応にも高鳴り始める。

「お、お、おはよお…ヒツキー?」

この、何とも言えない緊張感を破る様に恐る恐るヒツキーに声を掛けてみるも、こんな小さな囁きでヒツキーが目を覚ますわけもなかった。

た。

規則正しく寝息を立てるヒツキーに、私は意を決して“ぐいつ”と体を近づけ、ほとんど耳元と言っても良いくらいギリギリまで顔を寄せて、私は再び囁いた。

「ヒツキー朝だよ…起きてっ。」

「むにゃ…あと35年…ZZZ」

「つて、何か5年増えてるしっ！」

返事というよりは寝言に近い受け応え（…というかボケ？）に、ヒツキーの熟睡っぷりを実感した私は、少々肩透かしを食らった感じが否めない。

ほら…私だけドキドキさせられるのは、なんか悔しいじゃん？

私は抗議の意思を視線に込め、ヒツキーの顔をじっと覗き込んだ。けれど、そんな私の思いなど微塵も届く様子もなく、ヒツキーは呑気に寝息を立てていた。

むうーっ…なんかムカツクう。

だから、そんな気持ち私が私の右手を突き動かして、ヒツキーの鼻を摘ませたのは決して責められない事だと思っただ、私。

だって、悪いのはヒツキーだもん。私、悪くないもん。

最初は軽く鼻を摘んだり離したりする程度だったけど、なんだか段々と楽しくなってしまうって、軽くホッペを突っついてみたり、両手で顔を挟みこんで変顔にしてみたり…私のイタズラは加速度的にエスカレートしていった。

…サインペンが視界に入った時、額に“肉”の文字を書きたい衝動に駆られたけれど、流石にそれは洒落にならないので、そこはなんと

か耐え抜いた。

寸でのところで思い留まった私、超エライっ！

けれど、そんな心の葛藤が繰り広げられている事など知る由もなく、相変わらずヒツキーは目を覚まさない。そんなヒツキーの顔を、私は再び覗き込んだ。

気が付かなかったけど、ヒツキーの睫毛超長ーいっ！ それに、いつもは目が死んでるか分からなかったけど、こうして目を閉じてたら…何かマトモな人みたいじゃん。

何気ない気持ちで手を伸ばし、その指先でヒツキーの睫毛にそっと触れてみた。

「うわぁ…。」

思ったよりもずつと繊細な柔らかさに、軽い衝撃を受ける私。

続けて少し下へ視線を落とすと、今度は僅かに開かれた唇が目に入った。もはや、ヒツキー観察に一切の遠慮の無くなった私は“にゅっ”と手を伸ばして、そこへ自分の指先をそっと押し当てた。

「ほええ…男の子なのに、すっごい瑞々しい。」

最初は優しく触れているだけだったけど、慣れてきて事もあって割と夢中になって“ふにふにっ”と突っつき始めた。なんか、超プリプリしておもしろーい♪

そんな訳で、調子に乗ってやたらと突っついていたんだけど…

「…うーん。」

小さく声をあげたヒツキーは、体を軽く伸ばし始めた。

やばっ！ 起きちやうかもっ！

けれども幸いな事に、ヒツキーは2〜3度左右に身を振ると再び寝息を立て始めた。

「ヒツキー…起きてないよね？ 寝てるよね？」

返事の無い事を確認して、私は改めて大きく胸を撫で下ろしたのだった。

危ないところだった…。

気持ちを落ち着けた私は、何時の間にか布団の上からヒッキーに押し掛かる様になっていた自分の体勢に気が付き、慌てて上体を起こした。そして思わず、恥ずかしさで火照った顔を自分の両手で包み込む。

その時…僅かな湿り気が残る人差し指が、私の唇をそつと掠めた。ついさつきまで、ヒツキーの唇に触れていた…その指だ。

こ、これつてもしかして、か、か、間接…。

その瞬間、心臓が一度大きく“ドキン”と跳ねて、その後は“とくとくん” 凄く速さで鼓動を打ち始めた。

私は、軽く湿り気を帯びた人差し指をじつと見詰め、加えてヒツキーの口元とそれを何度も交互に見比べた末に、思わず“ごくり”と生唾を飲み込んだ。

何度も大きく深呼吸し終えた後、意を決した私は、震える指先を再び自分の唇へと押し当てようとゆっくりゆっくり近づけた。5cm…3cm…と、確実に縮まっていく距離。

そして、それが触れるか触れないかの刹那…私はそつと瞳を閉じた。

そんな時だった…。

「お前…(こ)で何やってんの?」

怪訝そうな表情を浮かべたヒツキーが、私の顔を覗き込んでいた。

つづく

【おまけ】

「ちよっ、タイトルと本編全然関係ないしっ！」

「そりやまあ…なんだ、お察しくださいって奴だろ。」

「そうだけどさあ…投稿期間だつて開きまくってるし…」

「そりやまあ…なんだ、お察しくださいって奴だな。」

「ううっ…なんか、働くのが怖くなってきたなあ…」

「だろう？　そこへ行くと、俺の夢は完璧だ。専業主夫に、俺はなるっ！」

「ヒツキーってば…相変わらずなんだねえ…」

第20話　もしあの場面で、ネロがブラックブラックガムを持ってさえいたならば・・・

ウィキペディアによれば、リスクマネジメントとは“リスクを組織的に管理（マネジメント）し、損失などの回避または低減をはかるプロセスをいう”のだそうだ。

だとすれば、材木座の様なぼっちからすれば“年賀状が来ないのは、皆メールで済ませているからでござる”ってな具合に、正月早々親兄弟に対して取り繕ってみたり、修学旅行の班決めの時徐おもむろにに国語の教科書を開いて“物語に集中し過ぎて、周りの喧騒なんて全然気付いてないでござるよ”アピールを試みたり、はたまたチュウパチャップスを挿したヘッドホンを耳に当てたまま机に突っ伏して、昼休み中寝たふりを決め込んで中2感を演出したりする…などといった、孤高の存在を演じる事によって己の自尊心を守るといふ涙ぐましい努力は、一種のリスクマネジメントであると言えなくもない。

しかしながらそんな思惑とは裏腹に、日常生活において屢々しばしばその身に降りかかって来るリスクをマネジメントしきれずに、かえって心の奥底を大きく抉られるという結末を迎えるぼっち達も少なくない。

そりやそうだ。

どんなに取り繕ったところで、ぼっちは所詮ぼっちなのだ。そもそも、事ある毎に“孤高なオレってば超カツコイイ！”アピールを重ねたとしても、自分自身が思うほどに他人はこちらを見ちやいない。むしろ、人との繋がりが希薄なだけに存在感が無さ過ぎて、ふとした拍子に

「比企谷？　誰、それ。」

などと真顔で言われるまでである。相手に悪意が無いだけに、そのダメージは地味大きいのだ。

だがちよつと待つて欲しい。

リスク自体を回避する事自体は比較的容易であるにもかかわらず、リスクマネージメントという盾を手にしているとはいえ、それ自体を避ける事はせずにあえてその中に身を投じる…(そして案の定心理的ダメージを受け悶絶する)といった、一種矛盾を含んだ行動を取る者が後を絶たないのは、自らを孤高の存在であるとアピールしながらも、その実他人の視線が頼るすくぶ気になってしまうという、アイデンティクライシスよろしく、心が左右にグラグラと揺れ動いているからなのではないだろうか？

だとすればそういった者の大半は、心の奥底に『不本意ながらもぼっちな境遇を受け入れつつも出来れば脱ぼっちを果たしつつ、あわよくばリア充共の仲間入りを果たしたいんです、私(晴れた空が好きです)』という、ある意味“犬伏の別れ”的な心の葛藤を隠し持っているのではないかと推察…いや、ここは敢えて“隠し持っているに違いない”と断言する事にしよう。

そこへいくと、俺のリスクマネージメント…いや、もうこれは新しくカテゴライズされたマネージメント、言うなれば“ぼっちマネージメント”って呼んでも良いよな。

とにかく、そのぼっちマネージメントっぷりは彼らと一線を画している。

まず、正月に着信メールを装って携帯のアラームをセットしたりはしないし、班決めの際に読むのは国語の教科書ではなく場の空気だ。むしろ、自ら進んで穴埋め要員となって、

「ひ、ヒキタニ君…良かったら組まない？」

といった具合に遠慮がちに声を掛けられるという経験を山ほど重

ね、スーパーサブたるポジションを堅固に築き上げた結果、その道ではもはや熟練者マスターアジアと言つても差し支えの無い域に上り詰めたまでである。

そして、ぼっちにとって一番の山場であると言つてもいい：昼休みに至つては、その大半をベストプレイスにてその時間を費やしてきた。

この様に、第三者との接触を“持たず作らず持ち込ませず”いうぼっち3原則：即ち無の境地へと辿り着いた俺の心理に、前述の者共の様なブレや葛藤など欠片も存在するはずもなく、それは即ち、ぼっちという世界での悟りを開いた“分かっちゃった人達”の仲間入りを果たした：いや、むしろ俺がトップランナーであると言つても過言ではない。

…多分な。

ともかく、どこかのバンドみたいに“他のメンバーがボーカルを残して脱退してしまいました(そして脱退メンバーで新たにバンドを結成しました)”みたいな状況は、見る者の胸を強く締め付けるし、またその哀れみの視線を向けられた当事者は多くの場合、夜寝る度にその光景を思い出し、一人布団の上で悶絶する事になるだろう。

華々しく散っていた先人達の経験：いや、むしろ歴史と言つてもいいだろう、現代を生きる我々はそれらを教訓とし、決してその悲劇的な歴史を繰り返してはならない。

愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶのだ。

結論。中途半端に群れない事：つまりぼっちである事こそが、人生における最大のリスクマネージメントなのである。

ア○イさん…メンタル超強え。

だが、そんな特権階級ポッチマスタたる俺にだって、リスクは突然に…しかも容赦なく降りかかってくる。

「アザレアをく♪これ以上歌うと色々イヤヴァイから歌わないし
くっ♪」

台所の奥から、一度耳にすれば誰もが“上機嫌なんだな…”と分かるくらいに陽気な鼻歌が、先程から絶え間なく聞こえてきている。ちよつと鼻の掛かった甘い声に加えて適度に外れる音程により、却つてその可愛さが頗るすこぶる強調されて、それらはタンポポの綿毛の様にふわりと柔らかい旋律となつて、俺の耳を心地良く撥つて来る。

本来であるならば、そんな緩い空気にその身を任せ、再び夢の世界へ旅立つて惰眠をむさぼりたいところなのだが、そんなアップテンポでご機嫌なサウンドと反比例するかの様に、俺の周りに漂う空気は重く、どんよりと淀んでいった。

そう、察しの良い皆様は既にピンと来ていらつしやるかも知れないが、その戦慄…もとい旋律の主は由比ヶ浜だ。

「ああっ!?!結衣さんそれはっ!!」

時より、その穏やかな旋律を打ち破るかの様に聞こえて来る小町の悲痛な叫び声によって、壁を隔てた向こう側で起きている出来事の凄惨さが、より生々しくこちらへ伝えられてくる。

これは…ダメかも分からんね。

それから更に幾ばくかの刻が流れ、俺の目の前には何とも形容し難い物体Xが、ど派手な湯気を噴き上げながら、あたかも己の存在を誇示するかの様に鎮座していた。

「えへへ…ちよつと失敗しちゃった♪」

そう言いながら、軽く頬を染める由比ヶ浜。

ちくしょう…悔しいが可愛いじゃないか、この野郎っ！ ダン〇ンこの野郎っ！ だが、そんな可愛い仕草がコントラストとなって、却って物体Xのヤヴァさが強調されてしまい、それを口元に運ぶという俺の決心を、大幅に鈍らせた。

つてか、失敗とかいうレベルじゃないだろ…これ。

そんな空気を察したのか、由比ヶ浜が

「む、無理しなくても良いから…ね？」

と、寂しそうに視線を落とした。

そんな一連の仕草が、俺の罪悪感をチクチクと刺激する。

いやー、これマジでヤヴァイでしょー！（戸部風）

そんなやり取りを見ていた小町が、もどかしそうな声で俺の耳元で囁いた。

「お兄ちゃん、何やってんのさっ！ ここでビシツと根性出さないと、小町的にポイント低いよっ！」

お前は鬼か。

とは言え、ここまで来ては流石に逃げられないという事も分かっているんだ…ああ、分かっているとも！ ほら、男なら、負けると分かっているでも戦わなければならぬ時がある” って、ハーロックと松本先生も言っていたしな。

ここでようやく、俺は腹を括る事にした。

相変わらず勢いよく煙を噴き上げているそれに一瞬たじろいだものの、“ごくり”と1つ、生唾を大きく飲み込んで右手で力強くスプーンを握りしめた俺は、そのまま物体Xを自分の口元へ一気に掻き込んだのだった。

そんな俺の様子に

「ヒッキー…」

と、嬉しそうに呟く由比ヶ浜。そんな彼女を見て、少しは腹を括った甲斐があったのかもな…などと思いつつ、徐々に意識が遠のいてゆく。

「パトラッシュ…：なんだかとっても眠いんだ…」

そんな思いを最後に俺の視界は真つ暗な闇に包まれ、そこで意識がぶつつりと途切れた。

あれ…確か前にも、こんな事無かったっけ？

第20話

しも

あ の 場 面

で、ネロがブラックブラックガムを持ってさえたならば…

「もうっ、ヒツキーってば。昨日は何時まで起きてたの？ あんまり夜更かししちや…体に悪いよ？」

何だか釈然としない思いを抱えながらも、“ああ…スマン。”と俺は短く返事をした。何だかんだで、俺の身を案じてくれているのだから、その気持ちは大事にしたい。

あれから大凡^{おおよそ}30分程経つた後、川を挟んだ向こう岸から手を振る人々を振り切って、俺は何とか息を吹き返した。たった30分なのに、何だか2時間映画を1本観た後の様な、密度の濃い出来事があった気がするのだが、何故だろう…全然思い出せない。

やけに筋肉質な、ヘルメットに覆面という出で立ちの人に声を掛けられ、生命の玉とやらを3つ〜4つ貰った様な気もするけれど、きつと気のせいだな…ウン。

コンピュータ超人のOSが、まさかのWindows95だったなんて…。

閑話休題。

寝ている間に見る夢なんてのは、往々にしてそういうものだ。“人偏”に“夢”と書いて“儂い”となるのも、きつとそんな理由だからなのだろう。

あるいは、“夢”というものは早々に“夢”から“目標”へと昇華しなければ、結局只の夢で終わり、儂くも霧散してしまうものだという、“俺、BIGになる！”と上京してきたは良いが日常生活に疲れてしまい、ただ生きる事だけで精一杯になってしまっている夢追い人への警鐘なのかも知れない。

まあ：適当に言ってるだけだから、胸が痛かった皆様はくれぐれも気にせず、今後も目標に向かって頑張って欲しい。

他意はないんです…いや、マジすんませんでした。

ともかく俺の場合、夢を叶える為にわざわざ上京必要はない。まあ仮に行くとしても、アキバあたりをブラついて、精々ジャンクパーツをニヤニヤしながら眺める程度のものだ。

“BIGでなくてもいい、ただ堅実に育って欲しい…”

そんな（主に親父の）思いを背に受けて、堅実な目標たる専業主夫になる…という大願を成就すべく、俺は日々精進し続けるのみなのである。

「専業主夫に、俺はなるっ!!」

そんな俺の心の声を漏れ聞いた由比ヶ浜は、軽く頭に手を当てて
“はあ…”
と、呆れた様に大きな溜息をついた。

そんなこんなで、予定よりもほんの少し早めに勉強会が始まった。
シンと静まり返った室内に、“カリカリカリ…”とペンを走らせる
音が絶え間なく響き渡り、時より“パラパラパラ…”と問題集のペー
ジを捲る音が微かに宙を舞う。ピンと張り詰めた空気がその場を支
配し、そこに一切の緩みを感じられない。

自分の課題に目を通しつつ、そんな雰囲気になんとなく落ち着かない
俺がいた。まあ…なんだ、女子が自分の部屋に居るってだけで、そも
そも落ち着かないものなんだよな、多分。

それにしても、あの由比ヶ浜が勉強に対して、こんなに前向きにな
るなんてな…。だってこいつ、“勉強が苦手なものも個性っ!!”って鼻
息荒かったんだぜ？

往々にして個性個性言ってる奴に限って個性が無い。そもそも、
ちよつとやそつとで変わるものが個性なわけがない…とは俺の持論
なのだが、由比ヶ浜の散々たる成績表の履歴を鑑みれば、彼女の主張
は至極当然の事の様に思われた。

だつてさ、アヒルの行進なんだぜ？ “いっちにつ、いっちにつ
…”って。

であるから、“そうだな…個性だな。”と、俺の中で出来る限りの
優しい眼差しを向けて、その発言を全面的に肯定したにも拘らず、
「ヒツキーっ、その言い方がムカつくっ!!」

と、由比ヶ浜の不興を買ったのは、甚だ理不尽な話だった。

あとさ、手当たり次第に物を投げるのはやめような。だってほら、当たったりしたら痛いじゃん？ 鉄アレイとかさ。

ってな具合で、由比ヶ浜の勉強に対するモチベーションの低さを、かつての俺は物理的なダメージを以って思い知らされていた訳なのだが：ところがどっこい、今日の前にいる彼女には当時の面影など微塵も無い。

人間ってのは明確な目標が出来るだけで、こんなに変わるもんなんだな。“鹿苑寺”と“慈照寺”が合わさって、“鹿苑寺：シヨウジ？”なんて事をのたまっていたのが嘘の様だ。

俺がそんな事を漠然と考えている間も、由比ヶ浜のペンは変わらず快調に文字を刻み続けている。何度かの勉強会を経て、最近ようやく見慣れてきた由比ヶ浜の真剣な顔つきからは、それまでお馴染みであった喜怒哀楽に溢れた、豊かなそれとはまた違った彼女の一面が垣間見えてくる。

僅かにあどけなさを残した顔立ちとは対照的に、まるでユリの花の様な凛とした空気を身に纏う姿に、思わず目を奪われそうに：って、ちよつと待ってくれ。

奪われそうってだけでその：なんだ、魅了されてなんてないんだからねっ！

幾多の恋愛経験というか失恋、いや勘違い的？：な、ともかく修羅場を潜り抜けてきた俺ですらこの調子だ。きつと並みの人間だったらコロリといってるに違いない。

危ないところだった…。

色即是空、空即是色。人間、経験を糧に日々学習して生きているのだ。

そんな、悶絶したかと思えば即達観した様にウンウン頷く俺の様子がよっぽど挙動不審に見えたのか、由比ヶ浜は俺の顔へと視線を移すと、“ほえっ？”と不思議そうに首をかしげた。

「ヒツキー、なんか変だけど大丈夫？」

続けて「まあ、変なのはいつもの事だけだよ」と、失礼な事をのたまう由比ヶ浜。

なんて失敬なっ…と言いたいところだが、自覚があるだけに反論できねえ。

だが皆様、ここは冷静になって俺の言葉に耳を傾けて欲しい。“変わっている”という事は、即ち一般人とは異なっているという事であり、歴史に名を遺す偉人達の多くは、偉業を成し遂げるまでの過程において屢々変人扱いされたものである。つまり、日頃より周りから畏怖される俺もまた、特別な存在なのだと感じました。

結論。ヴェルダースオ리지ナルに出て来るお孫さん、超偉人。

だが、その変人…もとい、偉人っぷりすら目立たなくさせてしまう程のヴェルダースオ리지ナルの旨さを、お茶の間の皆様へ如何に伝えれば良いのかを考えあぐねている俺に対し、心配そうな表情を浮かべた由比ヶ浜は、自分の顔をグイッと俺に近づけた。

「もしかして…体調良くない？ 大丈夫？」

由比ヶ浜はそう俺に尋ねるや否や、右手で俺の前髪をそっと掻き上げ、そして左手で自分の前髪を掻き上げると、自分の額を俺のそれに押し当てた。

ち、ちよっ…ガハマさん何やってるんっすかっ!?

あまりに突然の出来事に、陸揚げされた直後のバナメイエビ（活きているやつな？）の如く、思わず左右に身を振る俺。しかしその直後、由比ヶ浜の両手によって俺の頭は両サイドから挟み込まれる様にガツチリとホールドされ、一切の身動きが取れなくなった。

「ちよっ、熱計れないじゃん！ じっとしてろしっ！」

由比ヶ浜は、お節介な幼馴染がちよっぴり拗ねた様な声を出しつつ、より一層自分の額を俺のそれに密着させた。

ちよっ、おまつ!?

これ以上ないくらいに、ドアップになった由比ヶ浜と目が合った。深い海のように澄んだ藍色の瞳から送られる、1寸のブレもなく真つ直ぐな視線は、あたかも完全にロックオンした照準器の様に力強く揺るぎが無いものだ。

そんな視線に、この俺が耐えられるはずも無く、ものの数分で居た堪れない気持ちで一杯になった。だがどんなに身を振ろうとも、俺の頭は大絶賛ホールド中だ。

…ってか、その細い腕からどうやってこんな力が出るんだよ！

肌の触れ合う部分からは、由比ヶ浜の温もりがダイレクトに感じられ、また、あとほんの少しでも近づけば触れてしまいそうなくらいの、僅かに開かれた由比ヶ浜の唇から漏れる“もわああっ”とした熱い吐息が、柑橘系の香りを乗せて俺の鼻先をくすぐった。

近いっ…近いよっ!!

「うーん、熱は無いみたいだけど…」

由比ヶ浜は、そんな俺の動揺など微塵も感づいてない様に呟くと、ようやく俺から額を離れた。

この5分にも満たないこの出来事によって、俺はすっかり気が動転してしまい、既に由比ヶ浜はパーソナルスペースの外であるにも関わらず、俺の鼓動はその余韻に引っ張られたままだ。

「ホント…顔赤いけど大丈夫？」

そんな由比ヶ浜の問いかけに、

“ ああ…大丈夫だから気にするな。 ” と答えるだけで俺は精一杯だった。

「結衣さあん、お兄ちゃあん、おやつの時間ですよ〜♪」

15時を少し過ぎた頃に、501の豚饅を片手に小町が部屋へとやって来た。…ってか、豚饅まだあったのかよっ！

「いやあ…思いのほか美味しくってさ、お取り寄せしたの♪お母さんも美味しいって言ってたよ？」

気に入ってもらって何よりだが、それ…俺って確実にありつけてないやつだよな？

だが、ここは敢えて現実から目を背ける事にした。だって、心が折れるもの。

「それって親父は？」

「さあ？」

良かった、親父もありつけてないやつだ…親父ってば超可哀想。

まあ…お歳頃の娘さんの、父親に対する関心としてはこれくらいが世界標準だろうからさ、めげるな親父っ！

あれ…って事は俺って…親父と同じ扱って事？

知りたくなかった真実を目の当たりにし、頭を抱えて悶絶する俺を余所に、小町は急々と豚饅とお茶を配膳し始めた。手際良く並べられたそれらは、ほくほくと柔らかな湯気を立てて、しょんぼり気分を忘却の彼方へと葬り去ろうとするが如く、俺の食欲を激しく刺激してくる。

こういったあつたかメニユーは、この季節だと通常の3割り増しくらい旨そうに見えるから不思議だ。昼前にもこもこと煙を噴出していたアレと、ビジュアル的には大差は無いはずんだけどな…ほんと不思議だ（大事な事なので2回言いました）。

「…。」

まあ何だ、過去を振り返ったって仕方がないじゃないか。もし変えられるとするならば、それは常に未来だけだ。そして、あと数分後には、旨いものを頬張る未来が待っている事だろう。

そう…あとは食べるだけんだ！

だが、そんなタイミングを見計らうかの様に、試練は常にやって来る。

案の定…肉饅を手にとつて、まさにかぶり付かんとしたところで、新たな事件が勃発した。

今の今まで、由比ヶ浜とキャツキャウフフとしていた小町。ところが、今、小町のお気に入りなんです♪結衣さんも…”と声を発したところで、突然小町の動きが固まった。

いや、固まったというよりは何かに視線を奪われている…と言った方が正しい。由比ヶ浜の前に豚饅を置こうと中腰になったまま、小町はジツと凝視していた…。

由比ヶ浜の胸元を。

しばらくの間、食い入る様な視線を由比ヶ浜の胸元に送っていた小町は、豚饅と由比ヶ浜の胸元の間を何度か視線を泳がせた後、最後に自分の平原を軽く一瞥し、顔をくにやつと歪めた。

ああ、格差社会を目の当たりにしちやつたか…。

まあなんだ、こればかりは仕方が無い。人間皆平等…なんてのは幻想であり欺瞞なのだ。大概の人間はそれを噛み締めつつ、歯を食いしばって生きているのだ。

一方、最初は“えっ？ どうしたの、小町ちゃん？”と戸惑っていた由比ヶ浜も、途中で空気を察したのか、フォローの言葉を紡ぎ出すと、必死になって“うーん、うーん”と唸っていた。ってか、そのリアクションが既にアレだけどな。

やがて由比ヶ浜は、頭の上に豆電球が燈ったかの様な、如何にも“私、分かっちゃった！”といった明るい表情を浮かべると、その笑みを小町へと向けた。

なんか：傷口に塩を塗り込むパターンにならなきゃいいけど。

「ほ、ほら：遅刻しそうな時に、走っても揺れないから邪魔にならないじゃない？」

その瞬間、小町の身体は雷に撃たれたみたいに大きく波打った。

ちよつ、いきなりやらかしやがったっ!!

もうさ、グサツって音が聞こえて来そうなの：ドラ喰えで言え“痛恨の一撃”ばりのリアクションで、あまりの痛々しさにお兄ちゃん：ちよつと目を背けちゃったよ。

そんな小町の様子を見て、“しまったっ！”と己のやらかし具合を悟った由比ヶ浜は、一瞬視線を宙に彷徨わせつつも、すぐに気を取り直した様子で、それらを挽回すべく更にフォローという名の追い討ちをかける。

「そ、それに谷間に汗かいてもすぐに流れて蒸れないし：あと：え、えーつと、ほ、ほら、うつ伏せに寝るのだからとつても楽じゃん？」

往々にして、こういうフォローはダメ押しにしかならないという事を、そろそろ由比ヶ浜は学んでも良い頃だ。由比ヶ浜には一切の悪意がないだけに、その純粋な眼差しを全身で受け止める事になった小町

は、既に虫の息だ。

もうヤメてあげてっ！ 小町のライフはもうゼロよっ！

しばらくの間、その衝撃に打ちひしがれていた小町は、やがて何かを悟った様なまなざしで遠くの空を見詰めると、力なく呟いた。

「小町…なんだか、旅に出たくなつたよ…。」

神は乗り越えられる試練しか…いや、何でもない。

厳しい現実を前に呆然と立ち尽くす最愛の妹に、俺は気の効いた言葉ひとつ掛けてやれず、ただその光景をオロオロしながら眺める事しか出来なかつた…。

許してくれ、小町…お兄ちゃんは…無力だ。

つづく

【次回予告】

「豚まんとは全然違うしっ！もっと柔らかいもんっ！」

「なんならさ…触って…確かめてみる？」

「ねっ？ 豚まんとは…全然違う…でしょ？」

そんなタイミングを見計らうかの様に、“ボタン！”と勢い良くドアが開け放たれ、そこには目の笑ってない、氷の様な寒々しい笑みを浮かべた少女が立っていた。

「センパイ…随分とお楽しみの様ですね？（ニヤリ）」

次回もお楽しみに！

「あれ…なんか次回、死亡フラグ立ってね？」